

近畿自動車道(久居～勢和)

埋蔵文化財発掘調査報告

—— 第 2 分冊 2 ——

垣内田古墳群

天神山古墳群

平林古墳群

横尾古墳群



象嵌円頭柄頭

1990・3

三重県教育委員会
三重県埋蔵文化財センター



平林古墳群（北から）



垣内田 3 号墳出土銀象嵌柄頭金具・靱尻金具（1 : 1）

序

近畿自動車道関・伊勢線第8次区間（久居～勢和）建設予定地内にかかる現地発掘調査は昭和59年度から開始し、同63年度上半期に終了いたしました。遺跡の所在地は北から久居市、一志町、嬉野町、松阪市、勢和村、多気町の2市3町1村の行政区域にまたがります。遺跡件数にして計41遺跡、面積にして約15万㎡が試掘調査、あるいは本調査の対象となったわけです。

遺跡の種類としては、集落跡、墓跡、生産跡等多岐にわたり、また時代的にも旧石器時代から中近世（鎌倉・室町・江戸時代）に至るまでの各種各様の遺跡が発掘調査されました。その成果の一端は年度毎に刊行してきました発掘調査概報に紹介してきたところではありますが、63年度からは現地調査と並行して本格的な整理・報告書作成業務も開始してきました。そして、平成元年度には59・60年度に発掘調査した榎田川流域に所在する花ノ木遺跡、牧瓦窯跡群他8遺跡の報告書（第1分冊）を刊行いたしました。

さて、今回は昭和61・62年度に発掘調査を実施した4遺跡の報告であります。そして、これらの遺跡はすべて松阪市内に所在し、その西部山麓部、あるいは裾野に立地している古墳群を集めました。また、時代的には6世紀から7世紀にあたり、古墳時代の後期古墳群として位置付けられ、垣内田・天神山・平林・横尾古墳群は当地域の古墳社会の展開を示す一資料として興味深い調査資料といえましょう。

いずれにいたしましても、ここに報告する各遺跡は各地域の歴史と文化を如実に物語る生き証人ともいえ、埋蔵文化財発掘という行為にかわる代償としての公開という大きな使命と責務を負うものと考えています。

なお、調査、整理にあたっては多方面の方々から暖かいご援助なりご教示等をいただきました。いちいちお名前は記しませんが文末ながらここに深甚の謝意を表します。

平成2年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 中 林 昭 一

例 言

1. 本書は平成元年度に三重県教育委員会が日本道路公団名古屋建設局から委託を受けて実施した近畿自動車道関・伊勢線第8次区間（久居～勢和）建設予定地内に所在する埋蔵文化財発掘調査の内、昭和60年度から61年度に実施した松阪市西部山麓域に位置する4遺跡についての発掘調査報告書（第2分冊の2）である。

2. 調査にかかる費用は、日本道路公団の全額負担による。

3. 整理及び報告書作成は三重県教育委員会が主体となり、三重県埋蔵文化財センター調査第2課第1係が担当した。

・調査主体 三重県教育委員会

・調査担当 三重県埋蔵文化財センター

主幹兼調査第二課長 山澤義貴・主査 新田 洋

主事 田村陽一・主事 河北秀実

主事 小坂宜広・主事 山崎恒哉

主事 江尻 健・主事 伊藤裕偉

主事 角谷泰弘（伊勢市教育委員会より派遣）

主事 稲本賢治（多気町教育委員会より派遣）

主事 前川嘉宏（玉城町教育委員会より派遣）

（室内整理）

谷久保美知代 采野妙子 山分孝子 吉村道子

白石みよ子 反町瑩子 竹内由美 田中智子

反町有子

4. 本書の執筆分担は目次に示したが、文末にも明記した。

なお、奈良大学文学部文化財学科西山要一助教授からは垣内田古墳群にかかる付編として玉稿をいただいた。

5. 本書掲載の4遺跡についてはすでに刊行している『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財調査概報Ⅱ』（1986）、『同Ⅲ』（1987）において調査の概要を公表しているが、それらと本書では多少の相違があるが、本書をもって最終的な報告とする。

6. 本書で報告しえた各遺跡の記録類、及び出土遺物については三重県埋蔵文化財センターで保管している。

7. 遺構実測図作成にあたっては、国土調査法による第Ⅵ座標系を基準とし、方位の表示は座標北を用いた。

8. スキャニングによるデータ取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目 次

I. 前 言	新 田 洋	1
II. 位置と歴史的環境	新 田 洋	7
III. 松阪市岩内町 垣内田古墳群	前 川 嘉 宏	9
IV. 松阪市伊勢寺町・岩内町 天神山古墳群	新 田 洋	101
V. 松阪市伊勢寺町 平林古墳群	河 北 秀 実	127
VI. 松阪市伊勢寺町・岡山町 横尾古墳群	新 田 洋	175
(付編) 垣内田3号墳出土の象嵌円頭柄頭・鞘尻金具の元素分析と 保存処理	西 山 要 一	213

図 版 目 次

(垣内田古墳群)		PL 21	3号墳出土遺物	91
PL 1	調査前遠景・昭和60年度調査区全景	PL 22	3号墳出土遺物	92
PL 2	1・2号墳・3・4号墳	PL 23	4号墳・5号墳出土遺物	93
PL 3	4～7号墳・3～6号墳	PL 24	6号墳・7号墳出土遺物	94
PL 4	1～9号墳・10・11号墳	PL 25	7号墳・8号墳・10号墳出土遺物	95
PL 5	1号墳石室・1号墳石室	PL 26	8号墳出土遺物	96
PL 6	2号墳石室	PL 27	10号墳出土遺物	97
PL 7	3号墳石室・3号墳遺物出土状況	PL 28	10号墳出土遺物	98
PL 8	4号墳石室	PL 29	11号墳・12号墳・13号墳出土遺物	99
PL 9	5号墳石室	PL 30	その他の遺物	100
PL 10	6号墳石室	(天神山古墳群)		
PL 11	6号墳石室	PL 31	A・B地区調査前風景	117
PL 12	7号墳石室	PL 32	1号墳全景・石室	118
PL 13	8号墳・8号墳石室	PL 33	1号墳石室	119
PL 14	9号墳・10号墳	PL 34	1号墳遺物出土状況・3～6号墳	120
PL 15	10号墳石室	PL 35	3号墳石室	121
PL 16	10号墳遺物出土状況・11号墳	PL 36	3号墳遺物出土状況・4号墳	122
PL 17	昭和61年度調査区全景・12号墳石室	PL 37	5号墳石室・遺物出土状況	123
PL 18	13号墳石室・SX 1	PL 38	出土遺物	124
PL 19	1号墳出土遺物・2号墳出土遺物	PL 39	〃	125
PL 20	3号墳出土遺物	PL 40	〃	126

(平林古墳群)

PL 41 調査前遠景・6号墳…………… 159

PL 42 6号墳石室・6号墳遺物出土状況…………… 160

PL 43 7号墳・7号墳石室…………… 161

PL 44 7号墳遺物出土状況・8号墳…………… 162

PL 45 8号墳石室・8号墳遺物出土状況…………… 163

PL 46 16号墳・16号墳石室…………… 164

PL 47 10号墳・19号墳遺物出土状況…………… 165

PL 48 19号墳遺物出土状況…………… 166

PL 49 20号墳・20号墳石室…………… 167

PL 50 20号墳奥壁・20号墳遺物出土状況…………… 168

PL 51 22号墳・22号墳石室…………… 169

PL 52 23号墳・23号墳石室…………… 170

PL 53 出土遺物…………… 171

PL 54 "…………… 172

PL 55 "…………… 173

PL 56 "…………… 174

(横尾古墳群)

PL 57 前査前全景・1・2号墳調査前近景… 199

PL 58 1号墳全景・1号墳石室、奥壁…………… 200

PL 59 2号墳全景・外護列石…………… 201

PL 60 2号墳墳丘遺物出土状況・3号墳全景 202

PL 61 3号墳・3号墳墳丘遺物出土状況…………… 203

PL 62 4号墳全景…………… 204

PL 63 4号墳石室・奥壁・遺物出土状況…………… 205

PL 64 4号墳玄室遺物出土状況…………… 206

PL 65 4号墳羨道部遺物出土状況…………… 207

PL 66 出土遺物…………… 208

PL 67 "…………… 209

PL 68 "…………… 210

PL 69 "…………… 211

PL 70 "…………… 212

挿 図 目 次

第1図 第8次区間(久居～勢和)遺跡位置図… 3

第2図 遺跡位置図…………… 7

第3図 瑞巖寺17号墳出土土器…………… 8

(垣内田古墳群)

第4図 遺跡地形図…………… 9

第5図 調査区位置図…………… 10

第6図 調査区平面図…………… 11・12

第7図 1号墳・2号墳・3号墳地形測量図… 13

第8図 1号墳石室実測図…………… 14

第9図 1号墳遺物出土状況実測図…………… 15

第10図 1号墳出土遺物実測図…………… 15

第11図 2号墳石室実測図…………… 17

第12図 2号墳出土状況実測図…………… 17

第13図 2号墳出土遺物実測図…………… 17

第14図 3号墳石室実測図…………… 19

第15図 3号墳遺物出土状況実測図…………… 20

第16-1図 3号墳出土遺物実測図…………… 21

第16-2図 "…………… 22

第16-3図 "…………… 23

第16-4図 "…………… 24

第17図 4号墳・5号墳地形測量図…………… 28

第18図 4号墳石室実測図…………… 29

第19図 4号墳遺物出土状況実測図…………… 30

第20図 4号墳出土遺物実測図…………… 32

第21図 5号墳石室実測図…………… 33

第22図 5号墳遺物出土状況実測図…………… 34

第23図 5号墳出土遺物実測図…………… 34

第24図 6号墳・7号墳地形測量図…………… 36

第25図 6号墳石室実測図…………… 37

第26図 6号墳遺物出土状況実測図…………… 38

第27図 6号墳出土遺物実測図…………… 39

第28図 6号墳出土須恵器へう記号拓影…………… 40

第29図 7号墳石室実測図…………… 41

第30図 7号墳遺物出土状況実測図…………… 42

第31図 7号墳出土遺物実測図…………… 42

第32図 8号墳・9号墳地形測量図…………… 44

第33図 8号墳石室実測図…………… 45

第34図 8号墳出土遺物実測図…………… 46

第35図 10号墳・11号墳地形測量図…………… 50

第36図 10号墳石室実測図…………… 51

第37図	10号墳遺物出土状況実測図	52
第38-1図	10号墳出土遺物実測図	53
第38-2図	10号墳出土遺物実測図	56
第39図	10号墳出土須恵器へラ記号拓影	56
第40図	11号墳墓抔実測図	58
第41図	11号墳出土遺物実測図	58
第42図	12号墳地形測量図	59
第43図	12号墳石室実測図	59
第44図	12号墳出土遺物実測図	6
第45図	13号墳地形測量図	61
第46図	13号墳石室実測図	62
第47図	13号墳出土遺物実測図	63
第48図	SX 1 地形測量図	64
第49図	その他の出土遺物実測図	65

(天神山古墳群)

第50図	古墳群分布図	101
第51図	発掘調査区位置図	102
第52図	A区・1号墳実測図	103
第53図	B区・古墳群(2~7号墳)調査後実測図	104
第54図	1号墳実測図	105
第55図	1号墳出土遺物実測図	106
第56図	3号墳石室実測図	107
第57図	3号墳出土遺物実測図	108
第58図	4号墳石室実測図	109
第59図	5号墳石室実測図	109
第60図	5号墳遺物出土状況図	109
第61図	2~6号墳出土遺物図	110

(平林古墳群)

第62図	開墾時出土遺物	127
第63図	遺跡地形図	127
第64図	調査前地形測量図	129・130
第65図	調査後測量図	131
第66図	5・6号墳測量図	132
第67図	5号墳出土遺物実測図	132
第68図	5・6号墳丘断面図	132
第69図	6号墳石室実測図	133・134
第70図	6号墳遺物出土状況	135
第71図	6号墳出土遺物実測図	136
第72図	7号墳測量図	136
第73図	7号墳墳丘断面図	136

第74図	7号墳実測図	137
第75図	7号墳遺物出土状況	138
第76図	7号墳出土遺物実測図	138
第77図	8号墳測量図	138
第78図	8号墳墳丘断面図	138
第79図	8号墳石室実測図	139
第80図	8号墳遺物出土状況	139
第81図	8・9号墳出土遺物実測図	139
第82図	16号墳測量図	140
第83図	16号墳出土遺物実測図	140
第84図	16号墳石室実測図	140
第85図	19号墳測量図	141
第86図	19号墳墳丘断面図	141
第87図	19号墳石室実測図	142
第88図	19号墳遺物出土状況	143
第89図	19号墳出土遺物実測図	143
第90図	20号墳地形測量図	144
第91図	20号墳墳丘断面図	144
第92図	20号墳遺物出土状況	144
第93図	20号墳石室実測図	145
第94図	20号墳出土遺物実測図	146
第95図	22号墳測量図	146
第96図	22号墳石室実測図	147
第97図	22号墳出土遺物実測図	148
第98図	9・21・23号墳測量図	148
第99図	23号墳出土遺物実測図	148
第100図	23号墳石室実測図	149
第101図	遺物実測図	151

(横尾古墳群)

第102図	遺跡位置図	175
第103図	1・2号墳調査前測量図	176
第104図	1号墳実測図	178
第105図	1号墳墳丘南北断面図	178
第106図	1号墳墳丘東西断面図	178
第107図	1号墳石室実測図	179
第108図	2号墳実測図	180
第109図	2号墳墳丘南北断面図	180
第110図	2号墳東西断面図	180
第111図	1号墳出土遺物実測図	181
第112図	2号墳出土遺物実測図	181

第113図	2号墳遺物出土状況	181
第114図	3・4号墳調査前測量図	182
第115図	3号墳実測図	184
第116図	3号墳墳丘南北断面図	184
第117図	4号墳実測図	185・186
第118図	4号墳墳丘東西断面図	85
第119図	4号墳墳丘南北断面図	86
第120図	4号墳石室実測図	87
第121図	3号墳出土遺物実測図	88
第122図	4号墳遺物出土状況	88
第123図	4号墳出土遺物実測図	89

第124図	〃	190
第125図	〃	190

目 次

第1表	実測図等整理番号一覧	2
第2表	第8次区間(久居～勢和)発掘調査遺跡一覧	4
(垣内田古墳群)		
第3表	垣内田古墳群一覧	11
第4表	垣内田古墳群横穴式石室一覧	12
第5表	1号墳出土遺物一覧	16
第6表	2号墳出土遺物一覧	18
第7-1	3号墳出土遺物一覧(1)	25
第7-2	3号墳出土遺物一覧(2)	25
第8-1	4号墳出土遺物一覧(1)	31
第8-2	4号墳出土遺物一覧(2)	31
第9-1	5号墳出土遺物一覧(1)	35
第9-2	5号墳出土遺物一覧(2)	35
第10-1	6号墳出土遺物一覧(1)	39
第10-2	6号墳出土遺物一覧(2)	39
第11-1	7号墳出土遺物一覧(1)	43
第11-2	7号墳出土遺物一覧(2)	43
第12-1	8号墳出土遺物一覧(1)	47
第12-2	8号墳出土遺物一覧(2)	47
第13-1	10号墳出土遺物一覧(1)	54
第13-2	〃 (2)	55
第13-3	〃 (3)	55
第14表	11号墳出土遺物一覧	58
第15表	12号墳出土遺物一覧	60
第16-1表	13号墳出土遺物一覧(1)	63

第16-2表	13号墳出土遺物一覧(2)	63
(天神山古墳群)		
第17-1表	出土遺物観察表	113
第17-2表	〃	114
第17-3表	〃	115
第17-4表	〃	116
(平林古墳群)		
第18表	平林古墳群調査前古墳現況一覧表	128
第19表	平林古墳群調査古墳の概要一覧	149
第20-1表	出土遺物観察表	153
第20-2表	〃	154
第20-3表	〃	155
第20-4表	〃	156
第20-5表	〃	157
第20-6表	〃	158
(横尾古墳群)		
第21-1表	出土遺物観察表	193
第21-2表	〃	194
第21-3表	〃	195
第21-4表	〃	196
第21-5表	〃	197
第21-6表	〃	198

I. 前 言

1. 調査の経過

近畿自動車道関・伊勢線第8次区間（久居～勢和間）にかかる埋蔵文化財発掘調査はこの昭和61年度調査が第3年次にあたる。この8次区間については当初、昭和64（平成元）年度中に道路供用開始という建設工事計画とも関連して、当年度と次年度（62年度）で現地遺跡調査をすべて完了するという計画の下で、各関係機関と調整、協議を図っていたところであった。

しかし、その内容については、発掘調査の進展に伴う調査対象面積の増減、また用地買収の進捗状況や新たな遺跡の発見等によって、当初計画についてかなりの変更が生じたことも事実である。

最終的にその対象遺跡となったのは前年度からの継続調査としての多気町に所在する牧瓦窯跡群中の7号窯と楸形中世墓群、そして松阪市内に所在する

垣内田古墳群、藪ノ下遺跡、天神山古墳群、平林古墳群、横尾古墳群、寄谷遺跡、楢垣外遺跡、大河内城堀切の本調査と大河内5号墳の第1次調査（試掘）である。この内、天神山古墳群、楢垣外遺跡の2遺跡は新発見で、当年度協議をし、本調査に至ったものである。なお、垣内田古墳群は、60年度からの継続調査である。

とりもなおさず、61年度調査に際しても、日本道路公団松阪工事事務所、県土木部近畿道対策室には調査の円滑推進にあたって、また現地各地にあっては三重県住宅供給公社をはじめとし、松阪市、多気町の各関係機関には格別のご配慮とご協力を賜った。

また、各地元においては、各自治会長をはじめ、多くの方々のお心遣いご理解とご援助をいただいた。以上、文末ながら記して深甚の謝意を表したい。

2. 調査の体制

調査は三重県教育委員会が主体となり、同事務局文化課文化財第2係が担当した。

以下が**昭和61年度の調査体制**である。

文化財第2係長	伊藤久嗣	総括
技 師	新田 洋	調整・協議、天神山古墳群ほか
主 事	田中喜久雄	横尾古墳群
〃	田村陽一	藪ノ下遺跡
〃	河北秀実	平林古墳群
〃	宮田勝功	大河内城堀切ほか
技 師	野原宏司	寄谷遺跡ほか
主 事	野田修久	寄谷遺跡ほか
臨時調査員	青木尚根	
〃	谷 伸治	

室内整理員	谷久保美知代
〃	近藤豊美
〃	大西友子
〃	野崎栄子
〃	山本紀子

～調査指導（昭和61年度、順不同、敬称略）～

西村 康（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター
一発掘技術研究室長）
広岡公夫（富山大学教授）
八賀 晋（三重大学教授）
水野正好（奈良大学教授）
泉 拓良（奈良大学助教授）
奥 義次（県立宇治山田高校教諭）
植野浩三（奈良大学助手）
以上列記し、感謝の意を表する。（順不同・敬称略）

(発掘調査土木工事部門担当)

三重県住宅供給公社
堀内信吾

浜口安光
中田辰実

3. 調査、及び整理の方法

現地調査の方法についてはすでに刊行済みの近畿自動車道(久居～勢和)埋蔵文化財発掘調査報告(第1分冊)を参照されたい。また資料整理も第1分冊に示した方法により実施したのでここでは略する

が、各遺跡の遺構実測図と遺物実測図、及びピックアップ遺物には下記のように6桁の番号を与え整理した。

遺跡番号	遺跡名	遺構実測図	遺物実測図
18	垣内田古墳群	18-0001~0138	18-0101~0110 18-0201~0206 18-0301~0335 18-0401~0428 18-0501~0508 18-0601~0616 18-0701~0712 18-0801~0832 18-1001~1053 18-1101 18-1201~1205 18-1301~1313 18-1401~1408
37	天神山古墳群	37-0001~0019	37-0001~0056
21	平林古墳群	21-0001~0117	21-0001~0079
22	横尾古墳群	22-1001~1100	22-8101~8108 22-8201~8210 22-8301~8314 22-8401~8447

第1表 実測図等整理番号一覧

(新田 洋)



第1図 近畿自動車道第8次区間（久居～勢和）遺跡位置図（1：100,000）

番号	遺 跡 名	所 在 地	調査面積(m ²)		調 査 期 間 (元号は昭和)	担 当 者	概 要	
1	小戸木遺跡	久居市小戸木町	192	計 432	62. 3. 3～ 3. 5	宮田 勝功	遺構・遺物なし(試掘)	
			240		62. 9.20～ 9.24	木許 守	“() ”	
2	庄村遺跡	一志町庄村		304	62. 9.14～ 9.20	新田 洋	遺構なし・遺物微量(試掘)	
3	鳥居本(八反田)遺跡	一志町小山、新沢田	8,900	11,540	62. 9.24～63. 3. 7	宮田 勝功	弥生中期方形周溝墓など検出	
			2,640		63. 5.16～ 7.27	小坂 宣広 河北 秀実	飛鳥時代の井戸検出	
4	西野(天花寺)古墳群	嬉野町天花寺		3,400	62.11. 9～11.31	新田 洋	(山林伐開)	
					63. 5.16～ 9.28	新田 洋 山崎 恒哉	石剣・車輪石片出土、前期の古墳1基	
5	焼野(口山田)古墳	嬉野町島田		2,010	62.7.11～ 9.30	山下 雅春	古墳は畑寄せによる盛土と判明、石核出土(試掘)	
6	焼野(口山田)遺跡	嬉野町島田		3,500	62. 5.11～ 8.24	宮田 勝功 新田 洋	奈良時代の住居跡など検出	
7	天保(天保B)遺跡A・B区	嬉野町島田		7,200	62. 5. 7～ 9. 4	田村 陽一	平安時代の堅穴住居など検出	
8	天保(一志西部)遺跡 C区	嬉野町島田		5,000	62. 5.18～ 6.30	増田 安生	奈良～平安時代の堅穴住居など検出	
9	天保(天保館跡)遺跡 D区	嬉野町島田		3,800	62. 7. 1～ 8.12	増田 安生	“() ”	
10	天保古墳群 (含、天保遺跡E区)	嬉野町島田		5,390	62. 8. 5～63. 7.12	田村 陽一 野田 修久	6世紀中ごろの横穴石室墳など	
11	堀之内遺跡	嬉野町堀之内	1,450	14,250	62. 2.23～ 3.13	新田 洋	(側道部分の調査)	
			A区		2,200	62. 5. 6～ 7.16	河北 秀実	古墳～平安時代の住居跡など検出
			B区		2,200	62. 7.23～10. 1	河北 秀実	古墳～平安時代の溝など検出
			C区		5,400	62. 9. 1～63. 3.19	増田 安生	弥生後期堅穴、平安の掘立など検出
			D区		700	62.10.25～11.20	木許 守	古式土師器出土、ヤナ状遺構検出
C区下層	1,900	63. 5.18～ 8.13	田村 陽一	縄文中・後・晩期の土器多数出土				
12	中尾遺跡	嬉野町薬王寺	93	600	62. 3. 4	河北 秀実	(試掘)	
507			62. 5. 6～ 6. 5		河北 秀実	掘立柱建物3棟検出		
13	ビハノ谷古墳群	嬉野町薬王寺	1,000	13,000	62. 3. 2～ 3.30	野原 宏司	(山林伐開、表土掘削)	
			12,000		62. 5.19～ 8.12	野田 修久 木許 守	古式土師器出土、後期古墳1基	
14	女牛谷古墳群	松阪市小野町 嬉野町薬王寺	4,031	7,171	61.12.15～62. 2.21	野原 宏司	(山林伐開、第1次調査)	
			3,140		62. 5. 7～ 7.11	木許 守 野田 修久 山下 雅春	古式土師器出土 後期古墳4基	
15	平田遺跡	松阪市小野町		228	61. 2. 18～ 2. 24	田村 陽一	遺構なし、遺物微量(試掘)	
16	山見(下山見)遺跡	松阪市小阿坂町		224	60.11.12～11.20	野原 宏司	遺構なし、遺物微量(試掘)	
17	新田遺跡	松阪市小阿坂町	288	4,688	60.11.15～11.25	野原 宏司	(試掘)	
			4,400		60.12.27～61. 3. 25	野原 宏司	縄文後期土器出土	
18	垣内田遺跡 (垣内田古墳群)	松阪市岩内町	428	6,528	60.11.26～12.12	野原 宏司	(試掘)	
			5,500		60.12.27～61. 3. 25	吉水 康夫	横穴式石室墳を主体とする古墳群	
			600		61. 6. 30～ 7. 30	野田 修久		
19	藪ノ下(岡崎古墳群)遺跡	松阪市岩内町	1,100	2,500	61. 3. 1～ 3. 25	田村 陽一	(試掘)	
			1,140		61. 6. 30～10. 3	田村 陽一	良好な資料となる縄文後期土器多数出土	
20	榎長遺跡	松阪市伊勢寺町	304	2,708	60 60.10.18～10.24	田村 陽一	(試掘)	
			2,404		60.11.26～61. 3. 18	河北 秀実	奈良～平安時代の堅穴住居検出	

第2表 第8次区間(久居～勢和)発掘調査遺跡一覧(太ゴチックは本書所収遺跡)

番号	遺跡名	所在地	調査面積(m ²)		調査期間 (元号は昭和)	担当者	概要
21	平林古墳群	松阪市伊勢寺町		計 4,021	61.9.20~11.4	新田 洋 河北 秀美	石室を主体とする古墳群
22	横尾(西野)墳墓群	松阪市伊勢寺町、岡山町	5,500 2,500	8,000	60.7.1~61.2.27 61.5.31~12.5	田坂 仁 宮田 勝功 田中喜久雄 宮田 勝功	500基におよぶ中世墓群 後期小型円墳(横穴式石室)2基 後期小型方墳(木棺)2基
23	さんざい林遺跡	松阪市西野町		176	60.10.25~10.26	田村 陽一	(試掘)
24	坂東(大河内5号)古墳	松阪市笹川町		180	61.7.23~8.19	野田 修久	中世土器片微量。古墳にあらず(試掘)
25	大河内城堀切	松阪市大河内町		600	62.1.5~2.25	宮田 勝功	中世北畠氏の平山城大河内城の堀切
26	上ノ広(森下池西方)遺跡	松阪市広瀬町	224 1,136	1,360	60.3.22~60.3.31 60.7.1~60.10.14	上村 安生 田坂 仁 宮田 勝功 田村 陽一 野原 宏司	(試掘) 先土器末~縄文時代の石器多数出土
27	大原堀(大原堀南方)遺跡	松阪市広瀬町		114	60.10.28~60.10.31	田村 陽一	遺構、遺物微量(試掘)
28	花ノ木(山崎)遺跡	多気町牧	52 5,800	5,852	59.12.10 60.1.28~60.3.26	田村 陽一 杉谷 政樹 田村 陽一 杉谷 政樹	(試掘) 弥生時代中期竪穴住居、方形周溝墓など検出
29	浅間山北遺跡	多気町牧	44 1,000	1,044	59.12.10 60.1.28~60.2.23	高見 宜雄 田村 陽一 田坂 仁	(試掘) 土師器細片、天目茶碗片出土
30	浅間山南遺跡	多気町牧		470	60.3.25~60.3.31	河瀬 信幸 田村 陽一	遺構なし。遺物微量(弥生前期土器)(試掘)
31	牧瓦窯群 1・2・3号窯 4・5・6・8号窯 7号窯	多気町牧 多気町牧・楸形 多気町楸形	960 1,160 200		60.7.1~60.10.31 60.11.30~61.3.25 61.6.9~61.8.15	田中喜久雄 河北 秀美 田中喜久雄 野原 宏司	奈良時代の瓦専用窯 1号……平窯 2~8号……登窯
32	釈尊寺(中牧)遺跡	多気町楸形	144 1,000	1,144	60.11.1~60.11.12 60.12.5~61.2.28	田村 陽一 田村 陽一	(試掘) 掘立柱建物検出、中世土器出土
33	下村A遺跡	勢和村丹生	88 7,500	7,588	59.12.6~12.8 60.1.28~3.28	増田 安生 杉谷 政樹 吉水 康夫 河瀬 信幸 上村 安生	(試掘) 石鎌・石匙・山茶碗・瓦器片等出土
34	下村B遺跡	勢和村丹生		44	59.12.8~12.9	増田 安生 杉谷 政樹	遺構・遺物なし(試掘)
35	岩谷遺跡	松阪市矢津町	740 4,700	5,440	61.2.27~3.25 61.8.20~62.3.18	田坂 仁 野原 宏司 野田 修久	(試掘) 五輪塔など出土。寺(養徳寺)跡の伝承に裏づけ。
36	楸形(牧)中世墓群	多気町楸形		520	61.7.1~9.6	野原 宏司	石組の中世墓13基検出
37	天神山古墳群	松阪市伊勢寺町、岩内町		1,750	61.6.9~10.3	新田 洋	横穴式石室墳主体の古墳群
38	楯垣外遺跡	松阪市矢津町		1,676	61.9.1~10.18	野原 宏司 野田 修久	鎌倉時代の掘立柱建物など検出
39	久保屋敷(戸木)遺跡	久居市戸木町		12,000	62.9.1~63.3.31	山下 雅春 田中喜久雄	中世後半掘立柱建物、井戸、土塁状遺構など検出
40	ビハノ谷遺跡	嬉野町葉王寺		1,600	63.4.11~5.11	小坂 宜広	古墳時代竪穴住居。鎌倉時代掘立柱建物検出
41	西野遺跡 北広遺跡	嬉野町天花寺 嬉野町天花寺		2,473	63.7.12~8.3	野田 修久	古式土師器片出土(試掘) サヌカイト製尖頭器片出土(試掘)

※調査総面積は151,715m²、ただし本調査面積に試掘面積が重複する遺跡あり。

II. 位置と歴史的環境

近畿自動車道第8次区間（久居～勢和）建設予定路線は、行政区画としては久居市戸木町内を起点とし、一志町、嬉野町、松阪市、多気町を通過して勢和村へと抜ける。いわゆる、三重県の中南勢地区にあたる2市3町1村をまたぐ。そして、松阪市内では市西部の山麓部をほぼ南北に縦貫する形をとっている。

さて、この地域は松阪市の遺跡分布状況からみても、縄文時代から中世に至るまでの各種各様の遺跡が密集しているところといえよう。

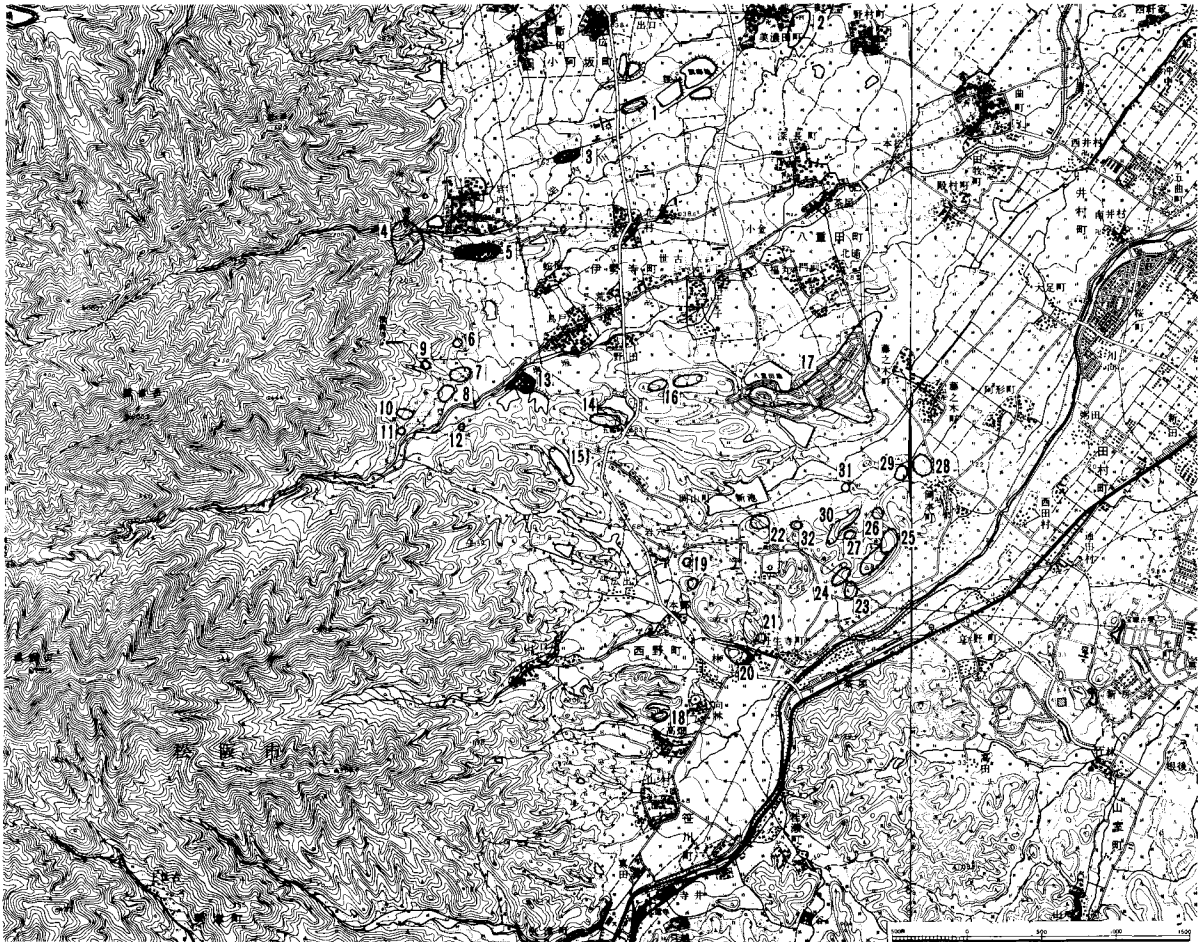
ここでは、本報告が古墳群に限定していることもあり、当地域をめぐる古墳時代、特に古墳と古墳群を中心にその概況を触れてみたい。

1. 前期古墳（4～5世紀）

当地域で最も早く古墳が築造されるのは4世紀後半代とされている。それはとくに嬉野地域に集中する前方後方墳が注目される。嬉野町域に所在する筒野古墳、西山古墳、鍔山古墳の他、松阪市との境に向山古墳が存在する。この向山からは内行花文鏡等の鏡類や石釧、車輪石などが出土している。

一方、近年では松阪市深長町で県営ほ場整備事業に伴って発掘調査された^①推定径50mの円墳とかんがえられている深長古墳がある。

この古墳の主体部は調査していないが、遺物としては底部穿孔のある土師器二重口緑壺が墳麓、あるいは周溝に沿って並べられた形で検出された。土師の編年観からすれば古墳築造時期は4世紀末ごろとかんがえられる。当時期に近い古墳としては八重田集落の南丘陵に所在する八重田古墳群^②（17）中の1



第2図 遺跡位置図（1：50,000）

（1：25,000 大河内・松阪 国土地理院）

号墳がある。

八重田古墳群は30基余から成り、4世紀後半代から5世紀後半代にかけて形成された古墳群で、基本的には円墳形態である。

さて、八重田古墳群が消極化する頃、今度は谷一つ隔てた岡本集落の北丘陵に高地蔵古墳群(28)が5世紀後半にはいって築かれる。そのうちの1号墳は全長58mの帆立貝式の前方後円墳で、葺石と円筒埴輪列をもつ。その後、6世紀初頭にかけては、平野を見下ろす丘陵尾根、先端には弥三郎新畑A古墳(31)、大分山5号墳(30)、狼谷古墳(27)、常光坊谷3～5号墳(26)など、20m前後の円墳が築かれている。狼谷、および常光坊谷はいずれも木棺直葬を主体部とし、周溝からは多量の形象埴輪、円筒埴輪が出土しており、5世紀末の年代観が示されている。

2. 後期古墳(6～7世紀)

6世紀に入ると、これまで古墳が築造されなかった鉢ヶ峰、あるいは堀坂山から東にのびる丘陵尾根、山腹面、いわゆる松阪市西部山麓にも古墳がつくられるようになる。

これまでの木棺直葬墳に加え、横穴式石室をつくる技術がこの地域にもつたえられる。今のところ岩内町、伊勢寺町の瑞巖寺古墳群(4)の6号墳、天神山古墳群(5)の1号墳に比較的古い型式の石室がみられ、およそ6世紀中葉と考えられる。

そして、この地域で古墳が群集墳という形で集中してつくられはじめるのは6世紀後半から7世紀前半である。

この地域の後期群集墳はその立地する流域から分けると、北から岩内川流域(A流域)、堀坂川流域(B流域)、阪内川流域(C流域)となろう。

A流域については前述の瑞巖寺古墳群がよく知られている。『松阪市史^③』によれば、標高120～180mの山腹斜面、及び尾根筋に、推定墳も含めて16基確認されている。横穴式石室が開口しているものが3基、石室石材が露呈しているものが9基あって、その構成主体は横穴式石室墳と考えられる。昭60・61年度に当事業によって発掘調査された垣内田古墳群(3)はその北西部に位置するが、標高にして52m前

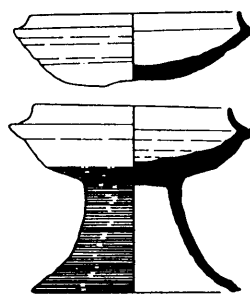
後しかなく、地形立地的には異なった存在を呈している。

また、瑞巖寺古墳群を形成する丘陵からさらに東へ細長く続く尾根、山腹斜面にはかつて12基の古墳が分布していたと伝えられており、これが今回の調査報告でその一端が明らかになった天神山古墳群である。B流域については堀坂川が平野部へ拡がりを見せはじめる伊勢寺町西域部に古墳群が認められる。左岸には北から下文珠古墳群(7)、上文珠古墳群(8)、善小広古墳(10)、高須摩古墳群(11)がその主なものである。石室石材の露出もあり、いずれも円墳形態の横穴式石室墳と推定されている。右岸には、めはじき古墳(12)と今回報告する平林古墳群(13)がその流域に所在している。

またC地域については、本遺跡位置図には右岸側について図示していないが、両域にわたって広く古墳群の分布が認められている。いずれも10基以内で、多くは4～5基を単位とした古墳群の立地がみられる。なお、横尾古墳群(15)は、BとC流域の間のB流域に近い丘陵上に位置している。(新田 洋)

〔註〕

- ①三重県教育委員会『昭61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告—第1分冊—』(1987・3)
- ②下村登良男『八重田古墳群発掘調査報告』(松阪市教育委員会・1983)
- ③松阪市史編さん室『松阪市史第2巻 史料篇 考古』(1978)



第3図 瑞巖寺17号墳出土土器(1:4)

Ⅲ．松阪市^{ようち}岩内町 ^{かいとだ}垣内田古墳群（18）

1. はじめに

J R松阪駅の西方約6 kmに松阪市岩内町の集落がある。この集落は松阪市と一志郡嬉野町の境となっている鉢ヶ峰（標高約420 m）の東麓に位置し、集落の東側には伊勢湾に向かってなだらかに傾斜する扇状地が広がっている。

この付近は近年圃場整備事業が進み整然とした水田の広がる場所である。圃場整備の事前調査では平地部にはまとまった規模の集落遺跡は確認されていないが、岩内集落周囲の丘陵部には横穴式石室を主体とする古墳時代後期の古墳が多数見られる。

昭和50年9月に近畿自動車道建設計画地内の分布調査が実施された際、岩内町集落から東北東方向へ緩やかにのびる低い尾根上の畑地で石鏃が1点採取され、周囲にも土器の細片が散布していることが判

明した。このあたりは遺跡の空白部分であったが、この時点で初めて遺跡の存在が確認され、昭和53年発行の『松阪市史 第二巻 資料編 考古』に、「遺物包含地・垣内田（かいとだ）遺跡」として紹介された。

今回の発掘調査は、近畿自動車道建設に伴い、インターチェンジから松阪市街地に通じるアクセス道路と料金所及び管理事務所が建設されるために実施することとなった。調査範囲は松阪市史に記載されている「垣内田遺跡」の隣接地で、このあたりにも土器片の散布が見られることから遺構の存在が十分に予想された。

本調査に先立つ第1次調査（224㎡）は、「垣内田遺跡」を中世の遺跡と想定し、遺跡範囲の確定を





第5図 調査区位置図（1：2,000）

※黒ベタは第1次調査の試堀坑位置 ※図中の番号は号墳

主な目的として行った。しかし、中世の土器の出土はそれほど多くなく、意外にも古墳時代後期の横穴式石室1基が検出された。そのため、中世の遺構の他に、墳丘を削平された古墳が他にも埋もれている可能性が高まった。

本調査は昭和60年度と昭和61年度の2年度にわたって実施した。その結果、昭和60年度の調査区（約5,500㎡）では11基の古墳（1号墳～11号墳）と性格不明の溝が数条、昭和61年度の調査区（約600㎡）では2基の古墳（12号墳・13号墳）と性格不明の方形周溝状遺溝（S X 1）が検出された。

出土遺物は古墳時代後期の土師器、須恵器、鉄器等が整理箱に20箱程度で、そのほとんどは古墳の主体部から出土したものである。その他、木葉形尖頭器、縦長剥片、磨製石斧、石鏃、縄文土器片、中世の土師器皿・鍋、山茶椀、山皿等が整理箱に5箱程度ある。

なお、調査は「垣内田遺跡」という名称で実施しその後のニュース、概報等でもその名称を使用してきたが、遺構のほとんどが古墳であることから、今回は、「垣内田（かいどだ）古墳群」という遺跡名で報告することにした。

2. 古墳群の概要

調査前の標高は、昭和60年度の調査区では西端付近で約59.4m、東端付近で約53.2m、昭和61年度の調査区は西端付近で約52.2m、中央付近で約52.8m、東端付近で約51.5mである。調査区は西から東へのびる緩やかな丘陵の南斜面に沿っているため、標高は東あるいは南へ行くほど低くなる。

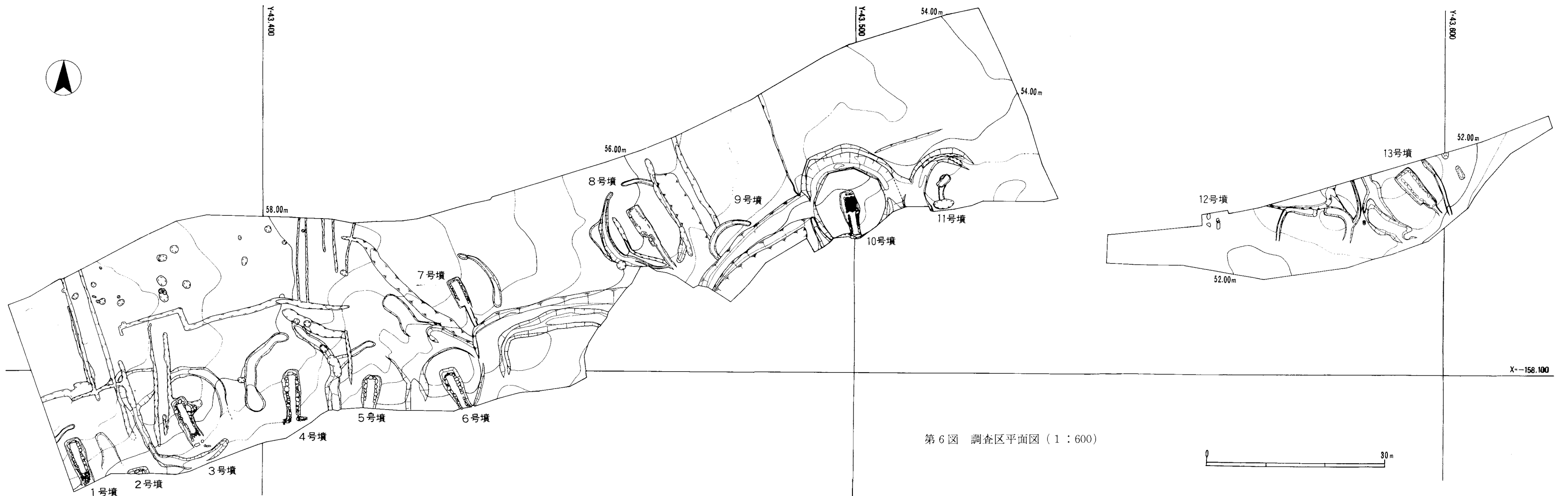
調査前の調査区は桑や柿の畑であった。耕作土上面から地山（黄褐色土）上面までの深さは北端で約20cm、南端で約1.2mである。古墳は耕作土あるいはその下に堆積していた黒褐色土を除去した時点で検出された。いずれの古墳も墳丘や主体部上部が削平されていたが、副葬品は比較的多数残存していた。

各古墳の墳形や規模は明確とはいえないが、わず

かに残っている周溝底の形状から判断すると、八角墳と考えられる10号墳と周溝が全く検出されなかった2号墳・12号墳を除く10基は円墳と考えられる。墳丘規模は最も大きいのが8号墳で、南北約17m、東西約13m、最も小規模なものが9号墳で、径7m程度である。

主体部は9号墳を除く12基で検出された。そのうち11号墳は木棺直葬であるが、その他は横穴式石室をもつ。

遺物の出土量は3号墳・8号墳・10号墳が多く、特に3号墳からは鍔金具、銀象嵌が施された柄頭金具・鞘尻金具、銀製の空玉等他の古墳に見られないものが出土している。



第6図 調査区平面図(1:600)

名称	外形	墳丘規模	主体部	出土遺物		備考
				土器類	土器類以外	
1号墳	円墳	南北約12m 東西約10m	横穴式石室	-	鉄刀2、鏝1、刀子3、鉄鎌4	周溝
2号墳	-	-	横穴式石室	須恵器杯身3・短頸壺1・壺1	-	
3号墳	円墳	南北約14m 東西約14m	横穴式石室	土師器椀1・須恵器杯蓋5・杯身1・高杯2・ 甕2・直口壺1・平瓶2・1	鉄刀1、柄頭金具1、鞘尻金具1、鉄鎌 6、鍔金具3、耳環4、空玉3、丸玉1	周溝 外護列石
4号墳	円墳?	南北約14m 東西約14m	横穴式石室	土師器甕1・須恵器椀3・甕1・瓶1・甕1	刀子8、鉄鎌3、耳環1	周溝 外護列石
5号墳	円墳?	東西約12m	横穴式石室	須恵器杯蓋1・杯身2・高杯1・壺1	鉄釘2	周溝
6号墳	円墳	南北約11m 東西約11m	横穴式石室	土師器甕1・須恵器杯蓋6・高杯5・椀1	刀子1	外護列石?
7号墳	円墳	径12m程度	横穴式石室	須恵器杯蓋2・杯身3・提瓶1	鏝1、刀子1、鉄鎌2	周溝
8号墳	円墳	南北約17m 東西約13m	横穴式石室	土師器台付椀2・鉢1・甕1・須恵器杯蓋3・ 杯身5・高杯6・高杯蓋1・脚付椀1・壺蓋1	鉄刀1、鏝1、刀子3、鉄鎌2、鉄鎌1	周溝
9号墳	円墳	径約7m	-	-	-	周溝
10号墳	八角墳?	径約13m 一辺約5m	横穴式石室	土師器椀5・須恵器杯蓋7・杯身25・高杯1・ 椀2・甕2・提瓶1	鉄刀1、刀子2、鉄鎌4、耳環2	周溝
11号墳	円墳	径約10m	木棺直葬	須恵器杯身1	-	周溝
12号墳	-	-	横穴式石室	土師器甕1・須恵器杯蓋1	-	
13号墳	円墳	東西約15m	横穴式石室	土師器椀2・甕1・須恵器杯蓋1 杯身1・ 高杯1・短頸壺1	刀子2、鏝1、鉄鎌2、耳環2、切子玉1	周溝

第3表 垣内田古墳群一覽

名称	掘形	主軸方位	全長(m)	玄室		羨道		袖	玄門立柱石	奥壁基底石		備考
				長(m)	幅(m)	長(m)	幅(m)			数	高さ	
1号墳	長台形状	N20°W	7.5	3.9	1.2~1.3	3.6	0.8~1.0	右片袖	右1	3	側壁1段分	敷石? 閉塞石
2号墳	-	N22°W	-	-	3.3	-	-	-	-	2	側壁2段分	敷石
3号墳	長台形状	N26°W	8.3	3.5	1.1~1.2	4.8	0.9~1.1	右片袖	右1・左1	2	側壁2段分	閉塞石
4号墳	長台形状	N3°W	8.0	3.7	1.2	4.3	1.1	右片袖	右1・左1	2	側壁2段分	
5号墳	長台形状	N4°W	-	3.8?	1.3~1.4	3.6	0.8~1.0	右片袖	-	3	側壁1段分	
6号墳	長台形状	N25°W	6.3	3.3	1.1~1.2	3.0	0.7~0.8	右片袖	右1・左1	2	側壁1段分	
7号墳	右片袖状	N26°W	-	4.5	1.1~1.2	-	-	右片袖?	-	2	側壁1段分	羨道不明瞭 墓道
8号墳	右片袖状	N35°W	-	4.3?	1.3?	-	-	右片袖?	-	-	-	短い羨道 墓道
10号墳	長台形状	N12°W	6.2?	2.6	1.4	3.6?	0.9~1.0	右片袖? 両袖?	-	-	-	無袖に近い 敷石
12号墳	-	N1°W	-	-	1.2	-	-	-	-	-	-	
13号墳	右片袖状	N43°W	7.2	5.0	1.3~1.4	2.2	1.0	右片袖	-	-	-	短い羨道 墓道

第4表 垣内田古墳群 横穴式石室一覽

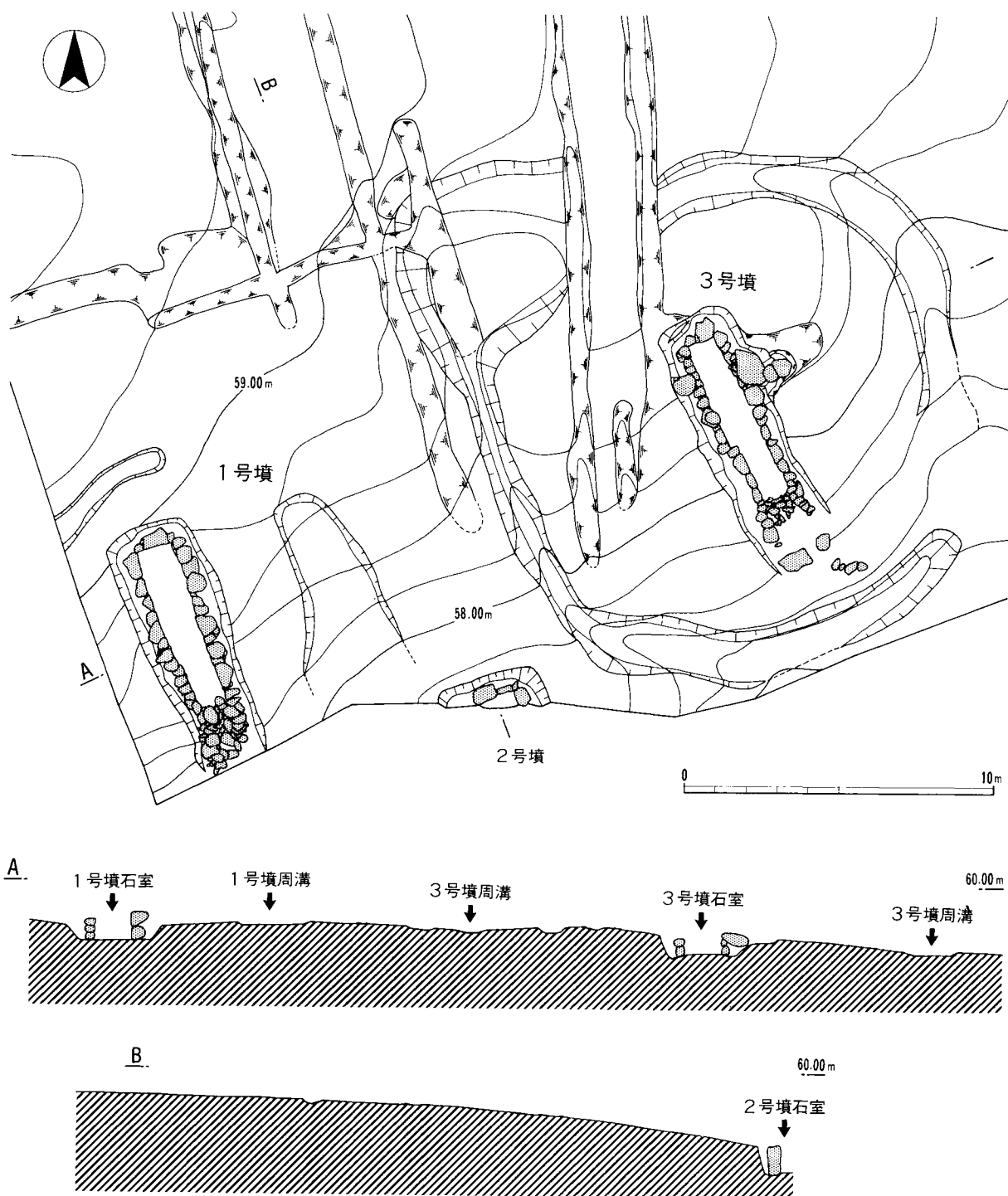
3. 古墳各説

1. 1号墳

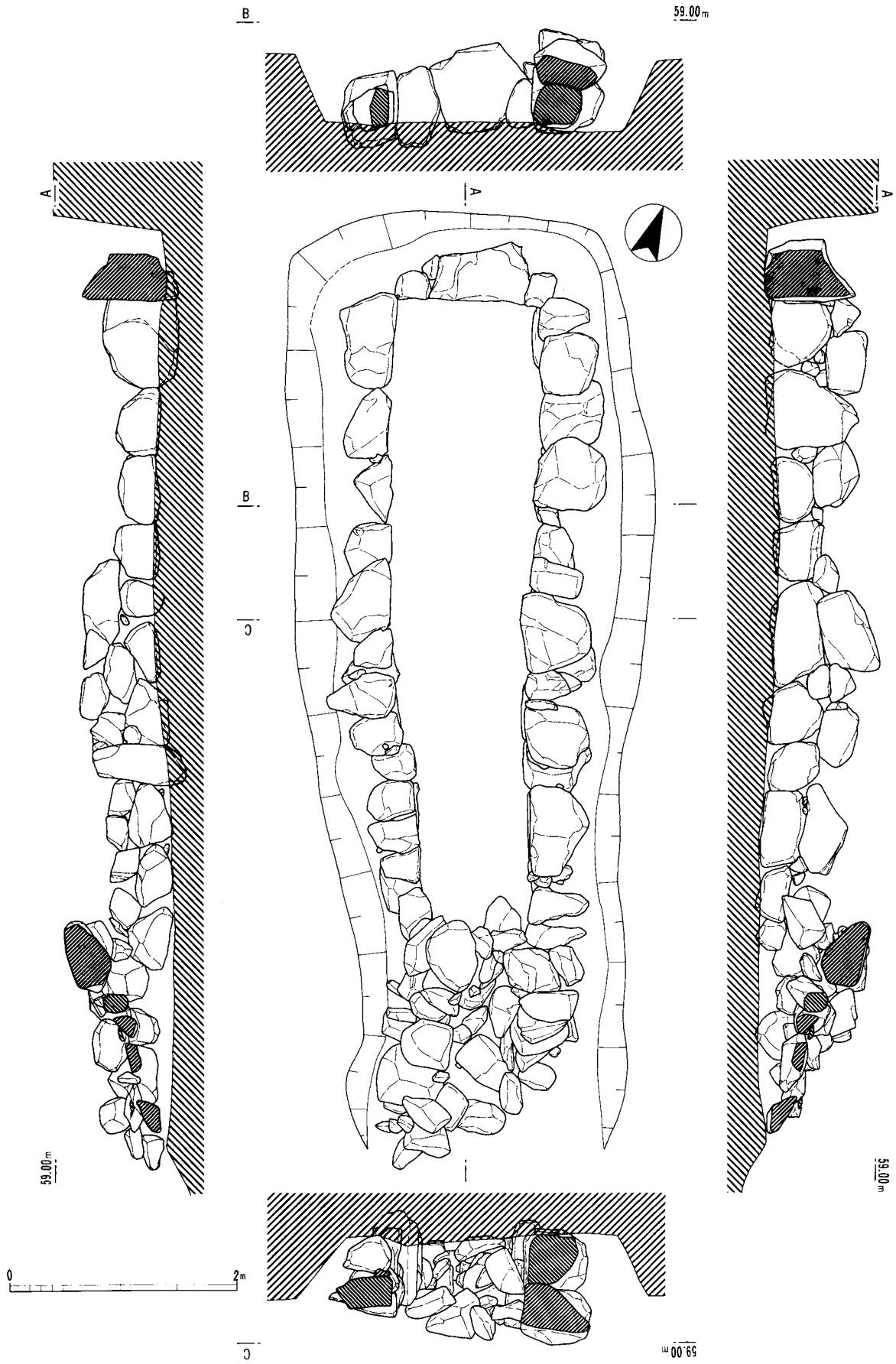
A. 墳形

1号墳は調査区の西端の丘陵斜面にある。削平に

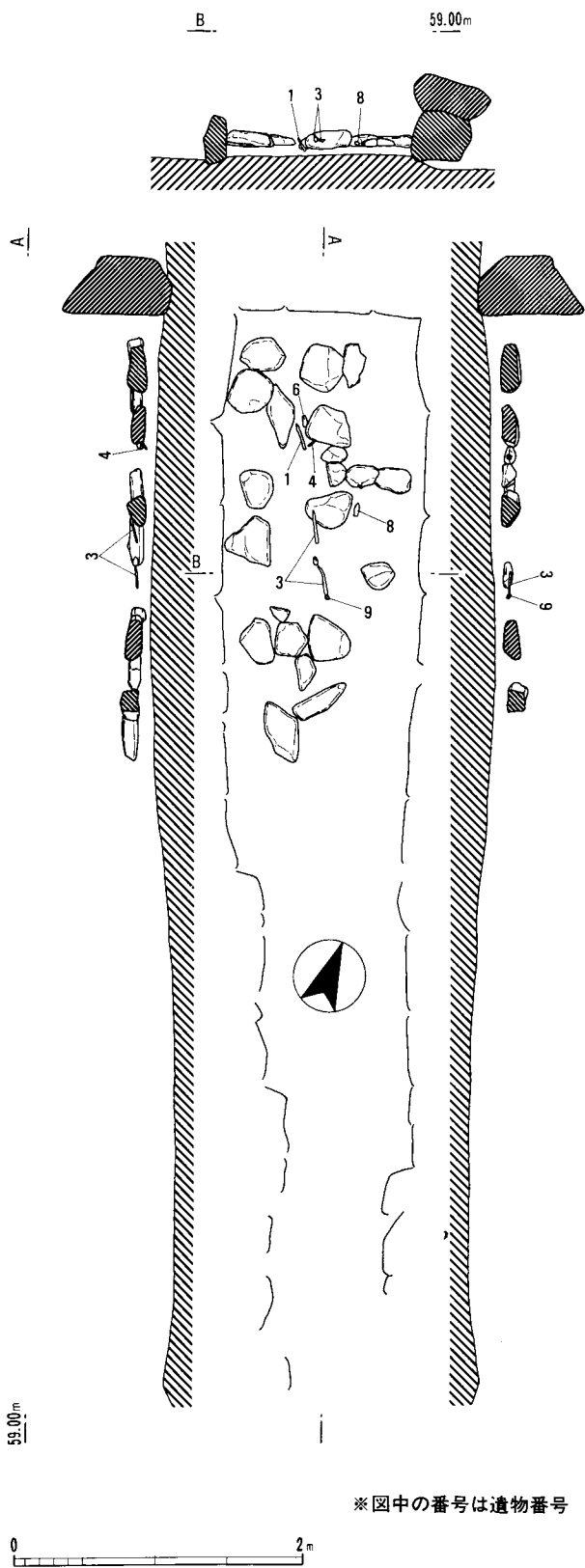
より墳丘が完全に失われているうえに古墳の西裾と南裾が検出できなかったため墳形や規模は断定しがたいが、主体部である横穴式石室の長さ及び北裾と東裾で検出された周溝の位置から推定すると、南北



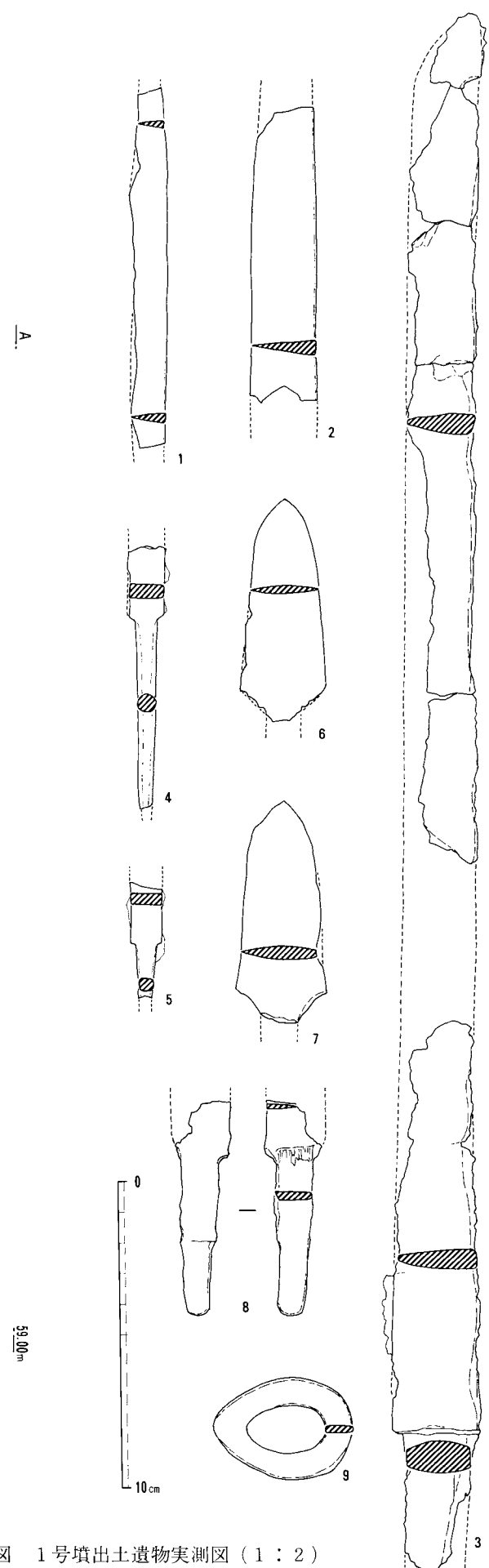
第7図 1号墳・2号墳・3号墳 地形測量図 (1:200)



第8图 1号墳石室実測図 (1:50)



第9図 1号墳遺物出土状況実測図 (1:50)



第10図 1号墳出土遺物実測図 (1:2)

約12m、東西約10mの南北に長い楕円形の円墳であったと思われる。

B. 主体部

主体部は主軸をN 20° Wにとり、南南東に開口する右片袖の横穴式石室である。

石室掘形は羨道方向へ行くほど幅が狭くなる長台形状のもので、検出長約8m、幅は奥壁部分が約3m、羨道入口付近が約2.5mである。

石室は基底石がほぼ完全に残っており、現存全長約7.5m、玄室長約3.9m、幅1.2m～1.3m、羨道長約3.6m、幅0.8m～1.0mを測る。

側壁の基底石は60cm前後×40cm前後の山石を横置きにして並べている。ただし、玄門部の右側壁の基底石1個については縦置きして玄門立柱石としている。奥壁の石材数は3個で、そのうちの1個が比較的大きい。上端の高さは側壁1段分とほぼ同じになっている。

羨道入口部分には20cm～60cmの大きさの山石が乱雑に詰まっていた。閉塞石と思われるが、崩壊した羨道側壁の石材も混入していると思われる。

玄室内で、幅20cm～30cmの平坦な石材が20個ほど検出された。これらの石の上面の高さがほぼそろっていることから、敷石とも考えられる。

C. 遺物

出土遺物は鉄刀2、鏢1、刀子3、鉄鏃4で、土器はない。これらのほとんどは玄室後半部から比較的まとまって出土した。

鉄刀^②(2・3) 2は石室埋土出土の刀身部の残片で、平棟平造である。鏢がひどく、かなり変形している。残存長9.6cm、刀身部最大幅2.2cm、棟幅は0.4cm～0.5cmを測る。3は玄室後半部で刀身部を奥壁側に、茎部を羨道側に向けて出土した平棟平造の

直刀である。欠損部分が多く完形にはならないが、同一個体のもので判断できる破片をならべると全長は50cm以上となる。刀身部幅は関近くで3.0cm、先端より13cmのところでは2.2cm、棟幅は0.7cmである。

鏢(9) 3の直刀の茎部に付いて出土した倒卵形の金銅製鏢で、長径4.5cm、短径3.3cm、厚さ0.2cmを測る。中央孔も倒卵形で、長径2.6cm、短径1.5cmを測る。

刀子(1・8) 1・8は玄室後半部出土である。1はかなり細長い刀身部をもつもので、残存長12.0cm、刀身部最大幅1.2cm、棟幅0.2cm～0.3cmを測る。8は両関造の刀子である。残存長7.0cm、棟幅0.2cm、茎部は長さ5.2cm、関近くの幅1.2cm、厚さ0.2cmで、茎部端に近づくほど狭く、薄くなる。関近くに木質が残る。図示してないが、石室埋土から刀子の茎部片と思われる残片が1点出土している。残存長4.5cm、端部近くの幅1.5cm、厚さ0.5cmで、わずかに木質が残る。

鉄鏃(4～7) 4・6は玄室後半部、5・7は石室埋土出土である。4・5は長頸鏃の残片と思われる。4は残存長8.6cm、頸部は断面が長方形で幅1.2cm、厚さ0.3cm、茎部は断面が方形で最大幅0.7cmを測る。5は残存長3.7cm、頸部は断面が長方形で幅1.0cm、厚さ0.3cm、茎部は断面が円に近い方形で幅0.6cm厚さ0.4cmを測る。6・7は長三角形の鏃身部をもつ広根系の鏃である。6は残存長7.3cm、最大幅2.8cm、7は残存長7.3cm、最大幅3.0cmを測る。

2. 2号墳

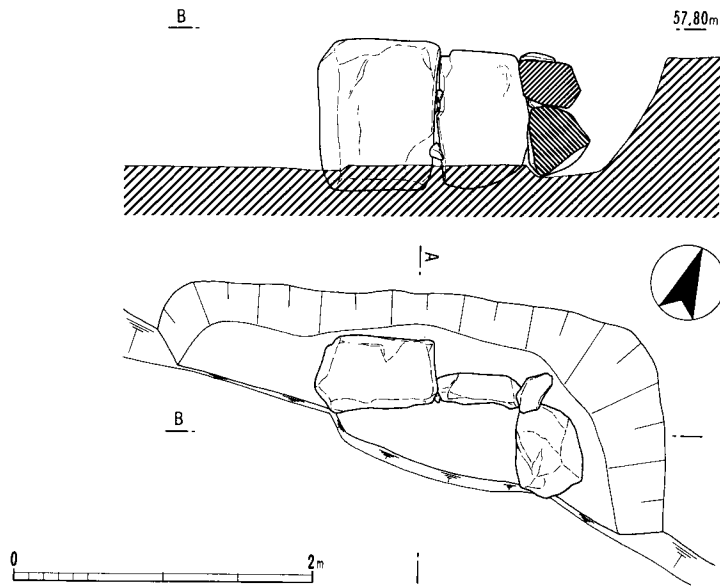
A. 墳形

2号墳は1号墳の南東側にある。墳丘は完全に失

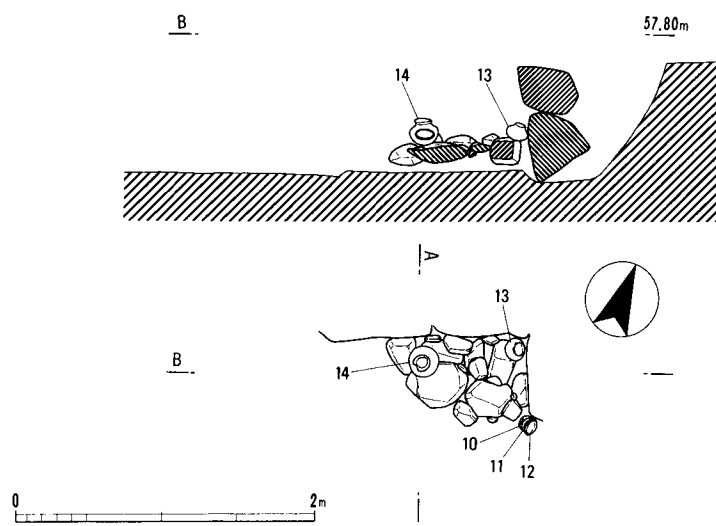
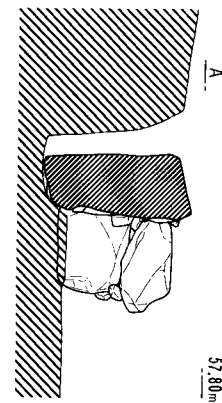
遺物番号	出土位置	器種	備考	取上番号 整理番号
1	M-10 1号墳 玄室	刀子	刀身部片 鉄製 残存長12.0cm	No.2 18-0103
2	M-10 1号墳 石室埋土	鉄刀	刀身部片 鉄製 残存長9.6cm	18-0107
3	M-10 1号墳 玄室	鉄刀	刀身部～茎部片 鉄製 全長50cm以上	No.4 18-0104
4	M-10 1号墳 玄室	鉄鏃	頸部～茎部片 鉄製 残存長8.6cm	No.3 18-0106
5	M-10 1号墳 石室埋土	鉄鏃	頸部～茎部片 鉄製 残存長3.7cm	18-0109

第5表 1号墳出土遺物一覧

遺物番号	出土位置	器種	備考	取上番号 整理番号
6	M-10 1号墳 玄室	鉄鏃	鏃身部 鉄製 残存長7.3cm	No.1 18-0101
7	M-10 1号墳 石室埋土	鉄鏃	鏃身部 鉄製 残存長7.3cm	No.2 18-0102
8	M-10 1号墳 玄室	刀子	関部～茎部片 鉄製 残存長7.0cm	No.5 18-0105
9	M-10 1号墳 玄室	鏢	ほぼ完存 金銅製 長径2.6cm、短径3.3cm	No.4 18-0110
	M-10 1号墳 石室埋土	刀子	茎部片 鉄製 残存長4.5cm	18-0108

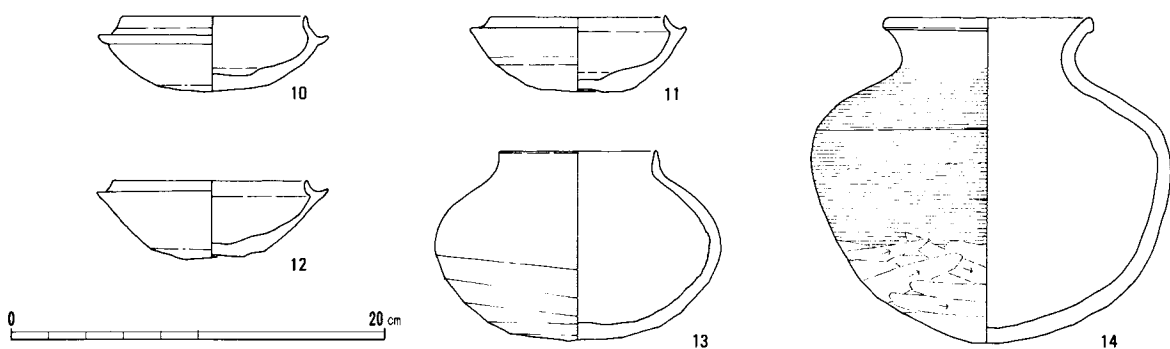
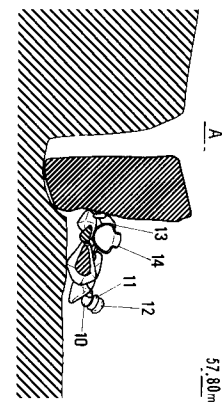


第11図 2号墳石室実測図 (1:50)



第12図 2号墳遺物出土状況実測図 (1:50)

※図中の番号は遺物番号



第13図 2号墳出土遺物実測図 (1:4)

遺物番号	出土位置	器種	計測値(cm)	調整・技法の特徴	色調・胎土	残存度	備考	取上番号 整理番号
10	L-11 2号墳 玄室	須恵器 杯身	口径：9.8 器高：4.0	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切り未調整。	青灰色 砂粒含	口縁：7/8		No.3 18-0203
11	L-11 2号墳 玄室	須恵器 杯身	口径：9.3 器高：4.0	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切り未調整。	暗青灰色 細砂粒含	完存		No.4 18-0204
12	L-11 2号墳 玄室	須恵器 杯身	口径：10.3 器高：4.1	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切り未調整。ロクロ右回転。	青灰色 砂粒含	口縁：7/8		No.5 18-0205
13	L-11 2号墳 玄室	須恵器 短頸壺	口径：8.3 胴径：15.4 器高：10.1	内外面ロクロナデ。胴部外面下半ロクロヘラケズリ。底部内面ナデ。ロクロ右回転。	淡灰色 砂粒含	完存	胴部外面上半に自然釉付着。	No.2 18-0202
14	L-11 2号墳 玄室	須恵器 壺	口径：17.4 胴径：19.3 器高：10.8	口頸部内外面及び胴部内面ロクロナデ。胴部外面上半カキ目、下半雑なヘラケズリ。底部外面未調整、内面ナデ。	淡灰色 砂粒多含	口縁：7/8		No.1 18-0201
	L-10 2号墳 石室埋土上部	陶器 山茶碗	台径：7.3	内外面ロクロナデ。底部外面回転糸切り痕ナデ消し。	淡灰色 微砂粒含	口縁：欠損 高台：3/5		18-0206

第6表 2号墳出土遺物一覧

われており、周溝も検出できなかったため墳形や規模は不明であるが、1号墳の東裾周溝が2号墳の主体部北側約2mで消滅していること、3号墳の周溝の南西部分が2号墳と共有している可能性があること、主体部東側の標高57.4m、57.6mの等高線が主体部をとりまくように若干湾曲していることなどから、やや強引な推定であるが、1号墳程度の規模をもっていたであろうと思われる。

B. 主体部

主体部は横穴式石室で、遺存する主な石材は奥壁の2個と左側壁の2個のみである。奥壁石の並びから石室の主軸方向を推定すると、主軸をN 22° Wにとり、南南東に開口していたと思われる。

石室掘形は、奥壁付近の幅が3.3m前後で、1号墳・3号墳とほぼ同規模である。

左側壁の基底石は約60cm×約40cmの石材が横置きされているが、奥壁の石材は縦置きで、側壁2段分の高さがある大きなものが2個使用されている。同様の石の使い方をしている3号墳・4号墳の石室を参考にすれば、2号墳の奥壁幅を現存の1.2m程度としてよいと思われる。

C. 遺物

かろうじて残っていた石室北東隅から完形、あるいはほぼ完形の須恵器が5個体出土した。これらの須恵器は石室敷石の上に置かれたような状態で出土したことから、原位置を保っていたと考えられる。

須恵器杯身 (10~12) この3個体は、口縁部を上

にして重ねて置かれた状態で出土した。いずれも口径10cm前後、器高4cm程の小型品で、口径の割りに器高が高い。底部外面はヘラ切り未調整である。

須恵器短頸壺 (13) 石室の北東隅コーナーから口を上にして出土した。胴部下半にはしっかりとしたロクロヘラケズリが施されている。自然釉の付着の仕方から、口頸部全体に蓋状の土器を被せて焼成したことがわかる。

須恵器壺 (14) 奥壁の中央部正面から出土した。底部は敷石に接し、口頸部を上にして置いた。口頸部が短く外反し、口縁端部が外側に肥厚する丸底の壺である。底部のヘラケズリは、口頸部を下にして置いてからひと削りずつ土器を左回りに回転させて施したと思われる。底部外面の中央部はヘラケズリが施されず、未調整のままである。

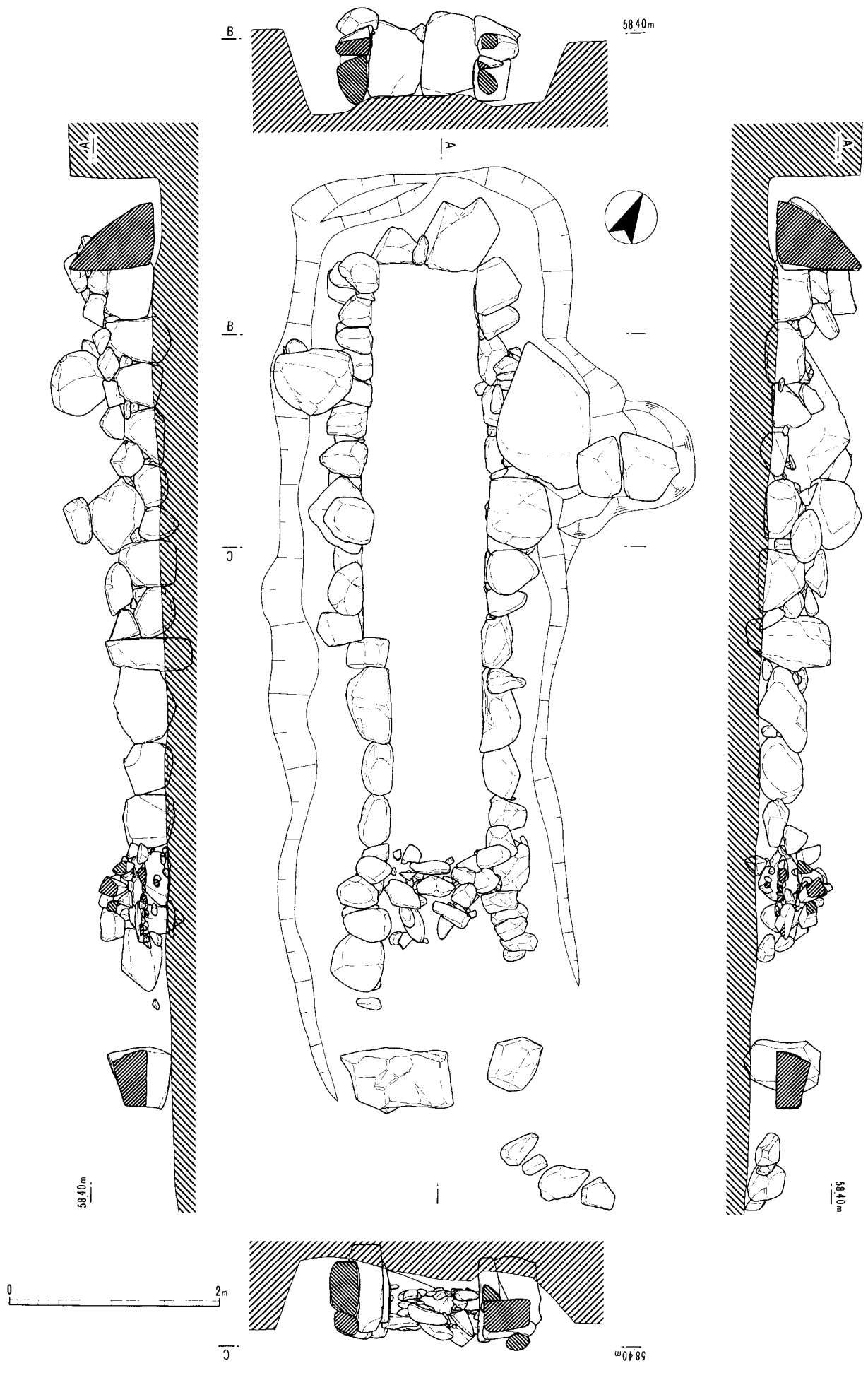
山茶碗 石室埋土上部から底部片が1点出土している。平安時代末葉のものであろう。

3. 3号墳

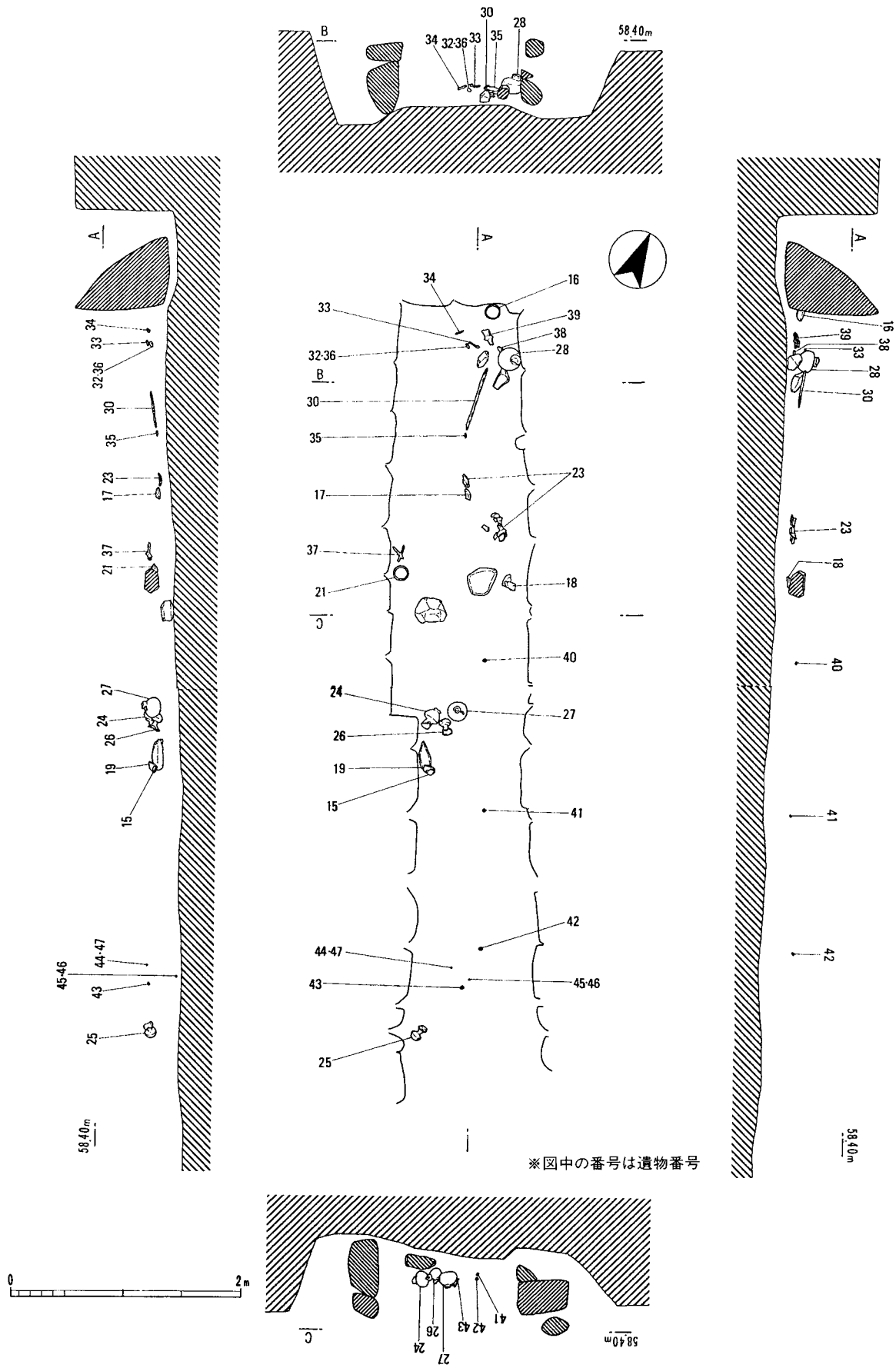
A. 墳形

3号墳は1号墳の東方約5mで検出された古墳で、丘陵斜面にある。周溝は、ほぼ全周復元できる程度に残っていたため、他の古墳よりは墳形や規模を知る条件は良い。それによると、墳形は円墳で、周溝内側の下端(墳丘裾)で測った規模は、東西、南北ともほぼ14mである。

なお、主体部である横穴式石室の羨道左側壁の延



第14图 3号墳石室実測図 (1:50)



第15図 3号墳 遺物出土状況実測図 (1:50)

長方向にある40cm前後の山石4個については、外護列石の一部と思われる。

B. 主体部

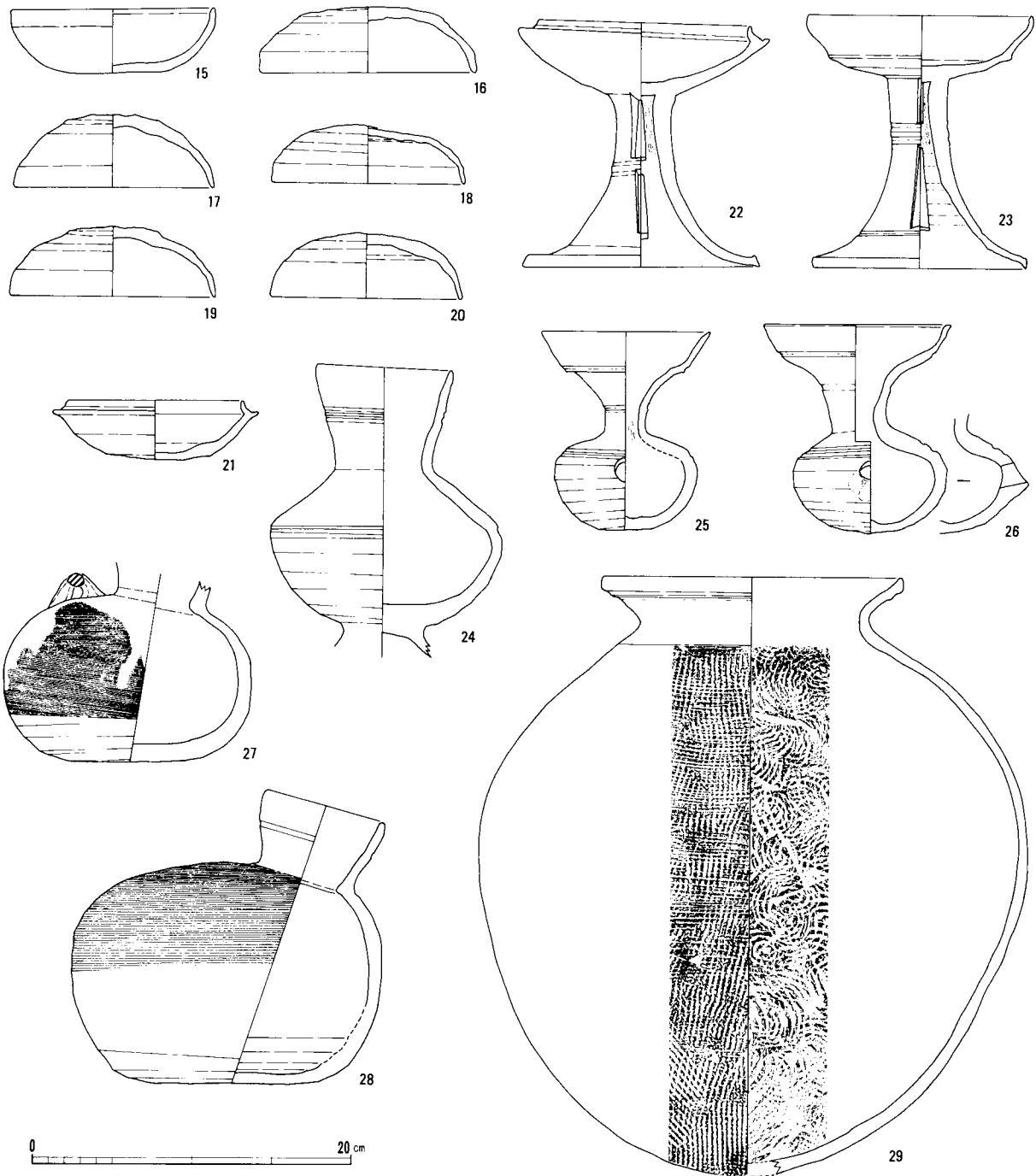
主体部は主軸をN 26° Wにとり、南南東に開口する右片袖の横穴式石室である。

石室掘形は長方形で、検出長約 8.8m、幅 2.7m 前後である。

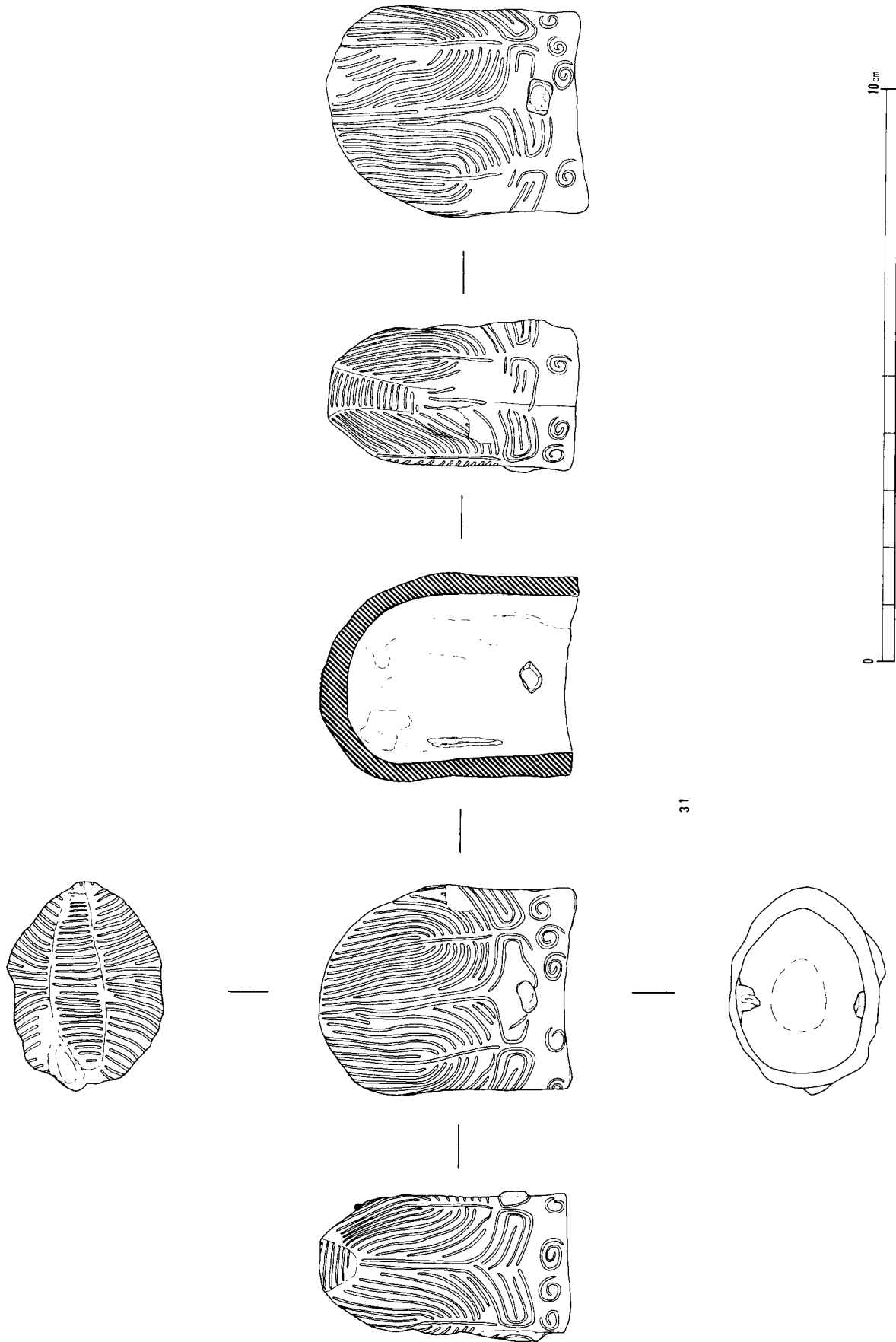
石室は玄室の基底石が完全に残っているが、羨道の

の入口付近は攪乱を受けているようである。玄室は長さ約 3.5m、幅 1.1m～ 1.2m、羨道は4号墳を参考にして外護列石手前を入口とすれば長さ約 4.8m、幅 0.9～ 1.1mを測り、石室全長は約 8.3mとなる。

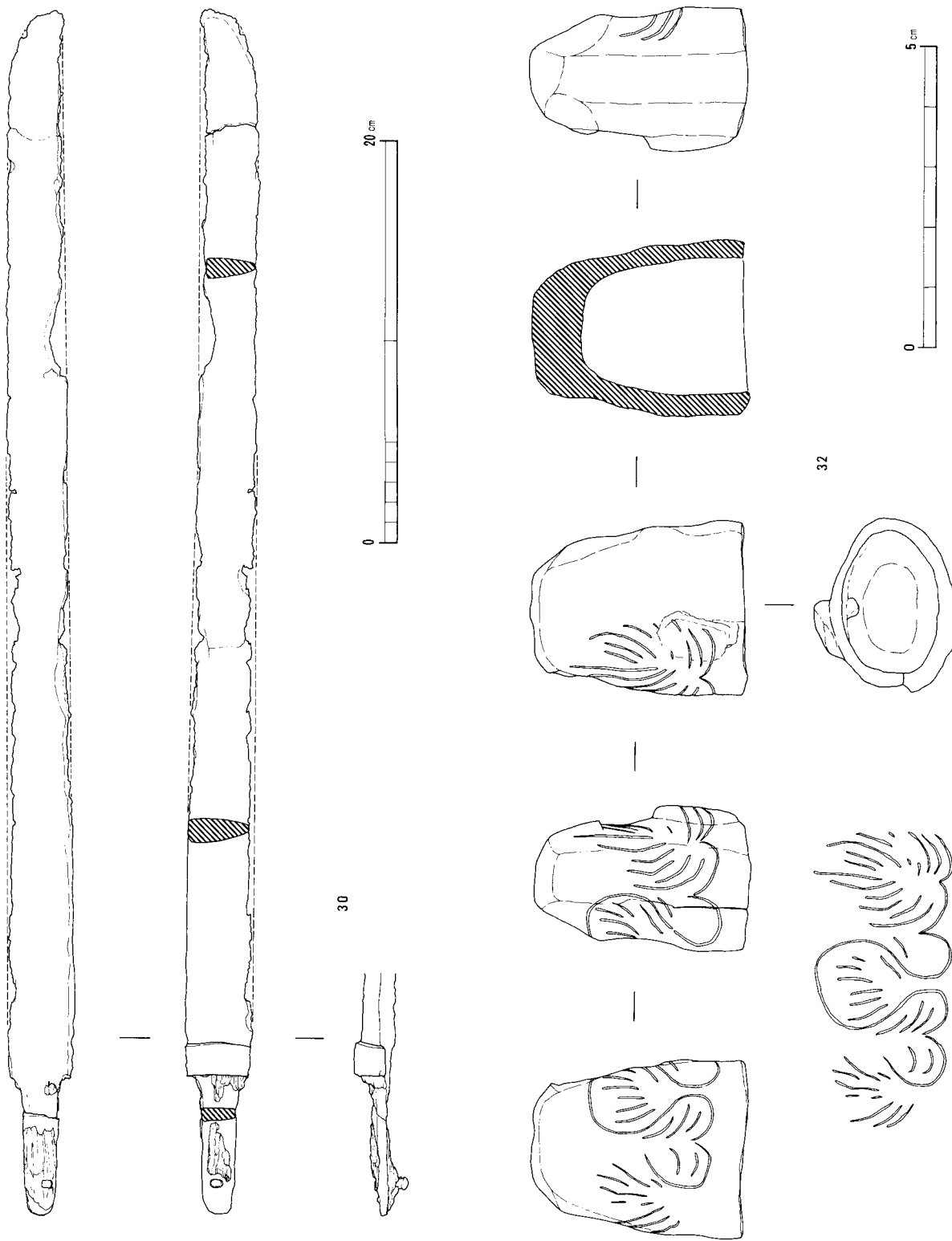
側壁の基底石は50cm前後×40cm前後の山石を横置きにして並べている。ただし、玄門部の両側壁の基底石各1個については縦置きして玄門立柱石として



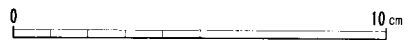
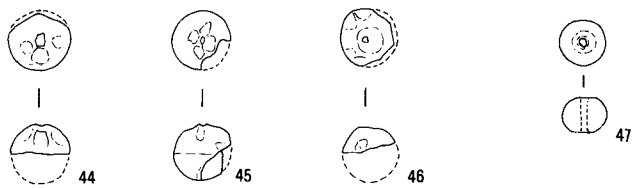
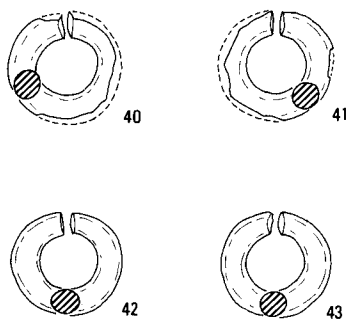
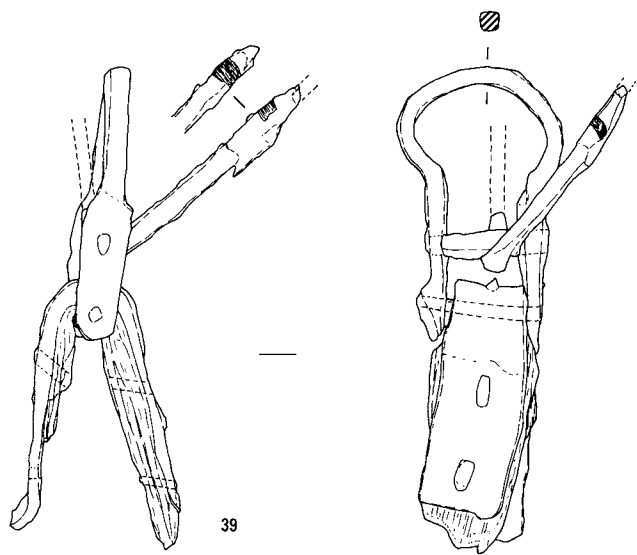
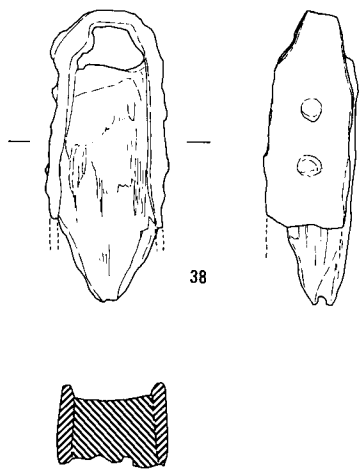
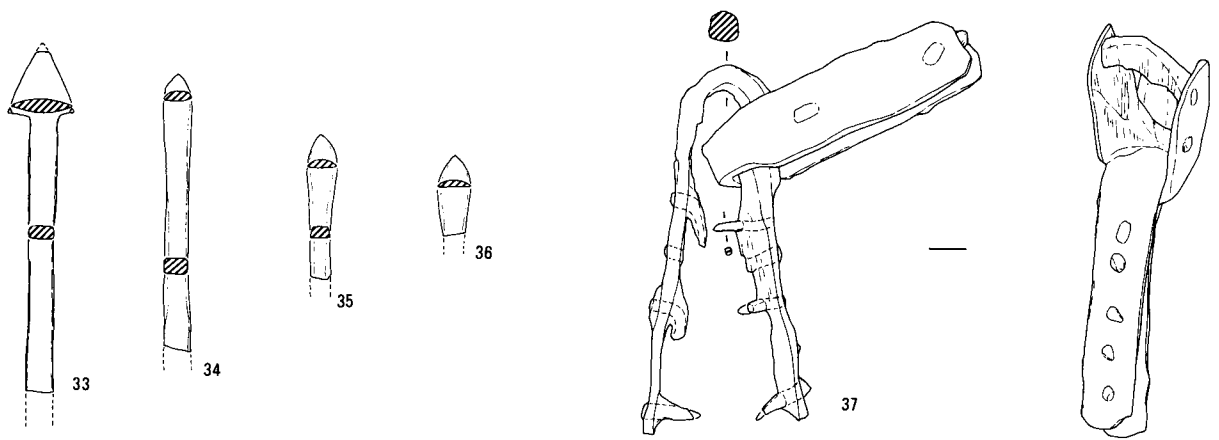
第16-1図 3号墳出土遺物実測図(1:4)



第16-2图 3号墳出土遺物実測図(1:1)



第16-3图 3号填出土遗物实测图 (30=1:3, 32=1:1)



第16-4图 3号填出土遗物实测图(1:2)

遺物番号	出土位置	器種	計測値(cm)	調整・技法の特徴	色調・胎土	残存度	備考	取上番号 整理番号
15	M-14 3号墳 羨道	土師器 椀	口径:12.5 器高:4.0	内面ナデ。外面指オサエのち軽いナデ。口縁部内外面ヨコナデ。	淡橙色 微砂粒少含	口縁:3/5	底部外面に木葉痕残る。	No.21 18-0319
16	M-14 3号墳 玄室	須恵器 杯蓋	口径:13.5 器高:4.1	内外面ロクロナデ。天井部外面ヘラ切り未調整。	淡灰色 砂粒含	完存	内面に焼き脹れ多い。	No.1 18-0301
17	M-14 3号墳 玄室	須恵器 杯蓋	口径:12.4? 器高:4.5	内外面ロクロナデ。天井部外面ヘラ切り未調整。	暗灰色 細砂粒多含	口縁:1/2		No.11 18-0310
18	M-14 3号墳 玄室	須恵器 杯蓋	口径:12.0 器高:3.6	内外面ロクロナデ。天井部外面ヘラ切り未調整。	外:黒灰色 内:青灰色 細砂粒含	口縁:3/4	器壁薄い。	No.12 18-0311
19	M-14 3号墳 羨道	須恵器 杯蓋	口径:12.7? 器高:4.4?	内外面ロクロナデ。天井部外面ヘラ切り未調整。	外:暗灰色 内:灰白色 砂粒含	口縁:1/4		No.20 18-0318
20	K-14 3号墳 周溝	須恵器 杯蓋	口径:12.0 器高:4.0	内外面ロクロナデ。天井部外面ヘラ切り未調整。	暗灰色 細砂粒多含	口縁:2/3		18-0328
21	M-14 3号墳 玄室	須恵器 杯身	口径:10.9 器高:3.7	内外面ロクロナデ。底部外面ヘラ切り未調整。ロクロ右回転。	暗青灰色 砂粒含	完存	18の口縁端部片が付着。	No.14 18-0313
22	第1次調査 No.10試掘坑 (3号墳)	須恵器 高杯	口径:13.2 裾径:14.8 器高:15.2	内外面ロクロナデ。柱状部内面に絞り痕。透かしは2方2段。	淡青灰色 砂粒含	口縁:3/5 裾部:5/6		18-0327
23	M-14 3号墳 玄室	須恵器 高杯	口径:14.0 裾径:13.3? 器高:15.8?	内外面ロクロナデ。杯底部外面ロクロヘラケズリ。ロクロ右回転。柱状部内面にシボリ痕。透かしは2方2段。	暗青灰色 細砂粒多含	口縁:5/6 裾部:1/8		No.10 18-0309
24	M-14 3号墳 玄門	須恵器 直口壺	口径:8.3 胴径:14.5	内外面ロクロナデ。胴部外面下半ロクロヘラケズリ。ロクロ右回転。	黒灰色 砂粒多含	口縁:5/6 胴部:完存	肩部外面と口頸部 内面に自然釉付着。	No.18 18-0316
25	M-14 3号墳 羨道	須恵器 壺	口径:10.5? 胴径:12.4 器高:9.0	内外面ロクロナデ。胴部外面下半ロクロヘラケズリ。ロクロ右回転。頸部内面にシボリ痕。	黒灰色 微砂粒多含	口縁:1/5 胴部:完存	肩部外面と口頸部 内面に自然釉付着。	No.23 18-0332
26	M-14 3号墳 玄門	須恵器 壺	口径:13.0 胴径:9.7 器高:13.0	内外面ロクロナデ。胴部外面下半ロクロヘラケズリ。ロクロ右回転。	黒灰色 細砂粒多含	口縁:1/2 胴部:完存	円孔部は貼り付け により突出。	No.17 18-0321
27	M-14 3号墳 玄門	須恵器 平瓶	胴径:15.5	口頸部内外面及び胴部内面ロクロナデ。胴部外面上半カキ目、下半ロクロヘラケズリ。ロクロ左回転。	淡灰色 微砂粒含	胴部:完存	胴部外面上半に自然釉厚く付着。	No.16 18-0315
28	M-14 3号墳 玄室	須恵器 平瓶	口径:7.5? 胴径:19.4 器高:18.4	口頸部内外面及び胴部内面ロクロナデ。胴部外面上半カキ目、下半ケズリ状の強いナデ。底部外面ロクロヘラケズリ、中央未調整。ロクロ右回転。	暗灰色 砂粒多含	完存	口頸部の焼き歪み大きい。	No.4 18-0304
29	K-14 3号墳 周溝?	須恵器 甕	口径:18.6? 胴径:34.6 器高:38前後	口頸部内外面ヨコナデ。胴部外面は擬格子状タタキ目のち部分的にカキ目。胴部内面は同心円状アテ具痕。	淡灰色 精良	口縁:1/6 胴部:5/6		18-0329

第7-1表 3号墳出土遺物一覧(1)

遺物番号	出土位置	器種	備考	取上番号 整理番号	遺物番号	出土位置	器種	備考	取上番号 整理番号
30	M-14 3号墳 玄室	鉄 刀	ほぼ完存 全長60.8cm	鉄製 No.8 18-0333	40	M-14 3号墳 玄門	耳環	錆化激しい 径3cm程度	銅芯銀張 No.15 18-0314
31	M-14 3号墳 石室埋土	柄頭金具	ほぼ完存 長さ4.6cm	鉄製 銀象嵌 18-0303	41	M-14 3号墳 玄門	耳環	錆化激しい 径3cm程度	銅芯銀張 No.19 18-0317
32	M-14 3号墳 玄室	鞘尻金具	ほぼ完存 長さ3.5cm	鉄製 銀象嵌 No.7 18-0307	42	M-14 3号墳 羨道	耳環	ほぼ完存 長径3.0cm、短径2.7cm	銅芯銀張 No.22 18-0320
33	M-14 3号墳 玄室	鉄 鎌	鎌身部~頸部 残存長9.0cm	鉄製 No.6 18-0306	43	M-14 3号墳 羨道	耳環	ほぼ完存 長径3.0cm、短径2.8cm	銅芯銀張 No.25 18-0324
34	M-14 3号墳 玄室	鉄 鎌	鎌身部~頸部 残存長7.4cm	鉄製 No.5 18-0331	44	M-14 3号墳 羨道	空玉	径1.5cm程度	銀製 No.24 18-0323
35	M-14 3号墳 玄室	鉄 鎌	鎌身部~頸部 残存長3.8cm	鉄製 No.9 18-0308	45	M-14 3号墳 羨道	空玉	径1.5cm程度	銀製 18-0325
36	M-14 3号墳 玄室	鉄 鎌	鎌身部 残存長2.1cm	鉄製 No.7 18-0334	46	M-14 3号墳 羨道	空玉	径1.5cm程度	銀製 18-0326
37	M-14 3号墳 玄室	鍔金具	鍔金具と吊り金具	鉄製 No.13 18-0312	47	M-14 3号墳 羨道	丸玉	完存 高さ0.9cm、径1.2cm	ガラス製 No.24 18-0322
38	M-14 3号墳 玄室	鍔金具	吊り金具	鉄製 No.3 18-0305		M-14 3号墳 石室埋土	鉄 鎌	頸部片 残存長2.1cm	鉄製 18-0330
39	M-14 3号墳 玄室	鍔金具	吊り金具と鉸具	鉄製 No.2 18-0302		M-14 3号墳 玄室	鉄 鎌	鎌身部片 残存長1.3cm	鉄製 No.5 18-0335

第7-2表 3号墳出土遺物一覧(2)

いる。奥壁の石材は縦置きで、側壁2段分の高さがある大きなものが2個使用されている。

羨道中央部には長さ30cm前後の横長の山石が20個程度詰まっていた。この石は羨道を塞ぐ目的をもって積まれたことは明らかで、閉塞石と断定できる。

C. 遺物

出土遺物は10号墳に次いで多く、土師器椀1、須恵器杯蓋5・杯身1・高杯2・甕2・直口壺1・平瓶2・甕1、鉄刀1、柄頭金具1、靱尻金具1、鉄鍬6、鍔金具3、耳環4、空玉3、丸玉1がある。装飾付大刀や馬具が出土したのは3号墳のみである。

石室内もある程度の攪乱を受けているようであるが、ほとんどの石室内遺物がほぼ同一面で検出されたこと、完形の遺物がかなりあることなどから、原位置を保っているものも多いと思われる。

石室内遺物は出土位置によって4群に分けられようである。第1群は奥壁近くのもので、須恵器杯蓋(16)・平瓶(28)、鉄刀(30)、靱尻金具(32)、鉄鍬(33~36)、鍔金具(38・39)がまとまって出土した。第2群とするのは玄室中央部で出土した須恵器杯蓋(17・18)・杯身(21)・高杯(23)、鍔金具(37)であるが、攪乱を受けているためかあまりまとまりはない。第3群は玄門近くのもので、土師器椀(15)、須恵器杯蓋(19)・直口壺(24)・甕(26)・平瓶(27)、耳環(40・41)がある。第4群は羨道入口近くの須恵器甕(25)、耳環(43・44)、空玉(45~47)、丸玉(48)で、装身具が比較的多い。

第1群には装飾付大刀が、第3群と第4群には耳環が2個ずつ見られることから、まとまりに欠ける第2群以外の3つの群にはそれぞれ少なくとも1体の埋葬が想定できそうである。

土師器椀(15) 玄門近くの羨道右壁で須恵器杯蓋(19)が破片と重なって出土した。底部外面には木葉痕が明瞭に残るが、比較的丁寧なつくりである。
須恵器杯蓋(16~20) 16は第1群、17・18は第2群、19は第3群、20は南裾の周溝部分で出土したものである。いずれも口径12cm~13.5cmと比較的小型で、天井部と口縁部との境の稜は消滅し、天井部外面はへら切り未調整である。16は口縁部を上にして置かれたような状態で出土したことから、杯身として

転用されていたと思われる。18は他の3点と比べて全体に器壁が薄く、色調や胎土も若干異なる。

須恵器杯身(21) 18の杯蓋とセットで焼成されたため18の口縁端部の一部が受部に付着している。18と21とは約80cm離れて出土したが、石室内に置かれた時点では蓋と身が合わさっていたと思われる。

須恵器高杯(22・23) 22は長脚2方2段透かしの有蓋高杯で、第1次調査(試掘調査)のNo.10試掘坑が偶然にも3号墳の玄室部分を掘削したときその玄室内から出土した。23は長脚2方2段透かしの無蓋高杯で、第2群の遺物である。攪乱によって砕かれており、その破片は直径60cm程度の範囲に散らばっていた。

須恵器直口壺(24) 台付の直口壺で、第3群の遺物である。台部は大部分が欠損している。

須恵器甕(25・26) 25は第4群、26は第3群の遺物である。いずれも胴部は丸底で頸部は細く締まり、口縁部径は胴部径を若干上回る。26の口頸部は胴部の中心からかなりずれて接合されている。貼り付けにより突出して付けられた円孔部も雑で、指頭によるナデつけ痕が明瞭に残る。

須恵器平瓶(27・28) 27は第3群、28は第1群の遺物で、いずれも口縁部を上にした状態で出土した。

須恵器甕(29) 3号墳の周溝近くの包含層から破片で出土したものであるため、3号墳に伴うものかどうかは確定できない。口頸部は1/6しか残っていないが、胴部は破片を接合するとほぼ全周する。胎土は砂粒をほとんど含まず精良で、3号墳出土の他の須恵器とはやや異なる。

鉄刀(30) 第2群の遺物で、鋒を奥壁側に基部を羨道側に向けて出土した平棟平造の直刀である。全長60.8cmで、鯉口金具が約1/2遺存する。刀身部は、長さ53.8cm、関近くの幅3.3cm、鋒より20cmのところの幅3.0cm、棟幅1.0cmである。基部は、長さ7.0cm、幅1.7cm、厚さ0.6cmで、木質が付着し、目釘が1本遺存している。錆のため不明瞭であるが、関部にも刃関孔があげられ、釘が遺存しているようである。

柄頭金具(31) 石室埋土出土の鉄製円頭柄頭金具で、表面に銀象嵌が施されている。長さは4.6cmで、差し口部分の長径3.5cm、短径2.5cm、肉厚0.3cm

～ 0.4cmである。内側には木質が残り、外面にはわずかに布質の繊維の痕跡が認められる。銀象嵌は全表面を4分割して火焰状文が施され、差し口の周囲のみ渦文が巡っている。

鞘尻金具 (32) 第1群出土の鉄製鞘尻金具で、鉄刀(30)の鋒から約20cm離れて出土した。31と同じく表面に銀象嵌が施されている。31より小型で、長さは3.5cm、差し口部分の長径3.0cm、短径2.2cm、肉厚0.3cm～0.4cmを測り、内側には木質が残る。銀象嵌は全表面を3分割して火焰状文が施されている。

鉄鏃 (33～36) いずれも第1群の遺物である。33は三角形の鏃身部をもつ長頸鏃で、残存長は9.0cmである。鋒が欠損しているが、復元すると、鏃身部長1.9cmで、最大幅は1.7cmとなる。頸部は断面が長方形で、幅0.9cm、厚さ0.4cmを測る。34～36は関部が不明瞭な鑿箭式の鏃身部をもつ長頸鏃である。34は残存長7.4cmを測る。鏃身部の断面は両丸造か片丸造かよくわからない。頸部の断面は長方形で、幅0.6cm～0.7cm、厚さ0.4cmを測る。35は残存長3.8cmである。鏃身部の断面は片丸造で、長さ1.7cm、幅0.8cm、頸部の断面は台形状で、幅0.8cm、厚さ0.3cmを測る。36は鞘尻金具(32)に鑄着して出土したもので、残存長2.1cmである。鏃身部の断面は片丸造で、幅0.9cmを測る。その他、石室埋土から頸部片1点と、34の頸部に鑄着して出土した断面が片丸造で35に類似した形態をもつ鏃身部片1点がある。

鐙金具 (37～39) 37は第2群の遺物で、木心鉄板張の壺鐙の上部の金具にそれを吊るす吊り金具が鑄によって付着しており、両者に木質が残っている。鐙側の金具の長さは9.9cmで鉄板幅が1.4cm、吊り金具の長さは7.7cmで鉄板幅1.9cmである。38・39は第1群の遺物で、この両者も37と同じく木心鉄板張の壺鐙につくものと思われる。38は吊り金具で、木質が残っている。端部が欠損しており、残存長は5.8cmで、鉄板幅は38より広く2.2cmである。39は吊り金具に鉸具が付着したもので、吊り金具には木質が残っている。吊り金具の長さは6.0cmで鉄板幅が2.3cm、鉸具の長さは7.2cmである。37・38・39の吊り金具は形態がそれぞれ異なることから、対にな

るものかどうかは断定できない。

耳環 (40～43) 4個体とも銅芯銀張で、径3cm程度の正円に近く仕上げられている。断面は円形で直径6mm～7mmである。40・41は第3群の遺物で、出土地点は1m以上離れているが、1対になるものであろう。両個体とも錆化が激しい。重さは40が11.0g、41が11.9gである。42・43は第4群の遺物で、1対になるものと思われる。銀箔はかなり剥落しているが、銅芯の残りは良い。重さは42が15.9g、43が17.0gである。

空玉 (44～46) 3個体とも第4群の遺物である。直径1.5cm程度の中空のもので、きわめて薄く延ばした銀を半球状にし、それを2つ合わせて作られている。比較的残りの良い46の重さは0.7gである。

丸玉 (44) 第4群の遺物である。濃青色のガラス製で、高0.9cm、径1.2cm、重さ1.7gを測る。

4. 4号墳

A. 墳形

4号墳は3号墳の東方約3mで検出された古墳で、丘陵斜面にある。周溝は南裾を除く3方で検出されたが、北裾部分で一部不明瞭となる。また、東裾部分の周溝は5号墳と共有する。横穴式石室の羨道入口から東西の両方向にのびる石列は、外護列石の一部と思われ、ここが古墳の南裾と推定される。この列石の石材には石室の基底石よりやや小さい40cm前後の大きさの山石が使用されており、東側に約2m、西側に約1m遺存している。

周溝は多角形墳的なコーナーをもつようにみえる部分もあるが、検出できなかった所も多いので、墳形は円墳としておく。周溝内側の下端(墳丘裾)で測った東西径と、外護列石のある南裾から周溝が切れている北裾部分までを測った南北径は、ともに約14mである。

B. 主体部

主体部は主軸をN 3° Wにとり、南に開口する右片袖の横穴式石室である。

石室掘形は長方形で、検出長9m程度、幅2.8m前後を測る。

石室は基底石がほぼ完全に残り、2段目の石材も比較的よく残っている。石室の規模は、全長約8.0

m、玄室長約 3.7m、幅 1.2m、羨道長約 4.3m、幅約 1.1mを測る。

側壁の基底石は50cm前後×40cm前後の山石を横置きにして並べており、玄門立柱石が左右に1個ずつ見られる。奥壁の石材は縦置きで、側壁2段分の高さがある大きなものが2個使用されている。

4号墳の石室の規模や形態は3号墳の石室ときわめて類似している。

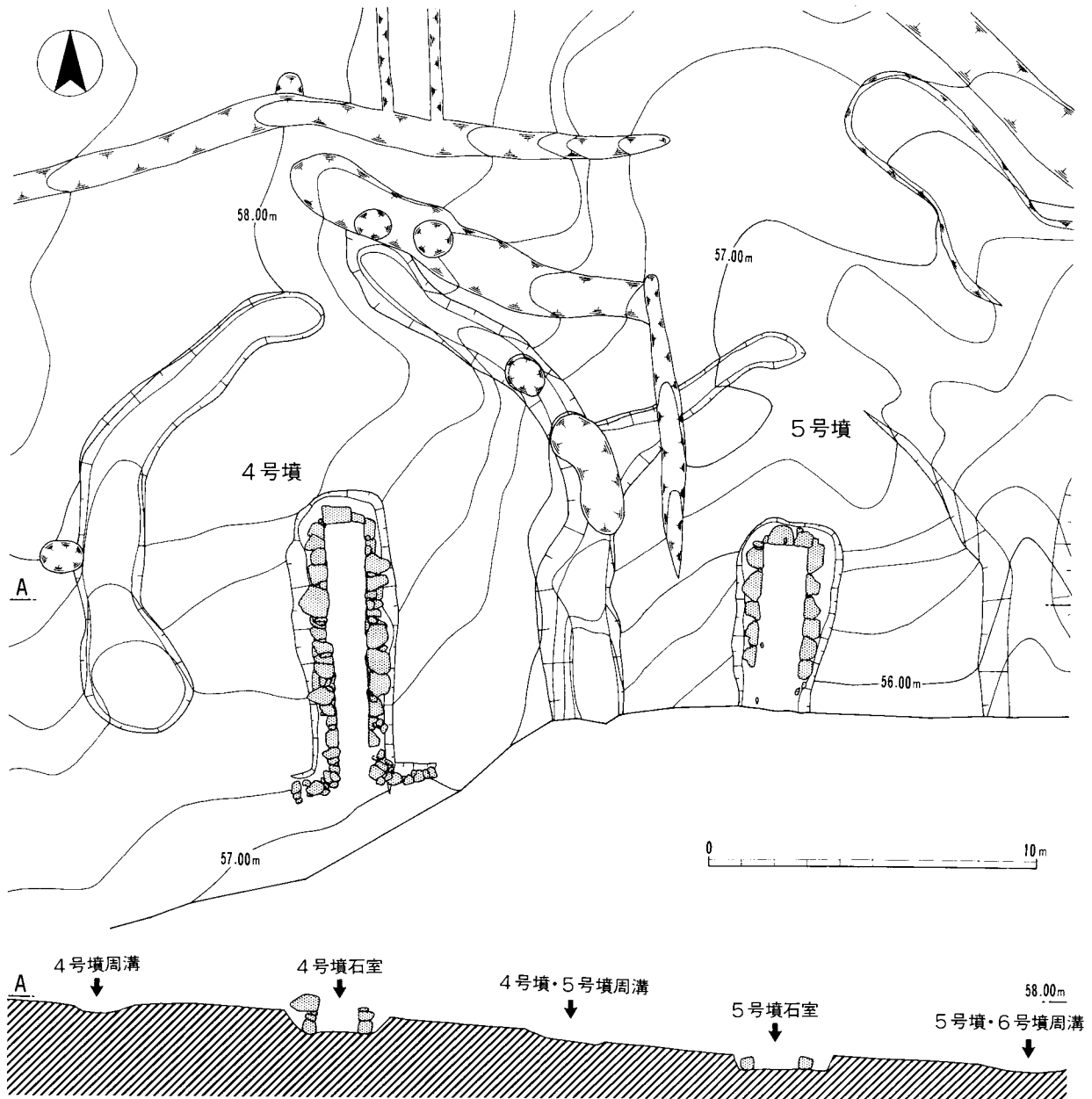
C. 遺物

古墳に伴うと思われる遺物は須恵器椀3・甕1・

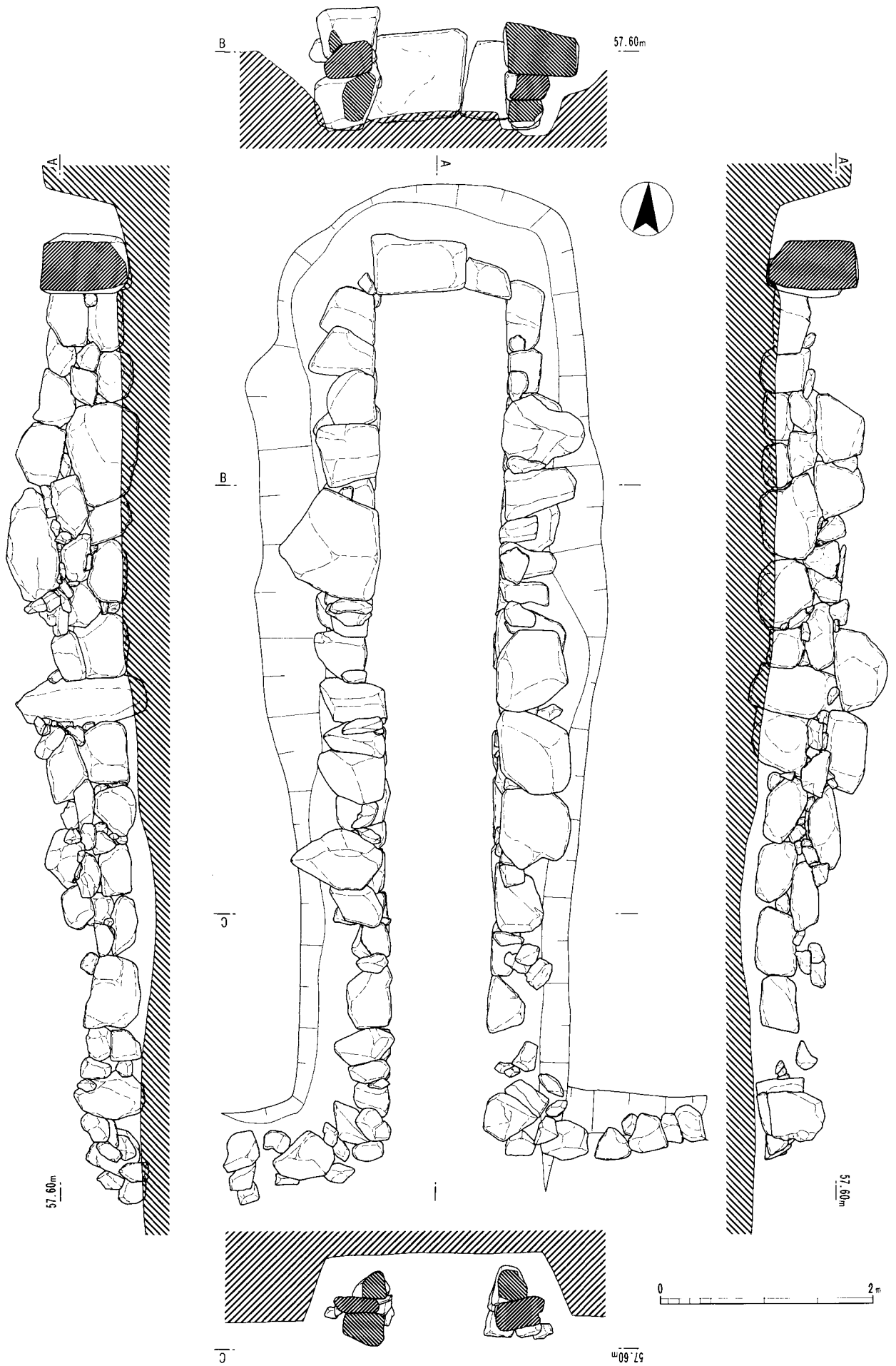
瓶1・甕1、土師器甕1、刀子8、鉄鏃3、耳環1で、基底石が比較的良好に残っている割には出土遺物量は少ない。石室埋土上部にはほぼ完形のものを含む中世の土器が多く含まれていたことから、中世に石室の攪乱を強く受けたことが考えられる。

なお、玄室中央部で検出された20cm～30cmの大きさの山石7個は、敷石あるいは棺台として置かれた可能性がある。少なくともこの面を石室床面とらえてよいであろう。

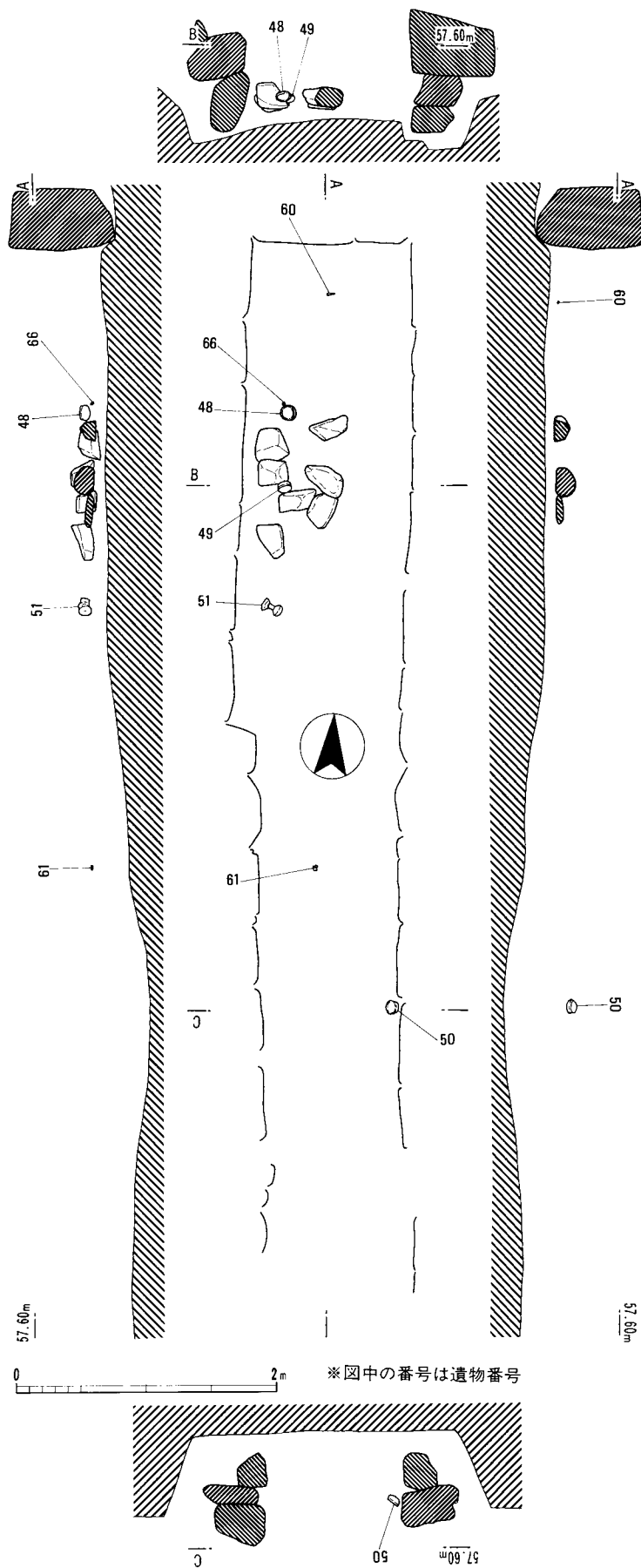
須恵器椀（48～50） 48・49は玄室中央部で、50は



第17図 4号墳・5号墳 地形測量図（1：200）



第18图 4号填石室实测图(1:50)



第19図 4号墳遺物出土状況実測図(1:50)

羨道部で出土した。いずれも口径10cm前後、器高5cm前後でよく似た形態をしている。底部外面の調整は48が手持ちヘラケズリ、49・50がロクロヘラケズリである。

須恵器甕 (51) 玄室前半部で出土した。胴部は丸底で頸部が細く締まる。口縁部は焼き歪みが甚だしく、口径は不確定であるが、胴部径を若干上回る程度と思われる。

須恵器瓶 石室埋土上部から胴部片が出土している。横瓶と類似した成形法をとる球状の胴部であることから、フラスコ形の細頸瓶と思われる。

須恵器甕 石室埋土上部から小片1点が出土している。全体の形態は全く不明である。

土師器甕 羨道埋土から同一個体のものと思われる胴部の小片が3片出土している。

中世の土器 (52~57) 石室埋土上部から中世の土器が整理箱約1箱分出土している。ほとんどが破片である。52の土師器皿、53・54の山茶椀は平安時代末葉のものであろう。55の山皿は高台がなく偏平であることから鎌倉時代に入るものと思われる。56は常滑産の甕の口縁部片で、口径は測れない。口縁部断面の形態から室町時代前半のものと思われる。57は土師器鍋で、口縁部の形態から、鎌倉時代中頃のものと思われる。

刀子 (58~63) 58は石室埋土出土で、全長10.3cm、刀身部長6.1cm、幅1.1cm、棟幅0.2cm、茎部の長さ4.2cm、関部近くの幅1.1cm、茎部端近くの幅0.4cmを測る。茎部には木質が残る。59は石室埋土から出土したやや大きめの刀身部片である。残存長は6.2cm、刀身部最大幅1.6cm、棟幅0.4cmを測る。60は奥壁近くから出土したもので、残存長8.8cm、刀身部最大幅1.3cm、棟幅0.2cm~0.3cm、

茎部は長さ 3.6cm、関部近くの幅 1.1cm、厚さ 0.3cmを測る。茎部には木質が残る。61は羨道部出土の関部分から茎部にかけての残片で、残存長 4.9cm、刀身部幅 1.4cm、棟幅 0.4cm、茎部幅 0.8cm、厚さ

0.2cm～ 0.3cmを測る。62は羨道埋土出土のミニチュア刀子で、丁寧に作られている。全長 5.9cm、刀身部の長さ 3.8cm、最大幅 0.7cm、棟幅 0.1cm、茎部の長さ 2.1cm、最大幅 0.4cmを測る。他に、刀身

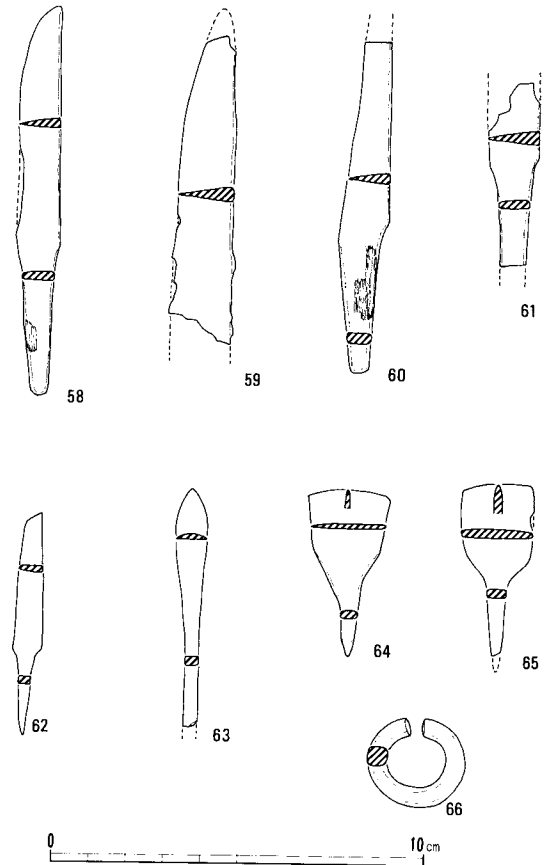
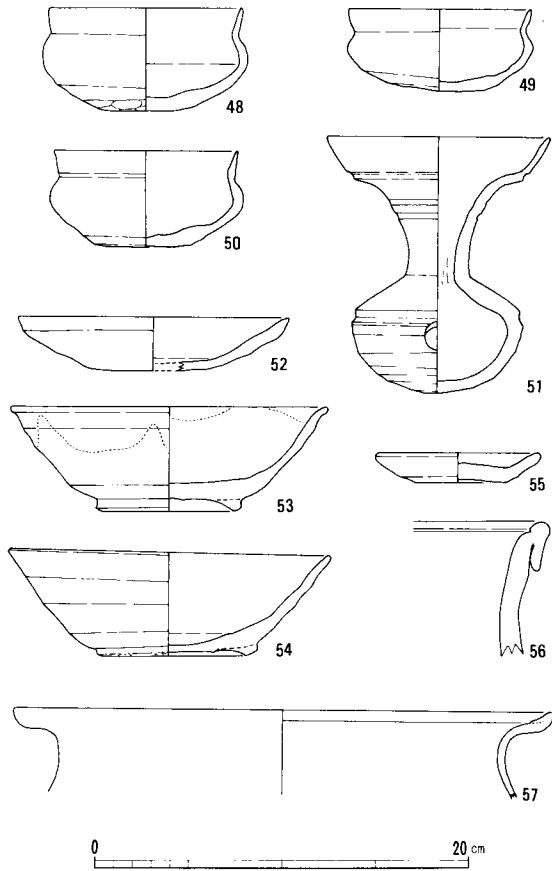
遺物番号	出土位置	器種	計測値(cm)	調整・技法の特徴	色調・胎土	残存度	備考	取上番号 整理番号
48	M-19 4号墳 玄室	須恵器 椀	口径：10.2 胴径：10.9 器高：5.5	内外面ロクロナデ。底部外面手持ち ヘラケズリ。	暗灰色 微砂粒多含	口縁：3/4 胴部：完存	底部に焼き脹れ 目立つ。内面全 体に自然釉付着。	No.4 18-0403
49	M-19 4号墳 玄室	須恵器 椀	口径：9.7 胴径：9.9 器高：4.4	内外面ロクロナデ。底部外面ロクロ ヘラケズリ、内面ナデ。ロクロ右回 転。	暗灰色 微砂粒多含	完存		No.5 18-0404
50	M-19 4号墳 羨道	須恵器 椀	口径：9.7 胴径：10.3 器高：5.1	内外面ロクロナデ。底部外面ロクロ ヘラケズリ。ロクロ右回転。	暗灰色 細砂粒含	口縁：3/4 胴部：完存		No.9 18-0407
51	M-19 4号墳 玄室	須恵器 甕	口径：11.8? 胴径：9.2 器高：13.6	内外面ロクロナデ。胴部外面下半ロ クロヘラケズリ。ロクロ右回転。頸 部内面にシボリ痕。	淡灰色 細砂粒含	口縁：2/3 胴部：完存	口縁部の焼き歪 み大きい。	No.6 18-0405
52	M-19 4号墳 石室埋土上部	土師器 皿	口径：14.4 器高：2.9?	口縁部ヨコナデ。内面ナデ、外面 指オサエのち軽いナデ。	明黄褐色 微砂粒含	口縁：2/3		No.10 18-0408
53	M-19 4号墳 石室埋土上部	陶器 椀	口径：16.8? 台径：7.0 器高：5.6?	内外面ロクロナデ。口縁部に漬け掛 け釉。	淡灰色 微砂粒少含	口縁：1/4 高台：3/4		No.11 18-0409
54	M-19 4号墳 石室埋土上部	陶器 山茶椀	口径：17.0 台径：7.6? 器高：5.5	内外面ロクロナデ。底部外面ナデ。	暗灰色 微砂粒含	口縁：7/8 高台：完存	高台端に稜殻痕。 高台かなり歪。	No.12 18-0410
55	M-19 4号墳 石室埋土上部	陶器 山皿	口径：8.5 底径：4.9 器高：1.6	内外面ロクロナデ。底部外面回転糸 切り痕残る。	淡灰色 砂粒含	完存		No.13 18-0411
56	M-19 4号墳 石室埋土上部	陶器 甕	口径：40前後	口縁部は断面「N」状。	釉：暗赤褐色 砂粒多含	口縁：1/10		18-0413
57	M-19 4号墳 石室埋土上部	土師器 鍋	口径：28.4?	口頸部内外面ヨコナデ。口縁部を 内面に折り返す。器壁薄い。	浅黄橙色 砂粒多含	口縁：1/5		18-0414
	L-19 4号墳 石室埋土上部	須恵器 瓶	胴高：19程度	内外面ロクロナデ。	灰白色 精良	胴部：1/3	上半外面に自然 釉付着。	18-0427
	L-19 4号墳 石室埋土上部	須恵器 甕		外面擬格子状のタタキ目。内面同心 円状のアテ貝痕のちハケ。	暗青灰色 細砂粒含	胴部：小片		18-0428
	M-19 4号墳 羨道埋土	土師器 甕		外面縦方向に細かいハケ。内面ハケ とナデ。	黄橙色 微砂粒含	胴部：小片		18-0426
	M-19 4号墳 石室埋土上部	陶器 山茶椀	口径：16.7? 台径：7.2 器高：6.4?	内外面ロクロナデ。	淡灰色 微砂粒少含	口縁：1/8 高台：1/2	内面に自然釉薄 く付着。	18-0412

第8-1表 4号墳出土遺物一覧(1)

遺物番号	出土位置	器種	備考	取上番号 整理番号
58	M-19 4号墳 石室埋土	刀子	ほぼ完存 全長10.3cm	鉄製 18-0415
59	M-19 4号墳 石室埋土	刀子	刀身部片 残存長 8.2cm	鉄製 18-0417
60	M-19 4号墳 玄室	刀子	鋒部分欠損 残存長 8.8cm	鉄製 No.1 18-0401
61	M-19 4号墳 羨道	刀子	関部～茎部 残存長 4.9cm	鉄製 No.8 18-0406
62	L-19 4号墳 羨道埋土	刀子	ほぼ完存 全長 5.9cm	鉄製 18-0420
63	L-19 4号墳 羨道埋土	鉄 鎌	鎌身部～頸部 全長 6.3cm	鉄製 18-0422

第8-2表 4号墳出土遺物一覧(2)

遺物番号	出土位置	器種	備考	取上番号 整理番号
64	M-19 4号墳 石室埋土	鉄 鎌	ほぼ完存 全長 4.4cm	鉄製 18-0425
65	L-19 4号墳 羨道埋土	鉄 鎌	茎部端欠損 残存長 4.5cm	鉄製 18-0421
66	M-19 4号墳 玄室	耳環	ほぼ完存 長径2.6cm、短径2.4cm	金銅製 No.25 18-0402
	M-19 4号墳 石室埋土	刀子	関部～茎部 残存長 6.2cm	鉄製 18-0416
	M-19 4号墳 石室埋土	刀子	関部～茎部 残存長 6.4cm	鉄製 No.24 18-0418
	L-19 4号墳 羨道埋土	刀子	刀身部片 残存長 4.2cm	鉄製 18-0419



第20図 4号墳出土遺物実測図(48~57=1:4、58~66=1:2)

部片が1点と関部から茎部にかけての残片が2点出土している。刀身部片は羨道埋土出土のもので、58とほぼ同形と思われる。残存長 4.2cm、刀身部最大幅 1.1cm、棟幅 0.2cmを測る。関部から茎部にかけての残片は2点とも石室埋土出土で、1つは残存長 6.2cm、棟幅 0.3cm、茎部長 5.0cm、幅 1.0cm、厚さ 0.4cmで、61に類似した形態をしている。もう1点は残存長 6.4cm、棟幅 0.3cm、茎部長 4.5cm、関近くの幅 1.6cm、厚さ 0.4cmで、60の茎部に類似した形態をしている。

鉄鏃 (63~65) 63は関部が不明瞭な鑿箭式に近い形態の鏃身部をもつ長頸鏃で、残存長 6.3cm、鏃身部は断面が片丸造で、長さ 2.2cm、幅 0.8cm、頸部は断面が方形で幅 0.4cm、厚さ 0.2を測る。64・65は方頭形の鏃身部をもつ有茎の鏃である。64は全長が 4.4cm、鏃身部は断面が平造で、長さ 2.4cm、幅 2.4cm、茎部の断面は関部近くが方形で、端部にいくほど円形に近くなる。茎部長は 2.0cmである。65は残存長 4.5cm、鏃身部は断面が平造で、長さ 2.6cm、幅 2.0cm、茎部は64よりかなり長いが、形態は類似

する。

耳環 (66) 玄室中央部の床面近くから1個のみ出土した。金銅製のもので、やや楕円形である。長径 2.6cm、短径 2.4cm、重さ 7.5gで、断面は径 0.5cmの円形である。錆化が進んでいるが、金の残りは良い。

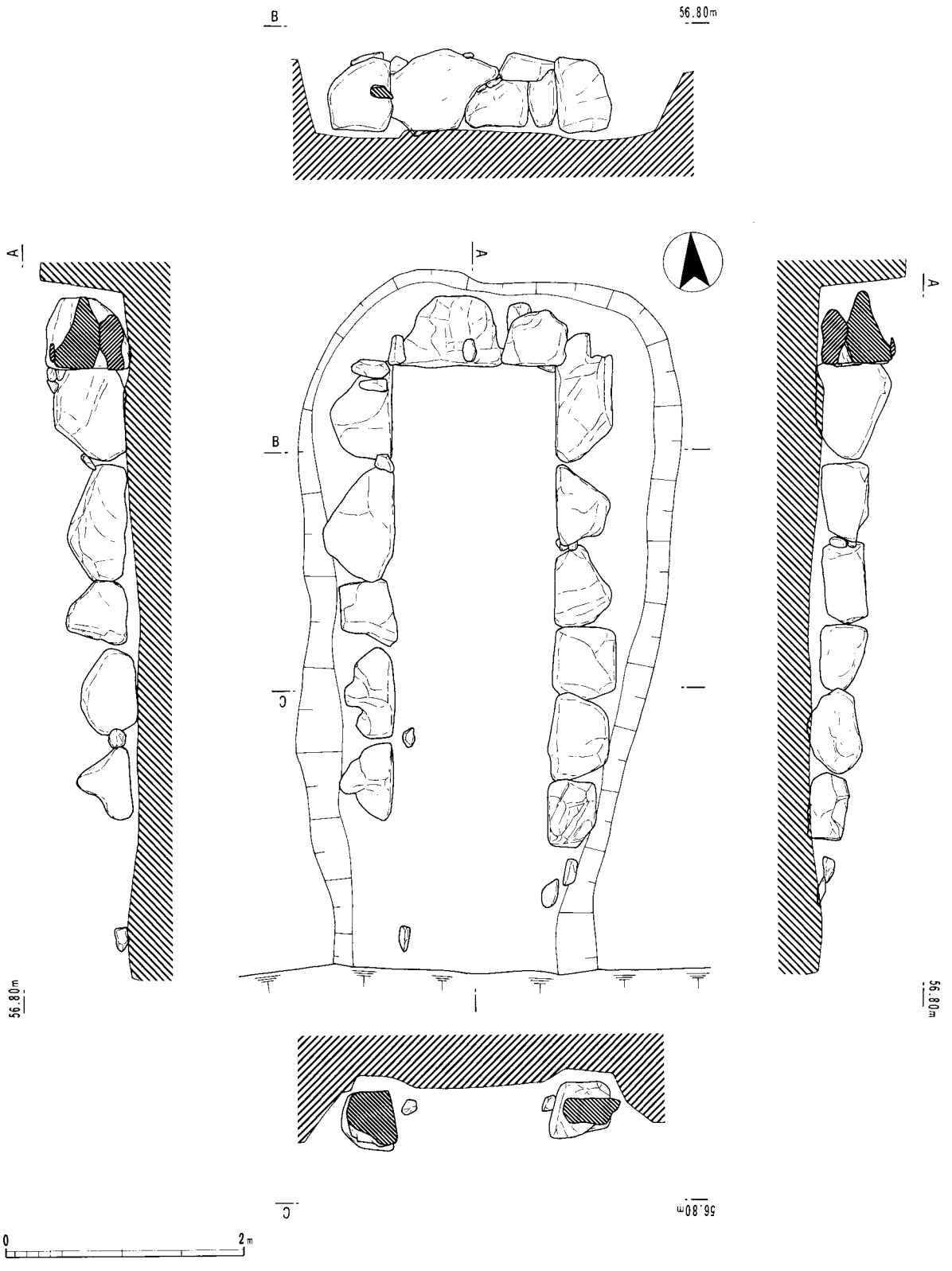
5. 5号墳

A. 墳形

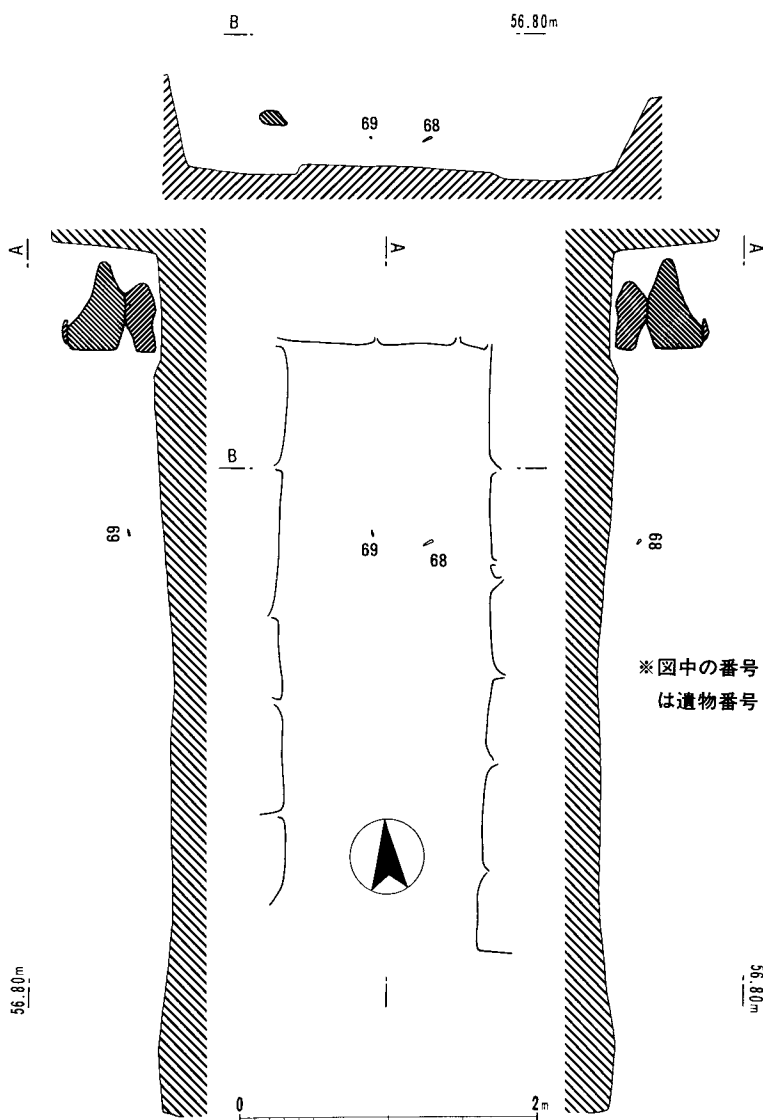
5号墳は4号墳の東側に接して検出された。西裾の周溝は4号墳と共有し、北裾では不明瞭となる。東裾は6号墳の西裾との間が周溝状となるが、古墳の南側が完全に消滅しているため周溝として続くかどうか不明である。古墳の裾は4号墳と同じく多角形墳状にコーナーをもつように思えるが、ここでは墳形を円墳としておく。東裾から西裾までの東西径は約12mである。

B. 主体部

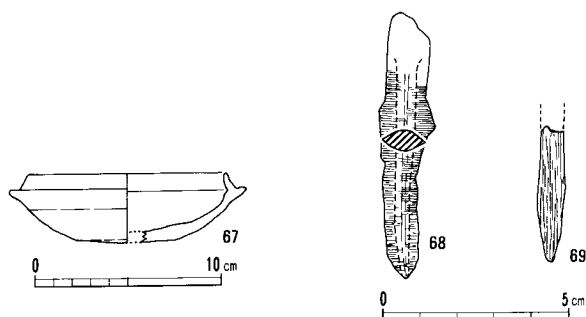
主体部は主軸をN 4° Eにとり、南に開口する横穴式石室である。



第21图 5号填石室实测图(1:50)



第22図 5号墳遺物出土状況実測図 (1:50)



第23図 5号墳出土遺物実測図 (67=1:4、68・69=1:2)

石室掘形は羨道方向へ行くほど徐々に幅が狭くなる長台形状のもので、奥壁付近幅約3.2mである。

石室の石材は玄室部分の基底石のみが残っている。側壁の基底石は70cm前後×40cm前後の山石が横置きに並べられている。奥壁基底石の石材数は3個で、そのうちの1個は側壁の石材とほぼ同じ大きさのものであるが、あとの2個はやや小さいものを使用されている。奥壁の高さは側壁1段分とほぼ同じになっている。

石室の現存規模は右側壁長約3.8m、左側壁長約4.0m、玄室幅 1.3m~1.4mで、玄門立柱石が残っていないため玄室と羨道との境は不明である。しかし、石室掘形の形態や石材の使用方法が類似する1号墳・6号墳の石室を参考にすれば、玄室の長さは現存長の約3.8mを大きく上回ることはないと思われる。

C. 遺物

出土遺物には須恵器杯蓋1・杯身2・高杯1・壺1、鉄釘2があるが、ほとんどが破片である。

須恵器杯蓋 石室埋土上部出土の口縁部の小片である。口径10cm~11cmの小型で器壁が薄いもので、雑な作りである。天井部と口縁部との境の稜は認められない。

須恵器杯身 (67) 石室埋土上部から口縁部片2片と底部片3片の計5片が出土している。そのうちの1片である67は底部外面に自然釉が厚く付着しているため他の破片と区別できるが、残りの4片はいずれも色調、胎土がきわめて類似していることから同一個体のものと考えられる。この個体の口径は10cm~11cmで、形態は67とほぼ同じである。

須恵器高杯 石室埋土上部から出土し

遺物番号	出土位置	器種	計測値(cm)	調整・技法の特徴	色調・胎土	残存度	備考	取上番号 整理番号
67	L-23 5号墳 石室埋土上部	須恵器 杯身	口径：10.6 器高：3.7?	内外面ロクロナデ。底部外面は自然釉が厚く付着し、調整不明。	暗灰色 細砂粒多含	口縁：1/4		No.3 18-0503
	L-23 5号墳 石室埋土上部	須恵器 杯蓋	口径：10~11	内外面ロクロナデ。	暗青灰色 砂粒含	口縁：1/12		18-0506
	L-23 5号墳 石室埋土上部	須恵器 杯身	口径：11~12	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切りのちナデ。	淡灰色 砂粒含	口縁：1/10		18-0507
	L-22 5号墳 石室埋土上部	須恵器 高杯		外面全面カキ目。内面ロクロナデ。透かしは2方2段。	青灰色 砂粒多含	柱状部片のみ		18-0504
	L-23 5号墳 石室埋土上部	須恵器 壺		外面ロクロヘラケズリ、内面ロクロナデ。	暗灰色 細砂粒少含	底部片のみ		18-0508

第9-1表 5号墳出土遺物一覧(1)

遺物番号	出土位置	器種	備考	取上番号 整理番号
68	1-22 5号墳 玄室	鉄釘	残片 残存長 7.1cm	No.2 18-0502

遺物番号	出土位置	器種	備考	取上番号 整理番号
69	1-22 5号墳 玄室	鉄釘	残片 残存長 3.6cm	No.1 18-0501

第9-2表 5号墳出土遺物一覧(2)

た小型の長脚高杯の柱状部片で、2方2段透かしをもつことがわかる。上段と下段の透かしの間付近には2条の沈線が巡り、外面全体にカキ目が施されている。

須恵器壺 石室埋土上部からロクロヘラケズリが施された底部片が出土している。大きさから、大型の短頸壺の破片と思われる。

鉄釘 (68・69) 玄室中央付近の床面近くで出土した鉄釘で、残片である。残存長は68が7.1cm、69が3.6cmで、断面の形状は方形と思われるが、木質が厚く付着しているため断定できない。この鉄釘は木棺に使用されていたものであろう。

6. 6号墳

A. 墳形

6号墳は5号墳の東側で検出された。周溝は認められなかったが、5号墳との間が一部周溝状になっている。

墳形は円墳で、東裾から西裾までの東西径および石室の羨道入口から北裾までの南北径は、いずれも約11mである。

B. 主体部

主体部は主軸をN 25° Wにとり、南南東に開口する右片袖の横穴式石室である。

石室掘形は羨道方向へ行くほど徐々に幅が狭くなる長台形状のもので、検出長約7.5m、奥壁付近幅約3m、羨道入口付近幅約2mを測る。

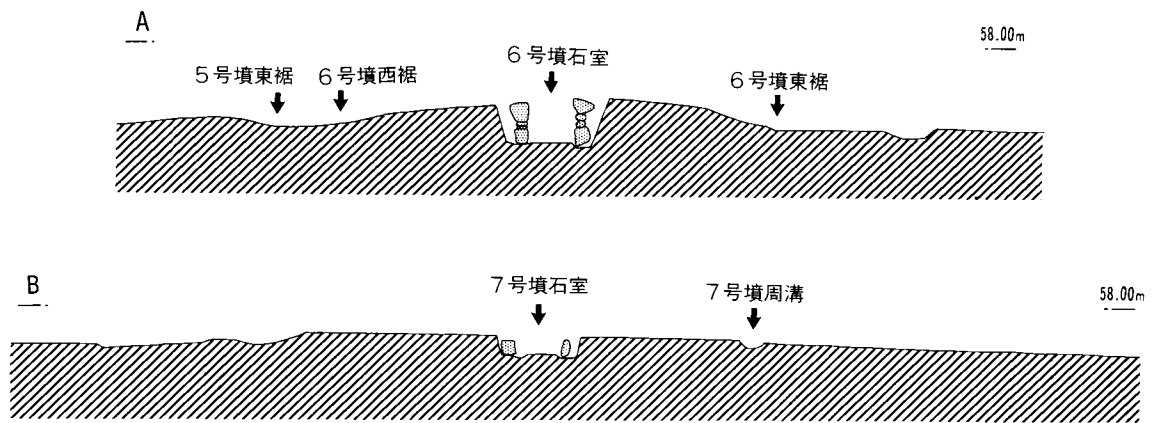
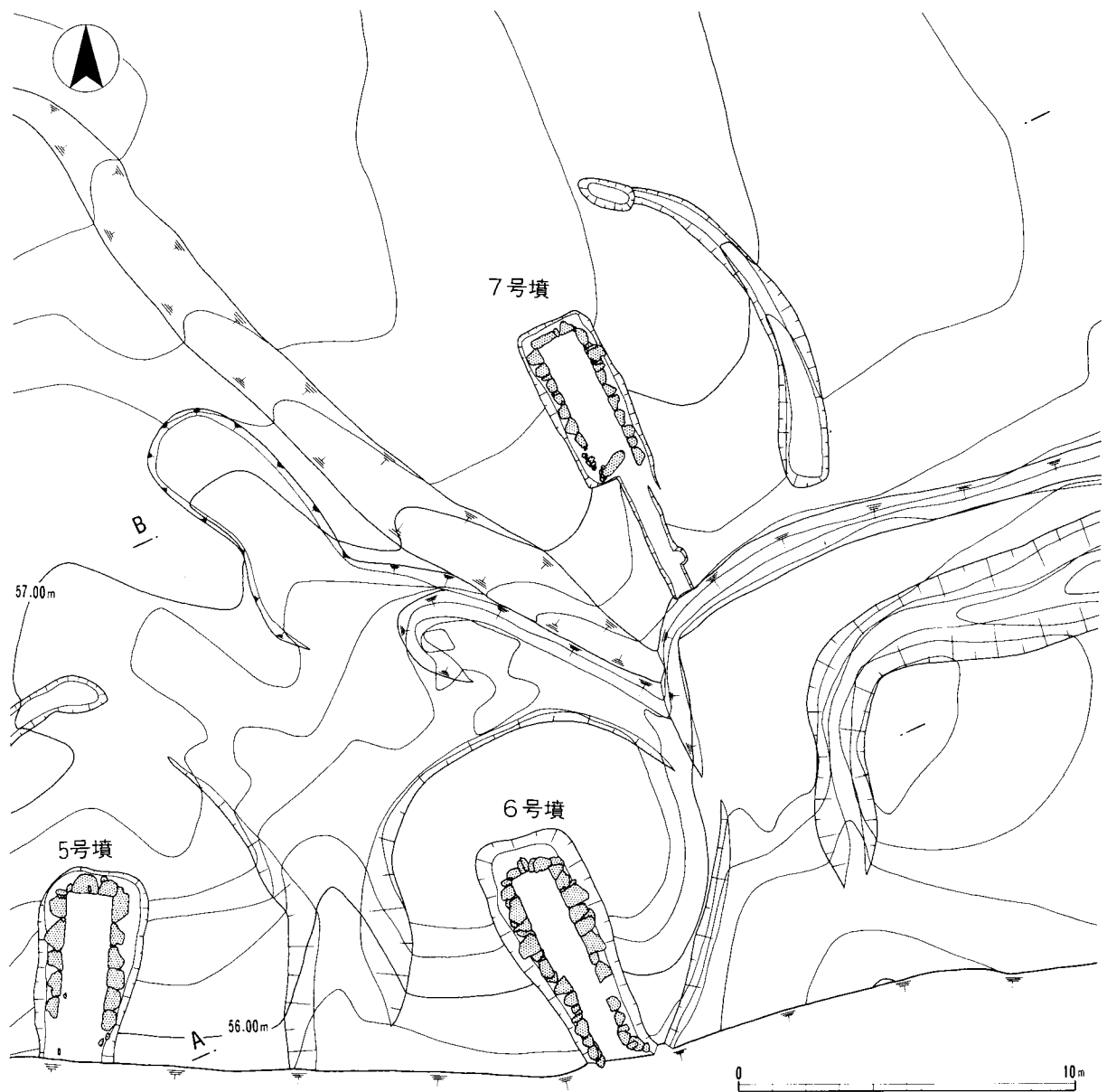
石室の石材は玄室部分の残りが良く、奥壁から左側壁にかけては3段目も残っている。しかし、羨道部は基底石のみである。羨道左側壁の入口部分は外護列石状に開いていくが、この部分は攪乱を強く受けていることも考えられるため、外護列石の有無は断定できない。

石室の規模は、羨道入口部分が良好に残っているとすれば、全長約6.3m、玄室の長さ約3.3m、幅1.1m~1.2m、羨道の長さ約3.0m、幅0.7m~0.8mとなる。

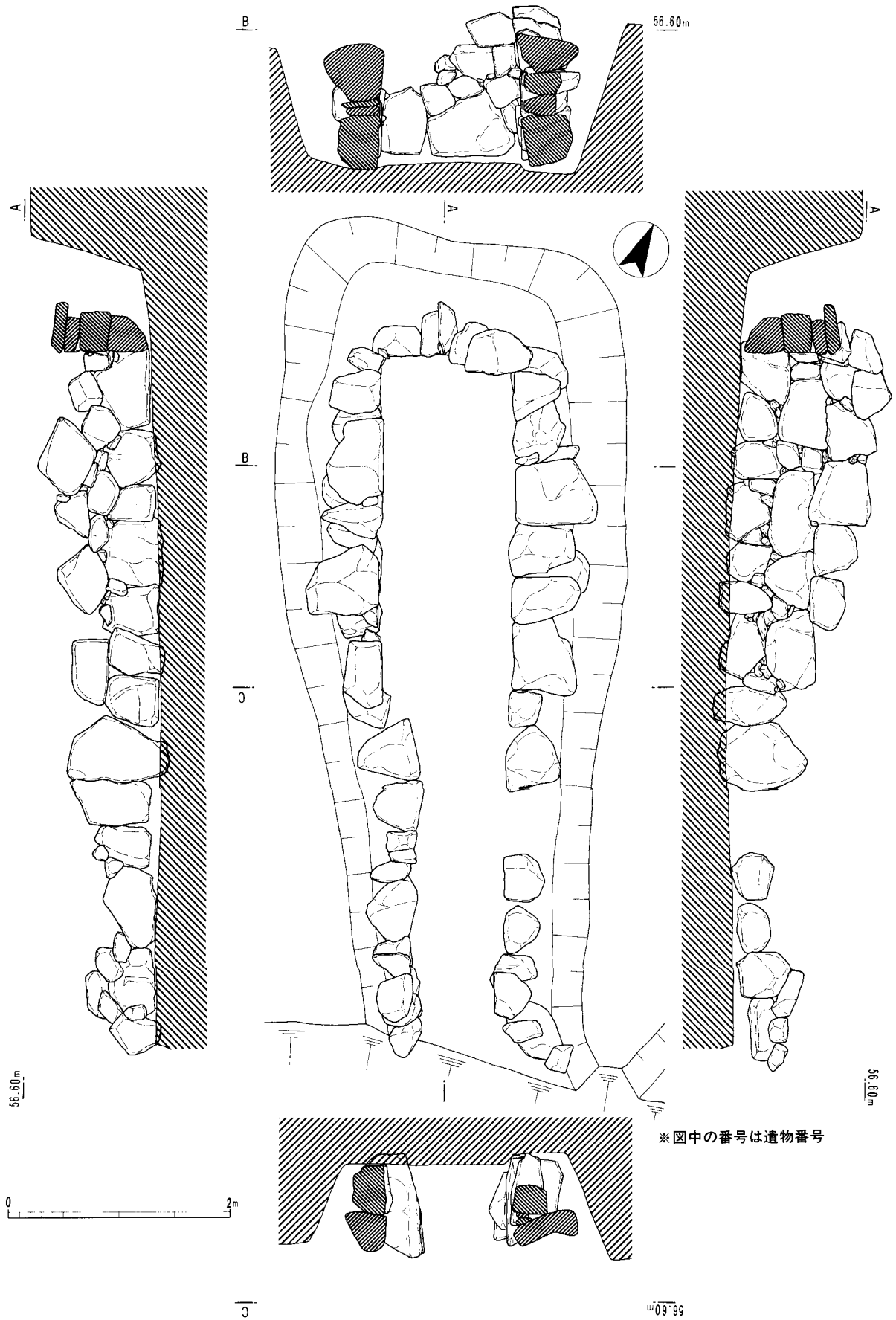
側壁の基底石は1号墳~5号墳のものよりやや小さい石材を縦置きして並べられている。左右の側壁に1個ずつある玄門立柱石は他の石材と区別するためにひとまわり大きい石材が使用されている。奥壁基底石の石材数は2個で、1つが縦置き、もう1つが横置きされている。

C. 遺物

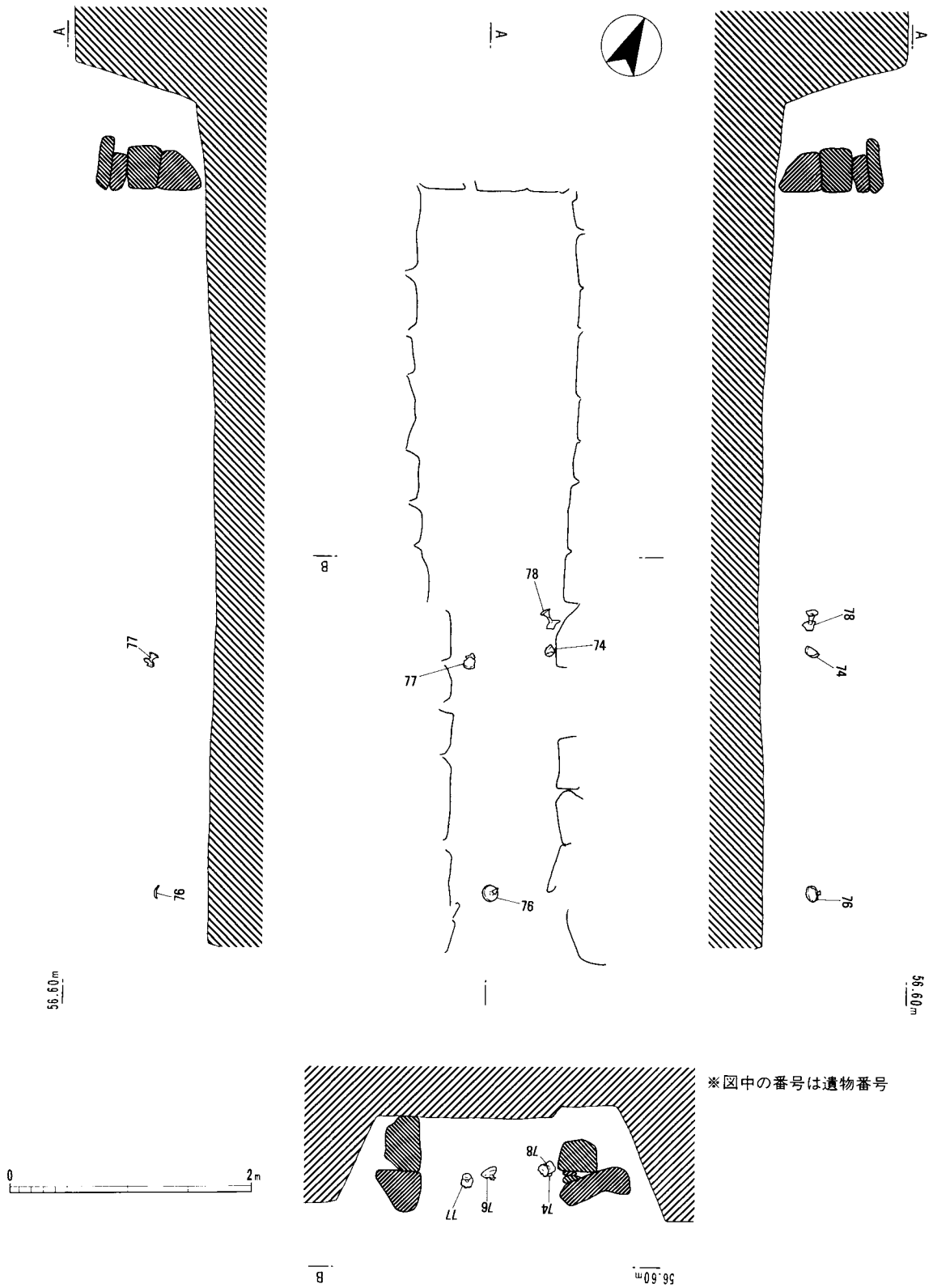
出土遺物には須恵器杯蓋6・高杯5・椀1、土師器甕1、刀子1がある。羨道部出土の須恵器杯蓋(74)・高杯(76~78)は石室床面と想定されるレベルより10cm~20cm浮いた状態で出土している。



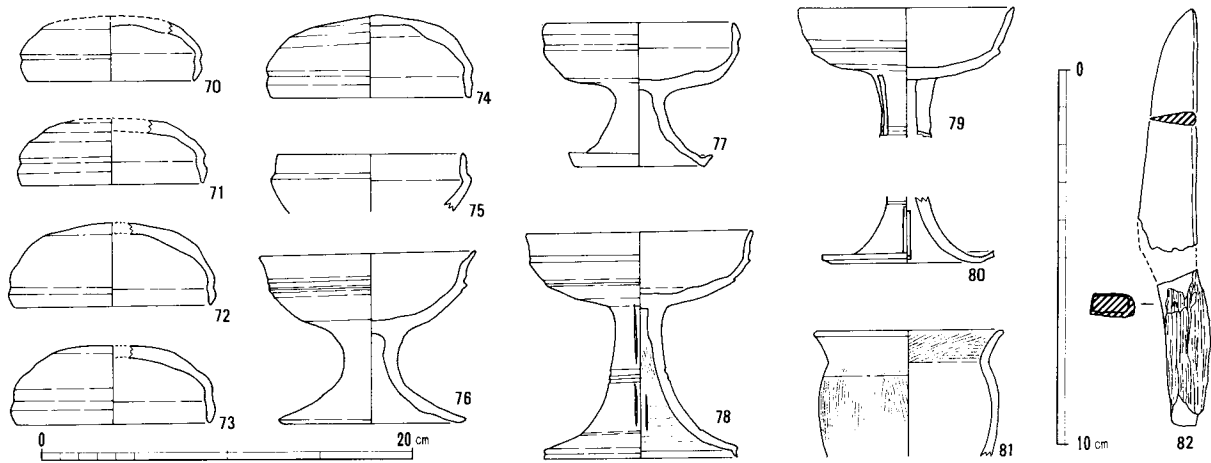
第24图 6号墳・7号墳 地形測量図 (1:200)



第25図 6号墳石室実測図 (1:50)



第26図 6号墳遺物出土状況実測図(1:50)



第27図 6号墳出土遺物実測図(70~81=1:4、82=1:2)

遺物番号	出土位置	器種	計測値(cm)	調整・技法の特徴	色調・胎土	残存度	備考	取上番号 整理番号
70	K-26 6号墳 石室埋土	須恵器 杯蓋	口径: 9.0?	内外面ロクロナデ。天井部外面ロクロヘラケズリ。ロクロ左回転。	淡灰色 微砂粒含	口縁: 1/10		18-0610
71	K-26 6号墳 石室埋土	須恵器 杯蓋	口径: 9.8?	内外面ロクロナデ。	灰色 微砂粒含	口縁: 1/3		18-0613
72	K-26 6号墳 石室埋土	須恵器 杯蓋	口径: 10.6 器高: 4.4	内外面ロクロナデ。天井部外面ヘラ切り未調整(ロクロヘラケズリの可能性もある)。	暗灰色 微砂粒含	口縁: 1/2		No 9 18-0608
73	K-26 6号墳 石室埋土	須恵器 杯蓋	口径: 10.4? 器高: 4.2	内外面ロクロナデ。天井部外面ヘラ切りのち軽いナデ。	暗灰色 微砂粒含	口縁: 1/2		No 5 18-0605
74	K-26 6号墳 羨道	須恵器 杯蓋	口径: 10.6 器高: 4.4	内外面ロクロナデ。天井部外面ロクロヘラケズリ。ロクロ左回転。	淡灰色 細砂粒含	口縁: 3/4	天井部外面に「X」のヘラ記号及び重ね焼きの痕跡。	No 2 18-0602
75	K-26 6号墳 石室埋土	須恵器 碗	口径: 10.0?	内外面ロクロナデ。	淡灰色 砂粒含	口縁: 2/3		18-0609
76	K-26 6号墳 羨道	須恵器 高杯	口径: 11.5 裾径: 9.4? 器高: 9.1	内外面ロクロナデ。	淡灰色 精良	口縁: 3/4 裾部: 1/4		No 4 18-0604
77	K-26 6号墳 羨道	須恵器 高杯	口径: 10.1 裾径: 7.0 器高: 7.7	内外面ロクロナデ。杯底部外面ロクロヘラケズリ。	暗青灰色 細砂粒少含	口縁: 1/2 裾部: 7/8		No 3 18-0603
78	K-26 6号墳 羨道	須恵器 高杯	口径: 12.0? 裾径: 10.4? 器高: 12.1?	内外面ロクロナデ。杯底部外面ロクロヘラケズリのちナデ。ロクロ右回転。柱状部内面にシボリ痕。透かしは2方2段(1段は内面まで貫通せず)。	淡青灰色 砂粒多含	口縁: 1/10 裾部: 1/3		No 1 18-0601
79	K-26 6号墳 石室埋土	須恵器 高杯	口径: 11.4	内外面ロクロナデ。杯底部外面ロクロヘラケズリ。透かしは3方。	暗灰色 砂粒含	口縁: 3/4		No 6 18-0606
80	K-27 6号墳	須恵器 高杯	裾径: 10.2?	内外面ロクロナデ。裾端部強いヨコナデ。透かしは2方。	青灰色 微砂粒含	裾部: 1/3		No 7 18-0607
81	K-26 6号墳 石室埋土	土師器 甕	口径: 10.0?	口縁部内外面ヨコナデ、内面にハケ残る。胴部外面ハケ、内面ナデ。底部内面はヘラケズリか?	浅黄橙色 細砂粒多含	口縁: 1/4	底部の破片あり。表面剝離進む。	No 8 18-0614
	K-26 6号墳 石室埋土上部	須恵器 杯蓋	口径: 11前後	内外面ロクロナデ。	淡黄灰色 微砂粒含	口縁: 1/10	焼成不良で表面剝離激しい。	18-0615

第10-1表 6号墳出土遺物一覧(1)

遺物番号	出土位置	器種	備考	取上番号 整理番号
82	K-26 6号墳 石室埋土	刀子	刀身部片 残存長 6.5cm	鉄製 18-0611

遺物番号	出土位置	器種	備考	取上番号 整理番号
82	K-26 6号墳 石室埋土	刀子	茎部片 残存長 4.4cm	鉄製 18-0616

第10-2表 6号墳出土遺物一覧(2)



第28図 6号墳出土須恵器へラ記号拓影(1:2)

須恵器杯蓋(70~74) 74は羨道部の玄門近く、70~73は石室埋土から出土した。完形のものではなく、70は小破片である。いずれも良く似た形態をしている。石室埋土よりもう1個体これらと同形態の須恵器杯蓋の破片が出土している。それは焼成がきわめて不良である。天井部外面にロクロへラケズリが認められるのは71・74のみである。また、74の天井部外面には「×」のへラ記号がある。70~73については、天井部がほとんど残っていないため、へラ記号の有無は不明である。なお、杯身が1点も出土していないことから、杯蓋とした5点の内いくつかは杯身として転用されていた可能性も考えられる。

須恵器碗(75) 石室埋土出土のものである。碗としたが、杯蓋とも考えられる。

須恵器高杯(76~80) 76は羨道入口近く、77・78は羨道部の玄門近く、79・80は石室埋土から出土した。76・77は短脚無蓋高杯であるが、両者は杯部や裾部の形態が全く異なる。77の杯部は70~74の杯蓋と全く同じ形態をしている。78・79は長脚無蓋高杯で、78は2方2段、79は3方2段の透かしをもつ。78の透かしはナイフ状の工具を突き刺しただけのもので、上段の透かしは内面まで貫通していない。80は脚部の裾の破片で、杯部の形態は不明である。脚は長脚で2方2段透かしになると思われる。

土師器甕(81) 石室埋土出土の小型の甕である。同一個体のもと思われる丸底の底部片がすぐ近くから出土しているが、接合できない。この底部片の調整は外面がハケで内面にはへラケズリが施されている。

刀子(82) 石室埋土出土の鉄製の刀子である。関部が欠損しており接合できないが、出土状況から同

一個体のもものと判断した。刀身部分の残存6.5cm、残存最大幅1.6cm、棟幅0.3cm、茎部の残存長4.4cm、最大幅1.1cm、厚さ0.4cm程度である。茎部には木質が残る。

7. 7号墳

A. 墳形

7号墳は6号墳の北側で検出された。立地は1号墳~6号墳と異なり、丘陵の尾根近くに位置する。周溝は北東部分が弧状に残っているのみである。周溝のカーブおよび石室の位置から、古墳の規模及び墳形を復元すると、径12m程の円墳となる。

B. 主体部

主体部は主軸をN 26° Wにとり、南南東に開口する横穴式石室である。

石室掘形は、長さ約5m、幅2.3m前後の長方形の掘形に幅約0.7mの溝状の掘形が付くものである。

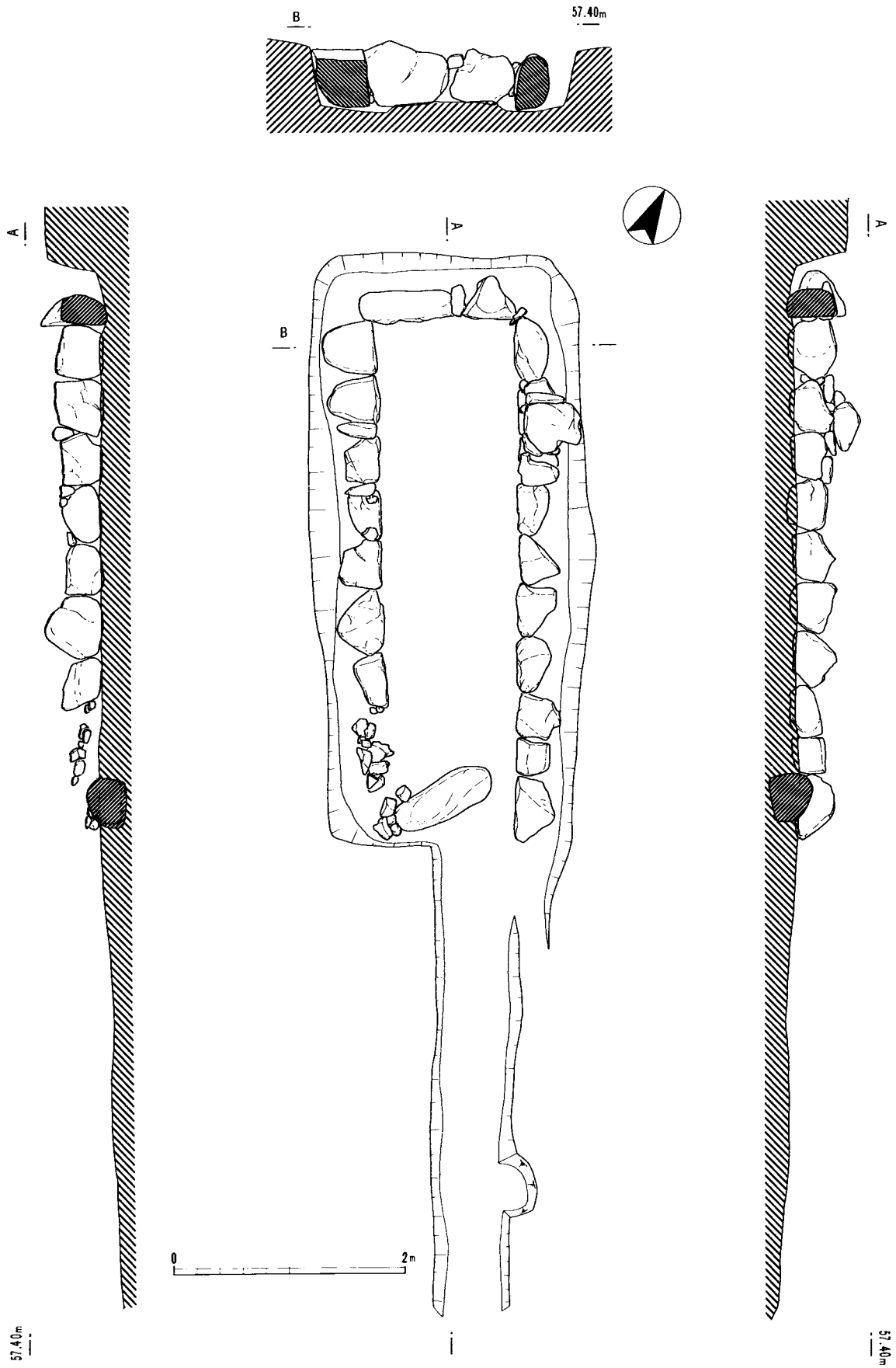
石室の石材は玄室部分の基底石のみが残っている。側壁の基底石は全て横置きで、長さ40cm~50cm、高さ30cm~40cmと、1号墳~6号墳のものよりも小さめである。奥壁基底石も横置きで、側壁基底石よりやや大きい石材が使用されている。

石室の平面形は確定できないが、石室掘形の形態や類似した掘形をもつ8号墳・13号墳の石室形態を参考にして推定すると、玄室は残存している左側壁の南端付近までと考えられ、玄室の長さは約4.5m、幅1.1m~1.2m、袖は石片袖となる。羨道はその存在の有無すら不明確で、しいていえば、玄室の南に続く幅約1mの掘形部分がそれにあたるといえないもない。そうとしても、羨道は付属施設的なきわめて小規模なものが想定され、石材の使用すら疑われる。羨道と想定した部分の南に続く溝状の遺構は墓道的なものであろう。

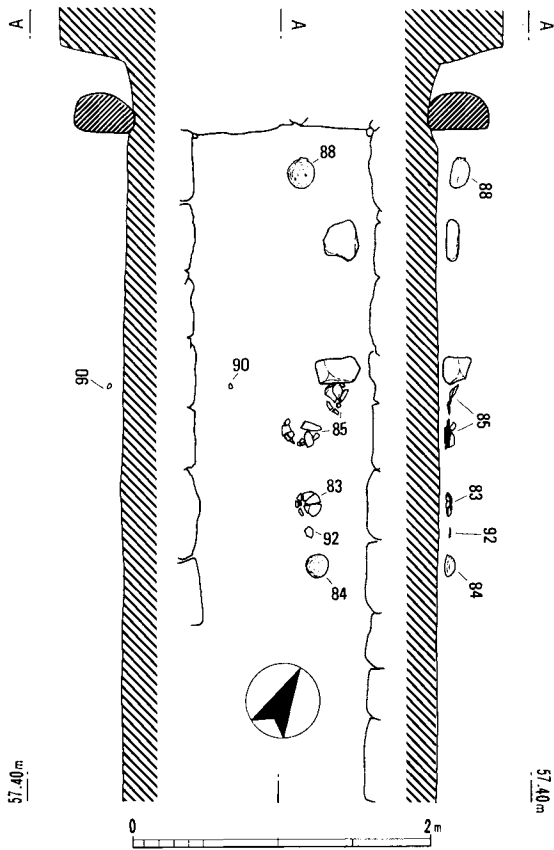
なお、玄門部で長さ約90cm、幅約30cm、厚さ約40cmの横長の石が検出されている。この石は、玄室と羨道とを区分するために意図的に置かれたものなのか、攪乱によって移動した側壁の石材が偶然ここにあるだけのものなのかは不明である。

C. 遺物

出土遺物には須恵器杯蓋2・杯身3・提瓶1、罽



第29图 7号墳石室実測図(1:50)



※図中の番号は遺物番号

第30図 7号墳遺物出土状況実測図 (1:50)

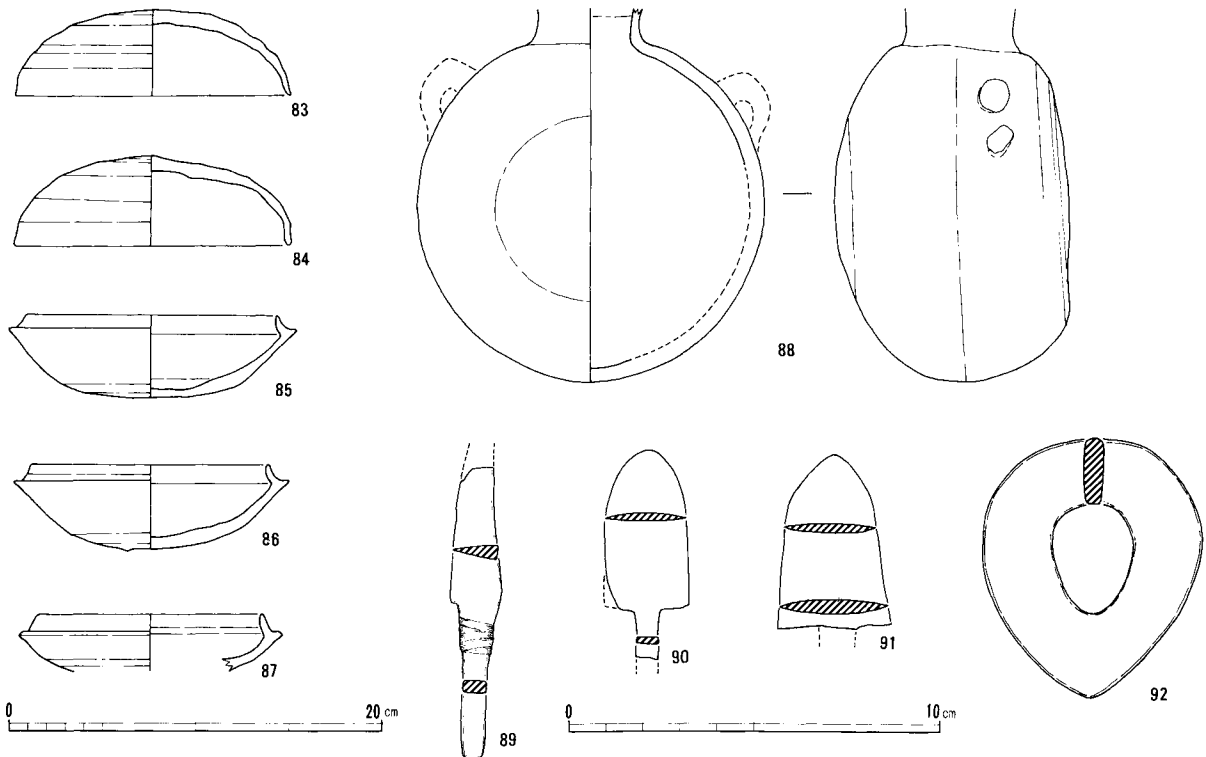
1、刀子1、鉄鏃2がある。そのうち、須恵器杯蓋 (83・84)・杯身 (85)、鉄鏃 (90)、鏢 (92) は玄室中央部から比較的まとまって出土した。

須恵器杯蓋 (83・84) 両者とも玄室中央部出土のもので、形態、法量、胎土などがきわめて類似している。口縁端部は丸くおさまり、口縁部と天井部との境の稜は全く認められない。天井部外面には右回転のロクロによるケズリが施されている。

須恵器杯身 (85~87) 85は玄室中央部、86は石室内埋土、87は周溝出土である。85・86のたちあがり部は短く、内傾してのびており、先端が尖り気味である。この両者と須恵器杯蓋 (83・84) の4点は底部または天井部の形態、胎土、調整技法などがきわめて類似していることから、同一工人により作成された可能性が考えられる。87はたちあがり部が厚いこと、器高が低いことなど、85・86の形態とは明らかに異なっている。

須恵器提瓶 (88) 奥壁近くで出土した。口縁部は欠損している。肩部の把手は欠けているが、粘土紐の貼り付け痕から、環状であったことがわかる。

刀子 (89) 石室埋土出土のもので鋒部分が欠損している。残存長は7.8cmで、刀身部最大幅1.4cm、



第31図 7号墳出土遺物実測図 (83~88=1:4、89~92=1:2)

遺物番号	出土位置	器種	計測値(cm)	調整・技法の特徴	色調・胎土	残存度	備考	取上番号 整理番号
83	O-27 7号墳 玄室	須恵器 杯蓋	口径：14.7 器高：4.6	内外面ロクロナデ。天井部外面ロクロヘラケズリ、内面不定方向ナデ。ロクロ右回転。	灰色 砂粒含	完存		No.5 18-0704
84	O-27 7号墳 玄室	須恵器 杯蓋	口径：14.6 器高：4.8	内外面ロクロナデ。天井部外面ロクロヘラケズリ、内面不定方向ナデ。ロクロ右回転。	灰色 砂粒含	完存		No.7 18-0706
85	O-27 7号墳 玄室	須恵器 杯身	口径：13.4 器高：4.4	内外面ロクロナデ。底部外面ロクロヘラケズリ、中心部にへら切り痕残る。ロクロ右回転。	灰色 砂粒含	完存	外面に自然釉薄く付着。	No.3 18-0703
86	O-27 7号墳 石室埋土	須恵器 杯身	口径：12.8 器高：4.6	内外面ロクロナデ。底部外面ロクロヘラケズリ。ロクロ右回転。	灰色 砂粒含	口縁：3/4	外面に自然釉薄く付着。	No.8 18-0707
87	N-29 7号墳 周溝	須恵器 杯身	口径：12.6?	内外面ロクロナデ。底部外面ロクロヘラケズリ。ロクロ右回転。	灰色 砂粒含	口縁：1/5	高杯の杯部である可能性も考えられる。	18-0710
88	O-27 7号墳 玄室	須恵器 提器	胴径：18.7?	内外面ロクロナデ、外面の一部ロクロヘラケズリ。	灰色 砂粒多含	胴部：完存	両肩に把手を貼った痕跡あり。	No.1 18-0701

第11-1表 7号墳出土遺物一覧(1)

遺物番号	出土位置	器種	備考	取上番号 整理番号	遺物番号	出土位置	器種	備考	取上番号 整理番号
89	O-27 7号墳 石室埋土	刀子	鋒部分欠損 残存長 7.8cm	鉄製 18-0708	91	O-27 7号墳 石室埋土	鉄 鎌	鎌身部 残存長4.7cm	鉄製 18-0709
90	O-27 7号墳 玄室	鉄 鎌	鎌身部 残存長 5.5cm	No.2 18-0702	92	O-27 7号墳 玄室	鐔	ほぼ完存 長径7.0cm、短径5.9cm	No.6 18-0705

第11-2表 7号墳出土遺物一覧(2)

棟幅 0.4cm、茎部は長さ 4.1cm、端部より約 2cm のところの幅 0.7cm、厚さ 0.3cmを測る。関近くの茎部には幅 0.4cm程に束ねられた繊維が数回巻かれた状態で付着している。

鉄鎌 (90・91) 90は玄室中央部、91は石室内埋土出土で、いずれも長三角形の鎌身部をもつ広根系の鎌である。90は残存長は 5.5cm、鎌身部長 4.2cm、最大幅 2.2cmを測る。91は鎌身部のみ出土で、残存長 4.7cm、最大幅 3.1cmを測る。

鐔 (92) 石室中央部で出土した。無窓の倒卵形の鐔で、鉄製である。象嵌は認められない。長径 7.0cm、短径 5.9cm、厚さ 0.4cmを測る。中央孔も倒卵形で、長径 2.9cm、短径 2.1cmを測る。

8. 8号墳

A. 墳形

8号墳は7号墳の東方約20mで検出された。7号墳と同様に尾根近くにある。周溝は石室入口部分と墳丘の西裾部分を除いてほぼ全周していたと思われるが、東裾の大部分が攪乱により消滅している。

古墳の規模は、主体部である石室の主軸方向では約17mであるが、それに直行する方向での規模を周

溝と石室の位置から復元すると13m程度となる。つまり、石室主軸方向に長い楕円形の円墳であったと思われる。

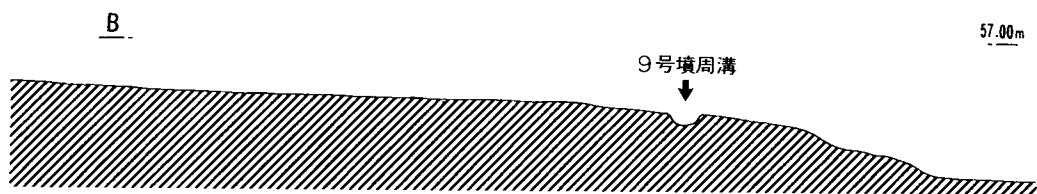
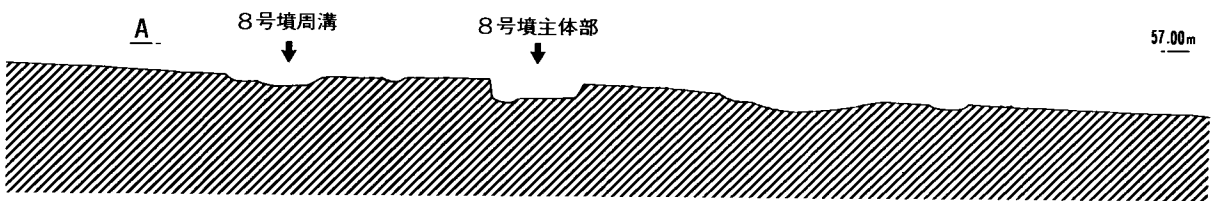
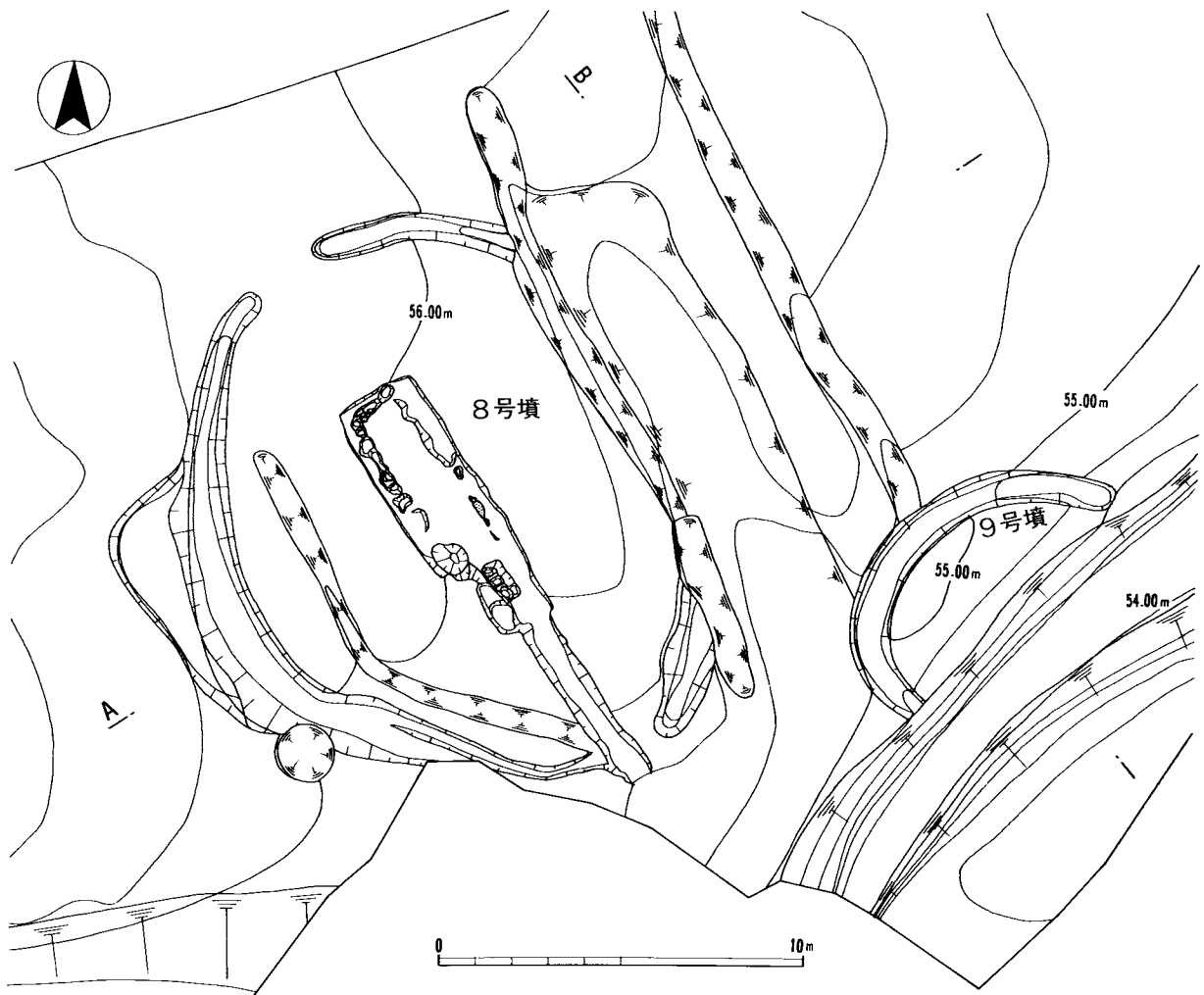
B. 主体部

主体部は南東方向に開口する横穴式石室で、主軸方向はN 35° W前後である。

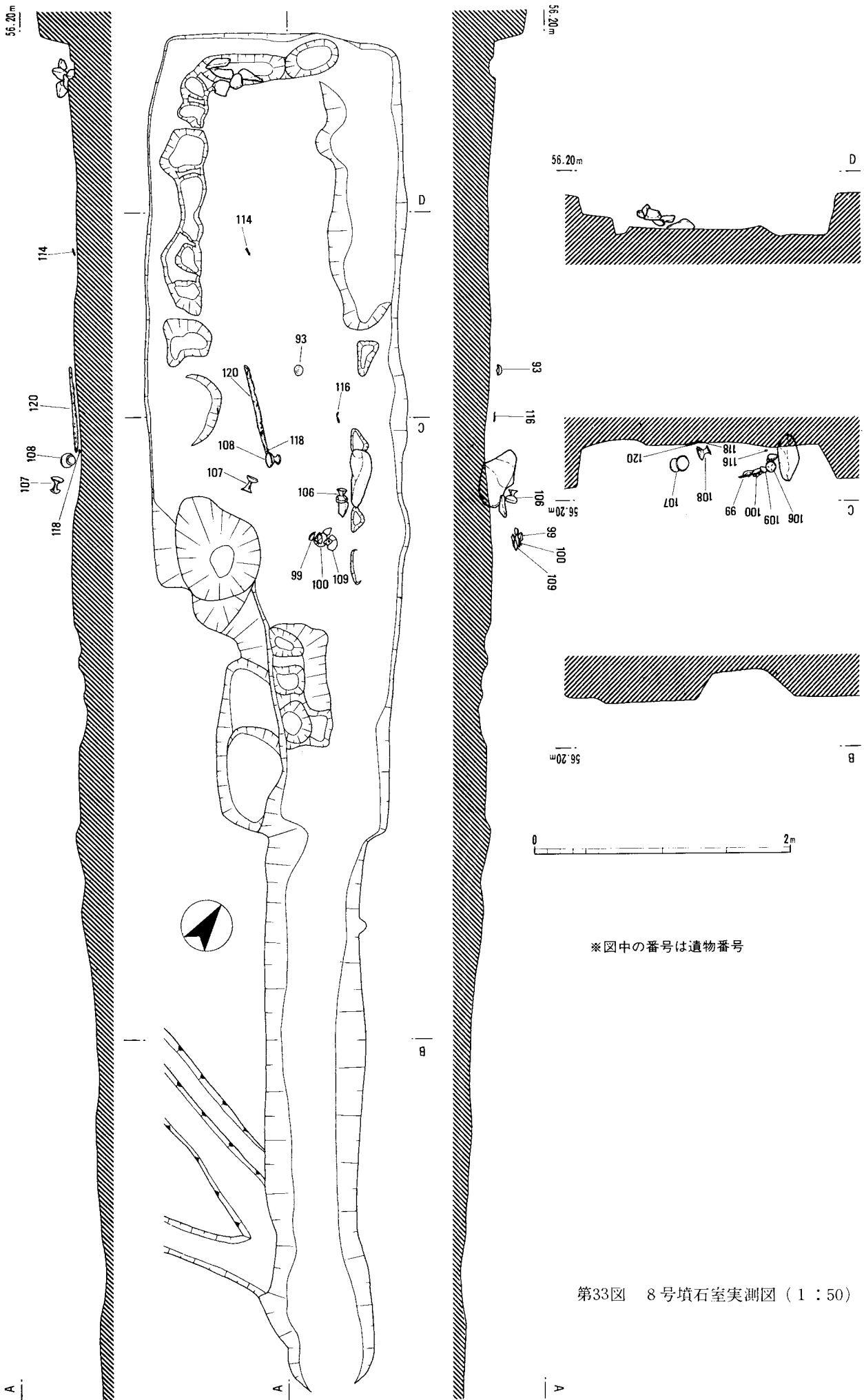
石室掘形の平面形は7号墳と類似している。玄室部分の掘形は長さ約 5.3m、幅 2.5m、羨道部分の掘形は長さ約 2.4m、幅約 1.7mとなる。羨道部分の南側には幅約 1mの墓道が付く。

攪乱を激しく受けており、残存している石室石材は玄室左側壁のものと思われる1個のみであるが、石材抜き取り痕と思われるピット列が検出された。

石室の形態や規模は石材抜き取り痕の並びおよび石室掘形の形態からある程度復元できる。須恵器杯蓋(99・100)・高杯(109)がまとまって出土した地点の西側にある径80cm程のピットは袖部分の石材の抜き取り痕と思われる。そうであるならば、石室は右片袖で、玄室長 4.3m程度、玄室幅 1.3m程度となる。羨道部分は石材の抜き取り痕が西壁側の一部にしか確認できなかったため、よくわからないが、玄室長に比べきわめて短く、幅も狭いものが想

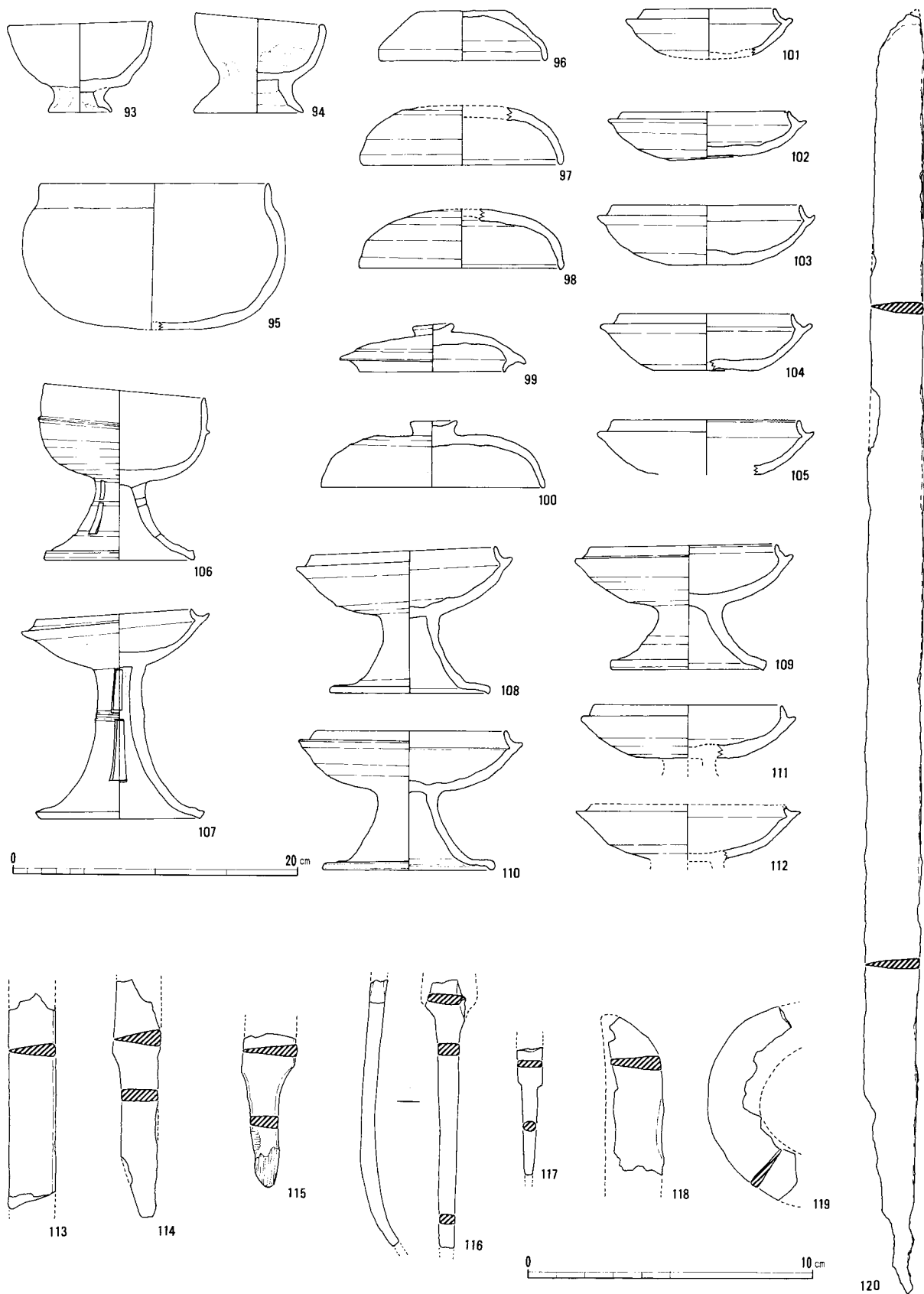


第32图 8号墳・9号墳 地形測量図 (1:200)



※図中の番号は遺物番号

第33図 8号墳石室実測図(1:50)



第34图 8号墳出土遺物実測図 (93~112・120=1:4、113~119=1:2)

遺物番号	出土位置	品 種	計測値(cm)	調整・技法の特徴	色調・胎上	残存度	備 考	取上番号 整理番号
93	OP-35 8号墳 玄 室	土師器 台付椀	口径：10.0 台径：4.4 器高：6.2	内面不定方向ナデ。外面指オサエの ちナデ。口縁部内外面ヨコナデか。 台部内外面指オサエ。	淡黄橙色 砂粒多含	口縁：3/5		No.4 18-0802
94	O-35 8号墳 石室埋土	土師器 台付椀	口径：8.8? 台径：7.5? 器高：6.5?	内面ヘラケズリ。外面指オサエのち ナデ。台部内面ヘラケズリ。台部外 面指オサエのちナデ。	淡黄橙色 砂粒多含	口縁：3/5		18-0820
95	P-35 8号墳 石室埋土上部	土師器 鉢	口径：16.0 器高：10.2?	内外面ナデか。	暗青灰色 砂粒含	口縁：2/3	表面剝離激しい。	No.13 18-0812
96	P-35 8号墳 石室埋土	須恵器 杯蓋	口径：11.6 器高：3.2	内外面ロクロナデ。天井部外面ヘラ 切り未調整。ロクロ右回転。	橙 色 砂粒含	口縁：4/5		No.16 18-0815
97	O-35 8号墳 石室埋土	須恵器 杯蓋	口径：13.9?	内外面ロクロナデ。天井部外面ロク ロヘラケズリ。	内：暗灰色 内：灰色 砂粒含	口縁：1/3	胎上に長石の吹 き出し。	No.22 18-0818
98	OP-35 8号墳 石室埋土	須恵器 杯蓋	口径：16.0	内外面ロクロナデ。天井部外面ロク ロヘラケズリ。ロクロ右回転。	淡灰色 細砂粒少含	口縁：1/3	焼成やや甘い。	No.23 18-0826
99	OP-35 8号墳 玄 門	須恵器 壺蓋	口径：10.1 器高：3.4	内外面ロクロナデ。天井部外面調整 不明、内面ナデ。中央が凹むツマミ をもつ。	暗灰色 細砂粒多含	口縁：1/2	外面全体に自然 釉付着。	No.12 18-0811
100	OP-35 8号墳 玄 門	須恵器 高杯蓋	口径：15.6 器高：4.6	内外面ロクロナデ。天井部外面ロク ロヘラケズリ、内面ナデ。ロクロ右 回転。中央が凹むツマミをもつ。	外：黒灰色 内：灰色 砂粒多含	口縁：4/5		No.11 18-0810
101	O-35 8号墳 石室埋土	須恵器 杯身	口径：9.0	内外面ロクロナデ。底部外面ロクロ ヘラケズリ。	青灰色 細砂粒多含	口縁：1/4		18-0822
102	P-35 8号墳 石室埋土	須恵器 杯身	口径：11.7 器高：3.2?	内外面ロクロナデ。底部外面ヘラ切 り未調整、一部軽いロクロヘラケズ リ、内面一定方向ナデ。ロクロ右回転。	灰 色 微砂粒含	口縁：3/4		No.15 18-0814
103	P-35 8号墳 石室埋土	須恵器 杯身	口径：13.1 器高：4.1	内外面ロクロナデ。底部外面ロクロ ヘラケズリか、内面ナデ。ロクロ右 回転。	灰 色 砂粒含	口縁：1/2	外面全体に自然 釉付着。	No.17 18-0816
104	P-35 8号墳 石室埋土	須恵器 杯身	口径：12.2 器高：3.9	内外面ロクロナデ。底部外面ヘラ切 り未調整、一部ロクロヘラケズリ、 内面。ロクロ右回転。	淡灰色 砂粒多含	口縁：1/2		No.18 18-0817
105	OP-35 8号墳 石室埋土	須恵器 杯身	口径：12.9?	内外面ロクロナデ。底部外面ロクロ ヘラケズリか。	外：青灰色 内：淡灰色 微砂粒含	口縁：1/12	焼成やや甘い。	No.14 18-0813
106	OP-35 8号墳 玄 室	須恵器 脚付椀	口径：11.2 裾径：10.4 器高：11.8	内外面ロクロナデ。椀底部外面丁寧 なロクロヘラケズリ。透かしは3方 2段。	灰 色 細砂粒含	ほぼ完存		No.9 18-0807
107	OP-35 8号墳 玄 室	須恵器 高杯	口径：10.9 裾径：11.3? 器高：14.2?	内外面ロクロナデ。杯底部外面ロク ロヘラケズリ、内面ナデ。柱状部内 面にシボリ痕。透かしは2方2段。	淡灰色 砂粒含	ほぼ完存	焼き呑み大きい。 杯部外面と脚部 内面に自然釉厚 く付着。	No.8 18-0806
108	OP-35 8号墳 玄 室	須恵器 高杯	口径：12.9 裾径：11.0 器高：10.0?	内外面ロクロナデ。ロクロ右回転。 杯底部内面ナデ。	青灰色 砂粒含	口縁：完存 裾部：2/3		No.7 18-0805
109	OP-35 8号墳 玄 門	須恵器 高杯	口径：13.0 裾径：10.6 器高：8.7	内外面ロクロナデ。杯底部外面ロク ロヘラケズリ、内面ナデ。ロクロ右 回転。	外：暗灰色 内：灰色 砂粒多含	口縁：9/10 裾部：1/2		No.10 18-0809
110	OP-35 8号墳 石室埋土	須恵器 高杯	口径：13.3 裾径：10.7? 器高：9.8	内外面ロクロナデ。杯底部外面ロク ロヘラケズリ、内面ナデ。ロクロ右 回転。	灰 色 細砂粒含	口縁：1/4 裾部：1/3		18-0819
111	OP-35 8号墳 石室埋土	須恵器 高杯	口径：13.1?	内外面ロクロナデ。杯底部外面ロク ロヘラケズリ、内面ナデ。ロクロ右 回転。	外：暗灰色 内：灰色 砂粒含	口縁：2/5	杯底部に脚部の 痕跡がわずかに 残る。	No.10 18-0808
112	OP-35 8号墳 石室埋土	須恵器 高杯		内外面ロクロナデ。杯底部外面ロク ロヘラケズリのちナデ、内面ナデ。	淡青灰色 砂粒含	受部：1/8	杯底部に脚部の 痕跡がわずかに 残る。	18-0821
	P-35 8号墳 石室埋土	土師器 甕	口径：14程度	肩部外面に縦方向の細かいハケ。内 面ナデ。	黄 橙 色 細砂粒含	口縁：1/10 胴部：小片	小片が数片出土。	18-0831

第12-1表 8号墳出土遺物一覧(1)

遺物番号	出土位置	器 種	備 考	取上番号 整理番号
113	P-35 8号墳 石室埋土	刀 子	刀身部片 残存長 7.7cm 鉄製	18-0828
114	OP-35 8号墳 玄 室	刀 子	関部～基部 残存長 8.3cm 鉄製	No.2 18-0801
115	P-35 8号墳 石室埋土	刀 子	関部～基部 残存長 5.5cm 鉄製	18-0824
116	OP-35 8号墳 玄 室	鉄 鎌	関部～頸部片 残存長 9.7cm 鉄製	No.5 18-0803

遺物番号	出土位置	器 種	備 考	取上番号 整理番号
117	P-35 8号墳 石室埋土	鉄 鎌	頸部～基部片 残存長 4.5cm 鉄製	18-0825
118	OP-35 8号墳 玄 室	鉄鎌?	残片 残存長 5.5cm 鉄製	No.6 18-0804
119	P-35 8号墳 石室埋土	鐔 ?	残片 鉄製	18-0823
120	OP-35 8号墳 玄 室	鉄 刀	ほぼ完存 全長90.5cm 鉄製	No.3 18-0832

第12-2表 8号墳出土遺物一覧(2)

定できる。この石室の形態は1号墳～6号墳とは大きく異なり、類例としては、7号墳・13号墳があげられる。

C. 遺物

出土遺物には土師器台付椀2・鉢1・甕1、須恵器杯蓋3・杯身5・高杯6・高杯蓋1・脚付椀1・壺蓋1、鉄刀1、鏝1、刀子3、鉄鏃2、鉄鎌1があり、土器の出土点数は10号墳に次いで多い。石室埋土出土のものが多く、正確な出土状況がわかるものは少ないが、床面近くで検出された遺物のほとんどは玄室前半部および玄門部に集中していたようである。

土師器台付椀 (93・94) 93は玄室中央付近、94は石室埋土出土である。粗雑なつくりで、特に台部は安定感に欠ける。

土師器鉢 (95) 石室埋土の上部から出土した土師器である。半球状の胴部に短く直立する口頸部がつく。鉢としたが、椀と呼ぶべきかもしれない。

土師器甕 石室埋土から小片が数点出土している。そのうちの1点は口縁部片で、表面剝離が進んでいるが、肩部外面に縦方向の比較的細かいハケが認められる。口径は14cm程で、形態は12号墳出土の土師器甕174に類似している。色調は黄橙色で、胎土に細砂粒を含む。

須恵器杯蓋 (96～98) いずれも石室埋土出土のもので、詳しい出土状況は不明である。97・98は類似した形態と計測値をもつが、96は小型で、調整も異なる。

須恵器壺蓋 (99) 玄門付近で出土した。壺蓋と思われるが、セットになるべき壺は出土していない。

須恵器高杯蓋 (100) 玄門付近で、壺蓋(99)、高杯(109)と重なるように出土した。おそらく109の蓋であろう。

須恵器杯身 (101～105) いずれも石室埋土出土のもので、詳しい出土状況は不明である。しかも、完形のものではなく、かなり攪乱をうけているようである。102と104の底部の調整はへら切り未調整で、へら切り痕の周囲のみわずかにロクロへラケズリが施されている。101・103の底部の調整は不明であるが、おそらく102・104と同様であろう。105については高杯の杯部である可能性もある。

須恵器脚付椀 (106) 玄室前半部の玄門近くで出土した。ほぼ完形である。椀底部外面のロクロへラケズリは細く丁寧である。

須恵器高杯 (107～112) 107・108は玄室前半部、109は玄門近く、110～112は石室埋土出土である。107は長脚有蓋高杯、108～110は短脚有蓋高杯である。111・112は底部外面に残るわずかな痕跡から高杯と判断した。おそらく108～110と同じく短脚有蓋高杯の杯部であろう。

鉄刀 (120) 玄室前半部から鋒を奥壁側に基部を羨道側に向けて出土した平棟平造の直刀である。鋒がわずかに欠損しているが、全体に残りは良い。残存全長90.5cmで、刀身部は残存長77.7cm、関近くの幅3.8cm、鋒より約21cmのところの幅3.6cm、棟幅0.7cm～0.9cmである。基部は、長さ12.8cm、最大幅3.0cm、関近くの厚さ0.8cmである。木質の付着や目釘痕は認められない。

刀子 (113～115) 113は石室埋土出土の刀身部残片で、残存長7.7cm、幅1.6cm、棟幅0.4cmを測る。114は玄室中央付近出土のもので、関部分から基部にかけての残片である。残存長8.3cm、刀身幅1.6cm、棟幅0.5cm、基部長5.8cm、幅1.3cm、厚さ0.4cmを測る。113と114は同一個体の可能性があるが、113の出土状況が不明であるため断定しがたい。115は石室埋土出土のもので、関部分から基部にかけての残片である。残存長5.5cm、刀身部幅1.9cm、棟幅0.4cm、基部は長さ4.0cm、端部から約2cmのところ幅1.0cm、厚さ0.4cmを測る。

鉄鏃 (116・117) いずれも長頸鏃の残片で、116は玄室前半部、117は石室埋土出土である。116は関部から頸部にかけての残片である。残存長は9.7cm、頸部の断面は長方形で、関部近くの幅0.7cm、厚さ0.4cmを測る。117は頸部から基部にかけての残片である。残存長は4.5cm、頸部の断面は長方形で、幅0.9cm、厚さ0.2cm、基部の断面は円形に近い方形で、基部近くの幅0.5cmを測る。

鉄鎌 (118) 鉄刀(120)の基部下から出土したもので、残存長5.5cmである。鋒の形態と刃の向きから鎌と判断したが、錆化が激しく欠損部も多いため断定は出来ない。

鏝 (119) 石室埋土出土である。幅1.7cm、厚さ

0.3 cm程度の鉄製のもので、錆化や欠損が著しい。断定はできないが、倒卵形の鏝の残片と思われる。

9. 9号墳

8号墳の東で周溝の一部のみが検出された。南東部分は開墾により削り取られている。周溝のカーブから墳形及び規模を復元すると、径7m程度の円墳となる。出土遺物は全くない。主体部は確認できなかったが、墳丘規模が小さいことから、横穴式石室とは考えられず、11号墳と同じく木棺直葬であったろうと思われる。

10. 10号墳

A. 墳形

10号墳は8号墳の東方約10mの丘陵斜面で検出された。南裾部分は崖となっており完全に失われているが、南裾を除く3方で幅3m～4m程の周溝が確認できた。

周溝は円墳状に巡るが、3箇所で130°～140°程のコーナーが明瞭に認められ、あと3箇所でもコーナーと判断できる箇所がある。コーナーからコーナーまでの長さは、周溝内側の下端（墳丘裾）でそれぞれ約5mである。

失われた南裾部分を含めて墳形を復元すると、正八角形に近いものとなる。墳丘の南半分は攪乱を強く受けているため断定しがたいが、ここでは、径約13m、一辺約5mの八角墳として報告しておく。

B. 主体部

主体部は主軸をN12°Wにとり、南に開口する横穴式石室である。

石室掘形は羨道方向へ行くほど徐々に幅が狭くなる長台形状のもので、玄室右側壁部分では、石室幅と比べて掘形幅が異様に広がっている。

石室掘形内には両側壁の基底石が残っている。基底石の大きさは40cm前後×20cm前後の横長のもので、他の古墳のものよりかなり小さい。奥壁部分には長さ30cm程の横長の山石が5個並んだような状態で検出されたが、これらの石材が奥壁の位置を示しているかどうかは断定できない。

玄室内には幅約30cm、厚さ10cm～15cmの石材が石室主軸方向に沿って4列に敷かれている。各列の現

存石材数は9個～10個で、かなり計画的に敷いて敷石としていることがわかる。

この敷石の範囲を玄室とすると、玄室の規模は、長さ約2.6m、幅約1.4mで、幅の割りに長さが短く、玄室面積は埴内田古墳群の横穴式石室の中では最も狭いものとなる。羨道の規模は、敷石南端から羨道右側壁南端の石材までを測ると長さ4.0mとなるが、羨道入口部分はかなり攪乱されているようで、石室の石材と思われる山石が10数個散乱していた。羨道右側壁南端の石材も落石であるかもしれない。羨道左側壁南端の石材までの長さを測ると約3.6mとなり、この数値の方が確実性がある。従って、石室の現存長は6.2mとなる。羨道の幅は0.9m～1.0mである。

袖の有無あるいは形態については、右側壁において、玄室と羨道との境付近の石材が欠損していることから断定しがたいが、左側壁の形態や玄室と羨道の石材の並び方から、きわめて無袖に近い石片袖あるいは両袖と思われる。

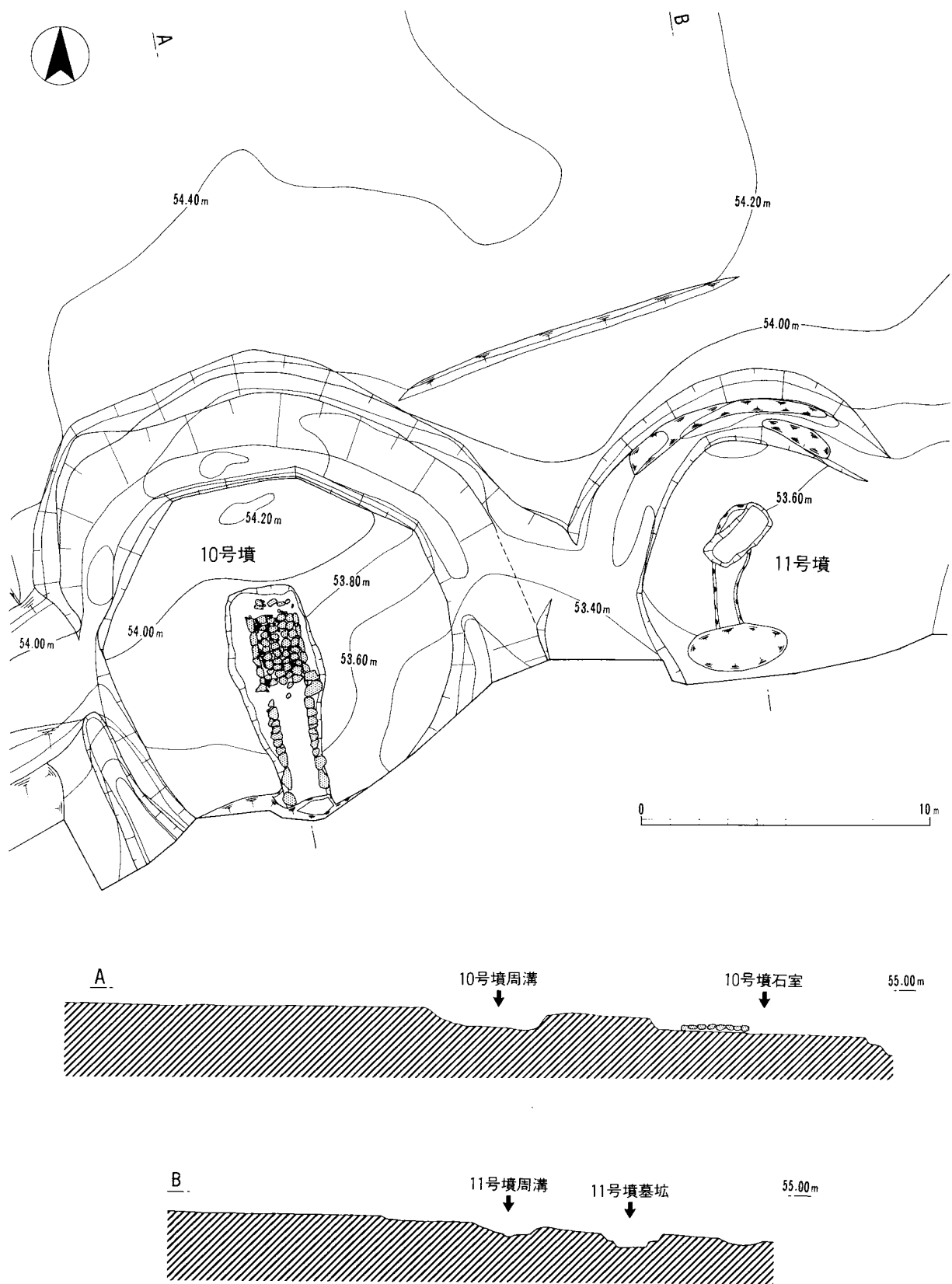
このように、10号墳は埴内田古墳群の中では特異な墳形や石室形態をもつ。

C. 遺物

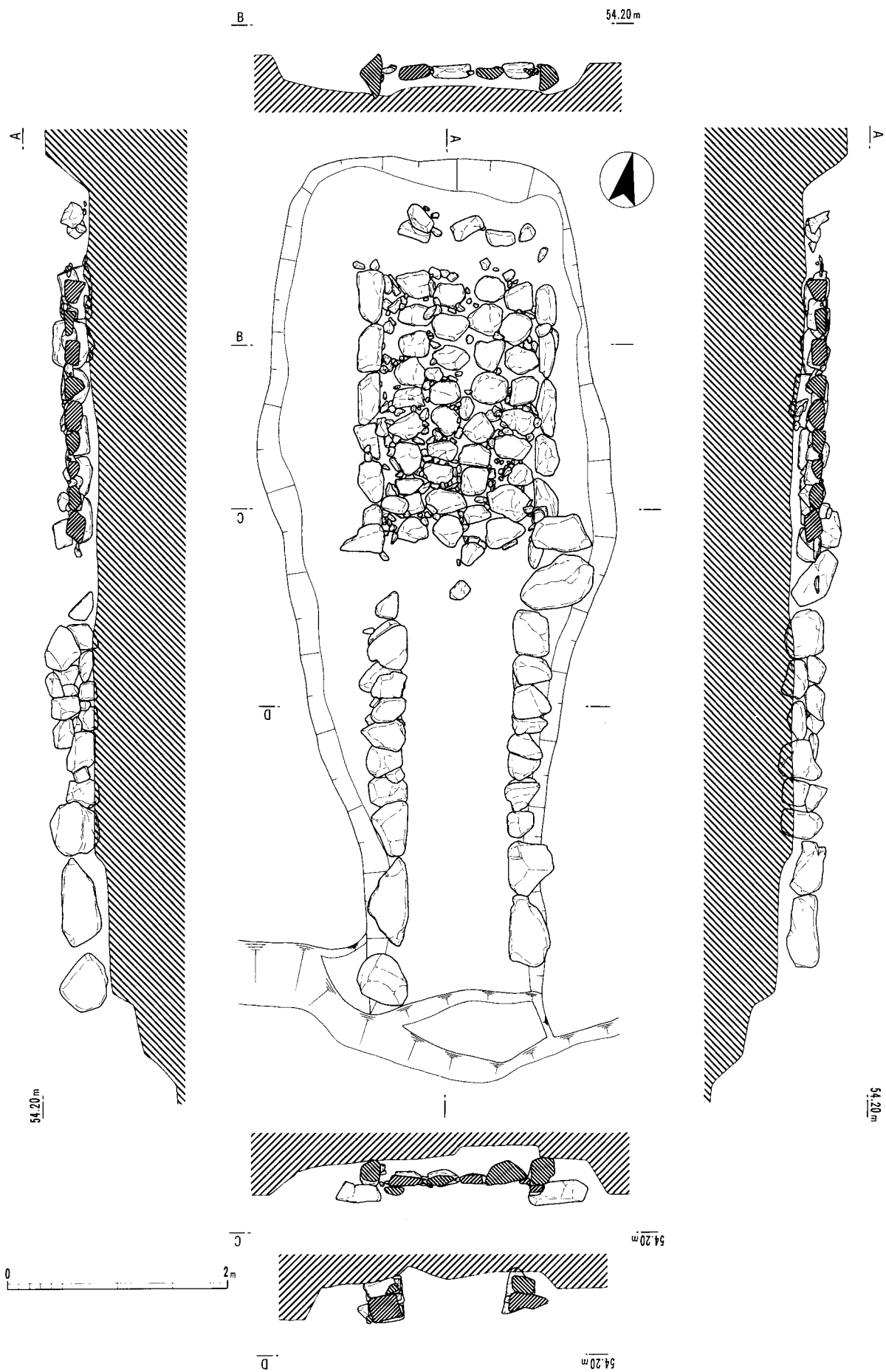
出土遺物には土師器椀5、須恵器杯蓋7・杯身25・高杯1・碗2・甗2・提瓶1、鉄刀1、刀子2、鉄鏃4、耳環2がある。土器の出土量は埴内田古墳群の中では最も多い。遺物の出土位置は、玄室中央部、玄門近く、羨道後半部の3箇所にまとまりがあるように思える。特に、羨道後半部で集中して出土した土師器椀(123・124)、須恵器杯身(147～149)・碗(157・158)・甗(161)の8個体は原位置をほぼ保っていたと思われる。

土師器椀(121～125) 121は玄室中央部、122は玄室前半部、123・124は羨道後半部、125は石室埋土出土である。123・124はほぼ完形で、両者は重なって出土した。125については小片で表面剝離が進んでいることから詳しい観察は不可能であるが、他の4個体については、形態や調整技法が類似している。

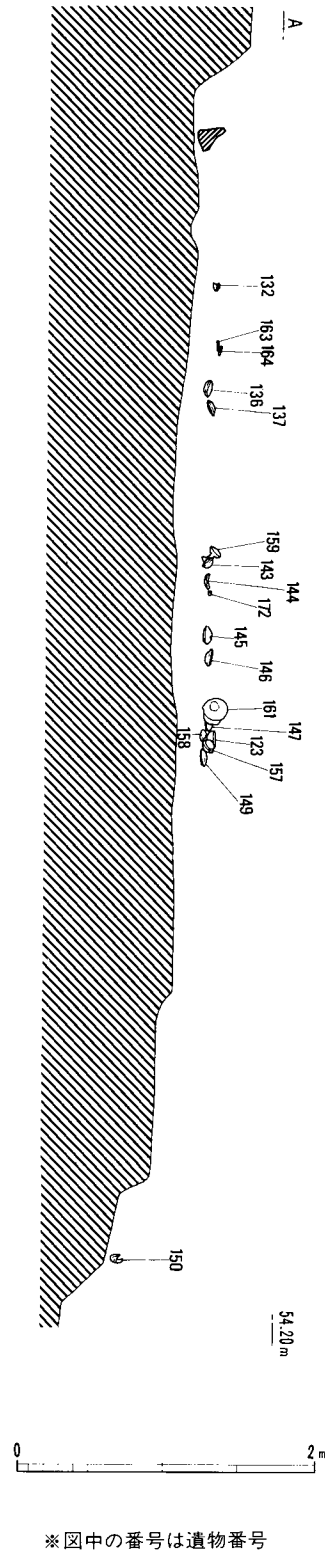
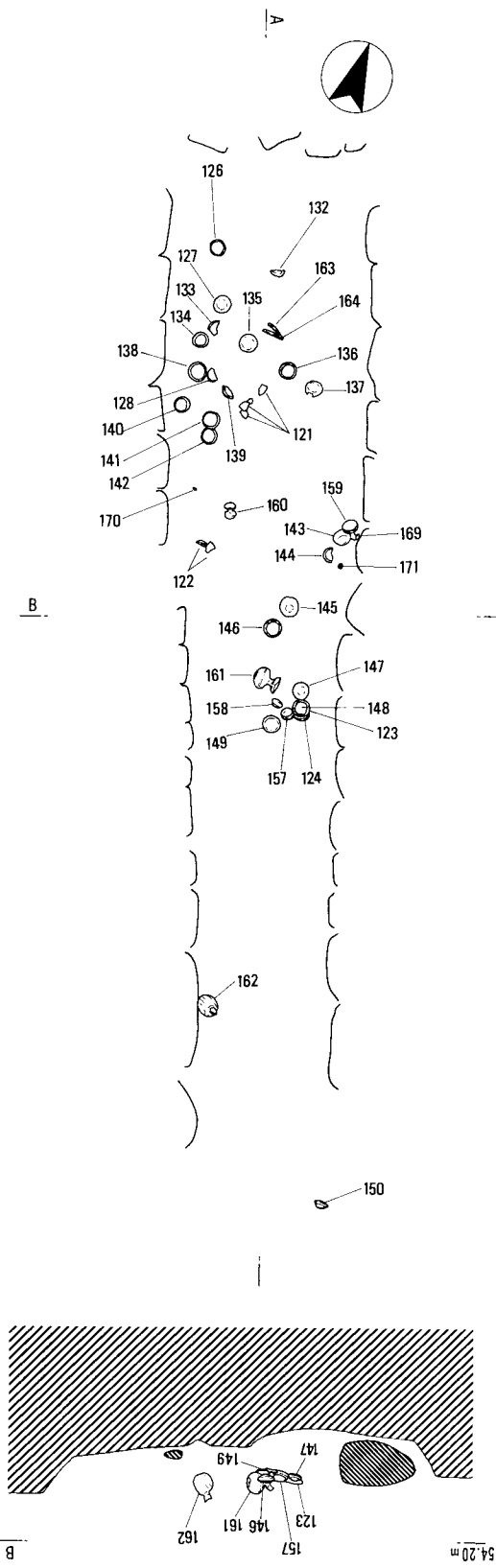
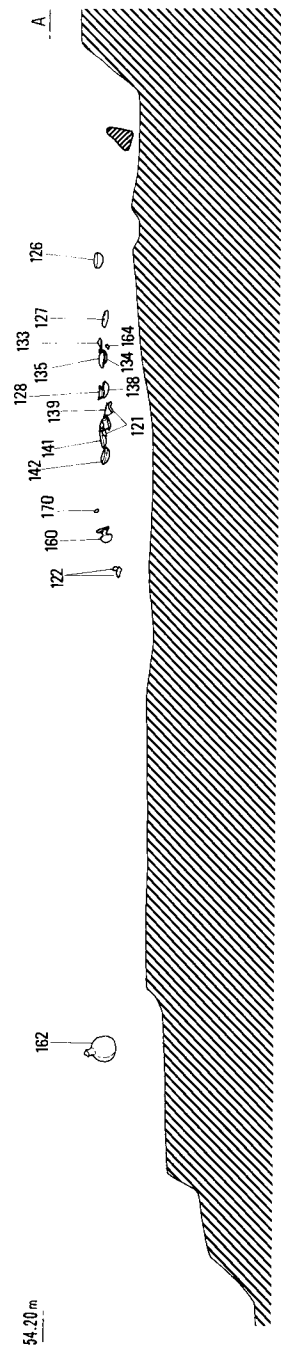
須恵器杯蓋(126～131) 126～128は玄室中央部、129～131は石室埋土出土である。いずれも口径は10cm～11cm程度と小さく、口縁部と天井部との



第35图 10号墳・11号墳 地形測量図 (1:200)

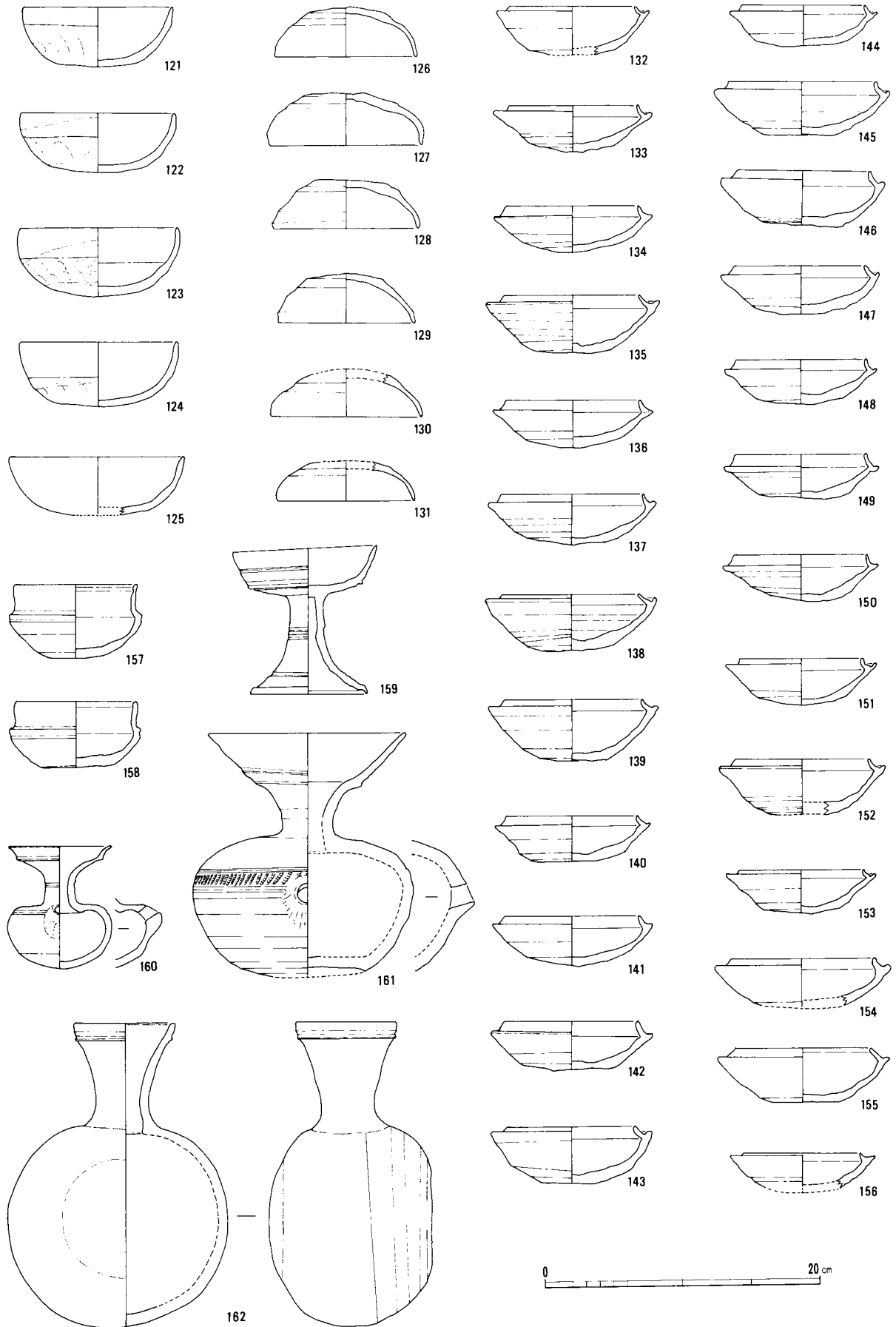


第36图 10号填石室实测图 (1 : 50)



※ 図中の番号は遺物番号

第37図 10号墳遺物出土状況実測図 (1:50)



第38-1图 10号墳出土遺物実測図(1:4)

遺物番号	出土位置	器種	計測値(cm)	調整・技法の特徴	色調・胎土	残存度	備考	取上番号 整理番号
121	N-44 10号墳 玄室	土師器 碗	口径：10.7	内面ナデ。外面指オサエのちナデ。 口縁部内外面ヨコナデ。	浅黄褐色 砂粒少含	口縁：1/2		No.9
			器高：4.3					18-1009
122	N-44 10号墳 玄室	土師器 碗	口径：11.2?	内面ナデ。外面指オサエのちナデ。 口縁部内外面ヨコナデ。	浅黄褐色 細砂粒含	口縁：1/2	粘土紐痕残る。	No.20
			器高：4.2?					18-1021
123	N-44 10号墳 羨道	土師器 碗	口径：11.3	内面ナデ。外面指オサエのちナデ。 口縁部内外面ヨコナデ。	浅黄褐色 精良	ほぼ完存	粘土紐痕残る。	No.31
			器高：5.0					18-1032
124	N-44 10号墳 羨道	土師器 碗	口径：11.3	内面ナデ。外面指オサエのちナデ。 口縁部内外面ヨコナデ。	浅黄褐色 細砂粒含	ほぼ完存	粘土紐痕残る。	No.32
			器高：4.6					18-1033
125	N-44 10号墳 石室埋土	土師器 碗	口径：12.6?	内面ナデ。外面指オサエのちナデ。 口縁部内外面ヨコナデか。	浅黄色 微砂粒含	口縁：1/4	表面剥離進み調整 不明瞭。	No.47
								18-1048
126	N-44 10号墳 玄室	須恵器 杯蓋	口径：10.1	内外面ロクロナデ。天井部外面へラ 切りのちナデか。天井部内面ナデ。 ロクロ右回転。	暗青灰色 微砂粒含	ほぼ完存		No.1
			器高：3.6					18-1001
127	N-44 10号墳 玄室	須恵器 杯蓋	口径：11.0	内外面ロクロナデ。天井部外面へラ 切りのちナデ。天井部内面ナデ。	暗青灰色 細砂粒多含	ほぼ完存	天井部に粘土紐痕 残る。外面に自然 釉薄く附着。	No.3
			器高：3.7					18-1003
128	N-44 10号墳 玄室	須恵器 杯蓋	口径：10.6	内外面ロクロナデ。天井部外面へラ切 り未調整。天井部内面一定方向ナデ。	外：暗灰色 細砂粒含	ほぼ完存	外面に自然釉薄く 附着。	No.13
			器高：3.5					18-1013
129	N-44 10号墳 石室埋土	須恵器 杯蓋	口径：9.9	内外面ロクロナデ。天井部外面へラ 切りのちナデか。天井部内面ナデ。	暗灰色 微砂粒含	口縁：1/2		No.40
			器高：3.6					18-1041
130	N-44 10号墳 石室埋土	須恵器 杯蓋	口径：10.9?	内外面ロクロナデ。天井部外面へラ 切り未調整か。	外：黒灰色 内：暗灰色 砂粒多含	口縁：3/4	外面に自然釉薄く 附着。	No.45
								18-1046
131	N-44 10号墳 玄室敷石下	須恵器 杯蓋	口径：9.9?	内外面ロクロナデ。天井部外面へラ 切り未調整か。	外：黒灰色 内：暗灰色 砂粒多含	口縁：3/4	外面に自然釉薄く 附着。	No.46
								18-1047
132	N-44 10号墳 玄室	須恵器 杯身	口径：9.0	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切 り未調整か。底部内面ナデ。	暗灰色 微砂粒含	口縁：2/3	外面に自然釉薄く 附着。	No.2
								18-1002
133	N-44 10号墳 玄室	須恵器 杯身	口径：9.2?	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切り 未調整。底部内面ナデ。ロクロ右回転。	暗灰色 微砂粒含	口縁：1/2 底部：完存	受部に127の口縁 端部片附着。内面 に焼き腹れあり。	No.4
			器高：3.3					18-1004
134	N-44 10号墳 玄室	須恵器 杯身	口径：9.4	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切り 未調整。底部内面ナデ。ロクロ右回転。	暗灰色 砂粒多含	ほぼ完存	底部外面に「V」 状のへら記号。	No.5
			器高：3.4					18-1005
135	N-44 10号墳 玄室	須恵器 杯身	口径：9.8	内外面ロクロナデ。底部外面へラケ ズリ。底部外面中心部未調整。ロク ロ左回転か。	淡灰色 精良	ほぼ完存		No.6
			器高：4.2					18-1006
136	N-44 10号墳 玄室	須恵器 杯身	口径：9.7	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切 り未調整。底部内面一定方向ナデ。 ロクロ右回転。	暗灰褐色 砂粒含	ほぼ完存	焼成やや不良。底 部外面に「V」状 のへら記号。	No.10
			器高：3.4					18-1010
137	N-44 10号墳 玄室	須恵器 杯身	口径：10.3	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切 り未調整か。底部内面一定方向ナデ。	淡灰黄褐色 砂粒含	口縁：2/3 底部：完存	焼成不良。底部外 面に「V」状のへ ら記号。	No.11
			器高：3.6					18-1011
138	N-44 10号墳 玄室	須恵器 杯身	口径：9.9	内外面ロクロナデ。底部外面へラケ ズリ。底部外面中心部未調整。ロク ロ左回転。	淡青灰色 精良	ほぼ完存		No.12
			器高：4.1					18-1012
139	N-44 10号墳 玄室	須恵器 杯身	口径：10.0	内外面ロクロナデ。底部外面へラケ ズリ。底部外面中心部未調整。ロク ロ左回転。	淡灰色 微砂粒多含	ほぼ完存		No.14
			器高：4.4					18-1014
140	N-44 10号墳 玄室	須恵器 杯身	口径：9.5	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切 り未調整。底部内面ナデ。	淡青灰色 微砂粒含	ほぼ完存	外面に自然釉薄く 附着。	No.15
			器高：3.3					18-1015
141	N-44 10号墳 玄室	須恵器 杯身	口径：11.7	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切 り未調整。底部内面一定方向ナデ。	淡黄灰色 砂粒多含	ほぼ完存	焼成不良。底部外 面に「V」状のへ ら記号。	No.16
			器高：3.6					18-1016
142	N-44 10号墳 玄室	須恵器 杯身	口径：9.6	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切 り未調整。底部内面一定方向ナデ。 ロクロ右回転か。	灰色 細砂粒多含	口縁：3/4 底部：完存		No.17
			器高：3.5					18-1018
143	N-44 10号墳 玄室	須恵器 杯身	口径：9.2	内外面ロクロナデ。底部外面ロクロ へラケズリ。ロクロ左回転。	暗青灰色 微砂粒多含	完存	底部外面に「一」 状のへら記号。	No.23
			器高：4.1					18-1024
144	N-44 10号墳 玄室	須恵器 杯身	口径：8.9	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切 りのち軽いナデか。底部内面ナデ。	暗灰褐色 細砂粒少含	完存		No.24
			器高：3.0					18-1025

第13-1表 10号墳出土遺物一覧(1)

遺物番号	出土位置	器種	計測値(cm)	調整・技法の特徴	色調・胎土	残存度	備考	整理番号
145	N-44 10号墳 玄門	須恵器 杯身	口径：10.7 器高：3.8	内外面ロクロナデ。底部外面へラケズリ。底部外面中心部にへラ切り痕残る。	灰 色 精 良	完 存		No.26 18-1027
146	N-44 10号墳 玄門	須恵器 杯身	口径：9.6 器高：3.9	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切りのちナデか。	淡青灰色 細砂粒含	完 存	一部分焼成不良	No.27 18-1028
147	N-44 10号墳 羨道	須恵器 杯身	口径：9.5 器高：3.5	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切り未調整。底部内面一定方向ナデ。	淡 灰 色 細砂粒含	ほぼ完存		No.29 18-1030
148	N-44 10号墳 羨道	須恵器 杯身	口径：9.4 器高：3.2	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切りのちナデ。底部内面一定方向ナデ。	暗 灰 色 微砂粒含	完 存	外面に自然釉付着。	No.30 18-1031
149	N-44 10号墳 羨道	須恵器 杯身	口径：9.4 器高：3.2	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切りのちナデ。底部内面一定方向ナデ。	暗 灰 色 微砂粒含	完 存		No.35 18-1036
150	N-44 10号墳 羨道入口土	須恵器 杯身	口径：9.7 器高：3.4	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切り未調整。底部内面一定方向ナデ。	暗 灰 色 微砂粒含	完 存		No.37 18-1038
151	N-44 10号墳 玄門	須恵器 杯身	口径：8.9 器高：3.3	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切りのち軽いナデ。底部内面一定方向ナデ。	暗 灰 色 微砂粒含	口縁：3/5	145の下から出土。	No.38 18-1039
152	N-44 10号墳 石室埋土	須恵器 杯身	口径：9.6?	内外面ロクロナデ。底部外面へラケズリか。	暗 灰 色 細砂粒含	口縁：2/5		No.39 18-1040
153	N-44 10号墳 石室埋土	須恵器 杯身	口径：9.0 器高：3.2	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切り未調整。底部内面一定方向ナデ。	暗 灰 色 細砂粒含	ほぼ完存		No.41 18-1042
154	N-44 10号墳 石室埋土	須恵器 杯身	口径：10.4?	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切りのちナデか。	灰 色 微砂粒含	口縁：1/4	焼成やや甘い。	No.42 18-1043
155	N-44 10号墳 石室埋土	須恵器 杯身	口径：9.8 器高：3.9	内外面ロクロナデ。底部外面ロクロへラケズリ。ロクロ左回転。	灰 色 精 良	口縁：1/2 底部：完存		No.43 18-1044
156	N-44 10号墳 石室埋土	須恵器 杯身	口径：8.4?	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切り未調整か。	灰 色 微砂粒含	口縁：1/4		No.44 18-1045
157	N-44 10号墳 羨道	須恵器 椀	口径：8.7 胴径：9.6 器高：5.3	内外面ロクロナデ。底部外面雑なロクロへラケズリ。底部中央へラ切り痕残る。	暗 灰 色 細砂粒多含	完 存		No.33 18-1034
158	N-44 10号墳 羨道	須恵器 椀	口径：8.6 胴径：9.4 器高：4.8	内外面ロクロナデ。底部外面雑なロクロへラケズリ。底部中央へラ切り痕残る。	灰 色 細砂粒少含	口縁：5/3 胴部：1/2		No.34 18-1035
159	N-44 10号墳 玄室	須恵器 高杯	口径：10.4 胴径：8.4 器高：10.6?	内外面ロクロナデ。杯底部外面ロクロへラケズリ。ロクロ右回転。	暗青灰色 細砂粒多含	口縁：完存 裾部：9/10	杯部傾く。	No.21 18-1022
160	N-44 10号墳 玄室	須恵器 甕	口径：7.4? 胴径：7.5 器高：8.9?	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切りのちナデ。	淡青灰色 細砂粒含	完 存	内外面に自然釉付着。口縁部かなり歪む。	No.19 18-1020
161	N-44 10号墳 羨道	須恵器 甕	口径：14.1 胴径：15.9 器高：17.5?	内外面ロクロナデ。胴部下軽いうろへラケズリ。ロクロ右回転。	淡 灰 色 砂粒多含	口縁：3/5	底部外面剥離。肩部外面に自然釉付着。	No.28 18-1029
162	N-44 10号墳 羨道	須恵器 提瓶	口径：7.2 胴径：15.9 器高：21.9	内外面ロクロナデ、外面の一部ロクロへラケズリ。ロクロ右回転。	淡 灰 色 砂粒多含	口縁：2/5 胴部：完存	肩部外面に自然釉付着。	No.36 18-1037

第13-2表 10号墳出土遺物一覧(2)

遺物番号	出土位置	器種	備 考	取上番号 整理番号
163	N-44 10号墳 玄室	鉄 刀	刀身部片 残存長12.1cm	鉄製 No.8 18-1008
164	N-44 10号墳 玄室	刀 子	鋒部分欠損 残存長15.6cm	鉄製 No.7 18-1007
165	N-44 10号墳 石室埋土	刀 子	刀身部片 残存長 5.2cm	鉄製 18-1050
166	N-44 10号墳 石室埋土	鉄 鎌	一部欠損 全長 7.3cm	鉄製 18-1052
167	N-44 10号墳 玄室	鉄 鎌	基部欠損 残存長 4.6cm	鉄製 No.22 18-1023

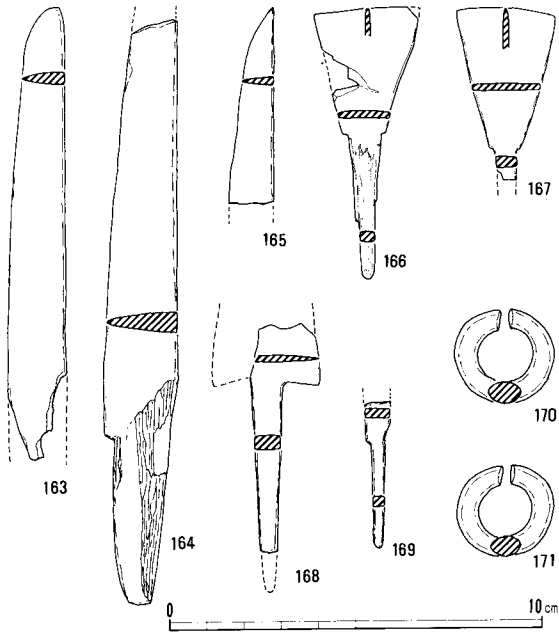
遺物番号	出土位置	器種	備 考	取上番号 整理番号
168	N-44 10号墳 石室埋土	鉄 鏃	鬚部～基部 残存長 6.1cm	鉄製 18-1051
169	N-44 10号墳 石室埋土	鉄 鏃	頸部～基部 残存長 3.9cm	鉄製 18-1053
170	N-44 10号墳 玄室	耳 環	ほぼ完存 銅芯金張 長径2.7cm、短径2.5cm	No.18 18-1019
171	N-44 10号墳 玄室	耳 環	ほぼ完存 銅芯金張 長径2.6cm、短径2.5cm	No.25 18-1026

第13-3表 10号墳出土遺物一覧(3)

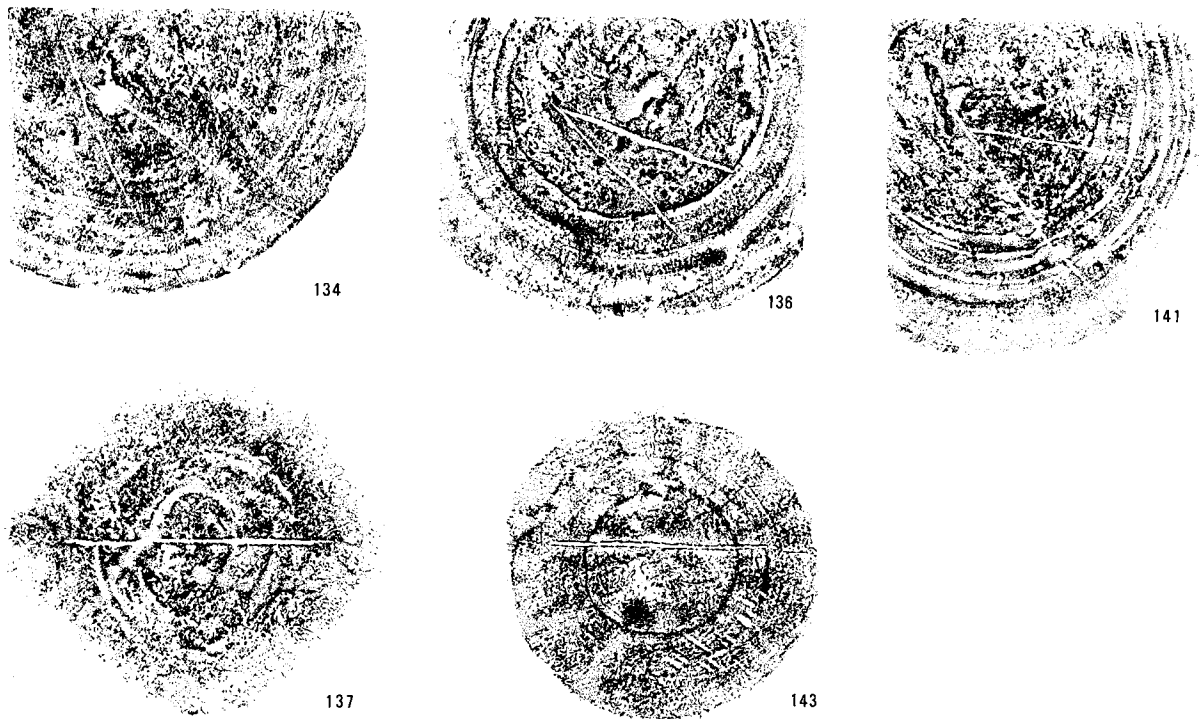
境の稜は全く失われており、天井部にロクロヘラケズリが認められるものはない。126と129、130と131はそれぞれ、胎土や焼成がきわめて類似している。また、127の口縁端部片が須恵器杯蓋(133)の受部に付着していることから、127と133とが同

時に焼成されたことがわかる。なお、図化不能の須恵器杯蓋片が石室埋土からもう1点出土している。この杯蓋も126~131と類似した形態をもつものである。

須恵器杯身(132~156) 132~142は玄室中央部、143~146・151は玄門近く、147~149は羨道後半部、150は羨道入口埋土、152~156は石室埋土出土である。いずれも口径が10cm前後のもので、たちあがりは短く、かなり内傾している。これらは胎土や底部外面の調整方法などから、A類・B類の2つの類に大きく分けることが可能である。A類は135・138・139・143・145・146・152・155である。底部外面にはロクロヘラケズリが施されているが、ロクロヘラケズリの範囲はへら切り痕を消すための必要最小限にとどめられており、中心部分にへら切り痕がわずかに残るものもある。ロクロの回転方向は不明なものもあるが、判明しているものは全て左回転である。器高は4cm前後で、口径に比してやや高い感じを受ける。胎土はきめが細かい。玄室中央部、玄門近くからは出土しているが、羨道後半部の杯身には含まれていない。B類はA類以外の杯身である。底部外面はへら切り未調整あるいはへら切りのち軽いナデで、全体に雑な作りである。ロ



第38-2図 10号墳出土遺物実測図(1:2)



第39図 10号墳出土須恵器へら記号拓影(1:2)

クロの回転方向は不明なものが多いが、判明しているものは右回転である。器高は 3.0cm～3.5cm程で、A類より低い。胎土は砂粒を含み、粗い。10号墳出土の杯身にはへら記号が認められるものが6個体ある。134・136・141には底部外面の中央付近から外側に向かって2本の直線が「V」状（松葉状と表現すべきか）に施されている。この3個体はB類に属し、B類の中でも特に類似点が多いことから製作者が同じと考えてよさそうである。137・143には底部外面の中央部を横切るように「一」状の直線が施されているが、137はB類、143はA類であることから同じ製作者によるものとは考え難い。

須恵器椀（157・158） いずれも羨道後半部から出土した。底部外面にはロクロヘラケズリが施されているが、中心部分にはへら切り痕が残る。

須恵器高杯（159） 玄室前半部の左側壁近くで出土した小型の長脚無蓋高杯である。脚部には透かしが無い。

須恵器甕（160・161） 160は玄室前半部から出土した小型の甕である。底部は丸底で茎部は細く締まり、口縁部径は胴部径とほぼ同じである。底部外面にはへらケズリが認められない。161は羨道後半部出土のきわめて大型の甕である。平底に近い丸底であるが、外面が剥離している。この剥離はおそらく焼成時のものであろう。頸部は細く締まり、口縁部は直線的に大きく開いている。胴部の最大径部外面には楯状工具による刺突文が施されているが、不明瞭である。

須恵器提瓶（162） 羨道前半部の右側壁近くで出土した。胴部は球形に近くなり、肩部の把手は全く認められない。底部外面の一部に木目痕がみられるがこれは叩き目ではなく、板状の台に置いた時に付いたものと思われる。

鉄刀（163） 玄室中央部出土の刀身部残片で、刀子とした164と重なって出土した。163も刀子とすべきかもしれない。残存長12.1cm、刀身部の最大幅1.6cm、棟幅0.3cm～0.4cmを測る。

刀子（164・165） 164は玄室中央部出土の大型の刀子で、鋒部分を欠損している。残存長15.6cm、刀身部最大幅2.0cm、棟幅約0.5cm、茎部は長さが4.4cm、最大幅1.4cmを測り、木質が付着している。

165は石室埋土出土の鋒部分の残片である。残存長5.2cm、最大幅1.2cm、棟幅約0.2cmで、164と同一個体である可能性も考えられる。

鉄鉢（166～169） 167は玄室前半部、166・168・169は石室埋土出土である。166・167は平面形が逆台形状の鉄身部をもつ方頭式の有茎鉄である。

166は全長7.3cm、鉄身部は長さ3.4cm、最大幅が2.9cm、茎部は断面が長方形で、長さ3.9cm、関部近くの幅0.8cm、厚さ0.4cmを測る。茎部には薄く木質が付着している。167は残存長4.6cmで、茎部のほとんどが欠損している。鉄身部は長さ3.6cm、最大幅2.7cm、茎部は断面が長方形で、関部近くの幅0.5cm、厚さ0.3cmを測る。168は欠損部分が多く、全体の形態はよくわからない。残存長は6.1cm、茎部は断面が長方形で、関部近くの幅0.8cm、厚さ0.4cmを測る。169は長頸鉄の頸部から茎部にかけての残片で、残存長3.9cmを測る。

耳環（170・171） 170は玄室前半部の右側壁近く、171は玄室前半部の左側壁近くで出土した。2個体とも銅芯金張のもので、金箔の残りは良い。170は長径2.7cm、短径2.5cm、重さ14.5g、171は長径2.6cm、短径2.5cm、重さ11.8gを測る。いずれも断面はかなり楕円形で、長径0.8cm、短径0.5cmである。

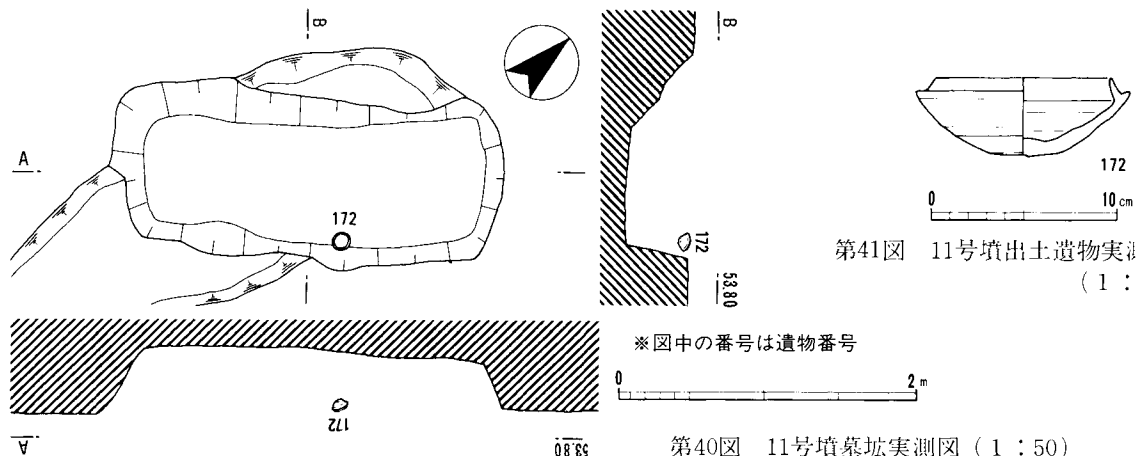
11. 11号墳

A. 墳形

11号墳は10号墳の東側に隣接して検出された小規模な円墳である。西裾の周溝は10号墳と共有しているように見えるが、攪乱を受けており、確かなことは不明である。北裾の周溝は底部分が攪乱を受けているが、比較的残りが良く、幅約1mを測る。東裾では周溝が検出されず、南裾は崖により、完全に失われている。周溝内側の下端のカーブから復元した墳丘規模は径約10mとなる。

B. 主体部

墳丘の中心からやや北西方向にずれた位置で、長方形の土壇が検出された。この土壇の規模は、上端では長辺約2.6m、短辺約1.1m、下端では長辺約2.3m、短辺0.7m～0.8mで、深さは0.3m～0.4mである。長軸方向はN 42° Eとなる。土壇の周囲



第41図 11号墳出土遺物実測図 (1:4)

第40図 11号墳墓坑実測図 (1:50)

遺物番号	出土位置	器種	計測値(cm)	調整・技法の特徴	色調・胎土	残存度	備考	取上番号 整理番号
172	N-48 11号墳 墓坑内	須恵器 杯身	口径: 9.4 器高: 4.2	内外面ロクロナデ。底部外面ロ クロヘラケズリ。ロクロ左回転。	灰色 砂粒多含	口縁: 1/2 底部: 完存	焼成不良。	No.1 18-1101

第14表 11号墳出土遺物一覧

には盗掘坑と思われる溝状の攪乱痕跡がみられる。土坑の東壁近くで、床面から0.3m程浮いた状態でほぼ完形の須恵器杯身が1個体出土した。この土坑は木棺を直葬した墓坑であろうと思われる。

C. 遺物

11号墳を検出する過程で土師器の細片や須恵器杯蓋・杯身・碗の破片が数片出土したが、11号墳に伴う遺物とは断定できなかった。11号墳の遺物と断定できるものは墓坑出土の須恵器杯身の1個体のみである。

須恵器杯身 (172) ほぼ完形であるが、焼成不良のため口縁端部はかなり磨滅している。底部外面は左回転のロクロで2回転程ヘラケズリが施され、ヘラ切り痕は見られない。胎土はやや粗いが、全体の形態や底部外面の調整技法は10号墳の杯身A類に類似する。

12. 12号墳

A. 墳形

11号墳の西方約40mで横穴式石室の残骸が検出された。この横穴式石室の位置から推定すると墳丘の範囲は調査区外の北側にもびるが、調査区内では墳丘や周溝は全く確認できなかった。

B. 主体部

横穴式石室の石材が10数個検出されたが、原位置

を保持していたのは右側壁の2個と左側壁の2個のみで、石材抜き取り痕も検出できなかった。石材の大きさは、横幅0.7m~1m、高さ0.4m~0.9mと大きい。他の古墳の石室の規模を参考にとすると、この部分は玄室で、玄室幅1.2mの横穴式石室が想定できる。石材の並びと地形から判断すると、石室の主軸方向はN1°Wで、ほぼ真南に開口していたと思われる。

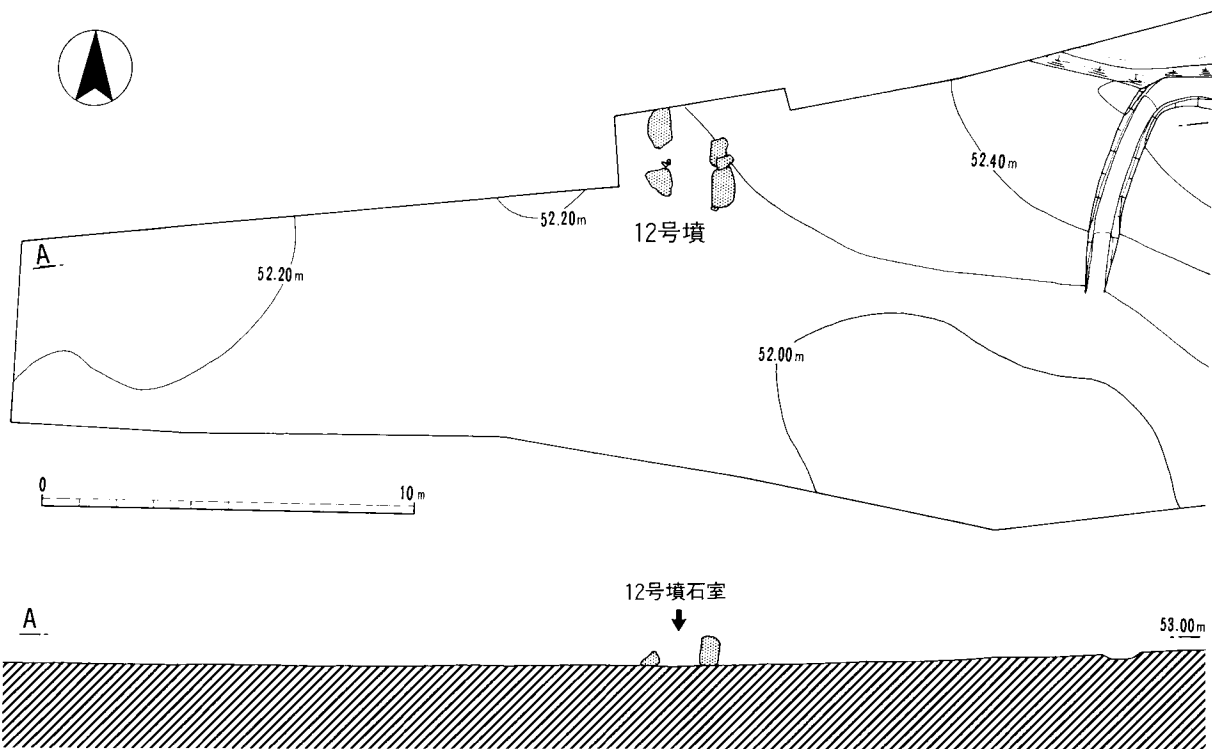
C. 遺物

石材の周囲からは中世の土器も出土している。12号墳に伴うと考えられるものは器形不明の須恵器片1点、須恵器杯蓋(173)、土師器甕(174)の3点のみである。

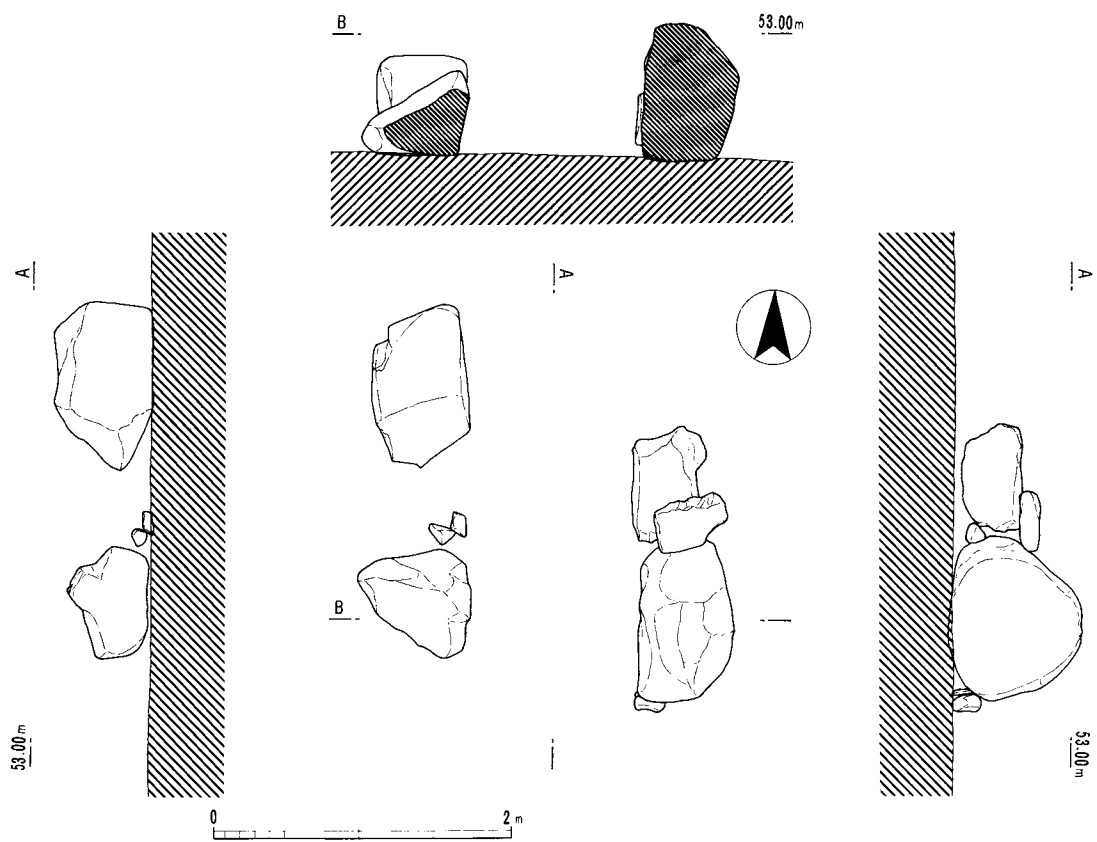
須恵器杯蓋 (173) 玄室内と思われる位置で出土した。内面のかえりは短く、口縁部より外へは出ない。天井部には擬宝珠様のつまみが付くと思われるが、欠損している。

土師器甕 (174) 玄室内と思われる位置で出土した。胴部外面のハケは明瞭であるが、内面のヨコハケは軽くナデ消されている。口縁端部は上方へ小さくつまみ上げられている。

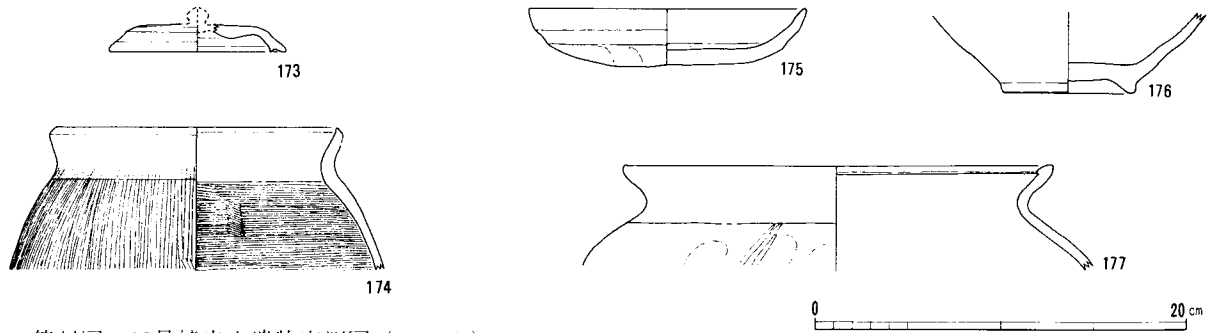
中世の土器 (175 ~ 177) いずれも石材の周囲から出土したものである。175は土師器皿で、器壁が厚く、ヨコナデはしっかりと幅広く施されている。176は山茶碗で、口縁部は欠損しているが、灰釉の



第42図 12号墳 地形測量図 (1 : 200)



第43図 12号墳石室実測図 (1 : 50)



第44図 12号墳出土遺物実測図（1：4）

遺物番号	出土位置	器種	計測値 (cm)	調整・技法の特徴	色調・胎土	残存度	備考	取上番号 整理番号
173	H-8 12号墳 石室	須恵器 杯蓋	口径：7.9?	内外面ロクロナデ。天井部外面ロクロヘラケズリ。	灰色 微砂粒含	口縁：1/5		18-1201
174	G-8 12号墳 石室内	土師器 甕	口径：15.0?	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面タテハケ、内面ヨコハケ。	浅黄橙色 微砂粒含	口縁：1/6		18-1202
175	G-8 12号墳	土師器 皿	口径：14.9 器高：3.1	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ、外面指オサエのちナデか。	浅黄橙色 砂粒含	口縁：2/5		18-1204
176	H-8 12号墳 石室	陶器 山茶碗	台径：6.8	内外面ロクロナデ。	淡灰色 微砂粒含	高台：完存	灰釉の漬け掛けが認められる。	18-1205
177	H-8 12号墳	土師器 鍋	口径：23.0	口縁部内外面ヨコナデ。	浅黄橙色 砂粒含	口縁：1/6	内外面煤付着。	18-1203

第15表 12号墳出土遺物一覧

漬け掛けが認められる。177 は土師器鍋で、口縁端部は丸く折り返されている。これらは平安時代末葉のものである。

13. 13号墳

A. 墳形

13号墳は12号墳の石室から東方へ約25mで検出された。周溝は削平や攪乱で極めて不明瞭であるが、主体部である横穴式石室の西方約7mにある幅広い溝と東方約7mにあるピット状の2つの浅い溝が周溝の一部と考えられる。南裾では周溝らしきものは検出できず、北側は調査区外となるため確認できなかった。墳形は円墳と思われ、東西径は15m程度となる。

B. 主体部

主体部は横穴式石室であるが、石材は全て抜き取られている。幸い、石材抜き取り痕と石室掘形が比較的良好的な状態で検出されたことから、石室の形態や規模がある程度復元可能である。

石室は主軸をN 43° Wにとり、南西に開口した右

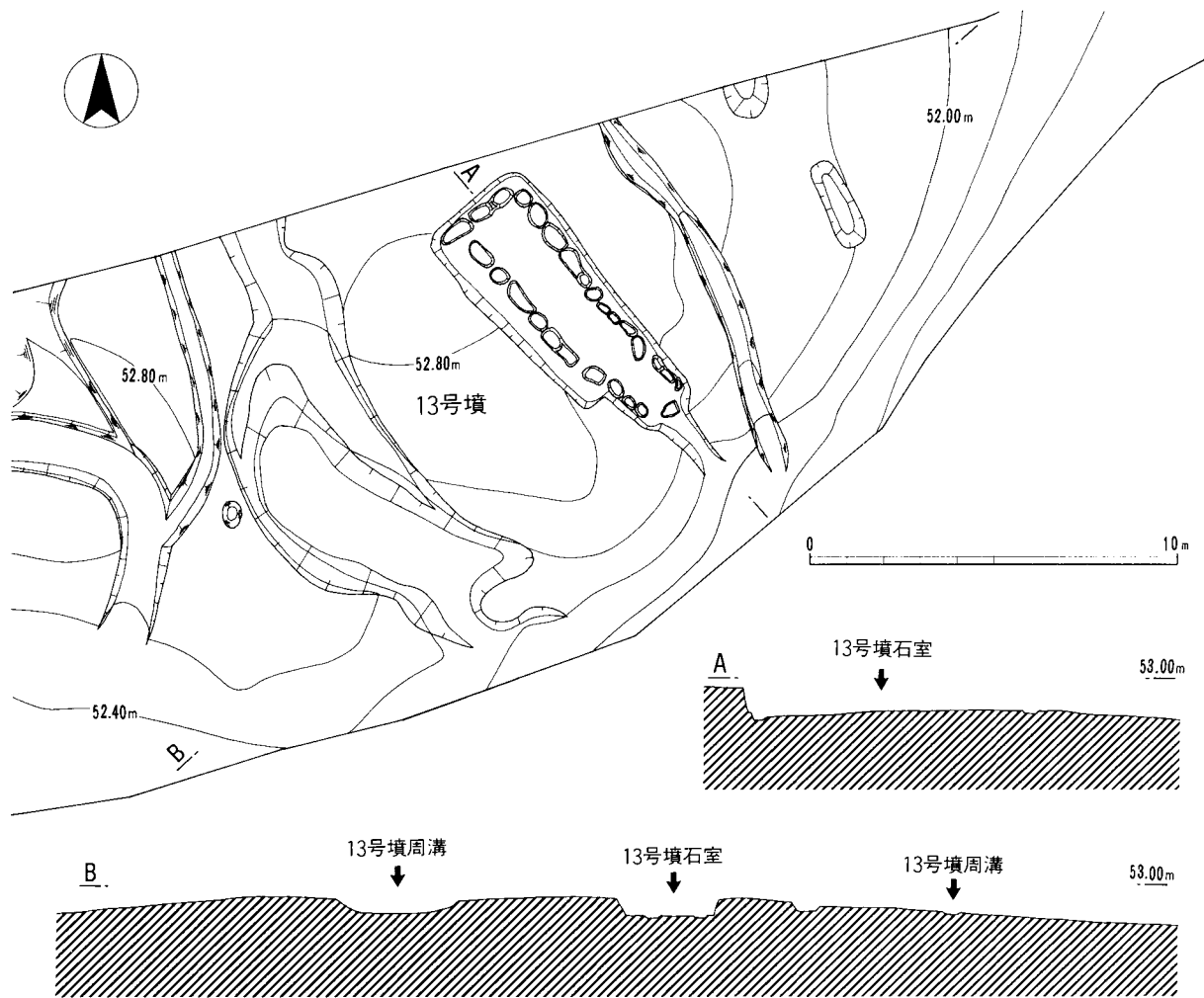
片袖のものである。奥壁部分の石材抜き取り痕より約5mにある右側壁の石材抜き取り痕を袖石とすると、玄室の規模は長さ約5m、幅1.3m～1.4mとなる。袖部分から南にある2列の石材抜き取り痕は羨道側壁のものと思われることから、羨道の規模は長さ2.2m、幅1m程度となる。石室全長は7.2mである。羨道入口の中央に位置する1つの抜き取り痕については、石室入口に意図的に設けた施設や閉塞石の痕跡とも考えられるが、単に落石によるものかもしれない。この石より南の掘形幅は0.6m～0.7mと狭くなる。この部分は墓道であろう。

復元した石室の形態は細長い玄室と短い羨道を持ち、さらに狭い墓道が付くものとなる。これは、7号墳・8号墳と類似した形態である。

C. 遺物

出土遺物には土師器椀2・甕1、須恵器杯蓋1・杯身1・高杯1・短頸壺1、刀子2、鉄鏃2、鏝1、耳環2、切子玉1がある。

土師器椀（178・179） 178は石室埋土、179は羨道付近から出土した。178は小片のため法量は不



第45図 13号墳 地形測量図 (1:200)

確定であるが、179 と10号墳出土の土師器碗とを比べると、179の方が口径、器高ともかなり大きい。

土師器甕 (180) 西側の周溝内から、破碎された状態で出土した長胴の甕である。

須恵器杯蓋 (181) 石室埋土出土である。口径、器高とも大きい。天井部外面はへら切り未調整である。

須恵器杯身 (182) 羨道部出土である。口径に比べて器高がかなり低い。立ち上がりは短く、内傾している。底部外面にはロクロへらケズリが施されているが雑である。

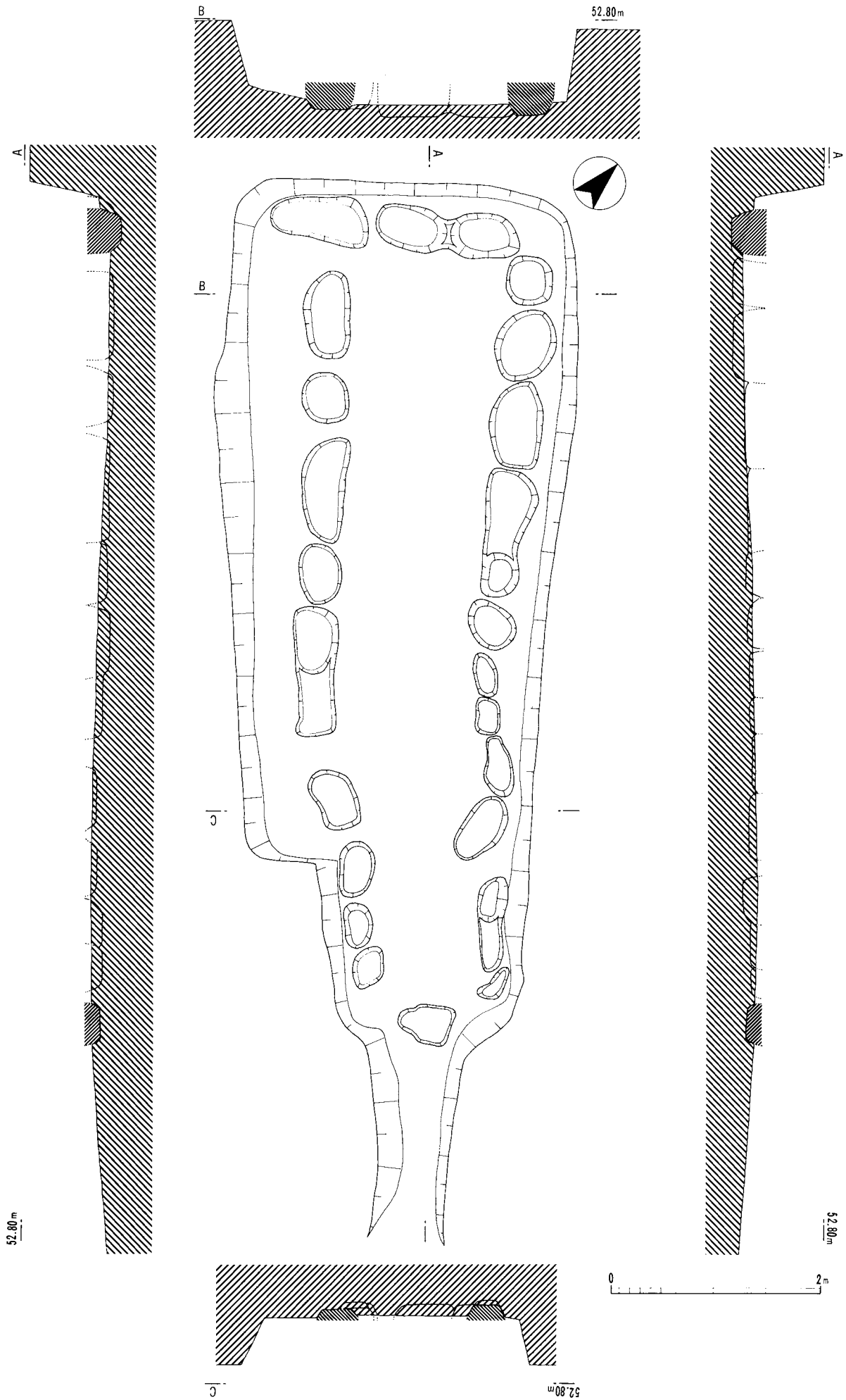
須恵器高杯 (183) 奥壁近くから出土した。脚部のみであるため、高杯であると断定することはできない。つくりは粗雑な感じを受ける。

須恵器短頸壺 (184) 石室埋土出土である。肩部には一条の沈線が施され、胴部下半はロクロへらケ

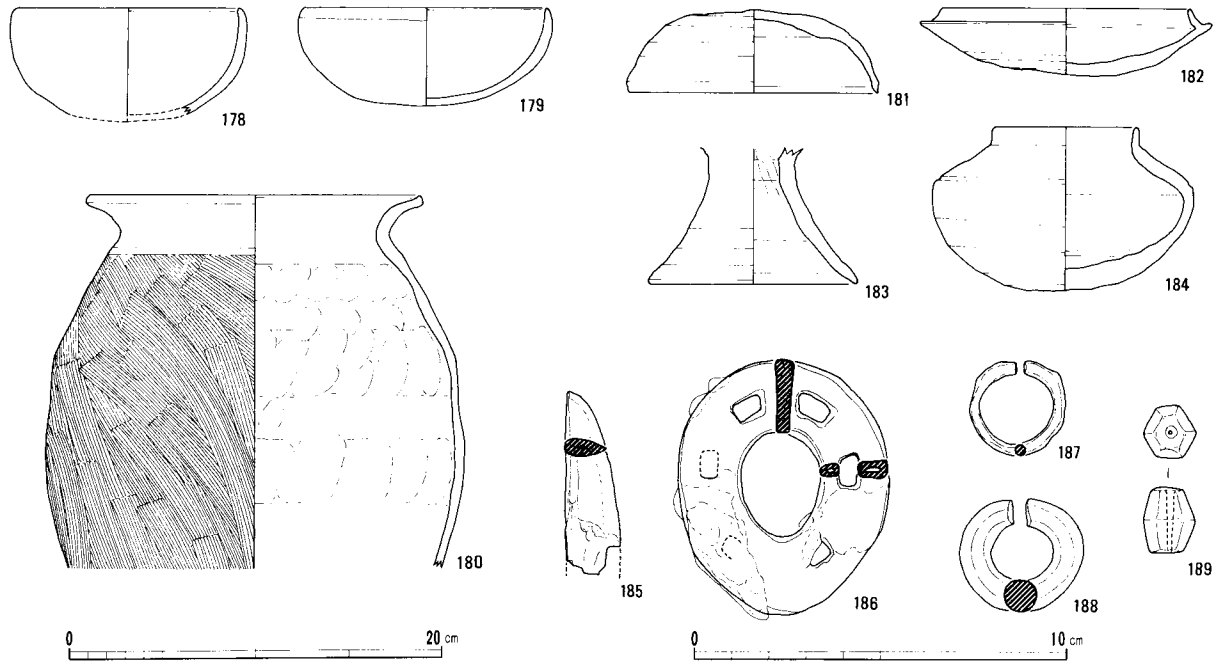
ズリで仕上げられている。肩部外面には別個体の口縁端部片が付着していることから蓋状の土器を被せて焼成したことがわかる。器壁表面には黒色粒子の吹き出しが多く見られる。

刀子 (185) 奥壁近くから出土した鉄製刀子の鋒部分である。残存長 4.9cm、残存最大幅 1.5cm、棟幅 0.4cmを測る。他に、石室埋土から平棟平造の刀身部の残片が2片出土している。そのうちの1片は刀身部の中央付近で、残存長3.4cm、刀身部幅1.7cm、棟幅0.3cmを測る。もう1片は鋒付近で、残存長3.2cm、最大幅1.6cm、棟幅0.3cmを測る。この2片は同一個体のもと思われる。

鉄鏃 石室埋土から、鏃身部片と頸部片が1点ずつ出土している。この2点は同一個体のものかどうかは不明である。鏃身部片は柳葉形の鏃身部をもつ長頸鏃のもと思われる。鏃身部の断面は片丸造で、



第46图 13号墳石室実測図 (1 : 50)



第47図 13号墳出土遺物実測図 (178~184=1:4、185~189=1:2)

遺物番号	出土位置	器種	計測値(cm)	調整・技法の特徴	色調・胎土	残存度	備考	取上番号 整理番号
178	F-17 13号墳 石室埋土	土師器 椀	口径:12.0?	内面ナデ。外面指オサエカ。口縁部 内外面ヨコナデ。	淡橙色 砂粒多含	口縁:1/4	表面剥離進む。	18-1301
179	G-17 13号墳 羨道	土師器 椀	口径:13.0 器高:5.3	内面ナデ。外面指オサエ。口縁部内 外面ヨコナデ。	淡橙色 砂粒多含	ほぼ完存		18-1302
180	E-16 13号墳 周溝	土師器 甕	口径:17.7? 胴径:22.4?	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナ ナメハケ、内面指オサエのちナデ。	浅黄橙色 砂粒含	口縁:1/3 胴部:1/4	表面剥離進む。	18-1312
181	F-17 13号墳 石室埋土	須恵器 杯蓋	口径:13.3 器高:4.5	内外面ロクロナデ。天井部外面ヘラ 切り未調整。	灰色 砂粒多含	口縁:3/4		18-1303
182	F-18 13号墳 羨道	須恵器 杯身	口径:13.3? 器高:3.6?	内外面ロクロナデ。底部外面ロクロ ヘラケズリ、内面ナデ。	灰色 砂粒多含	口縁:1/4		18-1304
183	F-17 13号墳 玄室	須恵器 高杯	裾径:11.4?	内外面ロクロナデ。	灰色 微砂粒含	裾部:1/4		18-1306
184	F-17 13号墳 石室埋土	須恵器 短頸壺	口径:7.6 胴径:14.1 器高:8.7	内外面ロクロナデ。胴部外面下半口 クロヘラケズリ。ロクロ右回転。	灰色 細砂粒含	口縁:3/4 胴部:7/8 底部:完存	肩部外面に重ね焼 きの痕跡あり。	18-1305

第16-1表 13号墳出土遺物一覧(1)

遺物番号	出土位置	器種	備考	取上番号 整理番号
185	G-17 13号墳 石室埋土	刀子	刀身部片 鉄製 残存長4.9cm	18-1308
186	G-17 13号墳 石室埋土	鐏	ほぼ完存 鉄製 長径6.9cm、短径5.7cm	18-1307
187	G-17 13号墳 石室埋土	耳環	錆化激しい 銅芯のみ 径2.5程度	18-1309
188	G-17 13号墳 石室埋土	耳環	ほぼ完存 銅芯銀張 長径3.3cm、短径3.0cm	18-1310

遺物番号	出土位置	器種	備考	取上番号 整理番号
189	G-17 13号墳 石室埋土	切子玉	完存 水晶製 高さ1.8cm	18-1311
	H-17 13号墳 石室埋土	鉄鏃	鏃身部片 鉄製 残存長2.9cm	18-1313
	H-17 13号墳 石室埋土	刀子	刀身部片2片 鉄製 残存長3.4cmと3.2cm	18-1314
	H-17 13号墳 石室埋土	鉄鏃	鏃部片 鉄製 残存長11.3cm	18-1315

第16-2表 13号墳出土遺物一覧(2)

残存長 2.9cm、最大幅 1.2cmを測る。頸部片も長頸鏃のもので、残存長11.3cm、断面は方形で幅 0.6cm、厚さ 0.4cmを測る。

鏑 (186) 奥壁近くから出土した倒卵形の鉄製鏑で、台形の透しを6個もつ。象嵌は認められない。長径 6.9cm、短径 5.7cm、厚さ 0.3cm~0.5 cmを測る。中央孔も倒卵形で、長径 2.8cm、短径 2.1cmを測る。

耳環 (187・188) いずれも石室埋土出土のもので、銅芯である。188 はやや楕円形で、長径3.3cm、短径 3.0cmを測り、断面は 0.9cmの円形である。重

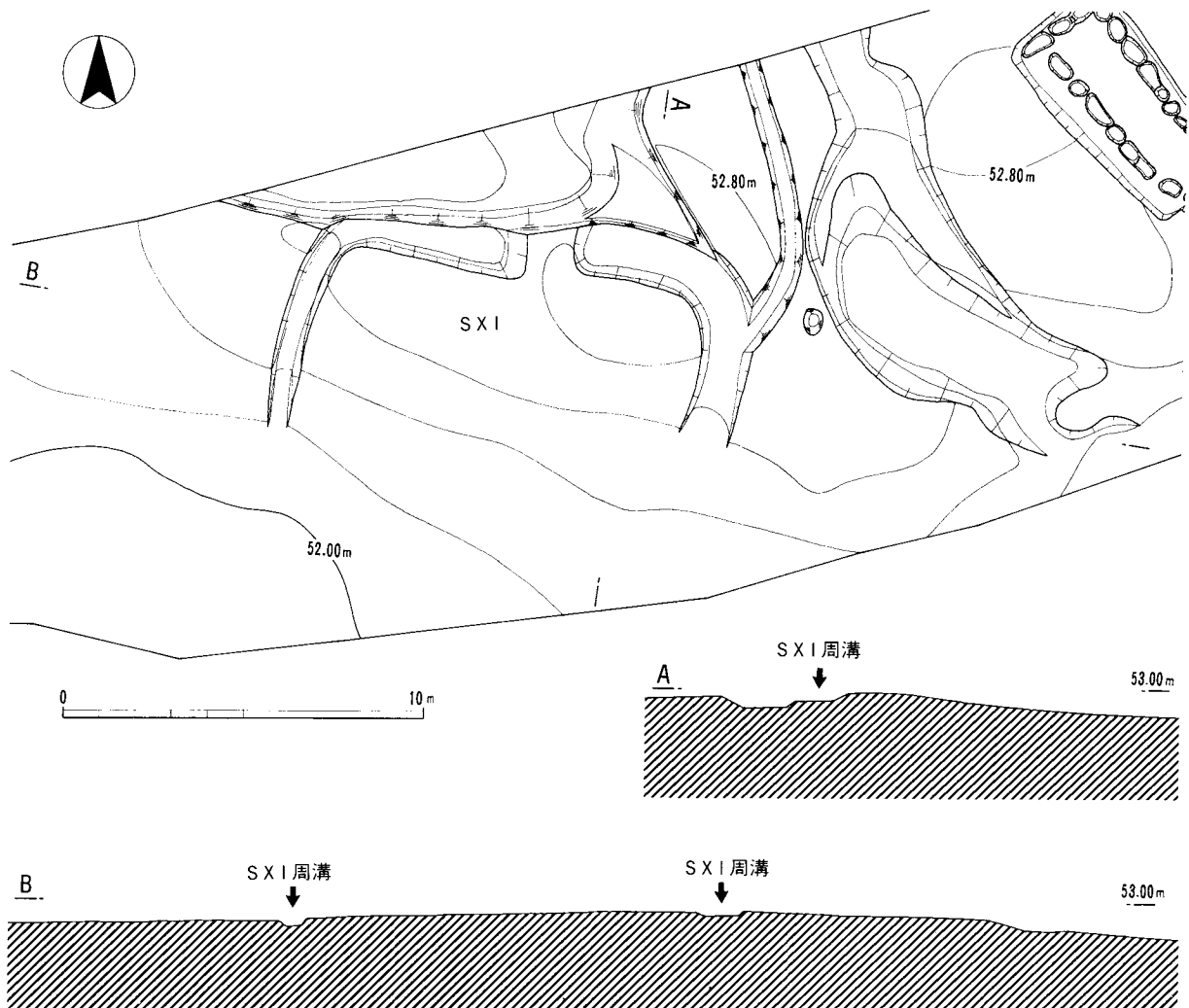
さは29.2gとかなり重い。銀がごく一部にかすかに認められ、銀張と考えられる。銅芯の残りは良い方であるが、部分的に錆化が進んでいる。187 も 188 と同程度の大きさのものであったのであろうが、現在では径 2.5cm、断面の径 0.3cmの針金状の銅芯のみとなっている。

切子玉 (189) 奥壁近くから出土した水晶製のもので、6角に面取りしてある。高さは 1.8cmで、上端と下端の幅は 0.9cm、中央付近の最大幅は 1.4cmを測る。穿孔は一方向からである。

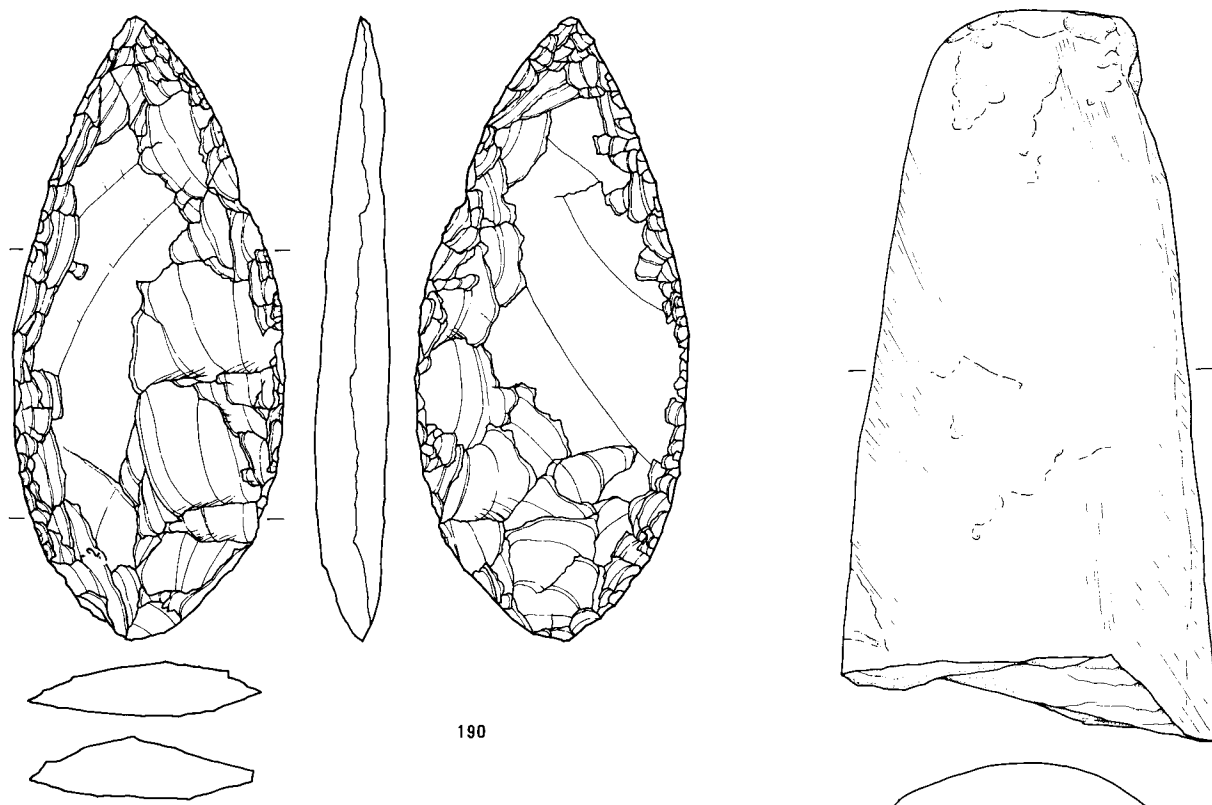
4. その他の遺構と遺物

1. 遺構

SX1 昭和61年度の調査区で検出された性格不明の周溝で、12号墳と13号墳とのほぼ中間に位置する。

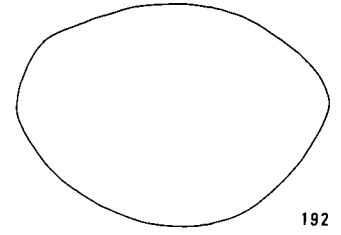


第48図 SX1地形測量図 (1:200)

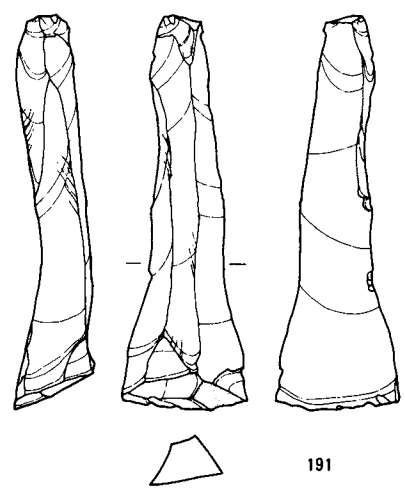


190

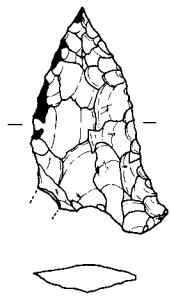
0 5 cm



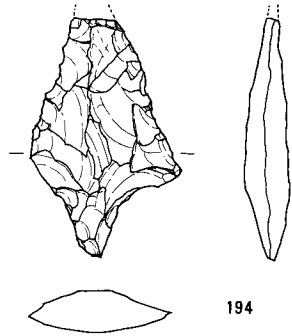
192



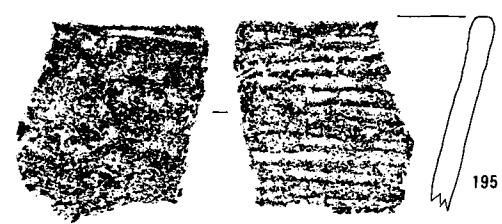
191



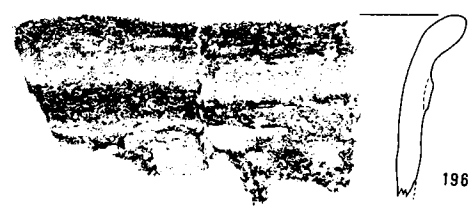
193



194



195



196

0 10 cm

第49図 その他の出土遺物実測図 (190~194= 1 : 1、195・196= 1 : 2)

幅 0.8m～1.5m、深さ 5cm～20cmの周溝が、南側を除く 3 方に巡り、北辺には陸橋部も認められる。周溝で囲まれた台状部の規模は東西約10.5mであるが、南北は 5 m程度が検出されたのみである。

遺物は全く出土しなかった。

2. 遺物^③

木葉形尖頭器 (190) 10号墳の石室掘形の埋土から出土した。幅広の剥片を素材とするもので、石質はチャートである。長さ 8.4cm、幅 3.6cm、厚さ1.0cm、重さ31.4gを測る。〔整理番号18-1401〕

縦長剥片 (191) 第一次調査のG18試掘坑から出土した。この試掘坑は 6号墳の南約30mに位置する。角礫を素材とするもので、石質は硬質頁岩と思われる。長さ 5.3cm、幅 1.7cm、厚さ 1.1cm、重さ 6.4gを測る。〔整理番号18-1402〕

磨製石斧 (192) 昭和60年度調査区の北西方向にある農道で表採したものである。刃部は欠損している。残存部の計測値は、長さ 9.8cm、幅 5.1cm、厚さ 2.9cm、重さ 239.4gで、石質は、細粒砂岩と思われる。〔整理番号18-1403〕

石鏃 (193・194) いずれも昭和61年度調査区の北側に隣接する畑で表採したサヌカイト製のものである。193 は逆刺の一方が欠損しており、刃部の一片にはタール状のものが付着している。残存部の計測値は、長さ 3.0cm、幅 1.8cm、厚さ 0.4cm、重さ 1.4 gである。194 は刃部先端が欠損している。残存部の計測値は、長さ 3.2cm、幅 2.1cm、厚さ 0.6cm、重さ 2.7gである。〔整理番号193=18-1404、194=18-1405〕

縄文土器 (195・196) いずれも深鉢の口縁部片である。195 は昭和60年度調査区の西半部で出土した粗製の無文土器で、外面は丁寧にナデつけられており、内面には貝殻条痕が認められる。色調は褐色で、胎土には径 1mm以下の細砂粒を多く含む。縄文時代の後期あるいは晩期のものであろう。196 は 4号墳の墳丘盛土から出土した突帯文土器である。口縁端部から約 1.5cm下がった外面に低い素文の突帯がつき、内外面には横方向のナデが施されている。色調は明褐色で、胎土には径 1mm以下の細砂粒を多く含む。縄文時代の晩期末葉のものであろう。〔整理番号 195=18-1407、196=18-1408〕

5. 結 語

1. はじめに

今回の発掘調査では、丘陵斜面に連続するように築かれた13基の古墳が検出された。これらの古墳は後世の削平を強く受けていたため、調査前の地表面観察ではその存在を窺い知ることができなかつたものである。周囲の地形や検出された古墳の並びから、調査区外にもまだ相当数の古墳が存在していることは十分に予想されるが、現時点では垣内田古墳群の広がりを知ることはきわめて困難である。

こういう状況の中ではあるが、各古墳の出土遺物や主体部構造などを比較しながら、垣内田古墳群について若干の検討をすることで結語としたい。

2. 出土遺物

今回の調査では、古墳時代の遺物の他に石器・縄文土器・中世土器などが出土している。それらの中

でも、4号墳の石室埋土から完形に近い状態で比較的多く出土した中世の土器は石室の再利用の可能性も考えられて興味深い。今回は古墳時代の遺物、それも、古墳の主体部あるいは周溝の中から出土したものに限りてみていくことにする。

(1) 土器

土器は古墳の築造年代を知る重要な遺物であるが、横穴式石室ではしばしば追葬が行われているため、数点の土器のみで古墳の築造年代を決定することは危険を伴う。垣内田古墳群においても、土器を比較的多く出土した古墳でも原位置の復元や追葬の回数を知ることが困難であることから、土器から各古墳の築造時期を決める作業は慎重に進めなければならない。しかし、ここでは、そういうことを承知しながらも、出土土器から知られる年代をもとに垣内田古墳群の流れをつかんでみることにする。

土器の中で、型式編年が最もよく進んでいるのは

須恵器蓋杯であるので、これを中心にして各古墳の時期を検討してみたい。なお、須恵器の編年は中村浩氏の須恵器編年^④を用いる。

垣内田古墳群の中で比較的古い要素をもつ蓋杯を出土する古墳としては、7号墳・8号墳・13号墳があげられる。これらの古墳出土の蓋杯は口径が大きく、外面中央部までヘラケズリが施されているものがあるが、杯蓋の外面に口縁部と天井部との境の稜が認められず、杯蓋・杯身の外面にヘラ切り痕が残るものも含まれている。こういう特徴は中村編年のII型式4段階～II型式5段階（6世紀後半～7世紀初頭）のもので、13号墳出土の土師器甕（180）の時期もこれと矛盾しない。7号墳出土の蓋杯は、杯蓋（83・84）の口径が15cm近く、杯身（85～87）の口径が13cm前後と垣内田古墳群出土の蓋杯の中では最も大きく、外面のヘラケズリも最も丁寧で、垣内田古墳群中では最も古手の蓋杯である。奥壁近くから出土した環状の把手をもつ提瓶（88）も古手で、II型式3段階（6世紀中頃～後半）にさかのぼりうる。これらのことから7号墳の築造時期は3基の中で最も古い6世紀後半と考えたい。なお、8号墳の石室埋土からはII型式6段階のものと考えられる口径が小さい杯蓋（96）・杯身（101）も出土していることから、7世紀前半にも追葬が行われたらしい。

2号墳・3号墳・5号墳・6号墳・10号墳・11号墳出土の蓋杯は、口径が10cm前後ときわめて小さい。杯蓋の口縁端部は丸くおさまり、口縁部と天井部との境の稜は全く認められない。杯身の底部外面はヘラ切り未調整のものが多く、ヘラケズリが施されているものも中心部にはヘラ切り痕が残っている。これらの特徴はII型式6段階のものである。中村編年のII型式6段階は、杯身と杯蓋との形態が逆転するIII型式1段階と同じ時期で、7世紀前半～中頃のものでされているが、これらの古墳ではIII型式1段階の蓋杯が全くみられないことから、時期を7世紀前半にしぼってよいと思われる。

10号墳からは25個体の杯身が出土した。これらの杯身は、平均の器高が4cm前後とやや高めで底部外面にロクロヘラケズリが施されているA類と、平均器高約3.5cmで底部外面はヘラ切り未調整のB類とに分けられる。A類とB類とは形態や調整方法が異

なるばかりでなく、胎土も明らかに異なっているが、この2者は石室内の敷石直上で混在して出土していることから時期的な差ではなく、生産地の違いと思われる。なお、11号墳墓坑内出土の杯身（172）は10号墳のA類ときわめて類似している。

3号墳と10号墳はともにII型式6段階に位置づけられる蓋杯を出土しているが、それぞれの古墳から出土している甕および高杯をくらべてみると、いずれも10号墳より3号墳の方が古い感じを受ける。特に、3号墳出土の高杯（22・23）はII型式5段階に相当するものである。蓋杯の平均口径でも3号墳の場合は12cmを超え、II型式6段階の時期とした古墳出土の中では最も大きい。このように、3号墳出土の土器は全体に7世紀前半でも古い時期に、10号墳出土の土器は新しい時期に位置づけられそうである。

4号墳からは蓋杯が出土していないが、甕（51）は3号墳出土のものに類似している。また須恵器碗（48～50）は10号墳出土のもの（157・158）とくらべてひとまわり大きく、作りも丁寧である。これらのことから4号墳出土の土器は10号墳出土のものよりやや古く、3号墳とほぼ同時期と考えてよさそうである。

6号墳からは杯身の出土はなく、杯蓋のみが6個体出土している。これらの形態はきわめて特徴的で、互いに良く似ていることから、土器の時期をある程度限定して考えてもよさそうである。高杯をみると78の透かしはこの段階によくみられる形骸化したものであるが、79・80の透かしは細いながらも方形にあげられている。6号墳の時期を3号墳と10号墳の間に置くのは限定しすぎであろうか。

12号墳出土の杯蓋（173）は内面にかえりのあるもので、かえりの長さから判断すると、III型式2段階（7世紀中頃）に相当する。これは、垣内田古墳群出土の須恵器の中では最も新しい時期に位置づけられるものである。同じく12号墳石室出土の土師器甕（174）の年代も杯蓋とは矛盾しない。しかし、12号墳は石室の遺存度がきわめて悪く、出土土器の点数もわずかであるので、7世紀中頃という時期は築造時期なのか追葬時期なのかはよくわからない。

出土土器からみた時期によって各古墳をならべてみると、6世紀後半＝7号墳、6世紀後半～末＝8

号墳・13号墳、7世紀初頭～前半＝2号墳・3号墳・4号墳・5号墳・6号墳、7世紀前半＝10号墳・11号墳となる。12号墳は7世紀中頃に築造あるいは追葬が行われたと思われる。

(2) 鉄鏃

鉄鏃は1号墳・3号墳・4号墳・7号墳・8号墳・10号墳・13号墳の7基の古墳から2個体～6個体ずつ出土している。

各古墳出土の鉄鏃には長頸鏃あるいは長頸鏃のものと思われる頸部片が含まれているが、7号墳からは長頸鏃は出土していない。長頸鏃の頸部には遺存度が悪いのか棘関をもつものは認められない。長頸鏃の鏃身部が出土しているのは3号墳・4号墳のみで(33～36・63)、それらは三角形の鏃身部をもつ33を除いて全て鏃身関部が不明瞭な細身の鑿箭式とよばれるものまたはそれに近いものである。

広根系の鏃身部が出土しているのは1号墳・4号墳・7号墳・10号墳で、逆刺をもつものはない。大きさは小型のものが多く1号墳出土のものはやや大型である。4号墳と10号墳とからは方頭形の鏃身部をもつものが2個体ずつ出土している。

これらの鉄鏃の時期は、土器からみた各古墳の時期と矛盾していない。土器の出土がない1号墳についても、長頸鏃が出土していることから他の古墳が築かれた時期範囲の中に収めてもよいと思われる。

(3) 鉄刀

鉄刀は1号墳・3号墳・8号墳・10号墳、鉄刀の鏢は1号墳・7号墳・8号墳・13号墳から出土しており、計6基の古墳で鉄刀の副葬が認められる。

3号墳の石室からは鉄刀(30)とともに銀象嵌が施された鉄製の円頭柄頭金具(31)と鞘尻金具(32)とが出土している。象嵌刀装具を出土した古墳としては、垣内田3号墳は県内で7例目となる。円頭柄頭金具に限ってみると、上野市大池古墳、大山田村前山古墳に次いで3例目で、伊勢国の範囲では初例となる。

西山要一氏作成の集成表^⑤によると、象嵌文様のある円頭柄頭金具を出土した遺跡の大部分は径10数mから30m程度の規模の古墳で、その年代も6世紀後半から7世紀前半の間に限られているようである。3号墳は直径14mの円墳で、出土土器からみた時期

は7世紀前半であることから、象嵌文様のある円頭柄頭金具を出土した古墳の一般的な例にあてはまる。3号墳出土の柄頭金具(31)には丁寧な火焰状文と渦文が施されており、文様の省略化は進んでいない。丁寧な文様をもつ円頭柄頭金具の多くは6世紀後半から末ごろのものであることから、3号墳の場合も7世紀初頭あたりの時期を考えてもよさそうである。これは土器からみた3号墳の時期と一致する。

新納泉氏によると^⑥、装飾付大刀を出土する小規模な古墳について、「群集墳ではその中心的な古墳であることが多い。そしてその分布の密度は、ふつう一郡に数基程度であり、10基をこえるような地域は少ない。」としている。垣内田3号墳の場合は墳丘規模、玄室床面積等それほど際立った大きさをもっているわけではないが、相伴遺物に馬具や銀製空玉など他の古墳にみられないものがある(ただし、これらの遺物は全てが装飾付大刀と同時期に副葬されたとは限らない)点で、垣内田古墳群中では特殊であるといえる。

2. 主体部

(1) 横穴式石室

垣内田古墳群では、検出された13基の古墳の中で11基が横穴式石室を主体部とする。この11基の横穴式石室は、形態の特徴から大きくAタイプ・Bタイプ・Cタイプの3つのタイプに分けることができる。ただし、12号墳については石室の破壊があまりにも激しいためよくわからない。

Aタイプの石室としたのは7号墳・8号墳・13号墳の石室である。玄室の幅は1.1m～1.4mでBタイプと変わらないが、長さが4.3m～5mと、玄室の平面形はかなり細長いものとなる。その一方、羨道はきわめて短く、8号墳・13号墳では2m程度、7号墳ではその存在すら疑われる程度である。また、羨道から墳丘外に向かって墓道と思われる幅の狭い素掘りの溝がのびていることも共通している。8号墳・13号墳は石室の石材が全く残っていないが、かろうじて残っている7号墳の基底石をみると奥壁部分を含めて全て横置きで、長さ40cm～50cm、高さ30cm～40cmと、1号墳～6号墳より小さめの石材を使用している。3基とも右片袖と思われるが、小規模

な袖で不明瞭である。しかし、石室掘形は明瞭な右片袖状を示している。

羨道部が未発達で、羨道部の全面に墓道もしくは墓道状の溝がみられるというAタイプの石室の特徴は、初期横穴式石室^⑦の特徴に通じるところがある。初期横穴式石室の特徴としては、他に玄室部床面と羨道部床面との段差、框石の存在、羨道内の閉塞などがあげられるが、垣内田古墳群の場合は石室の残りが悪く、石室床面においても検出が困難であったため、それらの特徴がどの程度存在していたのか不明である。ただし、7号墳の玄門部にある横長の石を框石の形骸化したものと考えられることはできる。

垣内田古墳群の周囲にある古い時期の石室をみると、6世紀前半の瑞巖寺6号墳^⑧(岩内町)・天神山1号墳^⑨(岩内町)、6世紀中頃の川原表3号墳・4号墳・5号墳・9号墳・11号墳^⑩(岡本町)がある。川原表古墳群の5基は全く羨道部をもたず、竪穴式石室と呼ぶべき構造であるが、瑞巖寺6号墳・天神山1号墳は右片袖の石室形態をしている。瑞巖寺6号墳と天神山1号墳の石室はともに完全には残っていないため、比較検討する材料は欠けるが、玄室は方形、羨道は玄門近くまで閉塞、基底石は全て横積みで玄門立柱石がみられないなどの類似点がみられる。天神山1号墳では框石が置かれ、そこを境に床面に段差がみられる。垣内田古墳群のAタイプの石室は瑞巖寺6号墳・天神山1号墳の石室に近いもので、垣内田古墳群の形成時期は瑞巖寺古墳群や天神山古墳群より遅れるが、これらの古墳群と同じ系統に属する集団により築かれ始めたと考えられる。

Bタイプの石室としたのは1号墳・3号墳・4号墳・6号墳の石室である。2号墳・5号墳の石室もBタイプであろうと思われる。Bタイプの石室は、玄室の幅が1.0m～1.4m、長さが3.5m～3.9mで細長いものであるが、Aタイプほどではない。袖の規模は小さいが明らかに右片袖である。羨道の全長がわかる古墳は少ないが、玄室長とあまりかわらず、3号墳・4号墳は玄室長をしのいでいる。基底石はAタイプの石室のものより大きい石が使用されており、原則として側壁部分が横置き、奥壁部分は縦置きである。ただし、6号墳のみは側壁も縦置きされている。

Bタイプの石室は詳しくみても、さらに3つのタイプに分けることができる。それをB-1タイプ・B-2タイプ・B-3タイプとする。B-1タイプとするのは3号墳・4号墳の石室で、玄門立柱石が両側壁にあり、奥壁の基底石が2個でその高さは側壁2段分という特徴をもつ。石室掘形が長方形状であることや、羨道入口から外護列石がのびることなどもその特徴に加えることができる。2号墳の石室は奥壁部分しか残っていないが、B-1タイプのものと思われる。B-3タイプとするのは1号墳の石室で、玄門立柱石が右袖部分のみ、奥壁の基底石は3個でその高さが側壁1段分、石室掘形は長台形状という特徴をもつ。5号墳の石室は羨道部分が消滅しており、玄門立柱石の有無も不明であるが、奥壁基底石や石室掘形をみるとB-3タイプに入れることができる。B-2タイプとするのは6号墳のみである。このタイプはB-1タイプとB-3タイプの特徴がいりまじったもので、玄門立柱石は両側壁にあり、奥壁の基底石は2個であるが高さは側壁1段分である。石室掘形は長台形状で、羨道入口は外護列石に続くと思われるような開き方をしている。この3つのタイプは、石室掘形の形態や基底石の用い方など、石室を築く初期の工程から異なっており、単なる偶然的な変異ではないと思われる。

Bタイプの石室は出土遺物からみると7世紀初頭から前半のもので、Aタイプの石室の次の時期に置くことができる。B-1・B-2・B-3の3つに分けたそれぞれのタイプは時期的な差であるのか、古墳を築いた集団の差であるのかは決めがたい。

Cタイプの石室としたのは10号墳の石室である。10号墳の石室は、無袖に近い右片袖あるいは両袖としたように袖部分が不明瞭で、玄室部分と羨道部分は敷石によってようやく区別できる程度である。玄室部分の基底石は小さく、全て横置きされるが、羨道部分の基底石は玄室部分のものよりやや大きめの石材が使用され、縦置きされているものもみられる。石室掘形は長台形状でB-2・B-3タイプの石室と同じである。Cタイプの石室の時期は10号墳出土の遺物から7世紀前半の新しいところに置ける。

(2) 木棺直葬

垣内田古墳群の中で木棺直葬の主体部が検出され

たのは11号墳のみである。9号墳は主体部が全く検出されなかったが、これも木棺直葬墳であったと思われる。11号墳は、10号墳とほぼ同時期に墳丘裾を接するように築かれながら墳丘や主体部の規模、副葬品の量など大きな差がみられる。このことから、11号墳の被葬者と10号墳の被葬者との地位・性格が大きく異なっていたことがうかがわれる^⑪。

3. 墳形と墳丘規模

2号墳・12号墳は墳形や墳丘規模が全く不明であることから、この2基を除外した11基の古墳についてみてみることにする。

(1) 墳形

10号墳を除く全ての古墳が円墳である。ただし、八角墳とした10号墳においても、はたして八角を意図して築かれたものかどうか疑問である。3号墳・4号墳・5号墳でも墳丘裾にコーナーと思われる箇所がみられることから、7世紀初頭に円墳を築く一つの方法としてこのような工法が取り入れられたと考えた方がよいのかもしれない^⑫。

(2) 墳丘規模

垣内田古墳群の場合、墳丘の高さがわかるものは全くなく、墳丘規模といっても平面でとらえられるのみである。

横穴式石室を主体部とする古墳では、墳丘規模に大きな差はない。そのなかで興味深いのは石室のタイプ分けと墳丘規模がほぼ対応することである。垣内田古墳群中で最も大きな規模をもつのがAタイプの石室を主体部とする8号墳と13号墳で、それぞれ直径が15m程ある。次いで大きな規模をもつのがB-1タイプの石室をもつ3号墳・4号墳で、両古墳とも直径約14mを測る。B-2タイプの石室をもつ6号墳とB-3タイプの石室をもつ1号墳・5号墳はいずれも径11m～12mでほぼ同じであるが、Cタイプの石室をもつ11号墳は径約13mである。このように、垣内田古墳群では、主体部の構造と墳丘規模とが密接な関係をもっていると思われる。

4. 立地

垣内田古墳群においては、主体部の構造と墳丘規模とが密接な関係をもっているのと同じように、主体

部の構造と古墳の立地とが密接な関係をもっている。つまり、Aタイプの石室をもつ7号墳・8号墳・13号墳は互いに距離をおいて丘陵尾根近くに築かれているのに対して、Bタイプの石室をもつ6基の古墳は互いに墳丘裾を接するようにして丘陵南斜面に並んでいる。Cタイプの石室をもつ10号墳も丘陵南斜面に築かれているが、Bタイプの石室をもつ古墳とはかなり離れており、あたかも木棺直葬墳の9号墳・11号墳を従えるような位置を占めている。このような占地のしかたは、各タイプの石室が築かれた時期の集団のありかたを反映しているものと思われる。

5. おわりに

垣内田古墳群においては、主体部構造・墳丘規模・立地の3点が密接に関係しており、それぞれが対応しながら時期的変化をしていくことが明らかになった。この変化は、単に古墳構築という技術的なものに原因が求められるのではなく、古墳群を造営した集団にもたらされた外的および内的な要因によるものであろう。長々と書いてきたわりに最後にならずいふんと言葉足らずの表現となったが、これ以上の追求は筆者の能力の限界をこえてしまうためここで終わりとする。
(前川嘉宏)

〔註〕

- ① 『松阪市史 第二巻 史料篇 考古』 松阪市 1978
- ② 金属製品の記述については、奈良大学助教授の西山要一氏の助言を得た。
- ③ 石器の記述については田村陽一氏、縄文土器の記述については奥 義次氏の助言を得た。
- ④ 中村 浩 『陶器Ⅲ』 叻大阪文化財センター 1978
- ⑤ 西山要一 「古墳時代の象嵌一刀装具について」『考古学雑誌』 第72巻 第1号 1986
- ⑥ 新納 泉 「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』 第30巻 第3号 1983
- ⑦ 県内の初期横穴式石室については浅生悦生氏が『中大谷13・16号墳発掘調査報告書』 安濃町遺跡調査会 1988 の中で集成している。
- ⑧ 『松阪市史 第二巻 史料篇 考古』 松阪市 1978
- ⑨ 本報告書のⅣで報告
- ⑩ 『川原表古墳群発掘調査概要』 松阪市教育委員会 1988
- ⑪ 竹内秀昭 「後期古墳の埋葬施設～伊勢地方の木棺直葬墳をめぐって～」『Mie history』 vol. 1 1990
- ⑫ 伊藤裕偉氏の教示による。

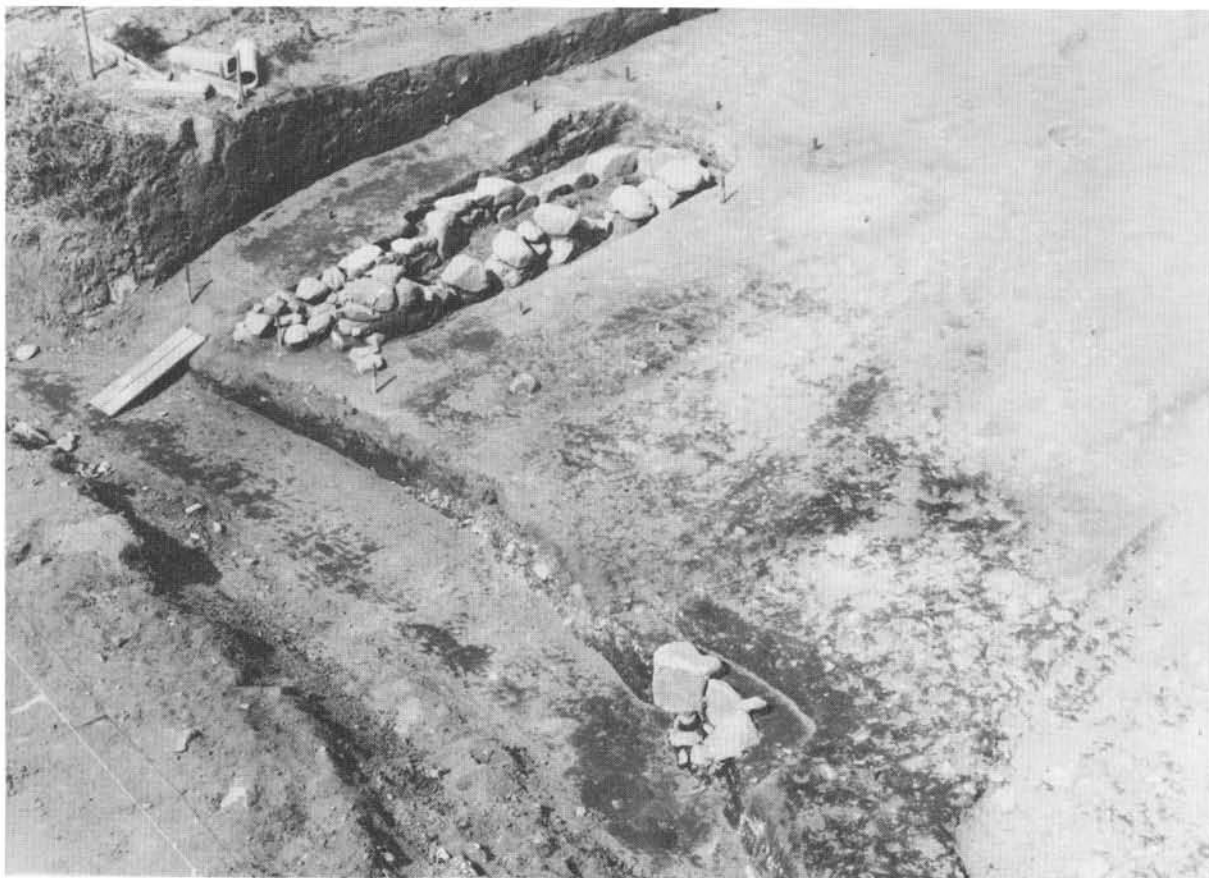


調査前遠景（南から）

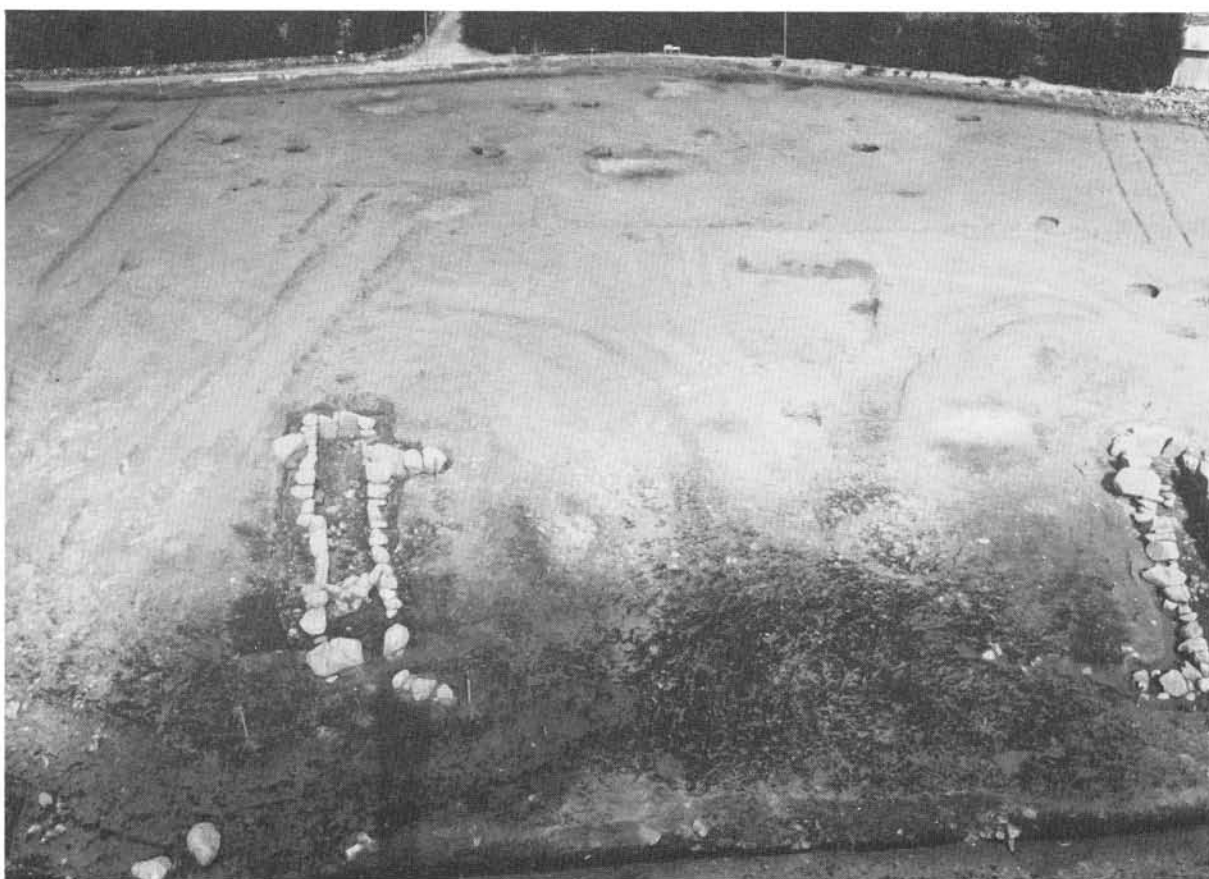


昭和60年度調査区全景（西から）

PL2



1・2号墳（南東から）



3・4号墳（南から）



4・5・6・7号墳（南西から）



3・4・5・6号墳（東から）

PL4



1・2・3・4・5・6・7・8・9号墳（北東から）



10・11号墳（西から）

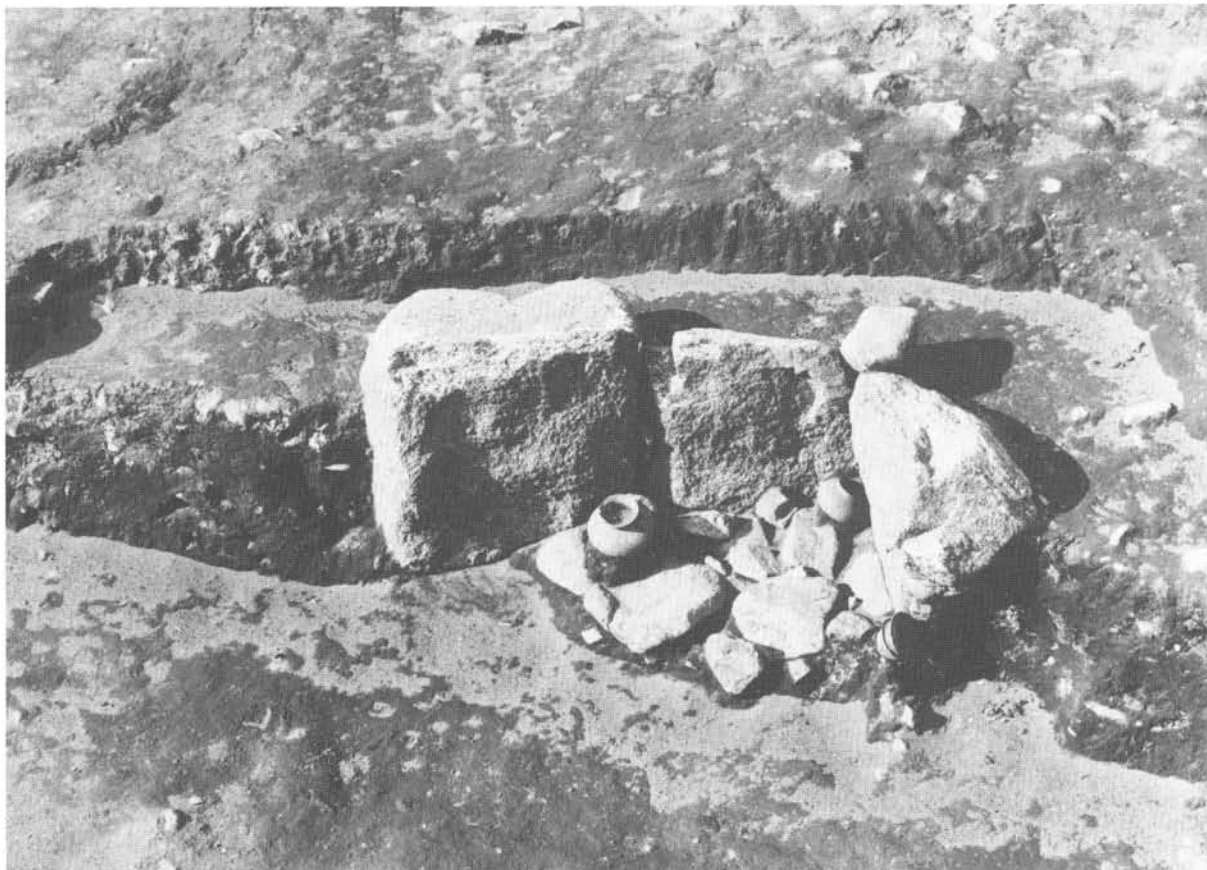


1号墳石室（南から）

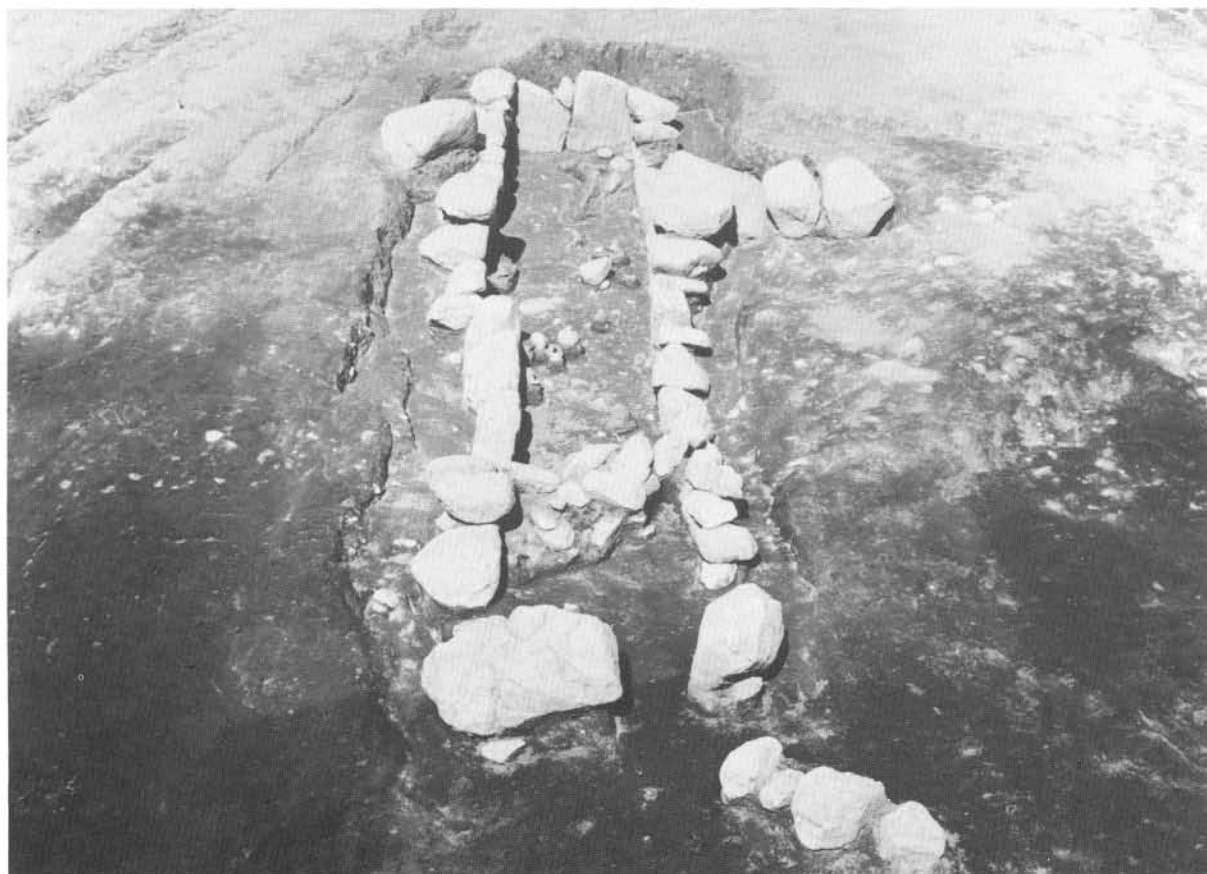


1号墳石室（東から）

PL6



2号墳石室（南から）



3号墳石室（南東から）



3号墳石室（南西から）



3号墳遺物出土状況（南東から）



3号墳遺物出土状況（南西から）

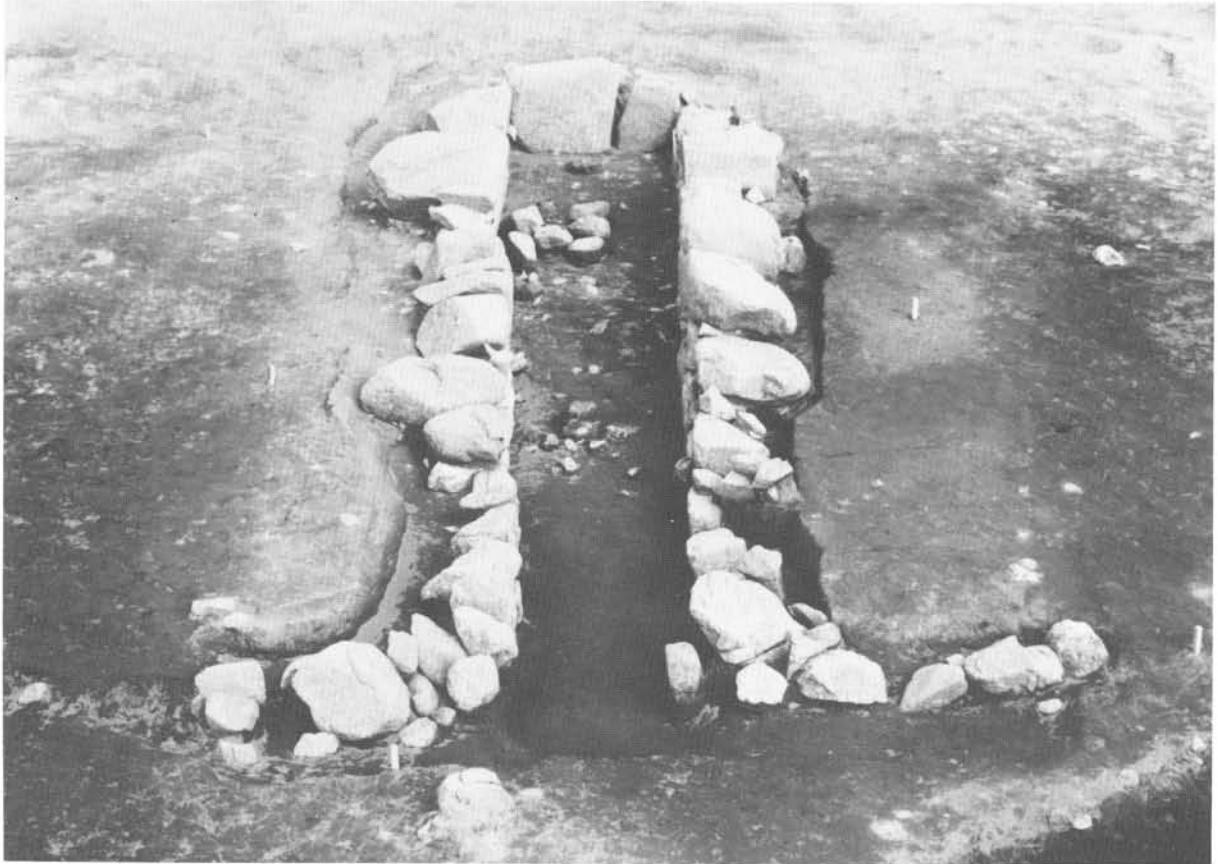


3号墳遺物出土状況（南西から）



3号墳遺物出土状況（北東から）

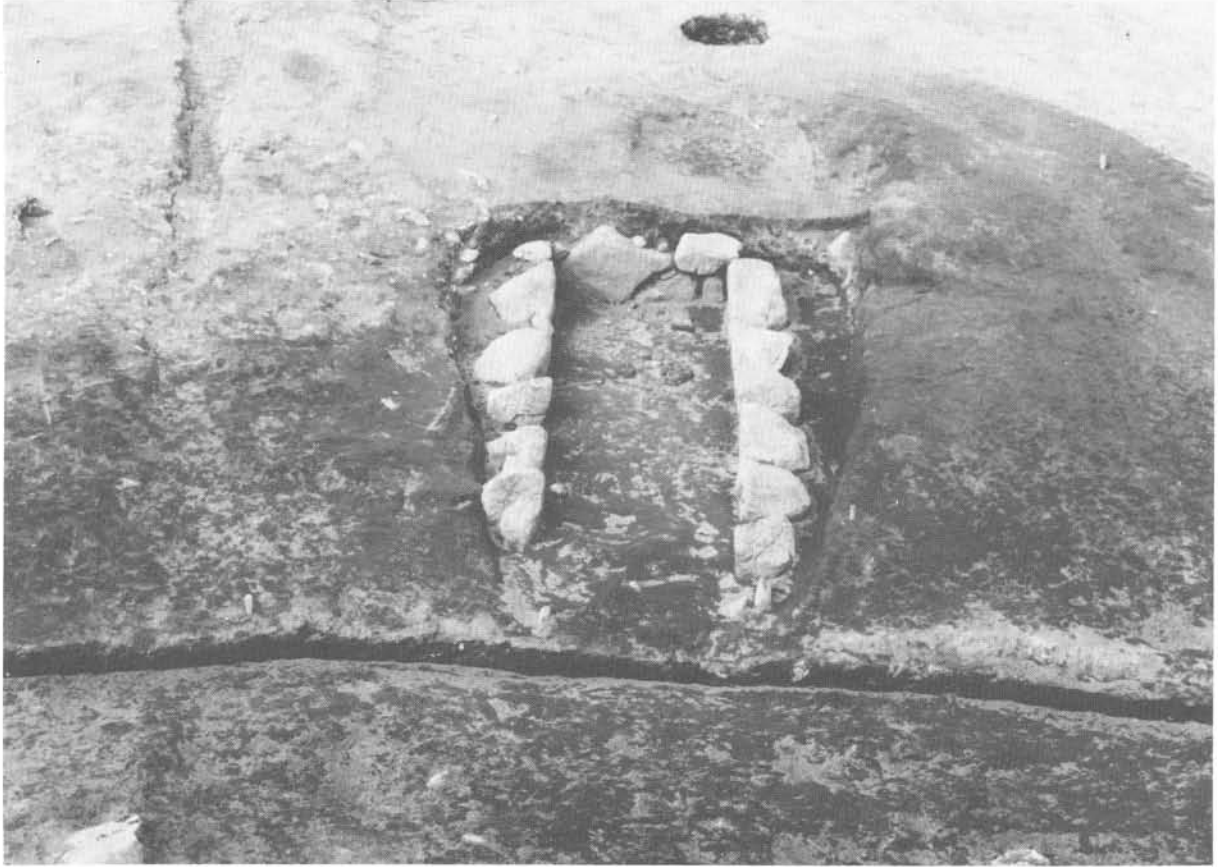
PL8



4号墳石室（南から）



4号墳石室（西から）

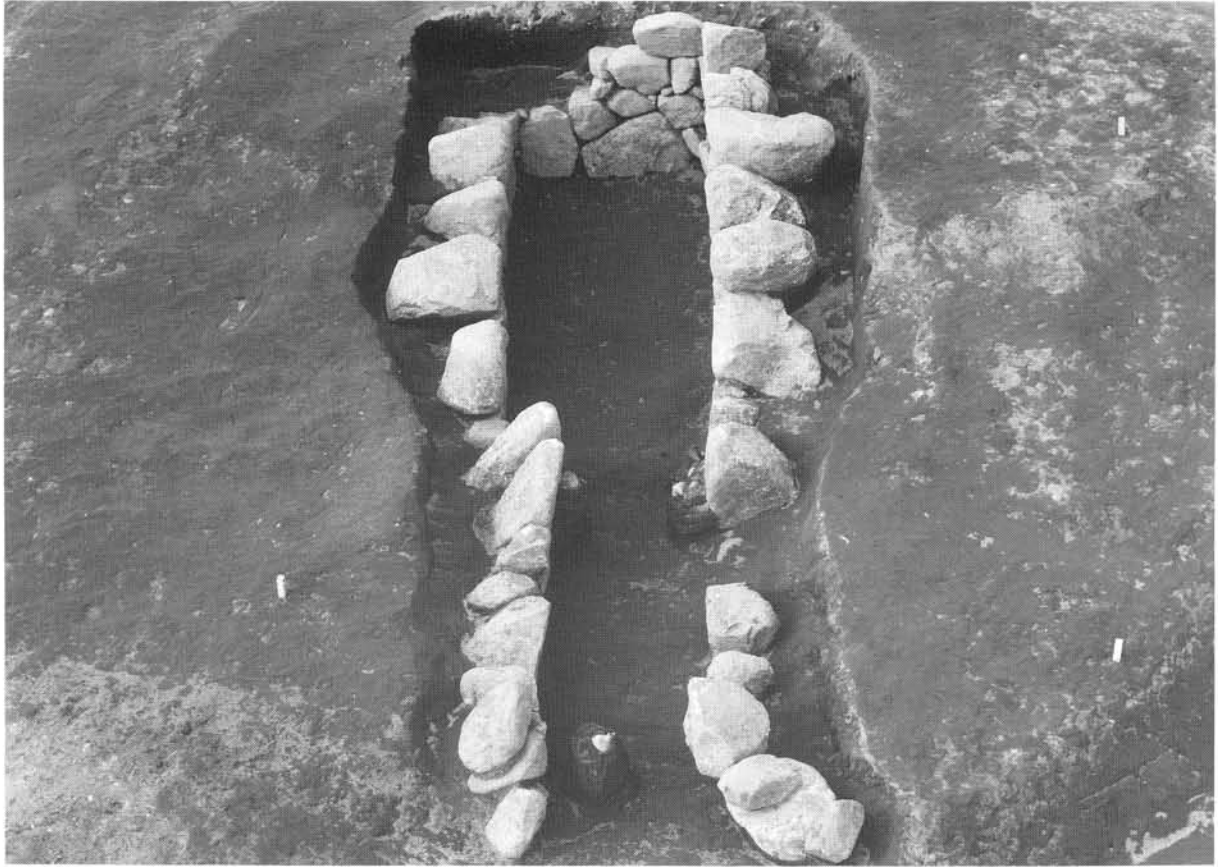


5号墳石室（南から）



5号墳石室（西から）

PL10



6号墳石室（南東から）



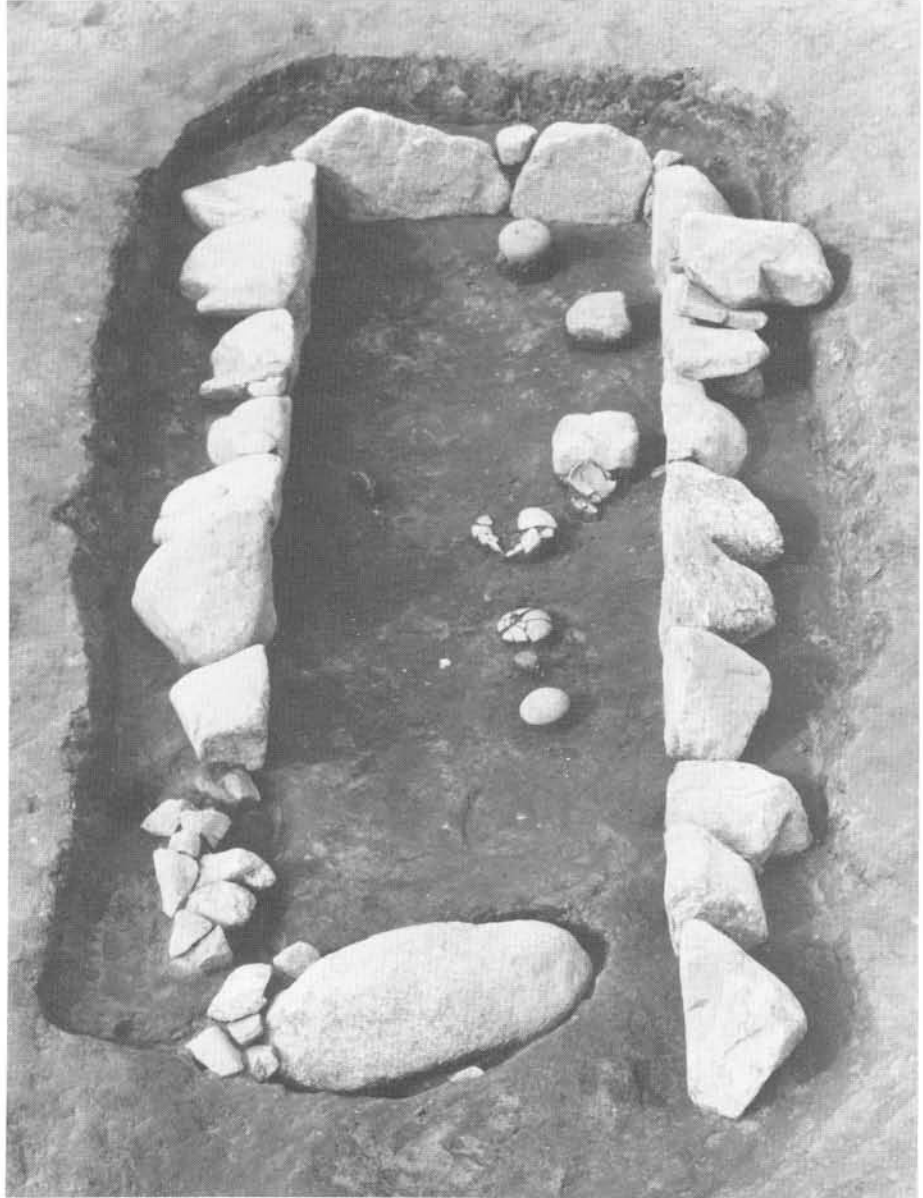
6号墳石室（南西から）



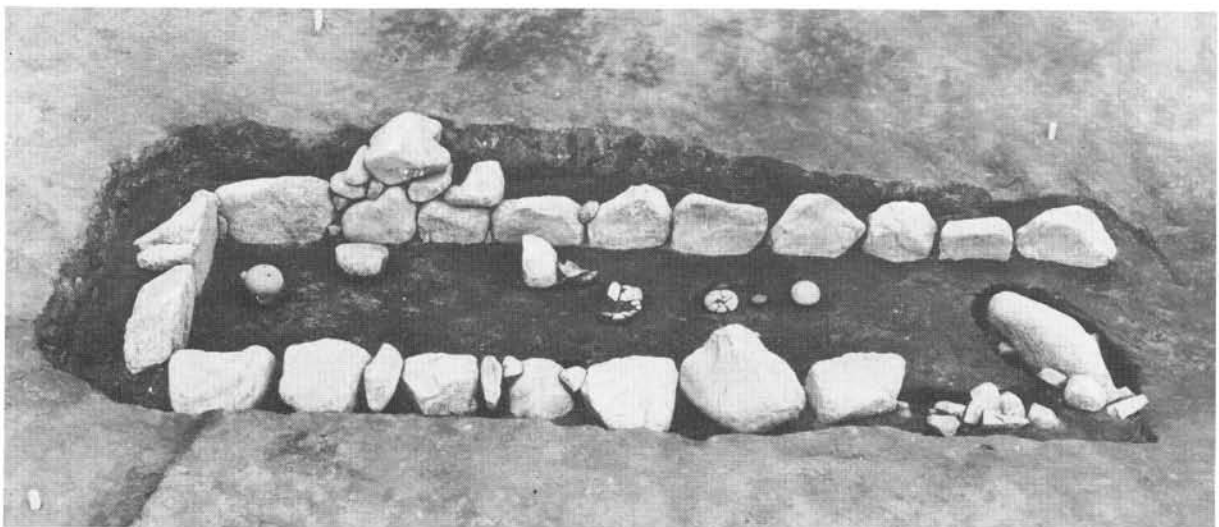
6号墳石室（北西から）



6号墳石室（南東から）



7号墳石室（南東から）



7号墳石室（南西から）



8号墳（南東から）



8号墳石室（南東から）

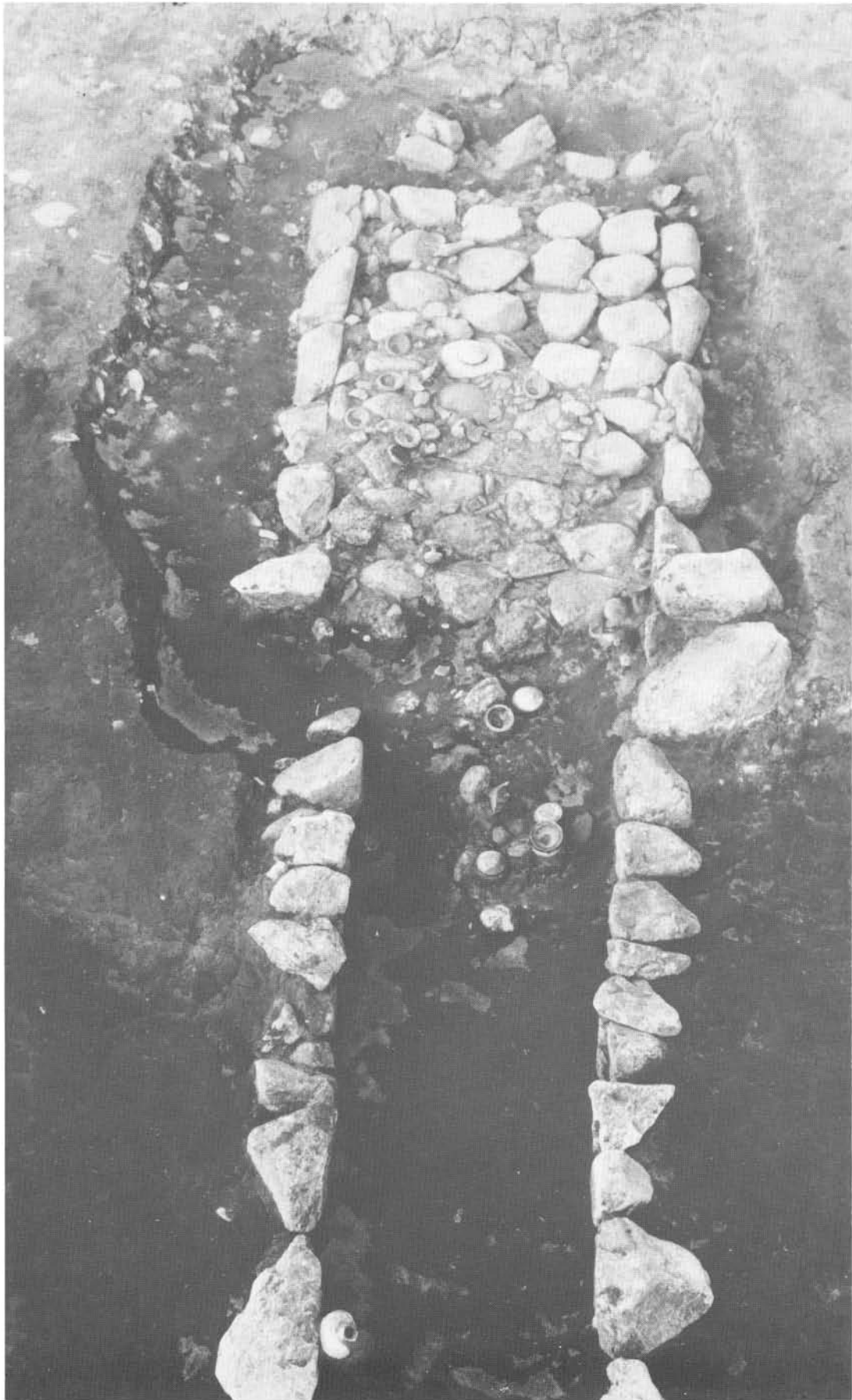
PL14



9号墳（西から）

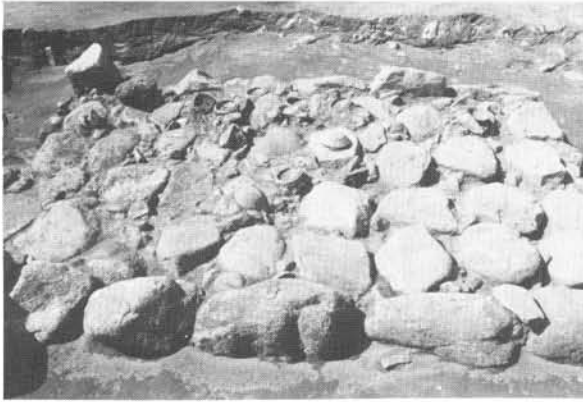


10号墳（南から）



10号墳石室（南から）

PL16



10号墳遺物出土状況（東から）



10号墳遺物出土状況（東から）



10号墳遺物出土状況（北から）



11号墳（南西から）



昭和61年度調査区全景（北東から）



12号墳石室（南から）

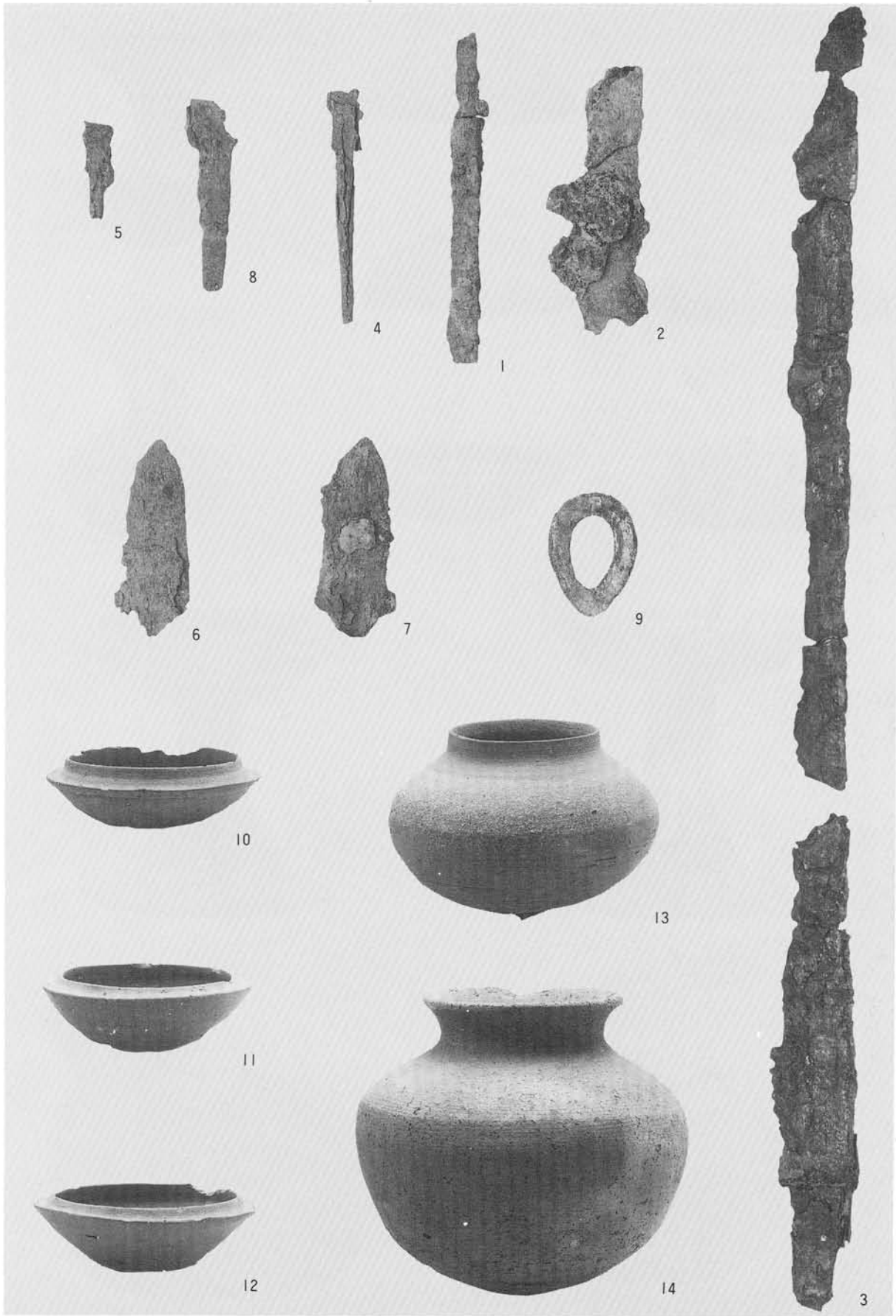
PL18



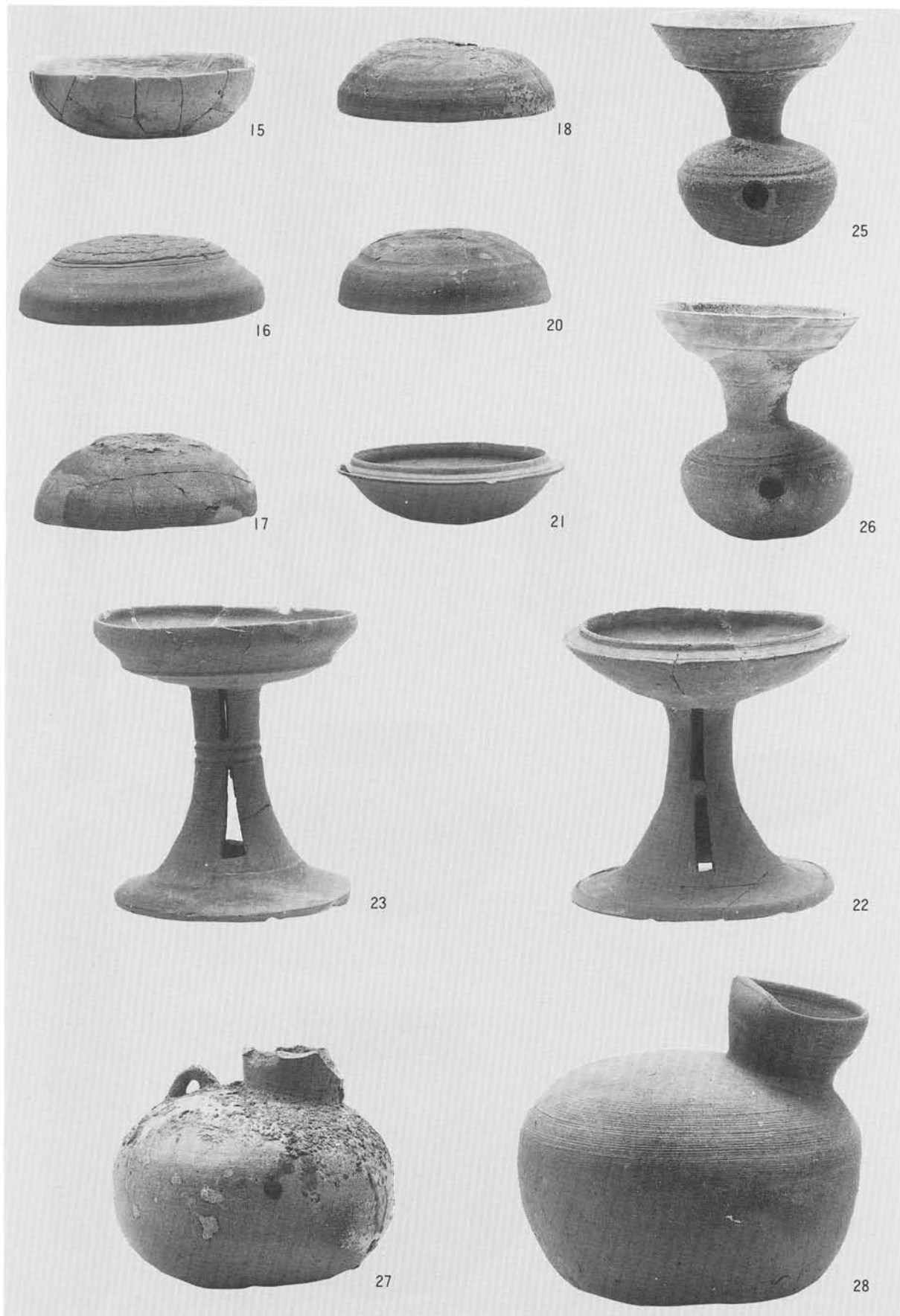
13号墳石室（南東から）



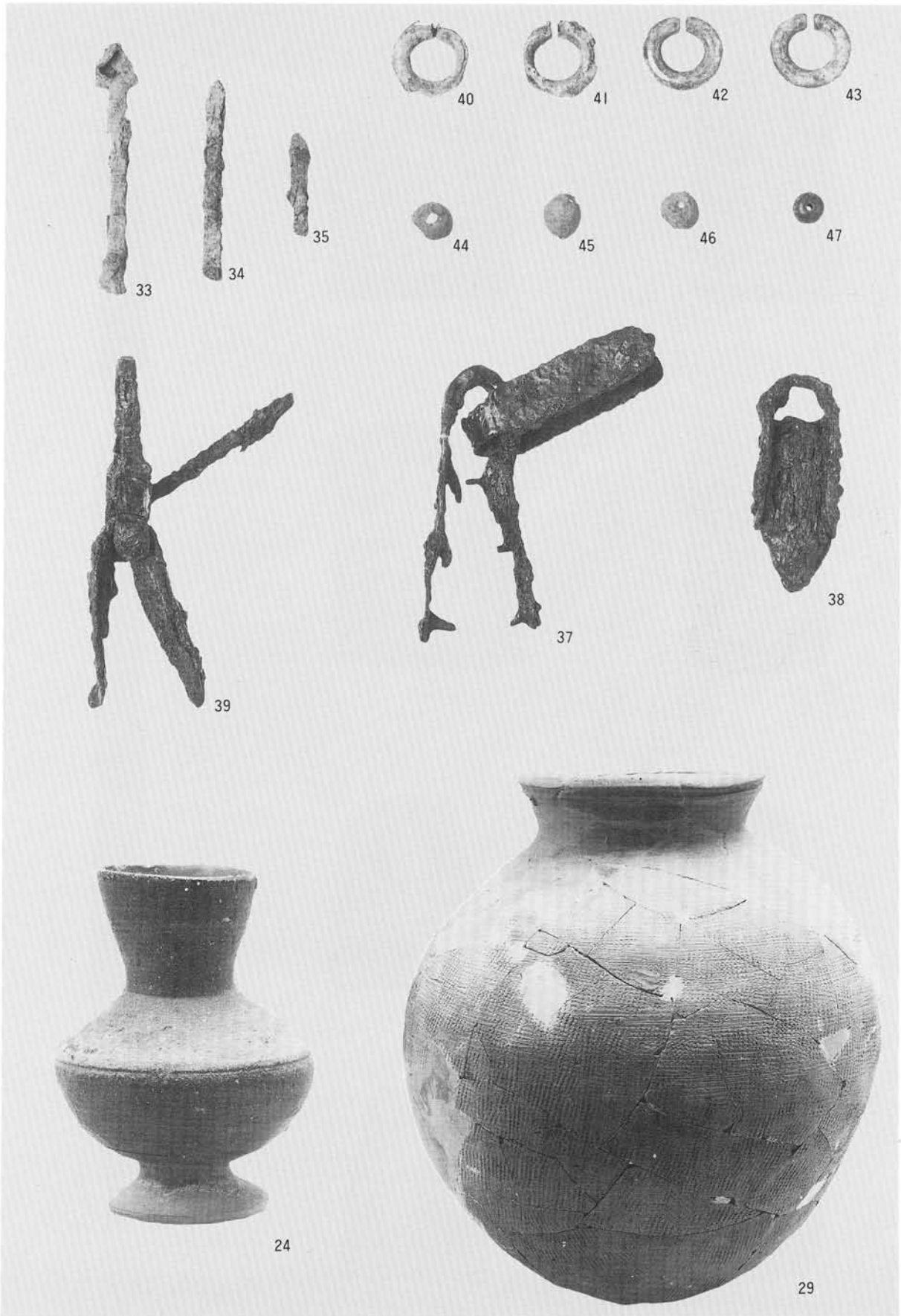
SX1（南から）



1号墳出土遺物 (1~9 = 1 : 2)、2号墳出土遺物 (10~14 = 1 : 3)



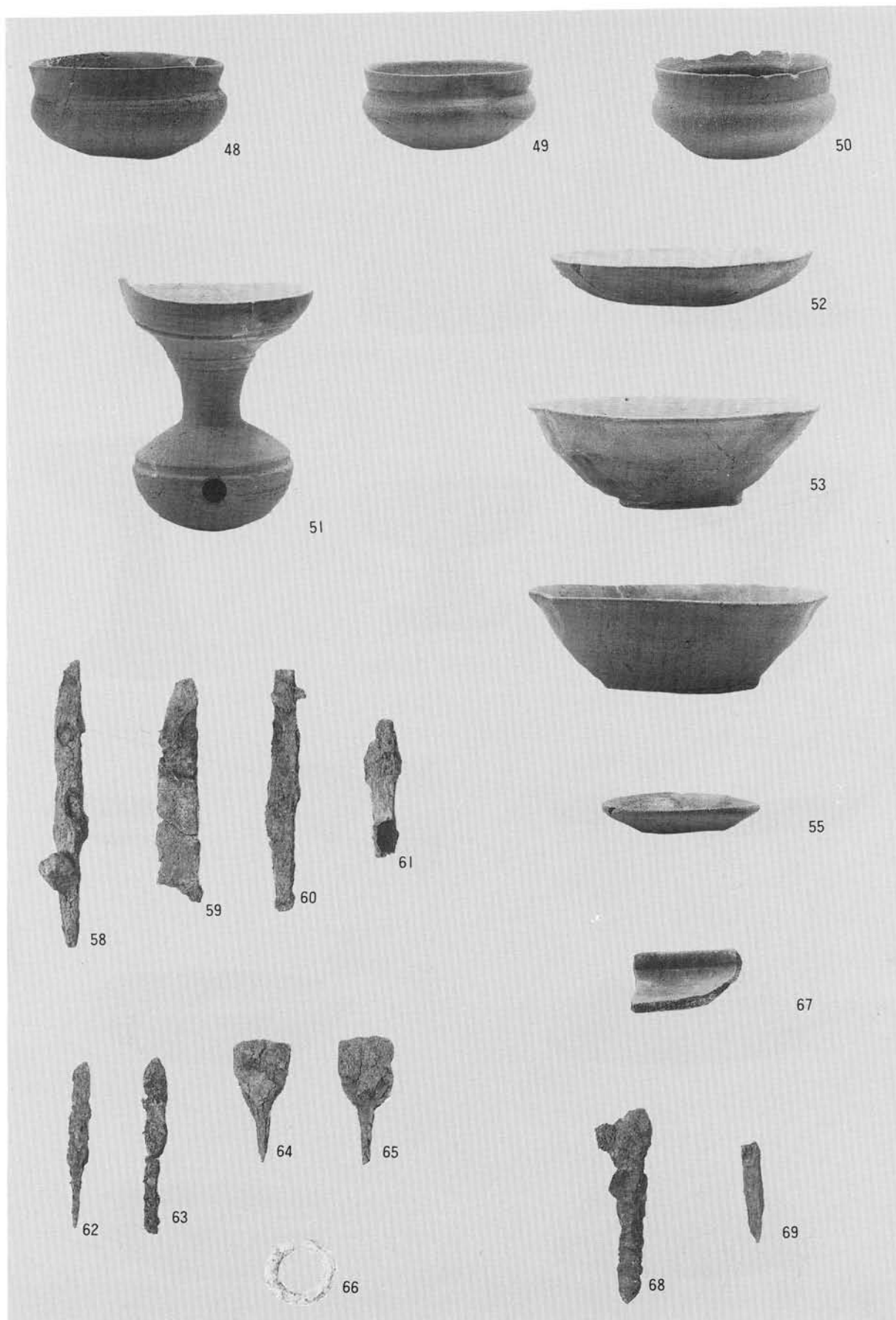
3号墳出土遺物(1:3)



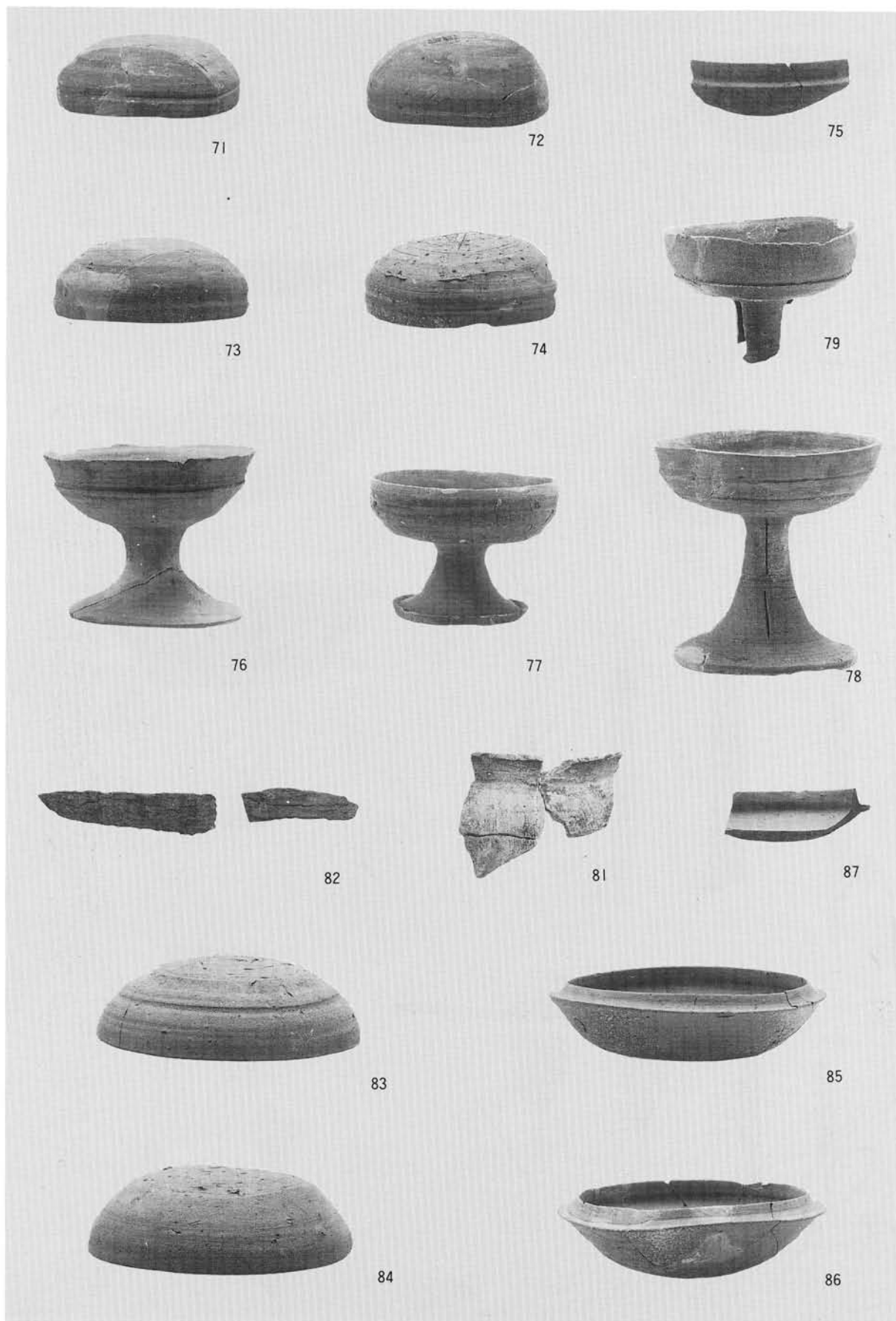
3号墳出土遺物（33~35・37~47=1：2、24=1：3、29=1：4）



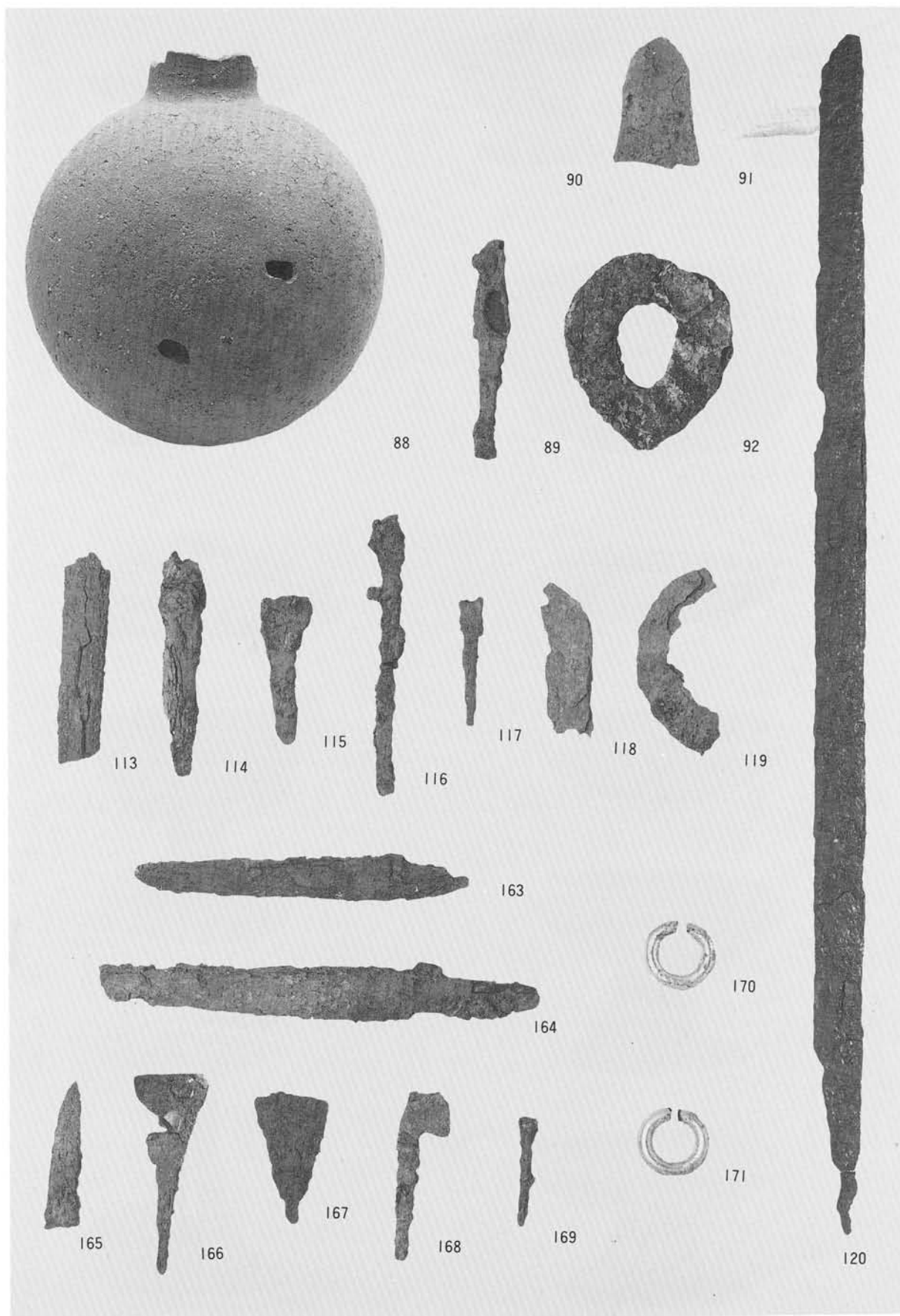
3号墳出土遺物 (30=1 : 3、31・32=1 : 1)



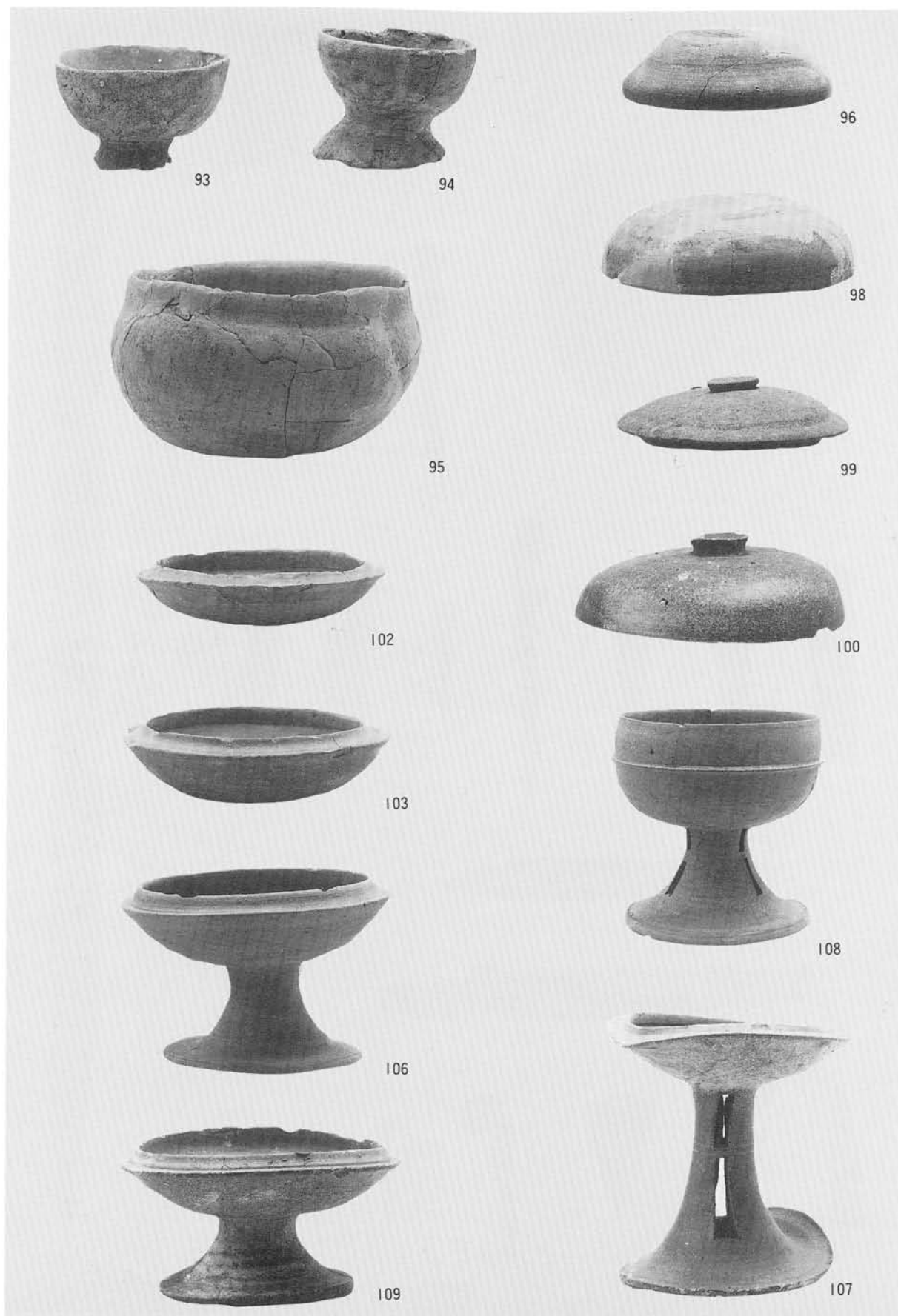
4号墳出土遺物(48~55=1:3、58~66=1:2) 5号墳出土遺物(67=1:3、68・69=1:2)



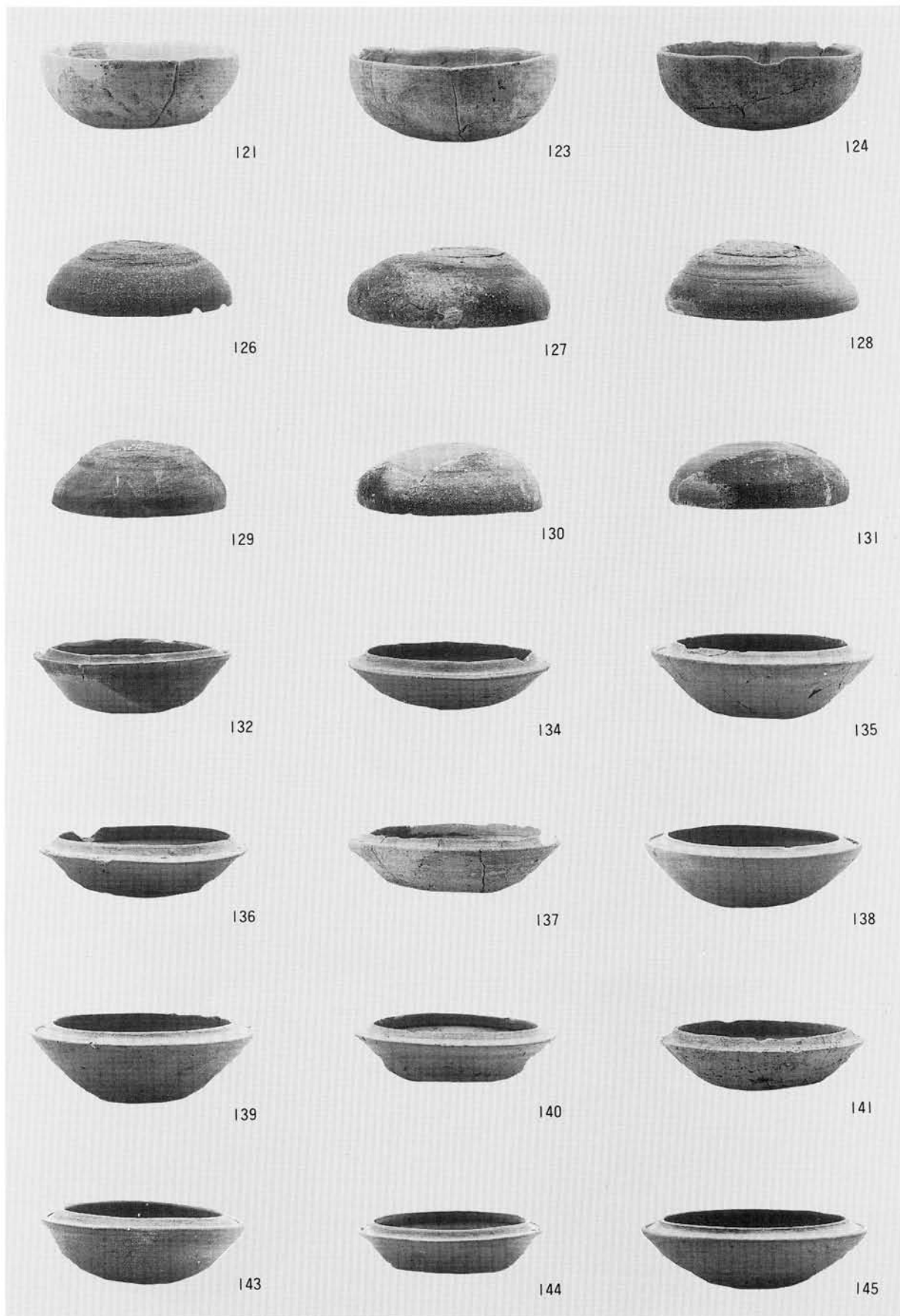
6号墳出土遺物 (71~79・81=1:3、82=1:2)、7号墳出土遺物 (83~87=1:3)



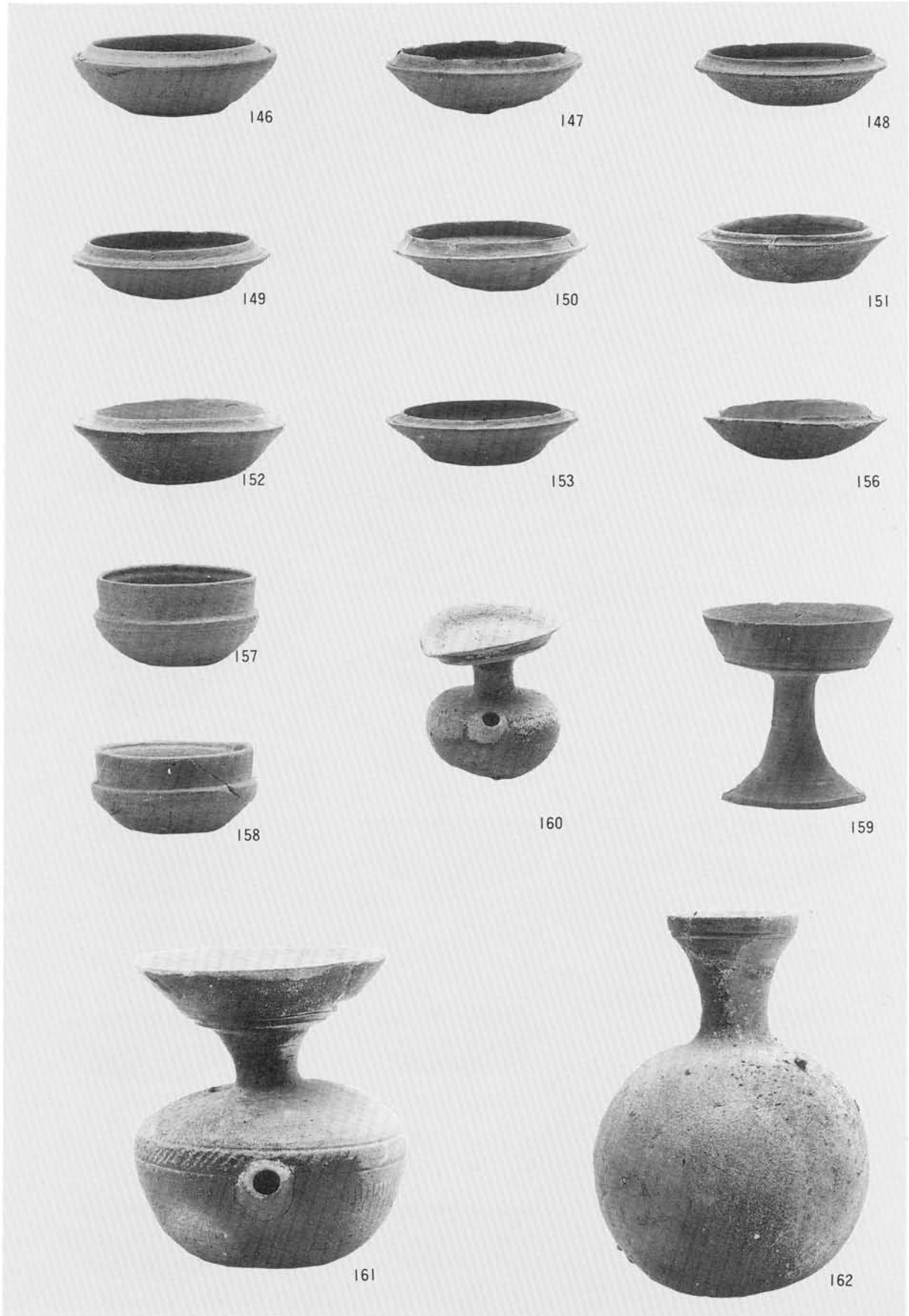
7号墳出土遺物 (88=1:3、89~92=1:2)、8号墳出土遺物 (113~119=1:2、120=1:4)
 10号墳出土遺物 (163~171=1:2)



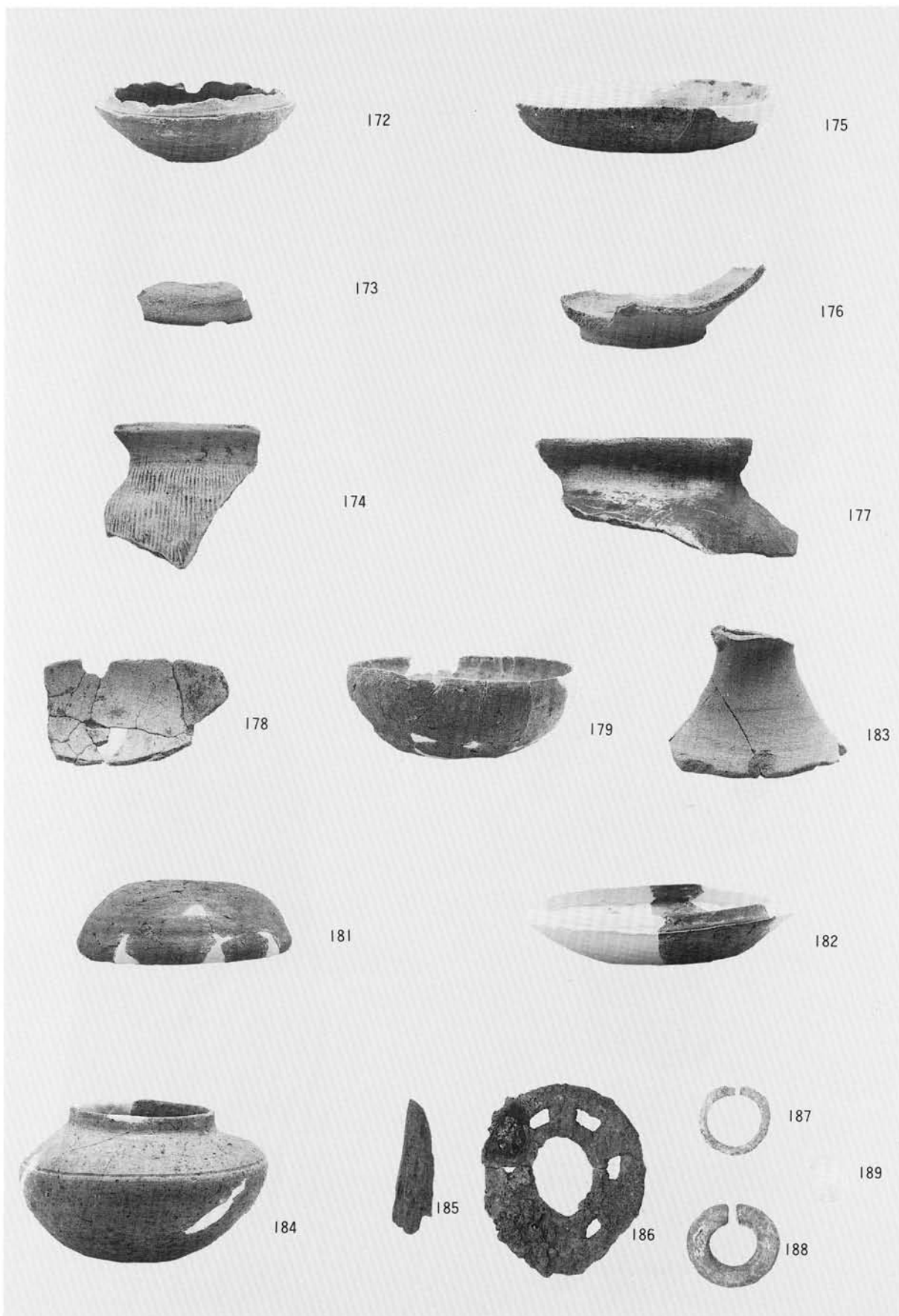
8号墳出土遺物（1：3）



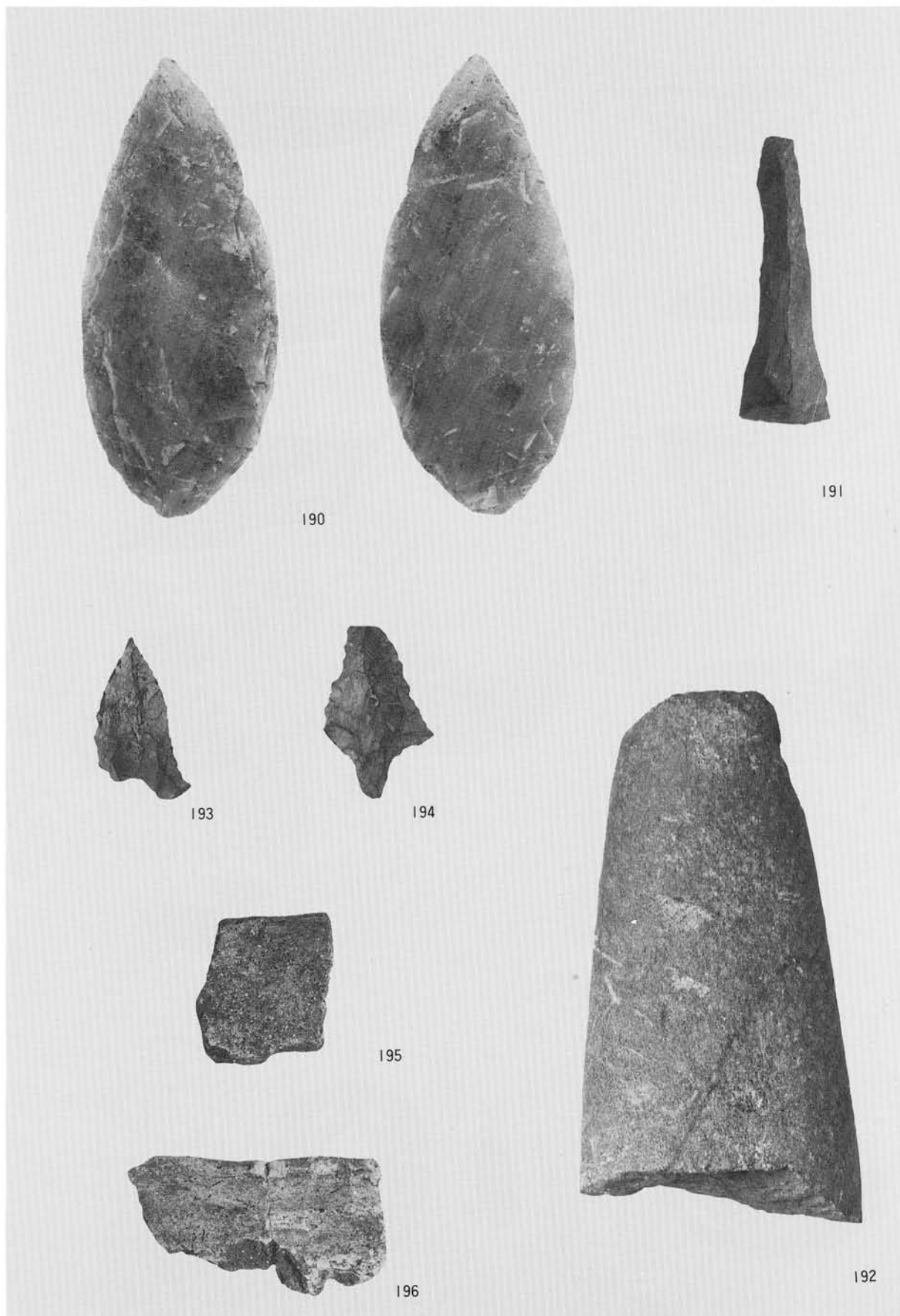
10号墳出土遺物（1：3）



10号墳出土遺物（1：3）



11号墳出土遺物 (172=1 : 3)、12号墳出土遺物 (173~177=1 : 3)
 13号墳出土遺物 (178・179・181~184=1 : 3、185~189=1 : 2)



その他の遺物 (190~194= 1 : 1、195・196= 1 : 2)

IV. 松阪市岩内町・伊勢寺町

天神山古墳群 (37)

1. はじめに

天神山古墳群は現行政区画上では、県道瑞巖寺・庭園線を挟んだ松阪市岩内町字向山と伊勢寺町字天神山にまたがったところに位置している。松阪市岩内集落の西端部に所在する名刹瑞巖寺を囲む鉢ヶ峰と観音岳からのびる尾根筋、山腹斜面には、推定墳も含めて17基余の横穴式石室を主体構成とする瑞巖寺古墳群の存在がよく知られていた。

瑞巖寺古墳群の多くが立地する観音岳から北東にのびる丘陵尾根から、さらに伊勢寺町北村集落へと東方に細長く続く丘陵支脈がみられるが、この支脈にもかつては横穴式石室を主体とする12基余の古墳群が存在したと推定されている。現状ではその支脈

の尾根筋に沿って先の県道が東西に走り、付近一帯はほぼ尾根先端にいたるまで開墾され、広く蜜柑園として土地利用されているところである。また、所所には石室材かとおもわれる散石と須恵器小片の散布がわずかに認められたものの、墳丘等は全く確認できない状況であった。

こうしたことより、当古墳群は当初の調査対象遺跡には入っていなかったが、日本道路公団との追加協議の結果、トレンチ調査から開始し引き続き本調査に移行したものである。本調査は昭和62年2月23日から同年3月13日まで実施し、その調査面積は約1,750㎡である。

2. 古墳群の概要

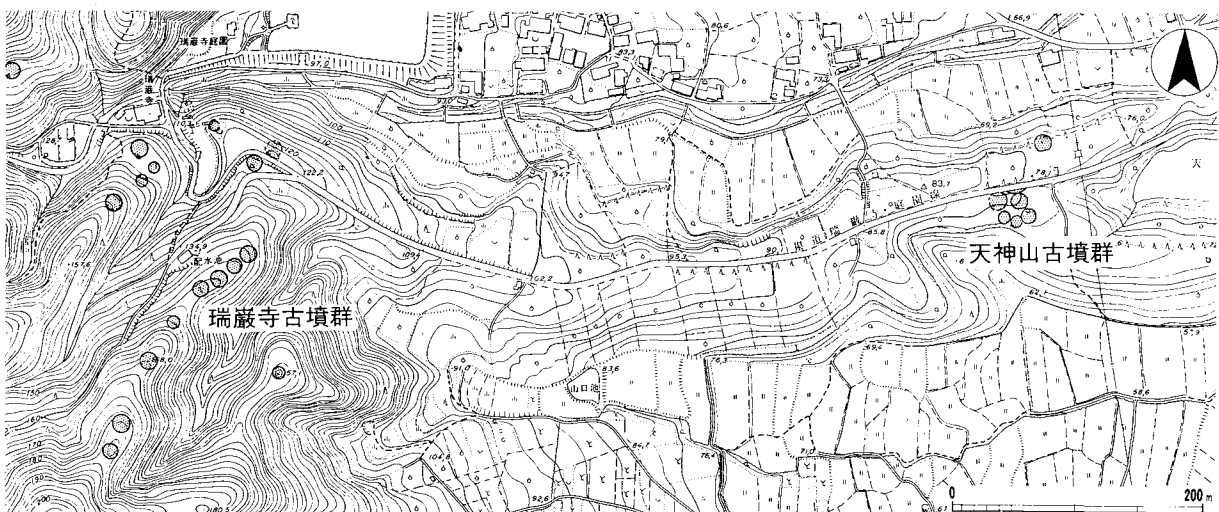
今回の調査で明らかになった古墳は周溝の一部と推定される不確かな2基をかぞえると計7基となる。いずれの古墳も既に開墾によって平坦に削平されており、当然のことながら盛土は認められなかった。要するに主体部も周溝もその痕跡を一部とどめる状態であり、推測の域をでない点も含まれるが、以下

ここに個々の概要を記したい。便宜上、調査区は県道を挟んで北をA区、南をB区と呼称した。

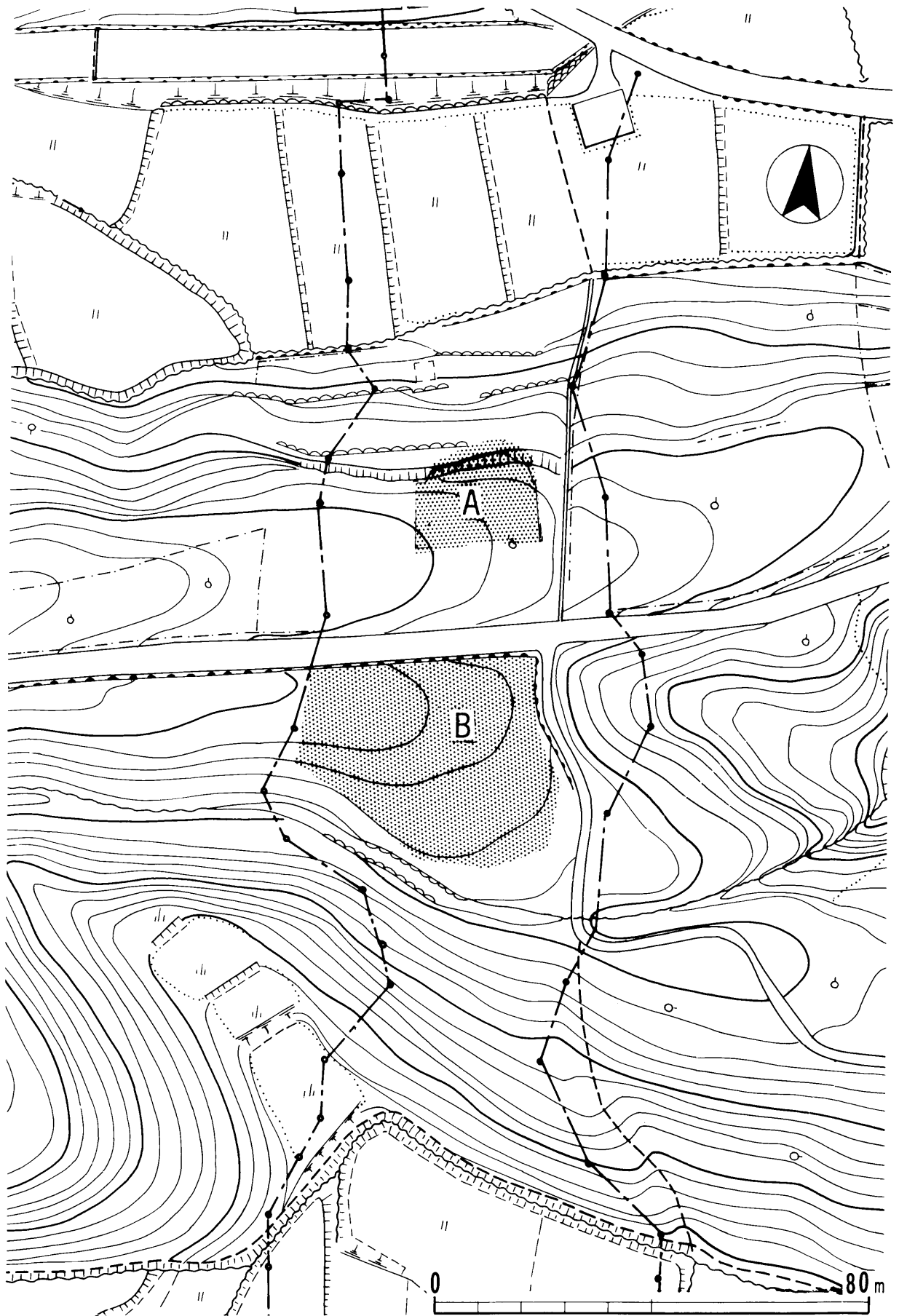
(1) 1号墳

A. 墳形

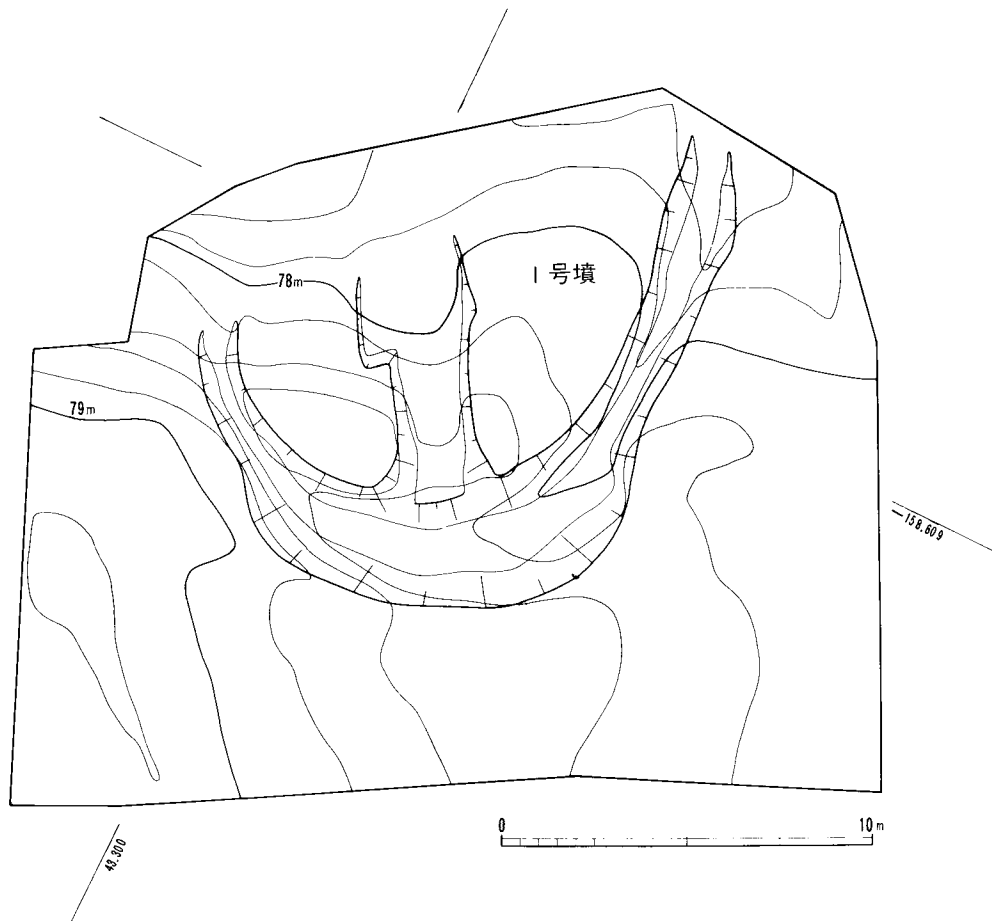
A区で検出された古墳で、南側に残る周溝から推定すると径約12mの円墳と考えられる。北側は既に



第50図 古墳群分布図 (1:6000)



第51図 発掘調査区位置図 (1 : 1,000)



第52図 A区・1号墳実測図（1：200）

土取りによって削平を受けており、周溝が全周するか否かは不明である。周溝は南側が深く、羨道との境の箇所では幅2.8m、深さ31cm余で、底は平坦である。

B. 埋葬施設

右片袖式の横穴石室で、羨道部と玄室の一部を、残す程度である。羨道部の石積みは2～3段残り、基底石には横長に大きめの石を据え置き、その上からは石を小口積みになっている。石の並びはわずかにハの字形に広がるが、概して直線的である。羨道部と玄室の境は縦長の框石で区切られ、玄門部を明確に意識している。羨道部は幅0.9m～1.0m、長さ3m余で、入口から玄門まで約30cmの比高差をもって傾斜して下がる。玄室は基底石とその抜き取り痕の一部が残っていたにとどまるが、玄室の幅は1.8mと推定できる。玄室と羨道の床面は玄門の境石を境にして約15cmの段差をもち、玄室側に下がる。石室堀形はほぼ石室の石の並びにそっている。

玄室部の南中央に一部10cm内外の川原石が残っており、玄室床面が石敷きであった可能性もある。

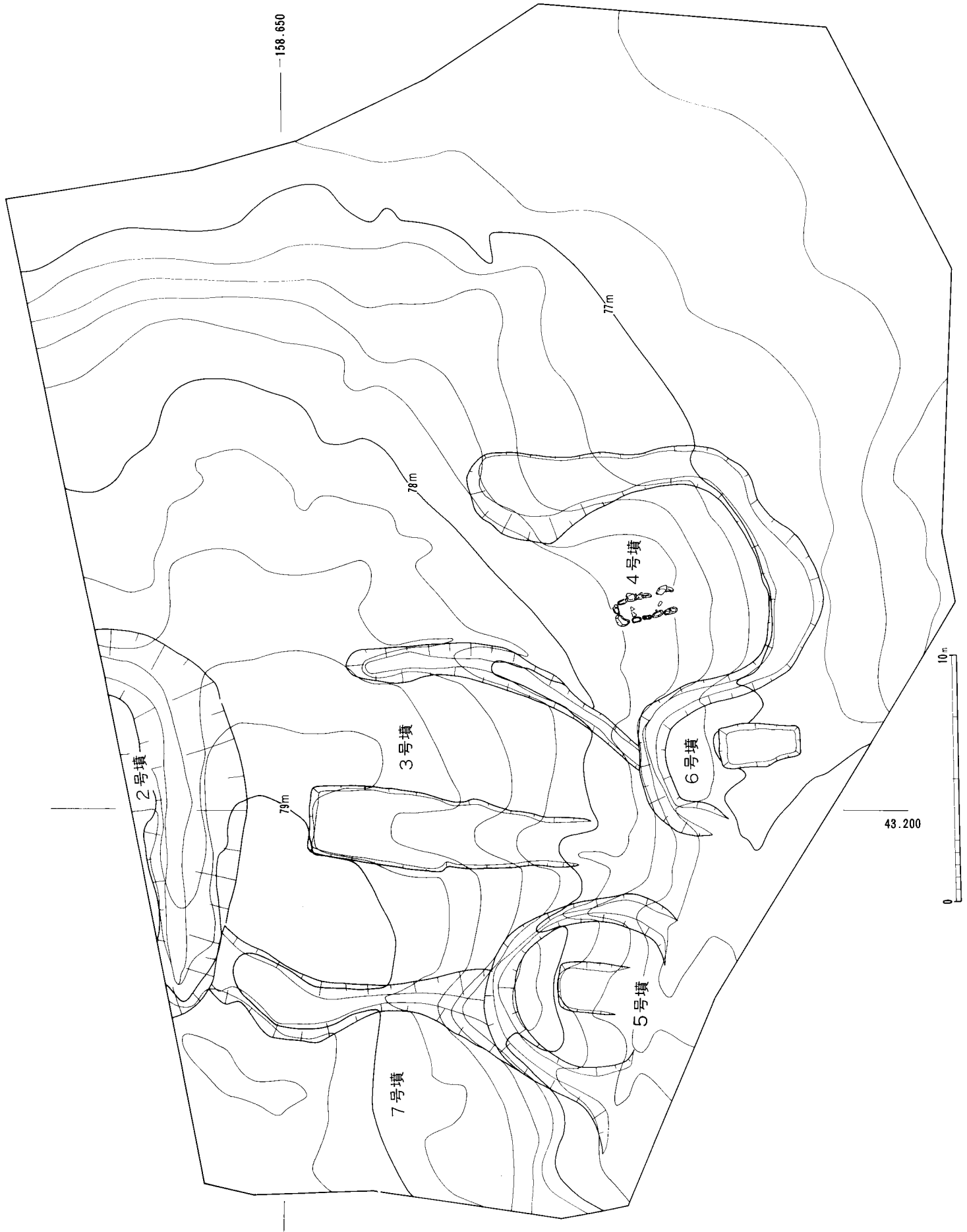
C. 閉塞石

玄門部の境石から約1m手前のところに閉塞のための石積みが見られた。その石積み状況は玄室寄りに横長の石を羨道にほぼ直角に配し、その上からは石の軸を羨道軸にあわせて乱積みした様相が窺える。

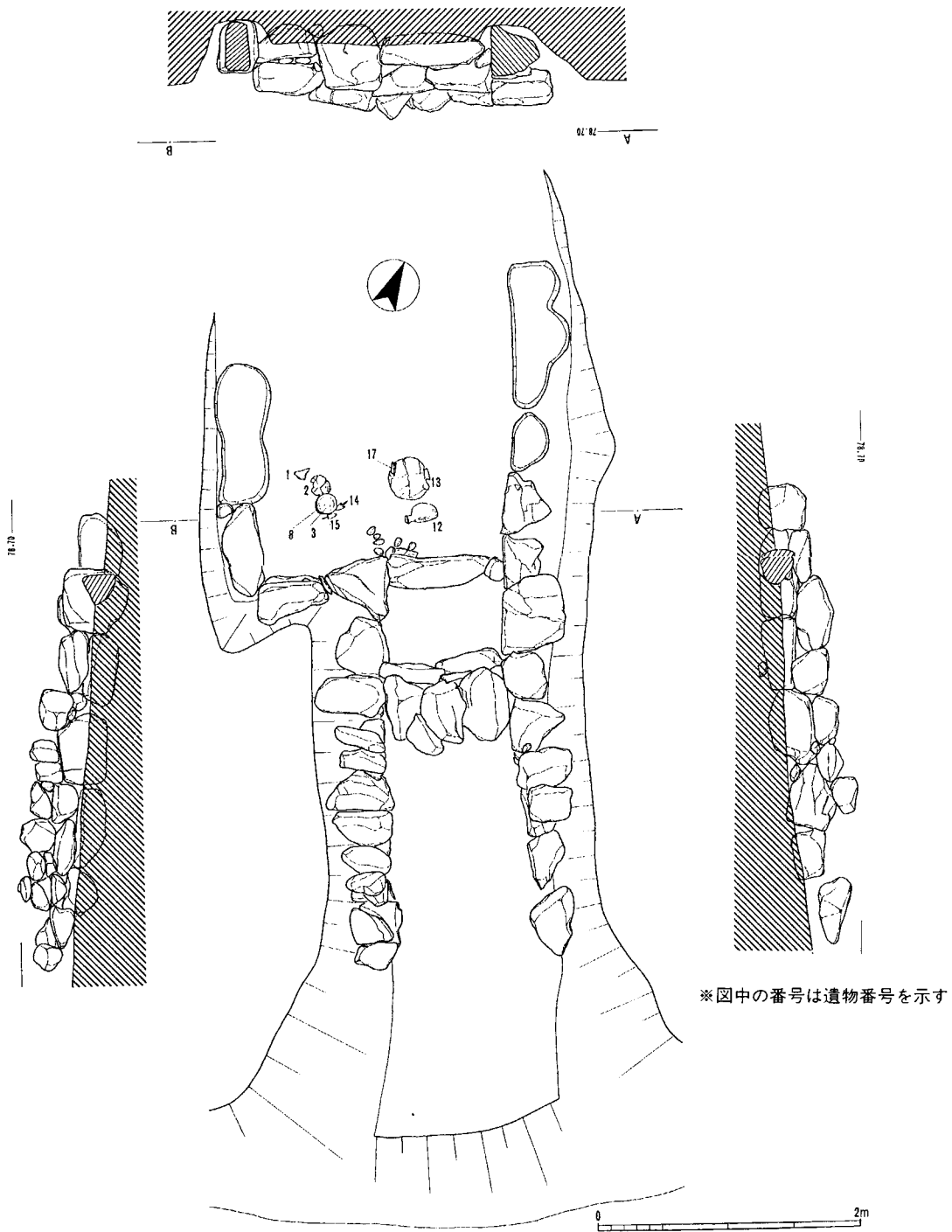
D. 遺物

遺物は玄室南寄りに残存しており、須恵器杯蓋（1～4）・杯身（5～10）・直口壺（11）・提瓶（12）と土師器鉢（13）の他、鉄製品としての鏃（14～16）、直刀片（17）がある。

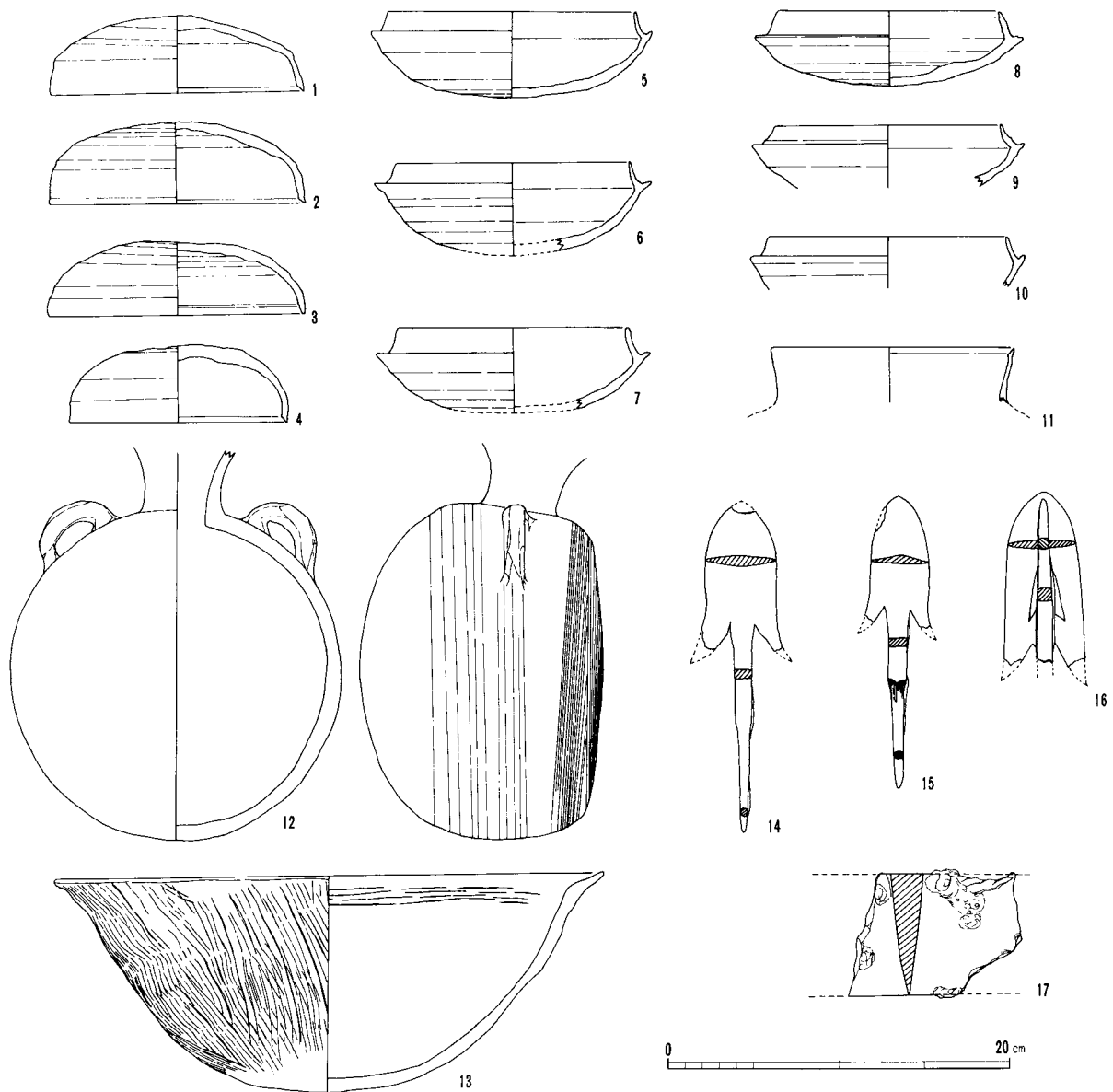
なお、（3）と（8）は杯蓋がセットとして重なって出土した。（13）の土師器鉢は口径32cm余で、外反する口縁部から体部はやや扁平な半球状をした形態で、胎土は砂粒を多く含み、色調は茶褐色を呈する。口縁部内面と外面全体には粗いハケメ調整がみられる。



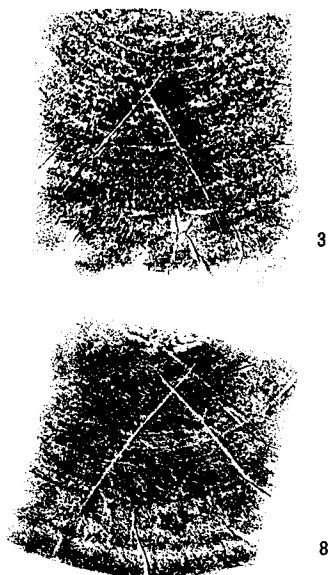
第53図 B区・古墳群（2～7号墳）調査後実測図（1：200）



第54図 1号墳実測図 (1:50)



第55図 1号墳出土遺物実測図（1：4）（14～17は1：2）



須恵器へら記号拓影（1：2）

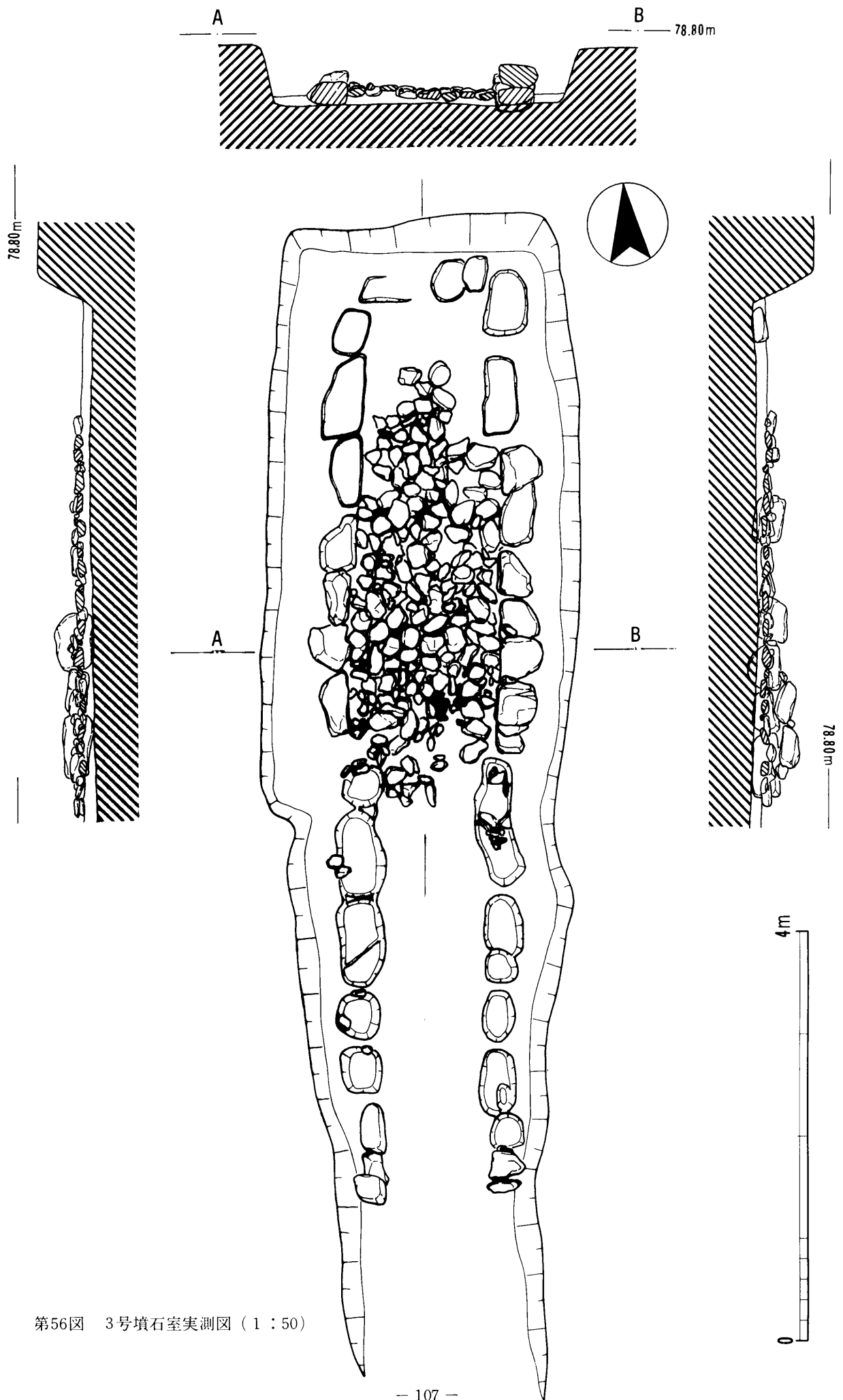
(2) 2号墳

東側の周溝の一部と考えられる溝を検出したが北半は3号墳と競合しており、南半は5号墳の周溝に切られている。周溝からは須恵器杯蓋（27・28）が出土している。（27）は周溝底にへばりついた状態で検出された。この2号墳の西発掘区際の南には石室の石材の一部とおもわれる転石も見られ、ここでは一応、須恵器杯蓋（27）の時期を時代の一点とする古墳（円墳）と推定した。

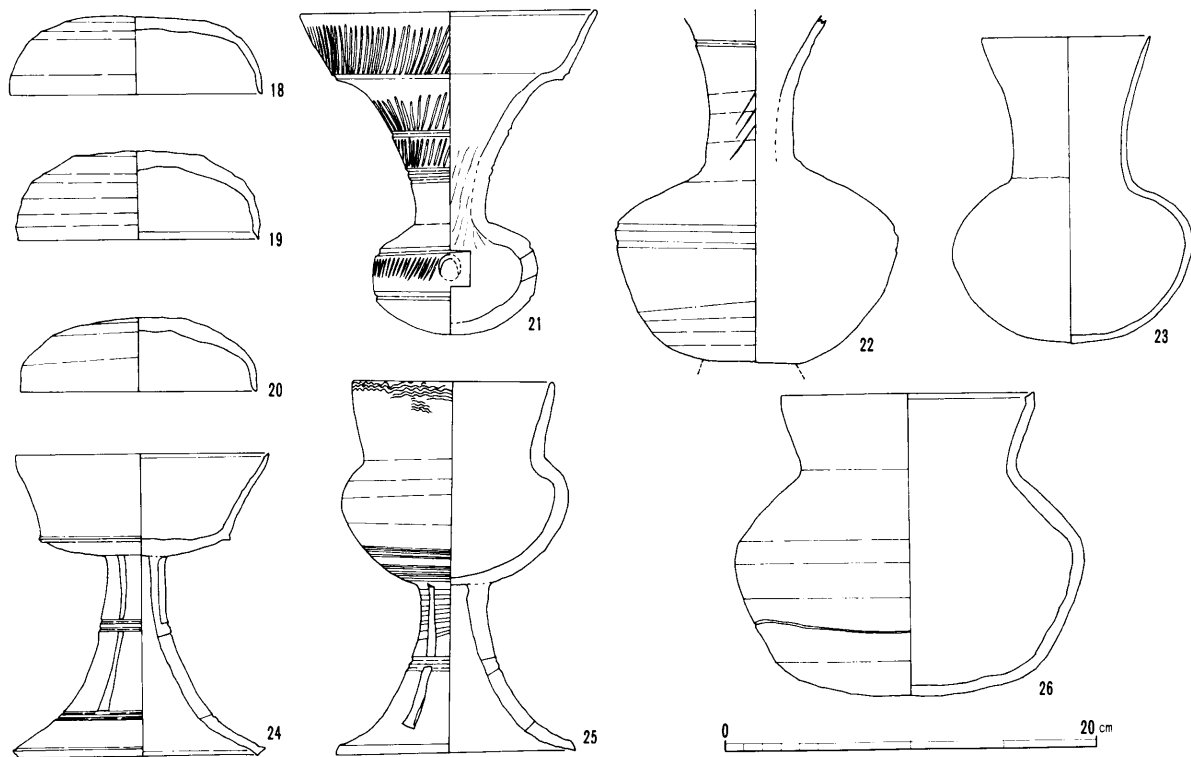
(3) 3号墳

A. 墳形

推定で、南北約18m、東西約15mの南北に長い楕円状の円墳と考えられる。東側周溝は6号墳の周溝によって切られている。また、西側周溝は2号と6



第56图 3号墳石室実測图 (1:50)



第57図 3号墳出土遺物実測図(1:4)

号の周溝によって切られている。東周溝は北半で途切れた形となっているが、特にB区の高い部分は開墾による削平も大きく、周溝は古墳背後に及んでいてもすでにカットされたとも考えられる。

B. 埋葬施設

両袖式の横穴式石室と推定される。玄室、羨道部とも残りが悪く、基底石の一部が認められる程度であった。また、羨道は石抜き取り跡を残す程度である。それより推し計ると、玄室幅1.46m、長さ4.4mで、羨道幅1.0m、長さ4.5mとなる。なお、玄室の床面には敷石が認められる。

石室の石積み状況は、基底石については石を横長に据えられ、2段目からの石は小口積みしている様子が窺える。石室の掘形は玄室部で幅2.8~3.2m前後、羨道部で2~2.7m前後で全長11.6mである。

C. 遺物

遺物(土器)はかなり攪乱した状況で出土しており、原位置を保っているとはおもえない。須恵器が主で杯蓋(18・19・20)・高杯(21)・台付壺(22・24)・直口壺(25・26)があり、土師器としては長頸壺(23)等が出土している。すべて玄室埋土からの出土である。

(4) 4号墳

A. 墳形

径約9m前後の円墳と考えられる。周溝は東と南に逆L字形にその痕跡がみられたが墓域を区画するという意味合いが強い溝かもしれない。当然のことながら盛土等はすでに削平されている。

B. 埋葬施設

横穴式石室の玄室の一部と考えられる基底石、抜き取り穴、敷石を検出した。基底石は奥壁と東側壁のごく一部の残存で、これより敢えて推定すると、玄室幅約75cm前後、長さ2.2m以上となる。玄室床面には敷石が認められる。石室掘形は確認できなかった。

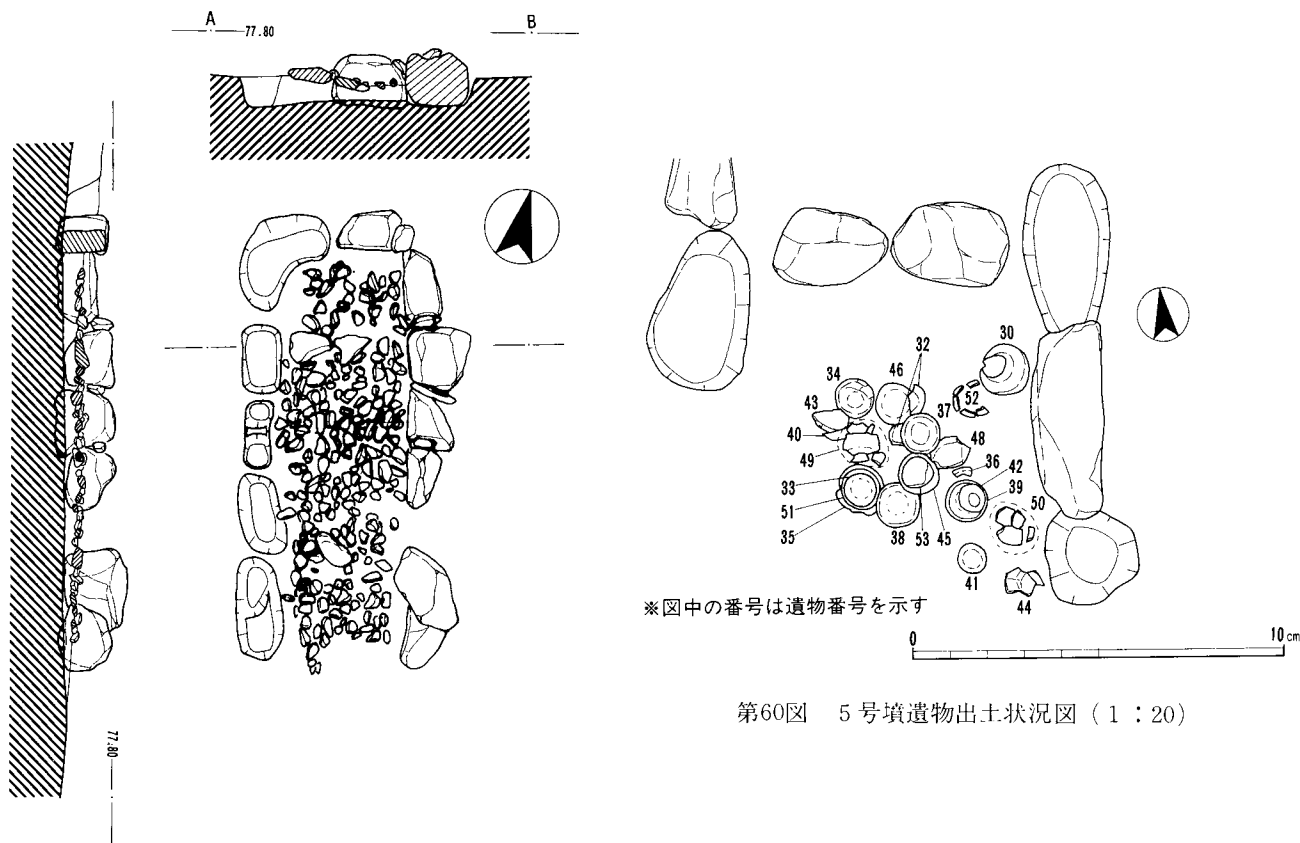
C. 遺物

4号墳にかかる遺物としては周溝東南の埋土から出土した須恵器細頸瓶(29)のみである。所謂、フラスコ形と呼称されているものである。

(5) 5号墳

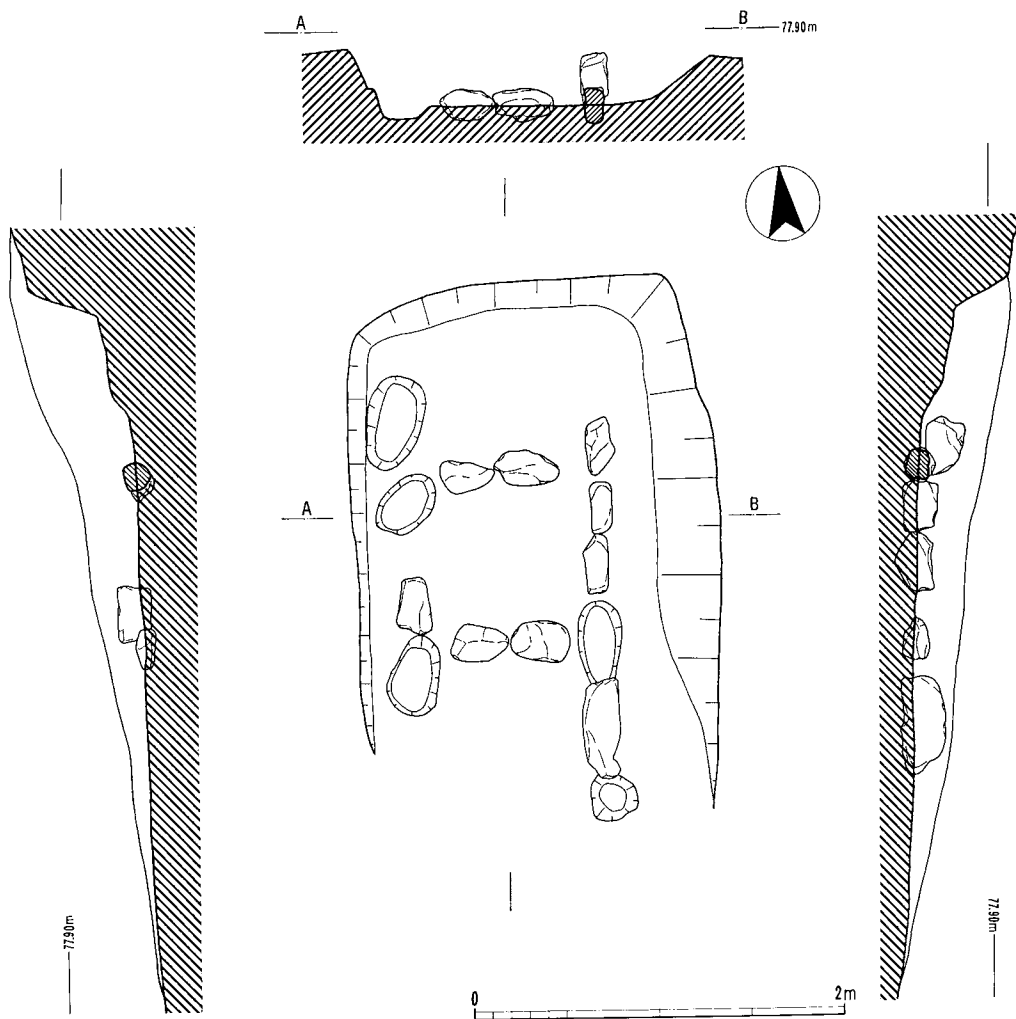
A. 墳形

径6.5m内外の円墳と考えられる。周溝は2号墳と3号墳を切り、幅1~1.5mで、深さ30~50cmである。

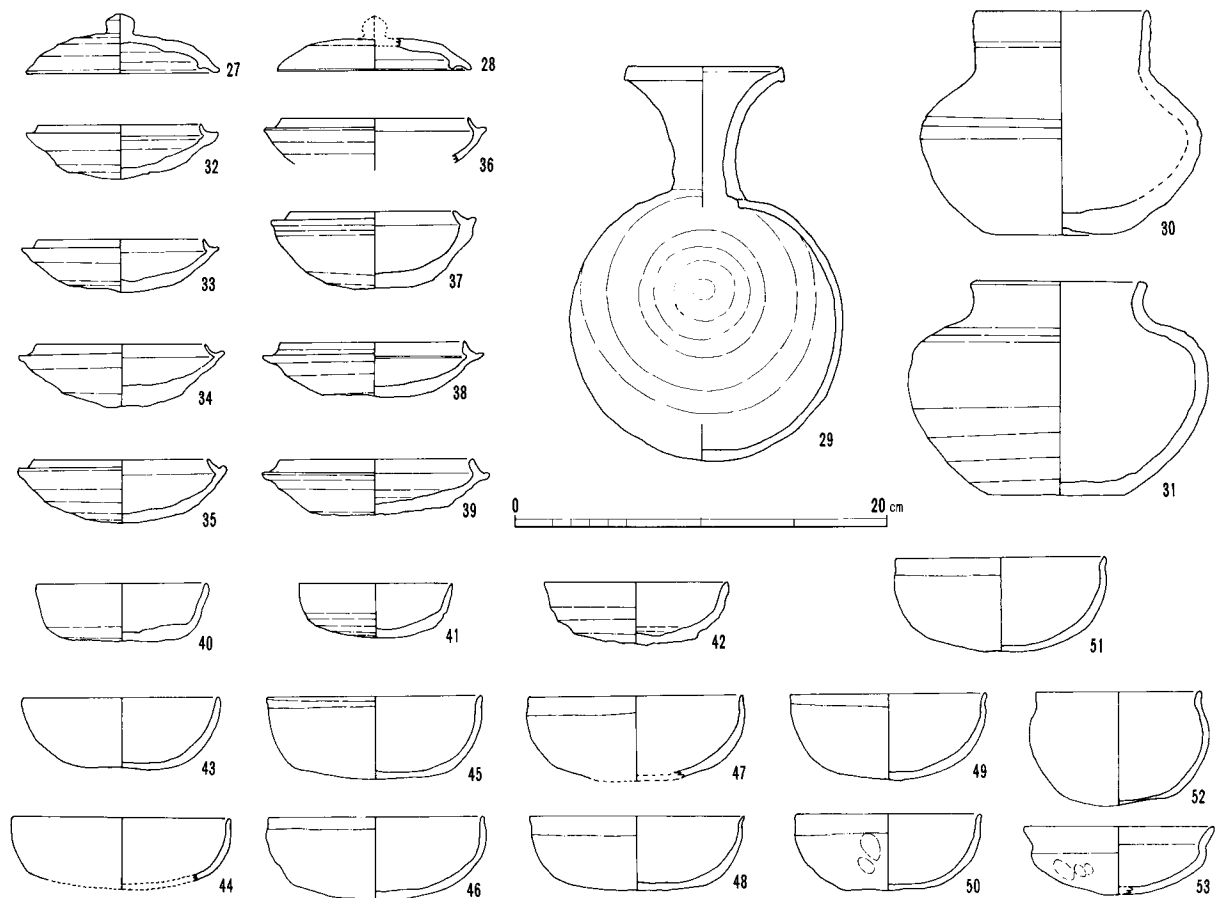


第60図 5号墳遺物出土状況図(1:20)

第58図 4号墳石室実測図(1:40)



第59図 5号墳石室実測図(1:40)



第61図 2～6号墳出土遺物実測図（1：4）

B. 埋葬施設

幅1.8～1.9m、長さ2.6mで深さ20～30cm前後の掘形内に基底石の一部とその抜き取り穴を検出した。これより推定すると、石室幅約85cm、長さ2.5m以上と考えられるが、斜面の低い側は一部削平されているものと思われる。床中央部に約1m間隔で30cm大の川原石が2個1対で据えられ、棺台の可能性もある。

C. 遺物

遺物は一箇所に集中して確認された。原位置ではなく、ある時期にかき集められた可能性もある。須恵器杯身（32～42）と土師器碗（43～53）の器種、器形の他は須恵器直口壺（30）が1点のみである。

(6) 6号墳

A. 墳形

4号墳の東南麓に検出されたもので、周溝は背後にめぐり、4号墳と共用したような形をとっている。径5～6m前後の円墳と推定できる。

B. 埋葬施設

幅70cm前後、長さ3.4m前後で南に幅が狭くなる幕墳掘形を検出した。深さは北側で40cm、南側で15cmぜんご残っている。棺痕跡は不明だが、主体部は木棺直葬と考えられる。

C. 遺物

遺物としては掘形埋土から出土した須恵器短頸壺（31）のみである。

(7) 7号墳

3号墳北側に検出された東西に巡る溝で古墳周溝の一部と考えられる。幅2.6m前後、深さ60cm内外である。

3. 結 語

今回の調査区で検出した古墳は計7基であるが、これは本来の天神山古墳群の一部と考えられる。従って全体の群構成等についてはここで論じられないが、若干の問題提起を含めながら記述し、まとめとしたい。

(1) 地形と立地

古墳はすべて東西にのびる丘陵尾根上、およびその南北の山腹斜面と考えられる場所に立地している。北腹面に築かれた1号墳、ほぼ尾根筋に築かれた7号墳をのぞくと残りは南腹面に築かれている。そして、南腹面に検出された3～5号墳の石室は当然のことながら地形にかんがみ南に開口している。しかし、1号墳については地形的に北に開口してもよさそうなのに南に開口していた。

現在、このあたりの岩内町と伊勢寺町の町境は尾根筋を東西に横断する県道瑞巖寺・庭園線で画されており、当群を見るかぎり、南側の伊勢寺側を意識している。

したがって当群の形成基盤となった集落（共同体）も伊勢寺側に求められるかも知れない。

また、こうした横穴式石室の開口方向については、たとえば集落から墓へ行く道、より接近すればいわゆる墓道（基道と枝道）がどのように意識、あるいはつくられていたかという観点と、もう一つ、死者を安置する場合の頭位をできる限り北位にという意識が強く働いていたという観点も考えてゆかねばならないだろう。

(2) 築造時期と推移

各古墳の築造時期については石室形態と出土遺物、特に須恵器の編年観に頼らざるを得ない。まず1号墳であるが、その横穴式石室の形態は片袖式である。そして、玄室部と羨道部は框石によって境をなし段をつくる。また、羨道部は比較的短く未発達と考えられ、こうした形態は竪穴系横穴式石室の流れとも受けとめられ、県下の初期横穴式石室の一形態と言える。

さて、須恵器は杯身、杯蓋の形態、手法等より、田辺編年の^②T K10型式、あるいはM T85型式に併行するものと思われ、6世紀中頃に比定できるものである。

2号墳については周溝東南から須恵器（27・28）が出土しており、それを根拠にすればT K217型式で、7世紀中頃と考えられる。

つぎに3・4号墳であるが、4号墳については主体部からの遺物出土はなく、南周溝から出土の須恵器細頸瓶（29）一点のみであるが、時期的にはT K209型式以降の7世紀代と考えられる。3号墳についてはかなり攪乱をうけていたが、杯蓋、長脚2段透かしの高杯、直口壺からみてT K43型式で6世紀後半に相当するものであろう。

5・6号墳についてはいずれも3号墳の周溝を切ったかたちで検出されているが、6号墳については主体部と思われる掘形埋土から須恵器短頸壺（31）が一点のみ出土したにとどまる。この壺はT K209型式ごろの6世紀末～7世紀初頭頃と考えられる。5号墳は須恵器と土師器が比較的かたまった状態で出土したが、その須恵器杯身の底部はすべてヘラ切り未調整で径8～10cm内外の小ぶりの身である。また、この時期は形態上は杯と蓋とが逆転する段階で、須恵器編年からすればT K217型式、7世紀前半～中頃の時期と考えられる。

以上述べたように、出土遺物から一応各古墳の築造時期の一点をさぐることはできる。

したがって当古墳群は今回の調査区だけをあてはめれば、6世紀中頃から7世紀中頃までのおよそ1世紀の間に順次築造されたものと言えよう。

そして、4～6号墳の3基は石室、墓壇の規模からみても単次葬と考えられ、後期群集墳も複次葬の段階から終末期においては古墳の規模、石室の規模ともに極端に小さくなって単次葬化していく様子の一端が当古墳群でも窺い知ることができる。

こうした変遷の在り方は畿内における終末期古墳に向かう動向と大差ない古墳埋葬の質的転換の一つとして捉えることもできよう。

(3) 天神山1号墳石室について

——当地域における横穴式石室の導入期——

当古墳群の中では1号墳は最も古い築造時期が考えられる。(2)でも述べたように須恵器編年からすると6世紀中頃(前葉に近い)に比定でき、また鉄鍔形態も当時期として矛盾はしない。

さて、横穴式石室の形態については、何分その残存状況が悪いので不明な点が多いが若干ふれてみたい。石室形態は右片袖式を呈し、幅およそ1.8m余と推定できる。とくに他の古墳石室との違いは玄室と羨道との間に框石がみられ、羨道部から玄室に向かって一段下がる点である。こうした形態は県下の初期横穴式石室にみられる。また、閉塞の仕方であるが、当古墳は玄門ではなく羨道にて石材を積みあげて行く。

したがって袖部を明確に形成している点、閉塞のあり方すれば所謂「畿内型」横穴式石室にはいるものである。

また、ちなみに白石氏による横穴式石室の型式編^④からみると、第II型式(第3期)、あるいは第III型式(第4期)の石室に近い形態と思われ、6世紀前半～中葉の時期にあてはめられよう。

ちなみに発掘調査例ではないが、この地域でこの天神山1号墳に似た時期の古墳としての瑞巖寺6号墳を少し紹介しておこう。

『松阪市史』^⑤によれば、「石室は長軸をN30°E方向にとり、羨道に向かって右に袖をもつ片袖式石室で南西に羨道を開ける。玄室は長さ3.4m、幅2m高さは1.7～2m。……(中略)……石室は横位にした石材を6～7段整然と積み構築したもので、玄室には天井石より一段下げて架している。」石室構造を持つ古墳である。

玄室幅において、天神山1号墳玄室より20cm前後大きいと推定されるが、右片袖式の石室をもち、形態的に類似した石室である可能性が高い。

また、瑞巖寺6号墳の採集遺物として図示されている須恵器杯身は、その調整手法は詳らかでないが分量・形態的にみて、天神山1号墳出土の杯身と時期的に大差がないと考えられるのである。

いずれにしても、天神山1号墳やここに紹介した瑞巖寺6号墳はその石室形態や出土遺物からみて、

当地域においては現在のところ初現期の横穴式石室墳と言えるであろう。

「畿内系の石室は、南伊賀から雲出川流域に伝わり、白山町ガガフタ1号墳・嬉野町釜生田A-5号墳・天保1号墳、瑞巖寺6号墳などに見られる。玄室と羨道の天井に段差を持ち、右片袖矩形平面に、ドーム状あるいは平らな玄室天井を持つものである^⑦」という横穴式石室の系譜、及び地域論の展望もすでに発表されているところである。

前期古墳から後期古墳への転換をめぐる諸問題の内、横穴式石室の受容形態(伝播経路)とその系譜論は一つの大きな注目点ではあるが、墳形(円形か方形か)と内部主体(横穴式石室か木棺直葬か)に相互のかかわり、使い分けがあるのか無いのか、そして相関があるとすればそれを古墳を造営せしめた地域集団の性格的差異として見るのか否か等々、今後は更に遺構・遺物論的にも究明していかなければならない諸問題が多い。

以上、ここでは果たせなかつた、若干の問題提起をも書き加えて小まとめといたしたい。

(新田 洋)

〔註〕

- ① 松阪市史編さん委員会『松阪市史第二巻史料編 考古』(1987)
- ② 田辺昭三『陶邑古窯址群I』平安学園考古クラブ(1966)
- ③ 森下浩行「日本における横穴式石室の出現とその系譜—畿内型と九州型—」『古代学研究111』(1986)
- ④ 白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」『古代学研究42・43合併号』(1966)
- ⑤ ①に同じ
- ⑥ ①に同じ。P.222に掲載されている。
- ⑦ 岡田登「近畿の横穴式石室地域論・三重県『横穴式石室を考える—近畿の横穴式石室とその系譜—(帝塚山考古学研究所・1990)

図版番号	出土地点	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考	整理番号
1	1号墳・玄室	須恵器	杯蓋	口径 14.9 器高 4.6	天井部やや尖り風	天井部 5/7へラケズリ	淡黄灰色	細砂粒多く含む	良好	ロクロ回転廻り・内面中央に一方方向のナデ	37-0009
2	1号墳・玄室	須恵器	杯蓋	口径 15.0 器高 4.8	天井部と口縁部の境に幅広い沈線	天井部 6/7へラケズリ	青灰色	砂粒(1~2mm大)含む	良好 (喉織)	ロクロ回転廻り	37-0003
3	1号墳・玄室	須恵器	杯蓋	口径 14.8 器高 4.3	口縁部内面に端部を示す沈線	天井部 5/7へラケズリ	淡灰色	細砂粒多く含む	良好	ロクロ回転廻り・天井部にへラ記号あり	37-0001
4	1号墳・玄室	須恵器	杯蓋	口径 12.7 器高 4.4	天井部平坦・口縁部やや内湾気味	天井部へラ切り・未調整	濁灰色	砂粒多く含む	良好	ロクロ回転廻り	37-0013
5	1号墳・玄室	須恵器	杯身	口径(14.4) 器高 5.0		天井部 3/4へラケズリ	淡青灰色	砂粒微量含む	良好	ロクロ回転廻り	37-0010
6	1号墳・玄室	須恵器	杯身	口径(15.6) 器高(5.5)		天井部 5/8へラケズリ	青灰色	喉織	良好	ロクロ回転廻り・焼きむすみあり	37-0014
7	1号墳・玄室	須恵器	杯身	口径(13.5) 器高(5.0)		天井部 2/3へラケズリ	青灰色	砂粒少量含む	良好		37-0012
8	1号墳・玄室	須恵器	杯身	口径 12.8 器高 4.4	口縁部内面に沈線	天井部 3/4へラケズリ	淡黄灰色	細砂粒多く含む	良好	ロクロ回転廻り・内面中央に一方方向のナデ・体部にへラ記号あり	37-0002
9	1号墳・玄室	須恵器	杯身	口径(13.2) 器高 —			青灰色	砂粒少量含む	良好	ロクロ回転廻り	37-0011
10	1号墳・玄室	須恵器	杯身	口径(13.8) 器高 —			青灰色	喉織	良好	ロクロ回転廻り	37-0016
11	1号墳・玄室	須恵器	直口壺	口径(14.2) 器高 —	段状の口縁内端部		淡灰色	砂粒多く含む	良好	ロクロ回転廻り	37-0015
12	1号墳・玄室	須恵器	提瓶	口径 — 器高 —		平坦部カキメ	淡灰色	砂粒多く含む	良好	ロクロ回転廻り	37-0004
13	1号墳・玄室	土師器	鉢	口径 32.1 器高 12.8	口縁部は器壁薄くなり、外反する	外面へケメ	茶褐色	砂粒(2~3mm大)多く含む	やや軟		37-0008

第17-1表 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考	整理番号
14	1号墳・玄室	鉄器	鏃	長さ(14.6)	柳葉形で逆刺(かえり)をもつ						37-0006
15	1号墳・玄室	鉄器	鏃	長さ 12.8	柳葉形で逆刺(かえり)をもつ					基部に木目痕残る	37-0005
16	1号墳・玄室	鉄器	鏃	長さ 一							37-0007
17	1号墳・玄室	鉄器	直刀	幅 長さ 一							37-0056
18	3号墳・玄室	須恵器	杯蓋	口径 13.4 器高 4.2		天井部 4/5へラケズリ	青灰色	細砂粒少量含む	良好	ロクロ回転逆廻り・内面中央に乱ナデ	37-0020
19	3号墳・玄室	須恵器	杯蓋	口径 13.0 器高 4.4	口縁端部内側に面をつくり尖る	天井部へラ切り未調整	灰色	石粒少量含む	良好	ロクロ回転順廻り	37-0022
20	3号墳・玄室	須恵器	杯蓋	口径 12.4 器高 4.0	口縁部と体部の境不明瞭	天井部 3/5へラケズリ	青灰色	石粒少量含む	良好	ロクロ回転順廻り	37-0021
21	3号墳・玄室	須恵器	甕	口径 16.0 器高 17.2	口縁部はラッパ状に大きく開く	体部下半はへラケズリ	淡青灰色	砂粒少量含む	良好	ロクロ回転順廻り	37-0026
22	3号墳・玄室	須恵器	台付長頸壺	口径 一 器高 一		体部の肩部に2条の沈線	紫灰色	砂粒少量含む	良好	ロクロ回転順廻り	37-0023
23	3号墳・玄室	土師器	長頸壺	口径 9.2 器高 16.4	口頸部はゆるやかに外反してのびる	体部下半は右廻りのへラケズリ	黄褐色	細砂粒含む	良好	体部に一箇所黒斑	37-0027
24	3号墳・玄室	須恵器	高杯	口径 13.6 器高 16.2	長脚2段透かし・杯部は立ち上がり部で鋭い稜をもつ		暗灰色	砂粒多く含む	良好	ロクロ回転順廻り	37-0028
25	3号墳・玄室	須恵器	脚付直口壺	口径 11.0 器高 19.8	長脚2段透かし	壺下半分はカキ目	暗青灰色	砂粒少量含む	良好	ロクロ回転順廻り	37-0025
26	3号墳・玄室 (石室埋土)	須恵器	直口壺	口径(13.6) 器高 16.2	口縁端部は内側上方に面を作る	体部下半はへラケズリ	淡青灰色	砂粒少量含む	良好	ロクロ回転順廻り	37-0024
27	2号墳・周溝	須恵器	杯蓋	口径 10.4 器高 3.3	宝珠つまみ	天井部 1/2へラケズリ	淡灰色	砂粒少量含む	良好	ロクロ回転順廻り・内面中央に一方向のナデ	37-0018

第17-2表 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	器種	器形	法量 (cm)	形態の特徴	成形・調整技法	色調	胎上	焼成	備考	整理番号
28	2号墳・周溝	須恵器	杯蓋	口径(10.5) 器高 一	宝珠つまみ		淡灰色	砂粒少量 含む	良好	ロクロ回転廻り	37-0019
29	4号墳・周溝	須恵器	細頸甌	口径 8.3 器高 21.0	フラスコ形	体部 1/3へラケズリ・体部中央に沈線	暗灰色	砂粒多く 含む	良好	ロクロ回転廻り・自然細厚 くかかる	37-0029
30	5号墳・玄室	須恵器	直口壺	口径 9.2 器高 12.0	垂直に立ち上がる口縁部	底部へラ切り未調整	暗青灰色	砂粒多く 含む	良好	ロクロ回転廻り	37-0048
31	6号墳・主体部 甕形埋土	須恵器	短頸壺	口径 9.6 器高 11.5	短く立つ口縁部はやや外反する	体部 1/2へラケズリ	淡灰色	砂粒少量 含む	良好	ロクロ回転廻り	37-0053
32	5号墳・玄室	須恵器	杯身	口径 8.6 器高 2.8	口縁部は短く内側に立ち上がる	底部へラ切り未調整	淡青灰色	砂粒少量 含む	良好	ロクロ回転廻り	37-0030
33	5号墳・玄室	須恵器	杯身	口径 8.9 器高 3.0	口縁部は短く内側に立ち上がる	底部へラ切り未調整	淡灰色	細砂粒含 む	良好		37-0031
34	5号墳・玄室	須恵器	杯身	口径 9.1 器高 3.5	口縁部は器壁薄く内傾して立つ	底部へラ切り未調整・内面中央に仕上げナデ	暗青灰色	砂粒多く 含む	良好	ロクロ回転廻り	37-0033
35	5号墳・玄室	須恵器	杯身	口径 9.7 器高 3.4	受部は丸みをもつ稜を形成	底部へラ切り未調整・内面中央部は乱ナデ	青灰色	砂粒多く 含む	良好	ロクロ回転廻り	37-0049
36	5号墳・玄室	須恵器	杯身	口径(10.0) 器高			明青灰色	細砂粒少 量含む	良好	小片	37-0050
37	5号墳・玄室	須恵器	杯身	口径 9.0 器高 4.1	上釜状の形態で、口縁部は短く内傾	体部下半は手持ちへラケズリ	青灰色	精緻	良好	ロクロ回転廻り・厚手の器壁	37-0038
38	5号墳・玄室	須恵器	杯身	口径 10.1 器高 3.0		底部へラ切り未調整	灰色	砂粒多く 含む	良好	ロクロ回転廻り	37-0032
39	5号墳・玄室	須恵器	杯身	口径 10.3 器高 3.0	底部は平出面をつくる	底部へラ切り未調整	淡黄灰色	砂粒多く 含む	良好	ロクロ回転廻り	37-0036
40	5号墳・玄室	須恵器	杯身	口径 9.0 器高 3.0		底部へラ切り未調整	白灰色	細砂粒少 量含む	やや軟	ロクロ回転廻り	37-0035
41	5号墳・玄室	須恵器	杯身	口径 8.3 器高 2.9	底部と口縁部の境は沈線で画す る	底部へラ切り未調整	暗青灰色	細砂粒少 量含む	良好	ロクロ回転廻り	37-0034

第17-3表 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	器種	器形	法量 (cm)	形態の特徴	成形・調整技法	色調	胎上	焼成	備考	整理番号
42	5号墳・玄室	須恵器	杯身	口径 9.9 器高 3.2		内面中央に仕上げナデ	淡黄灰色	精緻	良好	ロクロ回転逆廻り	37-0037
43	5号墳・玄室	土師器	碗	口径 10.7 器高 3.8		口縁部内外面ヨコナデ・体部内面ナデ、外面オサエによる凹凸残み	肌褐色	細砂粒多含む	良好	赤茶色のチャートくさり粒含む	37-0041
44	5号墳・玄室	土師器	碗	口径(12.0) 器高 —			茶褐色	細砂粒多含む	良好		37-0051
45	5号墳・玄室	土師器	碗	口径 11.6 器高 4.5		口縁部内外面ヨコナデ・体部内面ナデ、外面オサエによる凹凸残る	明褐色	砂粒少量含む	良好		37-0042
46	5号墳・玄室	土師器	碗	口径 11.6 器高 4.5		口縁部内外面ヨコナデ・体部内面ナデ、外面オサエによる凹凸残る	橙褐色	砂粒多く含む	良好		37-0047
47	5号墳・玄室	土師器	碗	口径(11.6) 器高(4.7)	体部から口縁部に向けて、器壁薄くなる、口縁端部は尖り立ち上がる	口縁部内外面ヨコナデ・体部内面ナデ、外面オサエによる凹凸残る	橙褐色	砂粒多く含む	良好		37-0052
48	5号墳・玄室	土師器	碗	口径(11.1) 器高 3.8	口縁端部は外反して立ち上がる	口縁部内外面ヨコナデ・体部内面ナデ、外面オサエによる凹凸残る	橙褐色	砂粒多く含む	良好		37-0040
49	5号墳・玄室	土師器	碗	口径 10.6 器高 4.5	口縁部と体部の境はにぶい稜をつくる	口縁部内外面ヨコナデ・体部内面ナデ、外面オサエによる凹凸残る	淡茶褐色	細砂粒少含む	良好		37-0045
50	5号墳・玄室	土師器	碗	口径 10.1 器高 4.1		口縁部内外面ヨコナデ・体部内面ナデ、外面オサエによる凹凸残る	橙褐色	細砂粒少含む	良好		37-0043
51	5号墳・玄室	土師器	碗	口径 11.4 器高 5.0	口縁端部はやや外反して立ち上がる	口縁部内外面ヨコナデ・体部内面ナデ、外面オサエによる凹凸残る	橙褐色	細砂粒少含む	良好		37-0044
52	5号墳・玄室	土師器	碗	口径 9.0 器高 6.0	深碗状	口縁部内外面ヨコナデ・体部内面ナデ、外面オサエによる凹凸残る	淡茶褐色	砂粒多く含む	良好		37-0039
53	5号墳・玄室	土師器	碗	口径 10.0 器高 4.0	口縁部と体部の境は明瞭	口縁部内外面ヨコナデ・体部内面ナデ、外面オサエによる凹凸残る	淡黄褐色	砂粒多く含む	良好		37-0046

第17-4表 出土遺物観察表



A 地区調査前風景



B 地区調査前風景

PL32



1号墳全景（西から）



1号墳石室（北から）

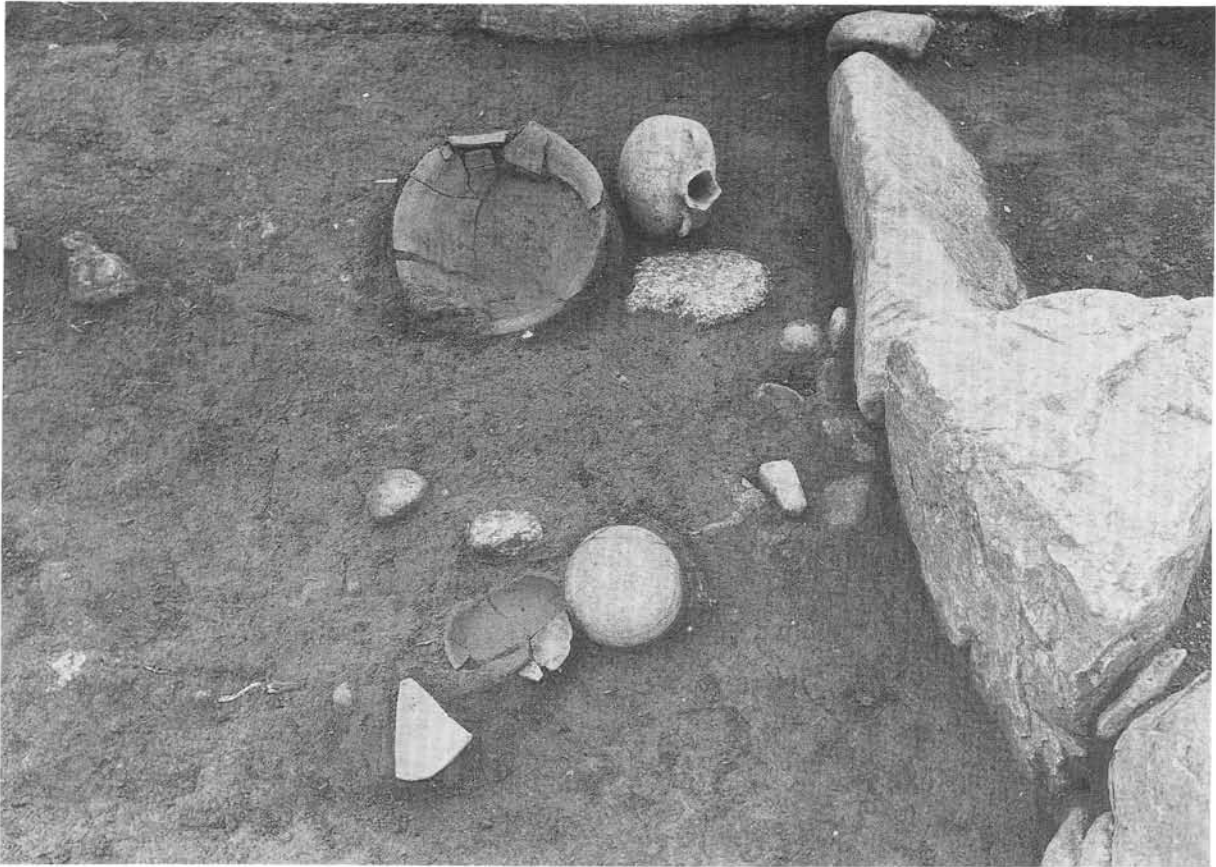


1号墳羨道部閉塞石（西から）



1号墳石室（東から）

PL34



1号墳石室遺物出土状況（西から）



3～6号墳（東から）



3号墳石室（北から）

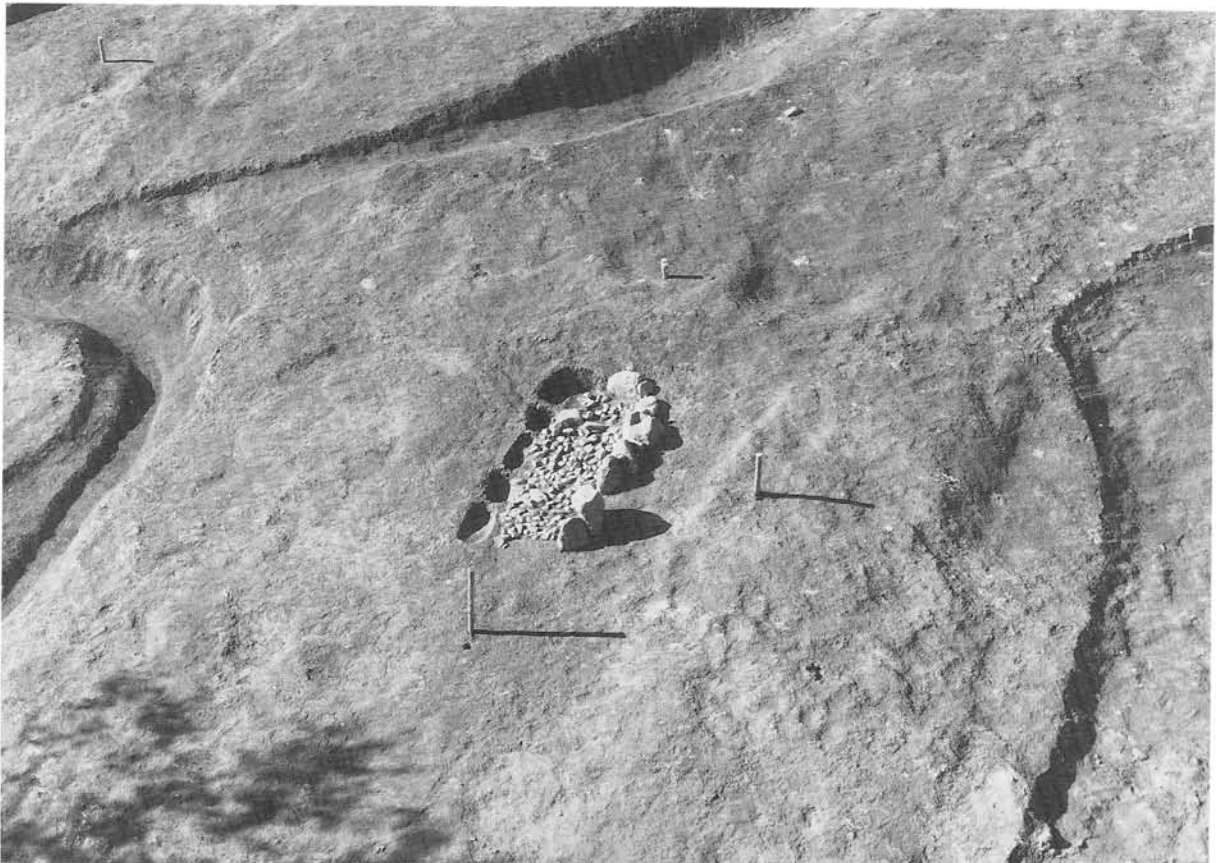


3号墳石室（北から）

PL36



3号墳遺物出土状況（南から）



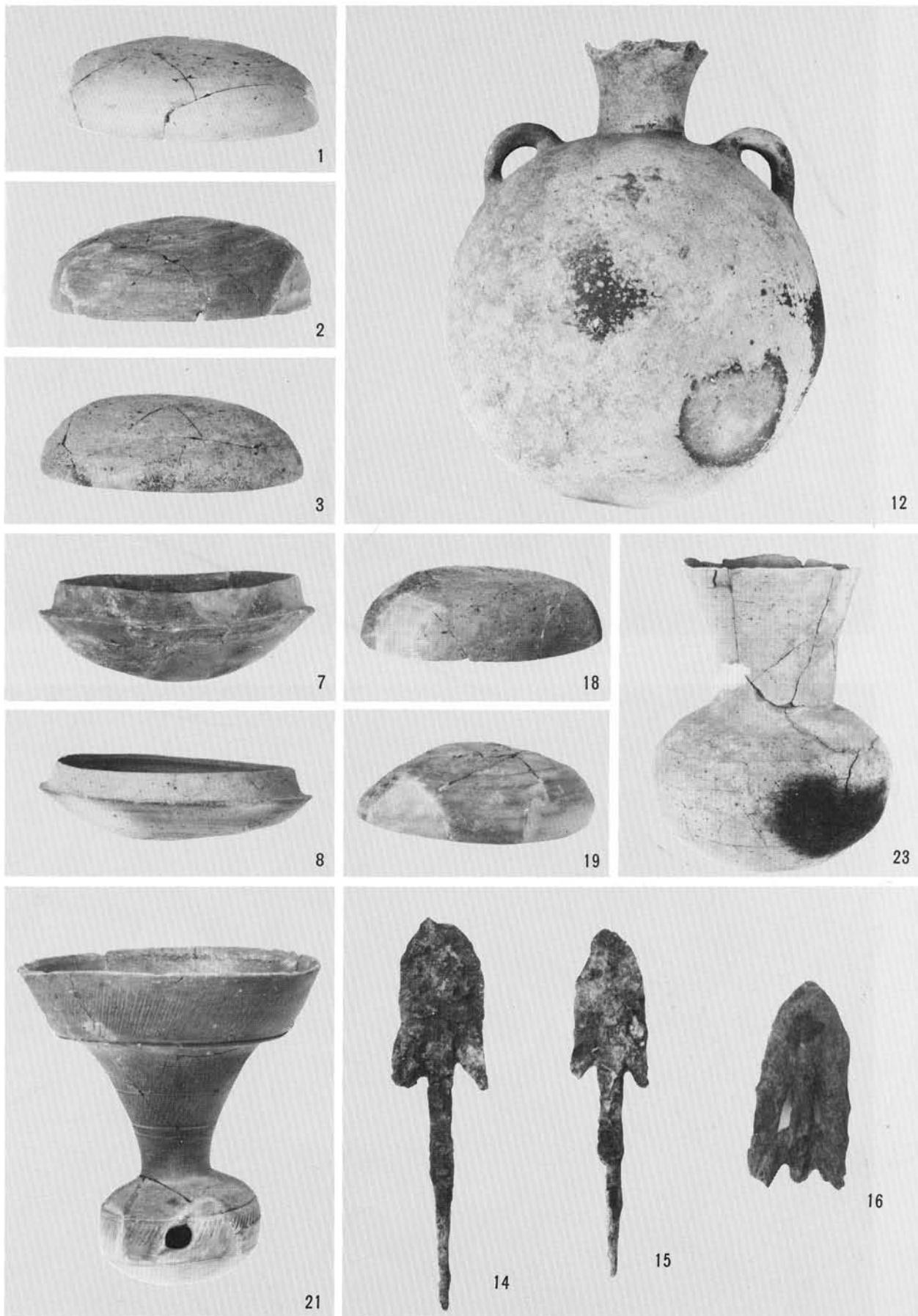
4号墳（南から）



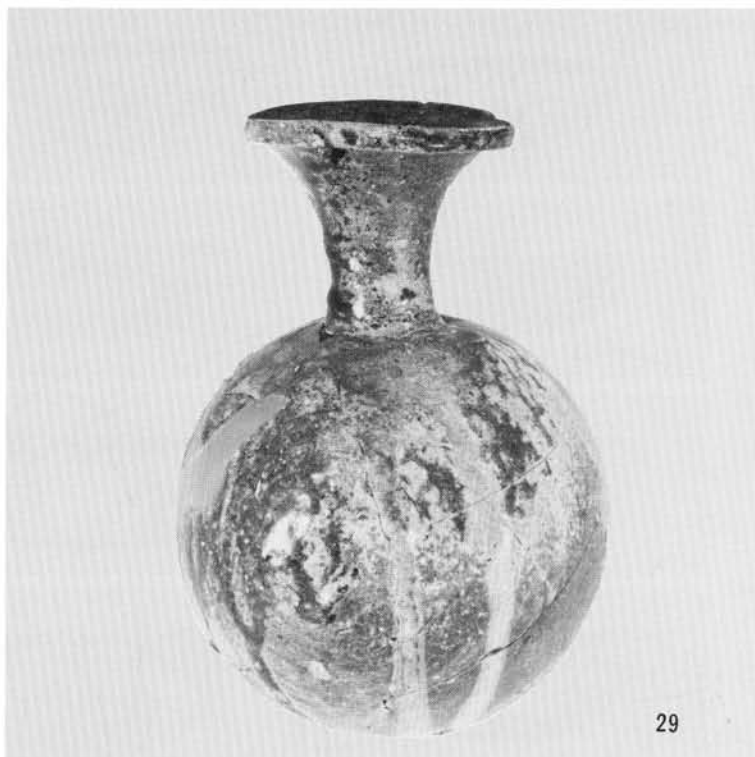
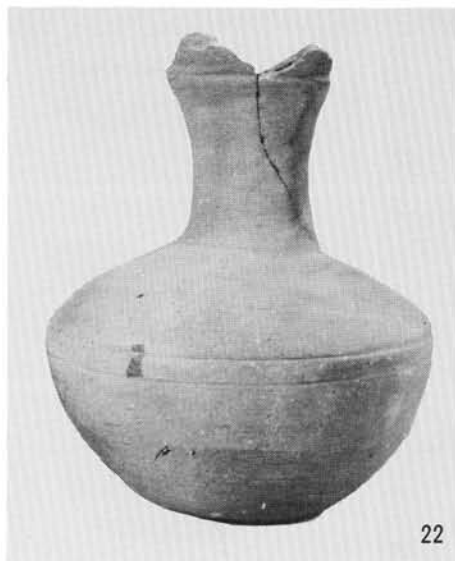
5号墳石室（南から）



5号墳遺物出土状況（西から）

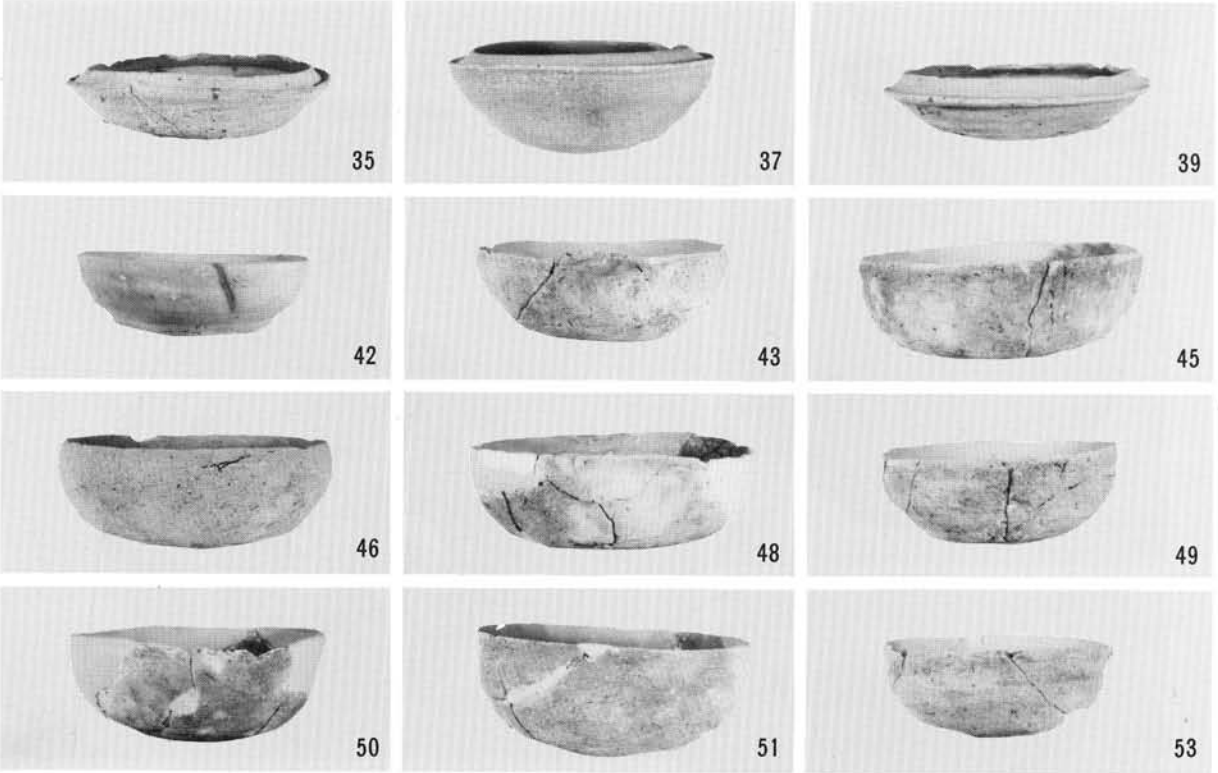


出土遺物 (1 : 3) (14~16は $\frac{1}{2}$)



出土遺物 (1 : 3)

PL40



出土遺物 (1 : 3)

V. 松阪市伊勢寺町 平林古墳群 (21)

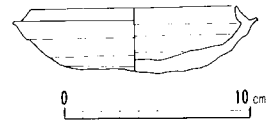
1. 古墳群の概要

松阪市西部山域の観音岳と堀坂山の間には、堀坂川によって形成された開析谷が東に延びており、この谷筋には多くの群集墳がみられる。平林古墳群もそのうちの一群で、堀坂山麓東末端の堀坂川右岸に突出する緩斜地上に位置する。当古墳群は平林池の北側の東西約 200m、南北約 100m に分布し、標高は70~80m程度で、現況は一帯みかん畑と山林である。行政区画は松阪市伊勢寺町字平林に所在する。

当古墳群については、1号墳から21号墳の総数21基の古墳が確認されており、1~8・19・20号墳が堀坂川に沿った北西側の緩斜地に、9~18・21号墳が北東側の緩斜地に分布する。横穴式石室を主体とした古墳群で、完存しているものは1基もなく、す

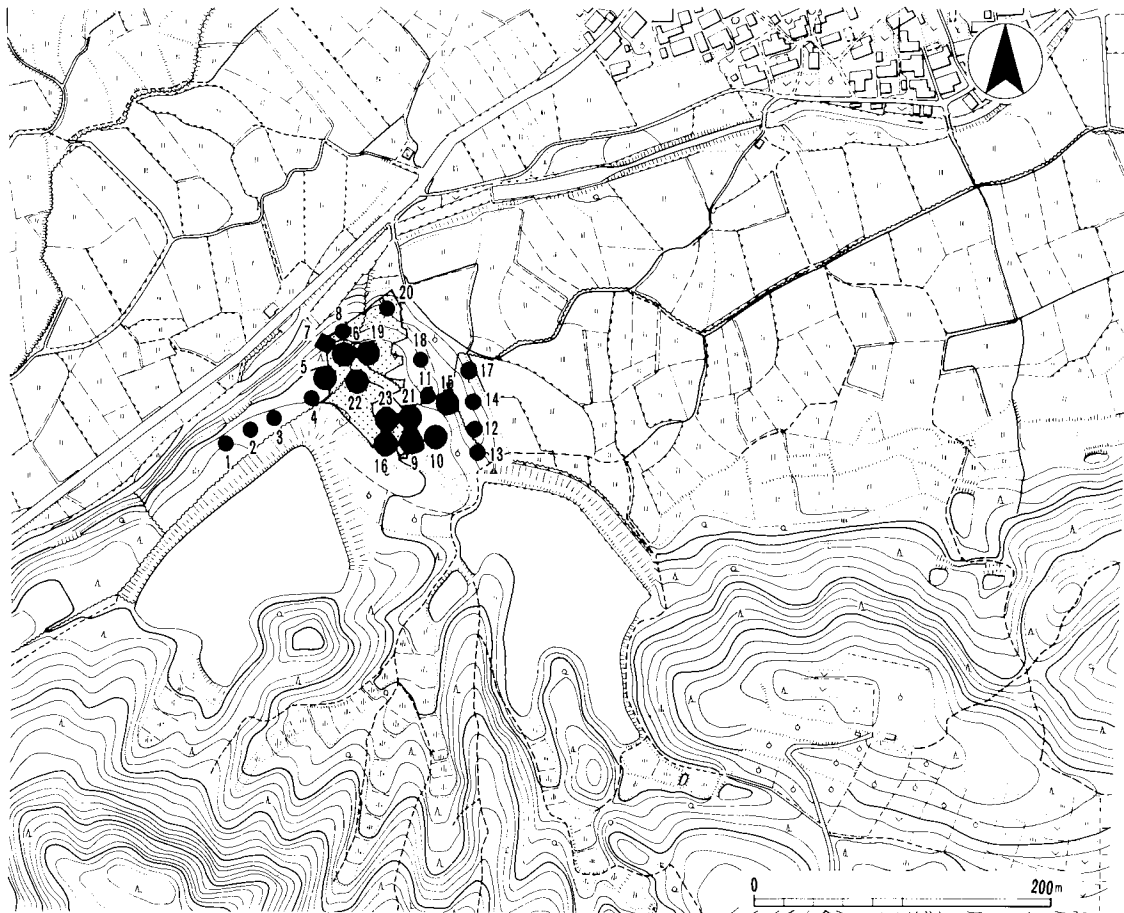
べて盗掘あるいは後世のみかん畑の開墾等により石室が破壊されている。各々の古墳の現況については第18表の通りであるが、詳細は『松阪市史・第二巻・史料篇・考古』¹に紹介されているので、参照されたい。

これまでの出土遺物は、1916年に出土したとされている、金環・鉄刀および各種の須恵器がある。また地元伊勢寺小学校に所蔵されている多数の須恵器は校区内出土と伝えられており、³その一部は平林古墳群出土遺物であるといわれている。第62図 開墾時出土遺物



0 10 cm

第62図 開墾時出土遺物 (1:4)



第63図 遺跡地形図 (1:5,000)

今回の調査中にも当古墳群で開墾時に出土したといわれる須恵器杯身（第62図）が地元の人から届けられた。

今回の調査は周知の21基の古墳のうち道路建設予定地内にかかる5・6・7・8・9・16・19・20・21号墳の9基が当初の対象であった。しかし調査が

進むにつれて22・23号墳の2基が新たに発見され、計11基の調査となった。なお、5・9・21号墳については、道路建設予定地内にかかる周溝の一部のみの調査となった。調査期間は昭和61年6月9日から同年10月3日までで、面積は約4,000 m²である。

2. 古墳各説

1. 5号墳

A. 調査前

北西側斜面のほぼ中央、発掘区の西側に径13m、高さ1.5 mの高まりが認められ、北東側3分の1程が発掘区に入る。墳頂部の標高は81.2mで、北東側

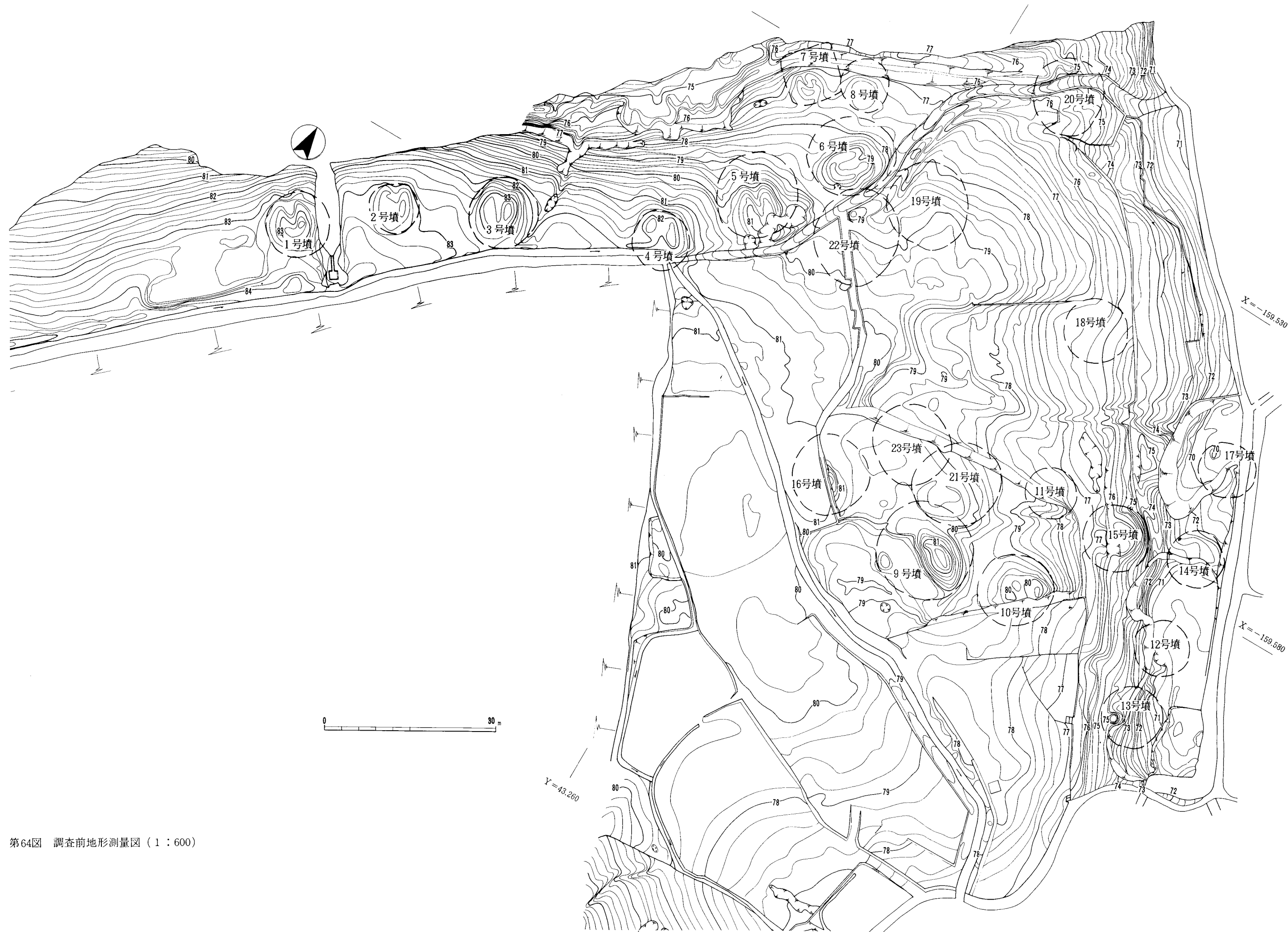
と南西側には周溝と思われる窪みが、墳頂には盗掘坑と思われる窪みがみられた。

B. 墳丘

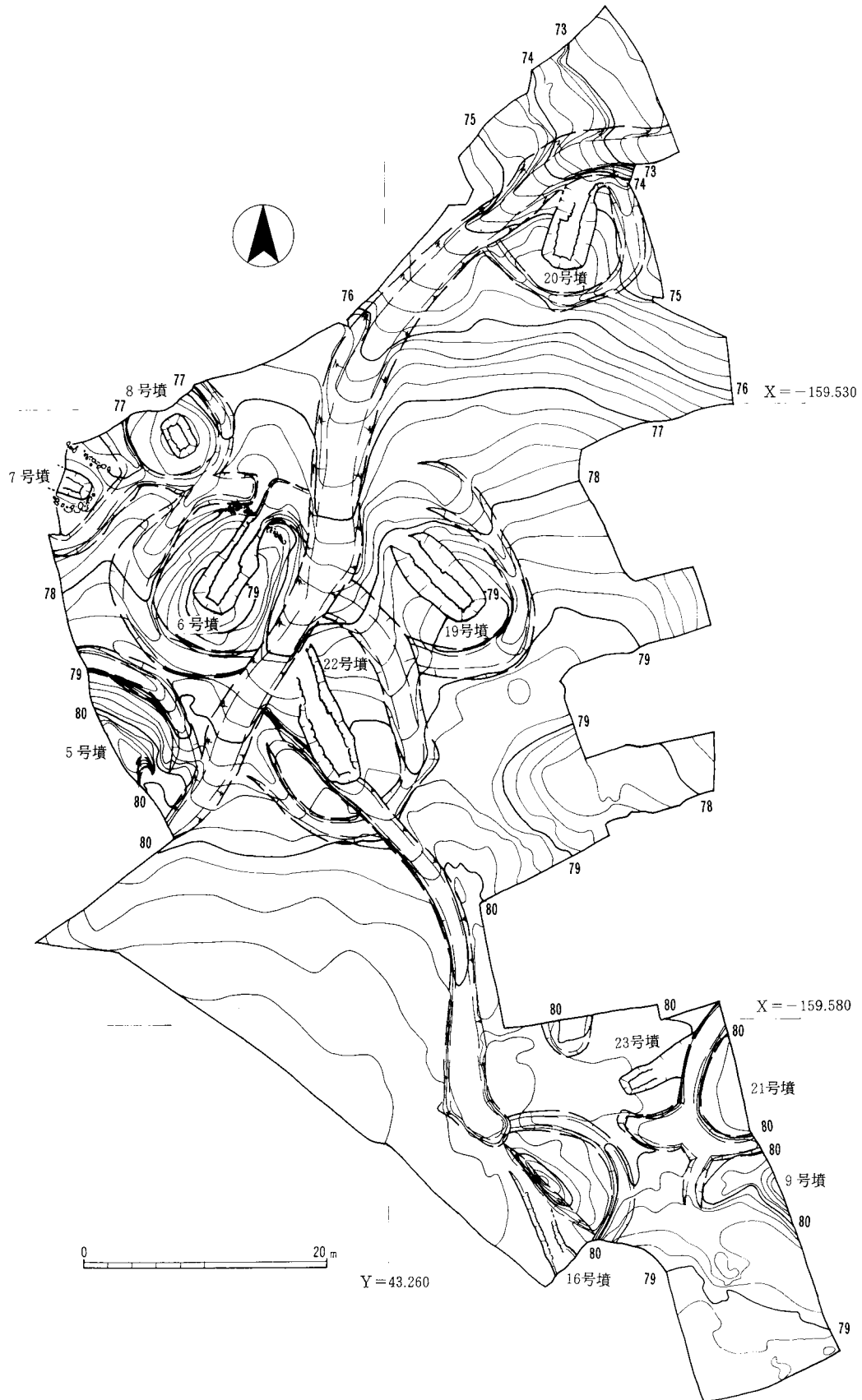
発掘区に入る東側の周溝の調査と、トレンチによる墳丘の断面調査を実施した。周溝の径から直径14

古墳名	推定墳丘径	現 高	石室方向	残 存 状 況
1号墳	11m	1m	(N40°W)	墳丘北東裾壊、墳頂部に破壊坑、石材1個露呈。
2号墳	8m	0.5m	(N15°W)	墳頂部に破壊坑。
3号墳	11m	2m	(ほぼ東西)	墳頂部に破壊坑。
4号墳	10m	1m	不明	墳丘北東側はよく残るが、南側は削平。
5号墳	13m	1.5m	(N40°W)	墳丘東側は炭焼き竈で破壊、墳頂部に破壊坑。
6号墳	12~15m	1.5m	(N30°E)	墳丘東裾壊、墳頂部に破壊坑。
7号墳	8m	1m	(N70°W)	墳丘北東裾壊、墳頂部に盗掘坑。
8号墳	8m	0.5m	不明	墳丘北裾壊、墳頂部に小礫散乱。
9号墳	12m	2m	不明	墳丘南西側半分削平、石材1個露呈。
10号墳	12.5m	2m	N80°W	墳丘南東側は破壊、墳頂部に盗掘坑、石室石材露呈。
11号墳	9m	2m	(N40°W)	墳頂部に破壊坑。
12号墳	不明	1m	N50°W	玄室西側壁と奥壁の一部、羨道の側壁の一部残存、玄室長約3m。
13号墳	不明	削平	不明	墳丘ほとんど壊、石材露呈。
14号墳	10m	1m	東に開口	墳丘北半分残存、南半分壊、石室側壁の一部が露呈。
15号墳	12m	2m	不明	墳頂部に破壊坑、石材露呈。
16号墳	7m	0.7m	不明	墳丘の北東側4分1のみ残存。
17号墳	不明	削平	不明	石室の一部の石材が崖に残存。
18号墳	不明	削平	(N70°E)	墳丘削平、石材2個露呈。
19号墳	不明	削平	不明	墳丘削平、石材約10個露呈。
20号墳	不明	削平	不明	墳丘削平、石材2個露呈。
21号墳	10m	0.5m	不明	墳丘はわずかな高まり。
22号墳	—	—	—	未発見
23号墳	—	—	—	〃

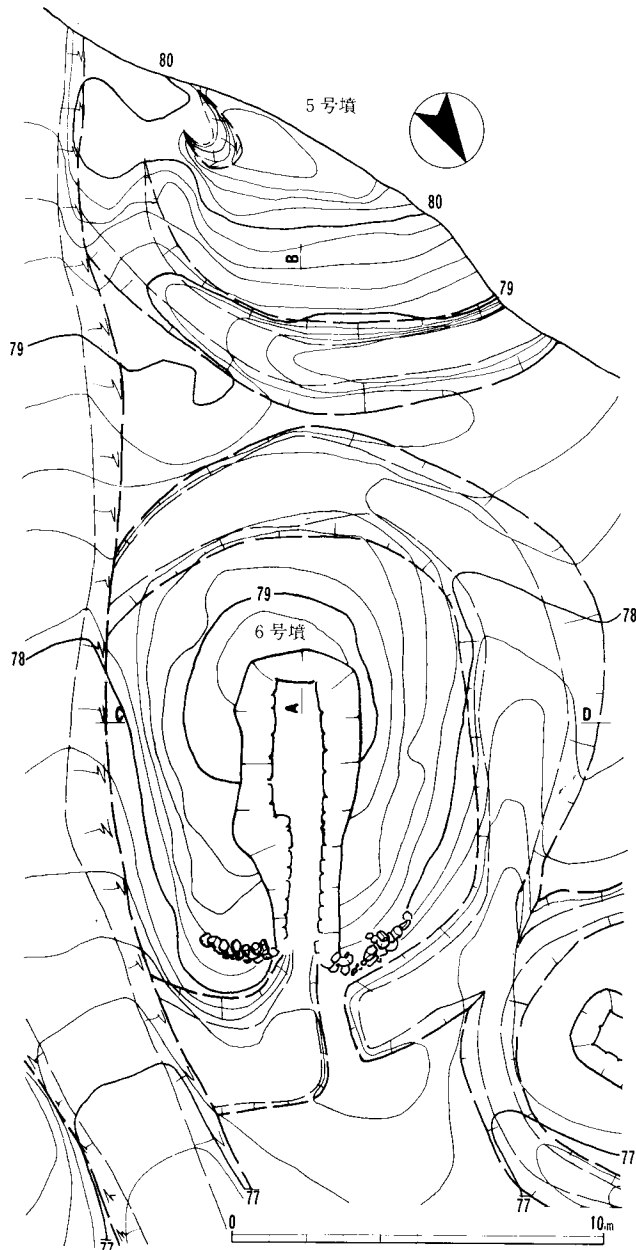
第18表 平林古墳群調査前古墳現況一覧表



第64図 調査前地形測量図 (1:600)



第65図 調査後測量図 (1 : 500)



第66図 5・6号墳測量図 (1:200)

m前後の円墳と推定される。高さは約2m残存しており、1m程の盛土がみられる。

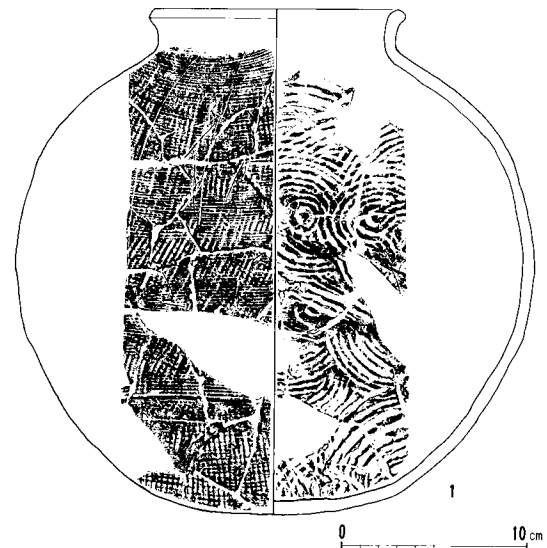
周溝は、幅1~2m、深さ70cmであるが、東側は現道および炭焼き窯によって攪乱をうけており、不明である。

C. 主体部

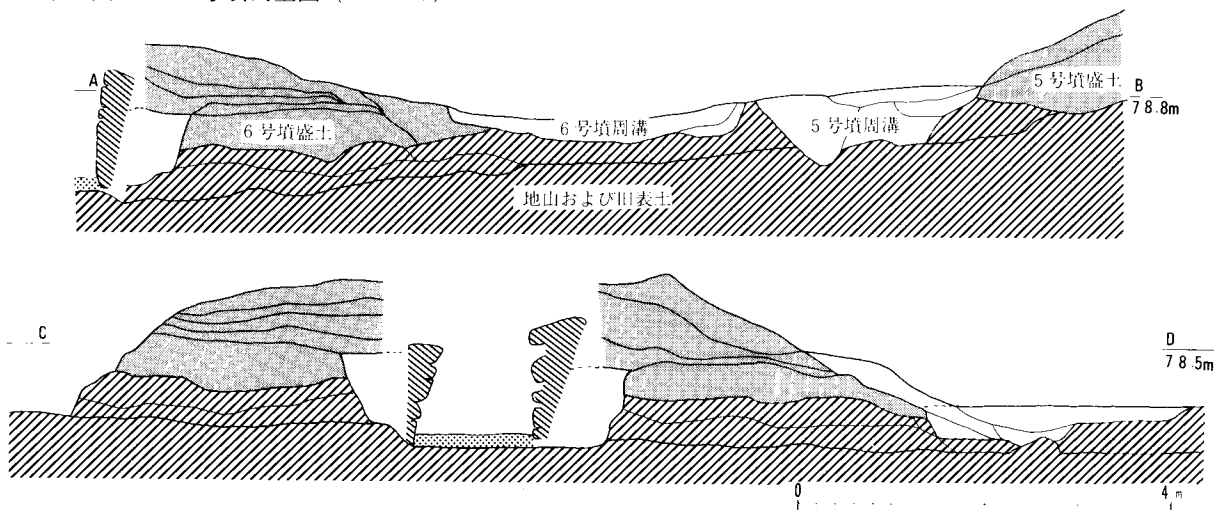
発掘区内に1m程の石材が1個露呈していたことから、石室墳と思われる。露呈している石材は発掘区内の端にあり、この石材を奥壁の一部と想定するならば、主体部はその殆どが発掘区外であり、主軸は推定N40°Wである。

D. 遺物出土状況

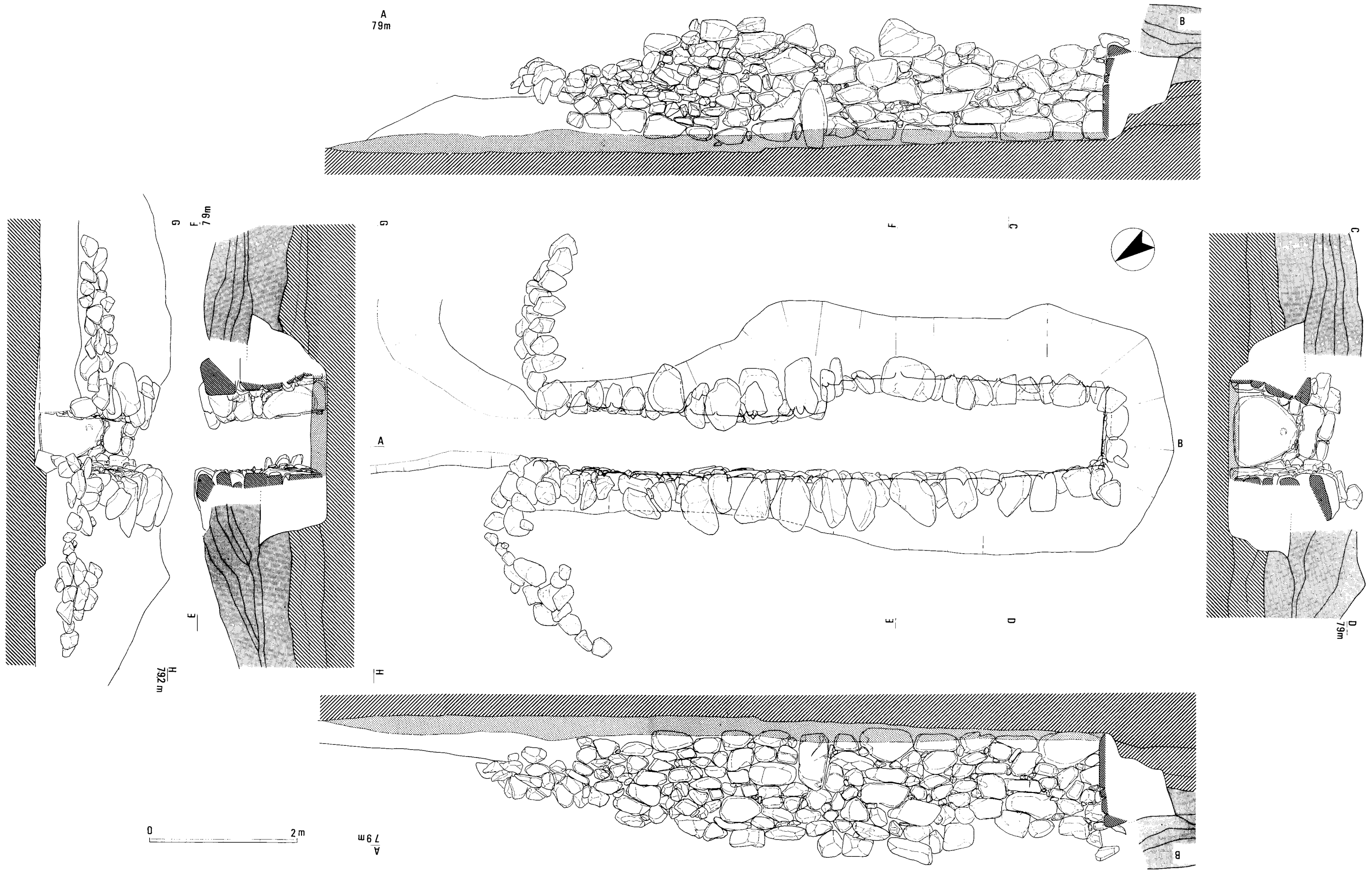
周溝の埋土から須恵器甕(1)が、散乱して出土したのみである。



第67図 5号墳出土遺物実測図 (1:4)



第68図 5・6号墳墳丘断面図 (1:80)



第69图 6号填石室实测图(1:50)

2. 6号墳

A. 調査前

5号墳の北東に位置し、径12~15m、高さ1.5 m程の高まりが認められ、墳頂部には、盗掘坑と思われる窪みがみられた。

B. 墳丘

長径15m、短径12mの石室の軸方向にやや長い円墳である。残存高約2 mで、田表土の上に4層、約1.4 m盛土されている。墳丘の中腹あたりに石室の開口部から左右にL字状に外護列石が広がる。外護列石は、人頭大の石を2~3段積んでいる。

周溝は幅2~3 m、深さ約40cmであるが東側は現道によって削平を受けており、不明である。

C. 主体部

主体部の掘形は一層目の盛土後切り込んでおり、平面形は長さ10m、幅は玄室部で約3 m、羨道部で約1.8 mである。

主体部は右片袖の横穴式石室で、主軸はN33° Eと北東側に開口する。床面の平面形は、玄室は長さ約3.6 m、幅約1.3mの長方形であるが、左側がやや胴張りとなり、奥壁近くでは幅約1.0 mと狭くなる。羨道部は長さ約4.1 m、幅約0.8 mで、やや右寄りに開口する。側壁は左右とも5~9段、約1.6 mま

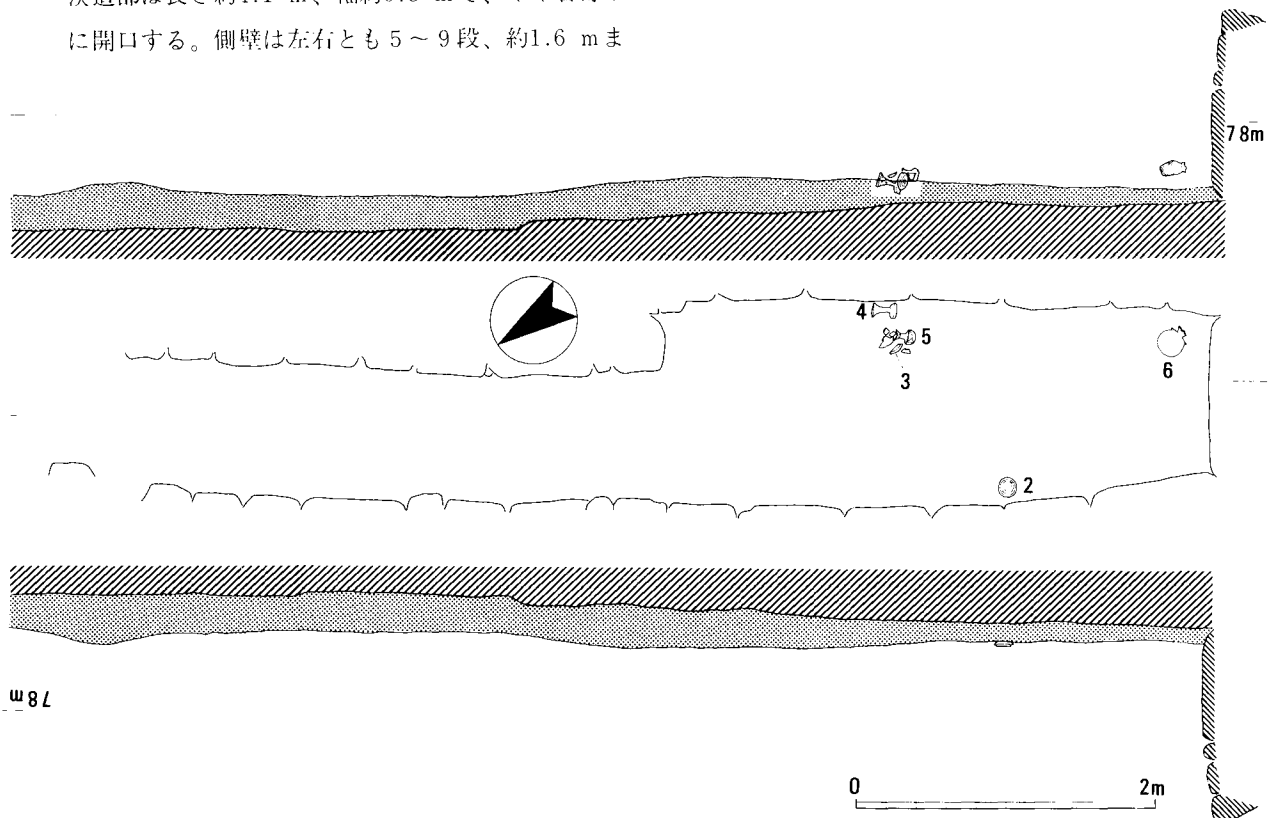
で残存する。玄室の基底石は長さ0.4~0.7mの石を横積みにし、2段目以上もほぼ同じ大きさの石材を積み上げている。羨道部の基底石は玄室のそれより一廻り小さい石材を使用し、2段目以上についてはさらに小さい人頭大の石材を多数使用して構築している。袖石には高さ約0.9mの柱状の石材を使用する。左側壁には袖石と対峙して高さ約0.7mの柱状の石材が使用されている。左側壁はほぼ垂直に立ち上がるが、右側壁は2段目から持ち送りがみられる。

奥壁は3段、約1.4mまで残存しており、高さ0.8 mの基底石を1個据えている。垂直に立ち上がり、持ち送りは認められない。

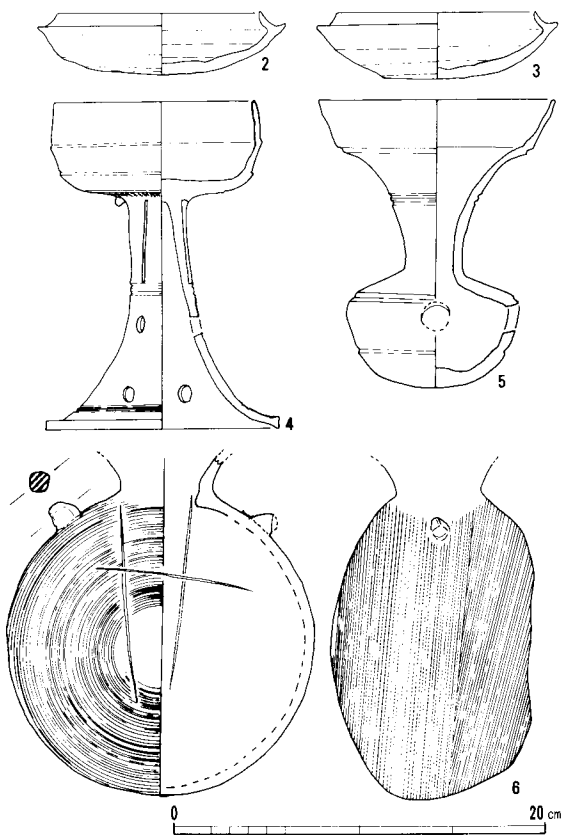
地山から床面までは、10~30cmである。

D. 遺物の出土状況

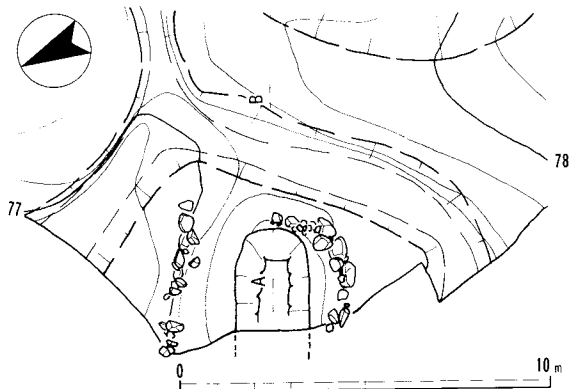
奥壁近くの床面から須恵器提瓶(6)が、右側壁の中央近くの床面から須恵器甕(5)・高杯(4)・杯身(3)が出土している。また左側壁近くの中央の床面からは須恵器杯身(2)が正立して出土している。



第70図 6号墳遺物出土状況(1:50)



第71図 6号墳出土遺物実測図（1：4、拓本は1：2）



第72図 7号墳測量図（1：200）

杯身2点（2・3）は、口径約11cm、器高3.5cm程で、色調、胎土、焼成が、酷似しており同一窯の物と思われる。

高杯（4）は杯部の底部に突刺文を施し、脚部との接合部付近に三方に小突起を貼りつける。脚部上方には三方向に透かしがみられるが貫通していない。脚部下方には三方向と四方向に円孔透かしがみられるが方向は不規則である。

提瓶（6）は、体部に「サ」字状のへら記号がみられる。

3. 7号墳

A. 調査前

6号墳のすぐ西側の堀坂川に面した一段低い所に径8m、高さ1m程の高まりが認められたため、調査前は円墳と考えられていた。墳頂部には、盗掘坑と思われる窪みがみられた。北東側3分の1程は現代の水路に切られている。墳丘の西半は調査区外である。

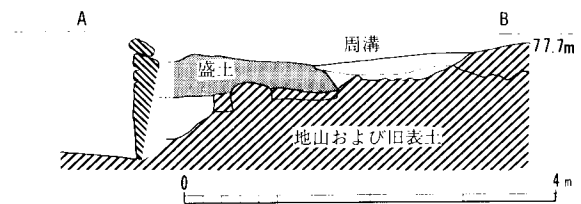
B. 墳丘

調査の結果、一辺約8mの方墳であることが判明した。残存高は約0.9mである。旧表土の上から1～2層、約0.5～0.8m盛土が認められた。墳丘中腹の北側には約4mの長さで、南側と東側にはL字状にそれぞれ外護列石がみられた。外護列石の大きさは約20～70cmである。

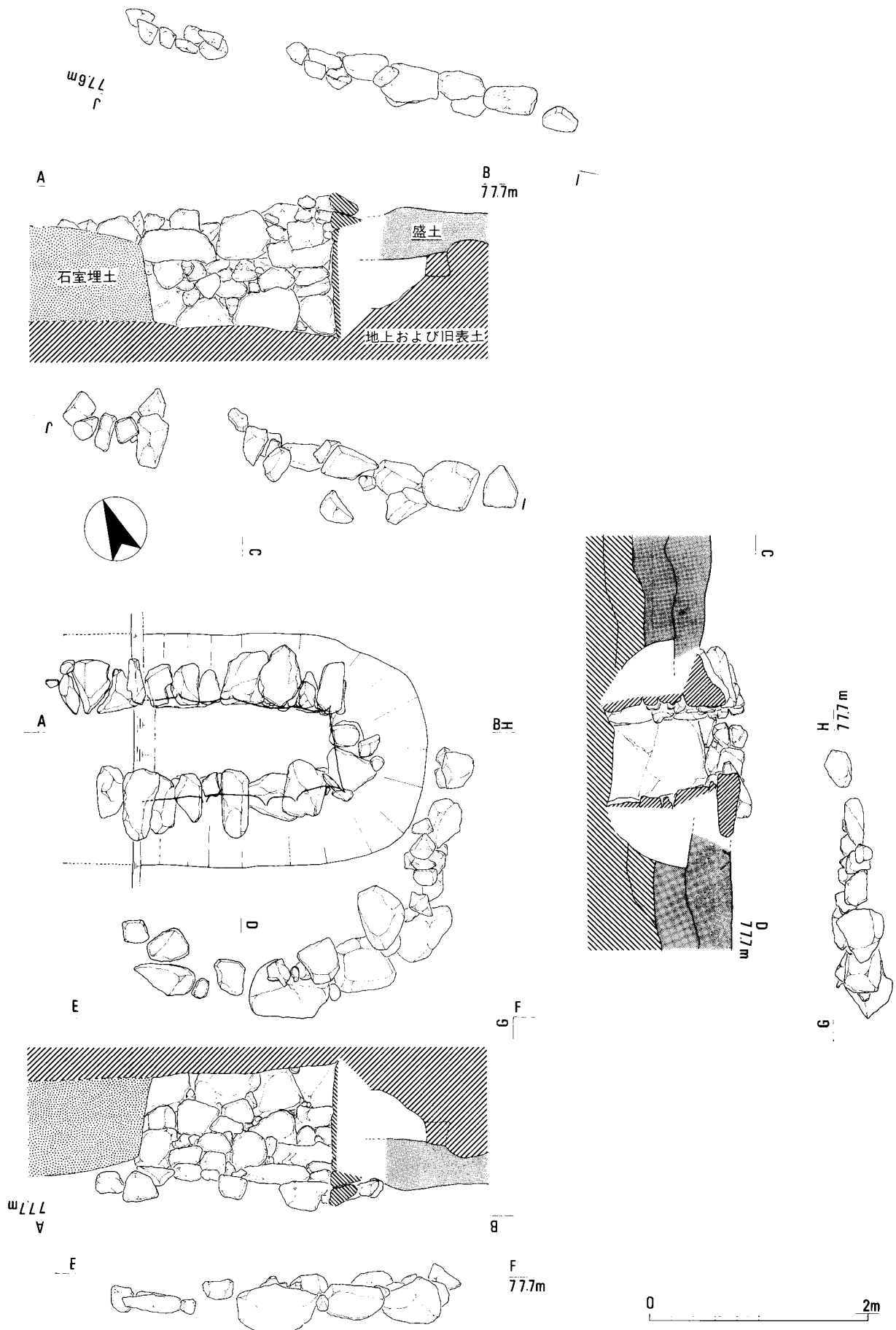
周溝は、幅1～3m、深さ約0.5mで、東側は8号墳と共有する。

C. 主体部

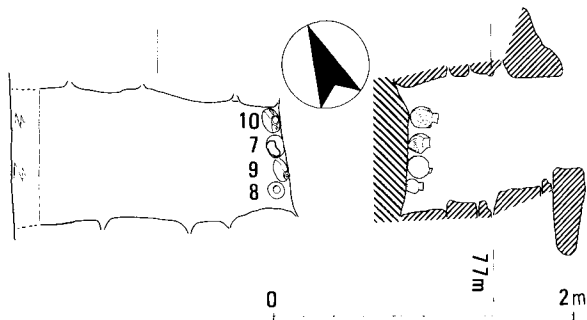
主体部の西半は調査区外のため東半のみ調査を行った。掘形は幅2.1mで、東側では旧表土から、北および南側では一層目の盛土後切り込んでいる。横穴



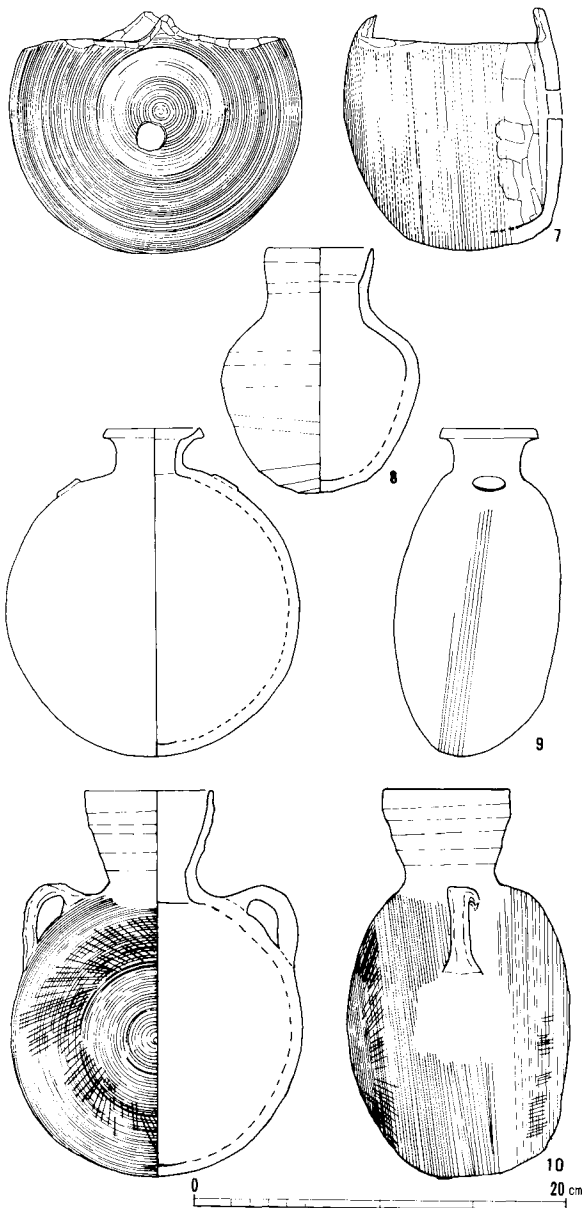
第73図 7号墳墳丘断面図（1：80）



第74図 7号墳実測図 (1 : 50)



第75図 7号墳遺物出土状況 (1:50)



第76図 7号墳出土遺物実測図 (1:4)

式石室と思われるが、袖部や羨道部については不明で、主軸はN68°Wと西すなわち堀坂川に向かって開口する。玄室の平面形は長さ1.6m以上、幅0.9mである。側壁は左右とも床面から約1.2mまで残存しており、右側壁はほぼ垂直であるが、左側壁は2段目から持ち送りがみられる。奥壁も高さ約1.2mまで残存しており、基底石は高さ約0.8mの石を一個据え、2段目からは、人頭大の石材を積み上げている。石室の石材は、閃緑岩、片麻岩、花崗岩、斑糲岩^④である。

D. 遺物出土状況

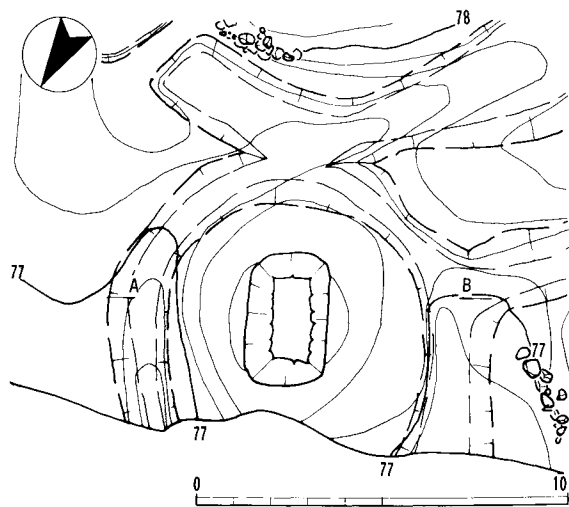
奥壁に接した床面から、須恵器提瓶(9・10)・特殊扁壺(7)・壺(8)が正立状態で並んで出土した。ほぼ原位置を保っているものと思われる。

特殊扁壺^⑤(7)は、提瓶の体部を焼成前に下半のみ切り残しへら状工具で波状に口縁を作ったもので、体部の中央、両側に一対の穿孔を施している。

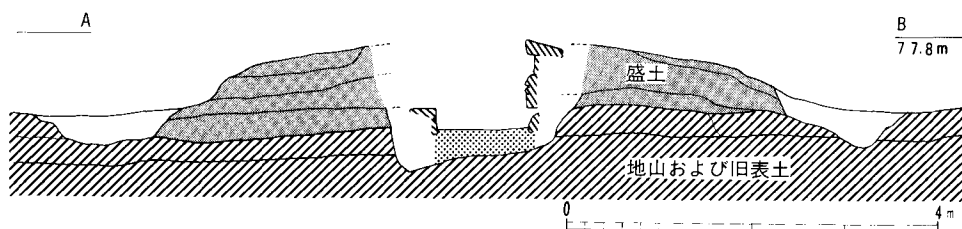
4. 8号墳

A. 調査前

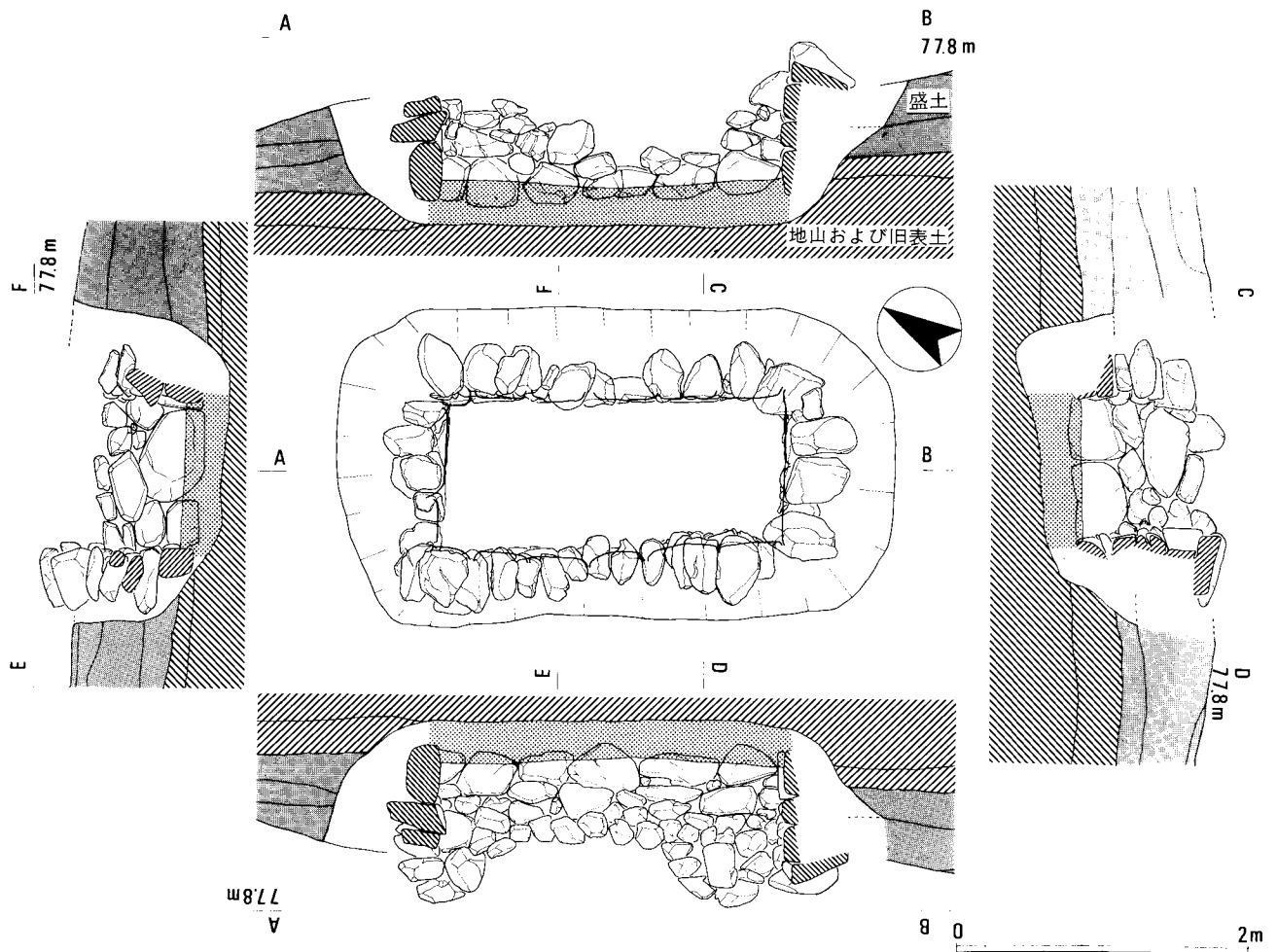
7号墳の北東に近接して、径8m、高さ0.5m程の高まりがみられた。



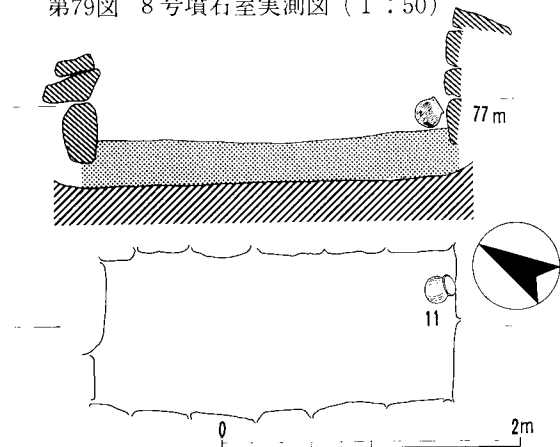
第77図 8号墳測量図 (1:200)



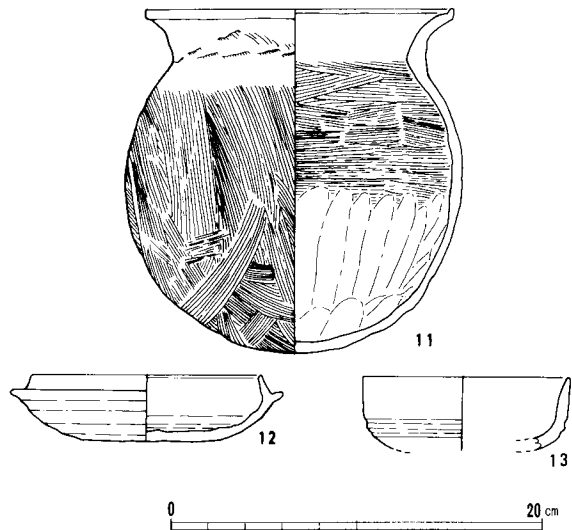
第78図 8号墳墳丘断面図 (1:80)



第79図 8号墳石室実測図 (1:50)



第80図 8号墳遺物出土状況 (1:50)



第81図 8号墳・9号墳出土遺物実測図 (1:4)

墳頂部には盗掘坑と思われる窪みがあり、小礫が散乱していた。北側3分の1は7号墳同様、現代の水路に削られて残存しない。

B. 墳丘

径約8mの円墳であるが、残存高は周溝底から1.2mである。旧表土の上に3~4層、約0.7~0.8m盛土されている。

周溝は幅0.8~1.5m、深さ0.3~0.4mで、西側は7号墳の周溝と共有する。

C. 主体部

掘形は2~3層目の盛土後切り込んでおり、掘形の平面形は長さ3.9m、幅2.1mの長方形である。

石室は竪穴式石室で主軸はN29°Wである。床面の平面形は長さ約2.4m、幅約1.0mの長方形である。東西の両側壁は長さ0.5m程の石を基底石とし、二段目以上は人頭大の石を積み上げる。残存状況の良好なところでは7段、床面からの高さは約1.0mである。両側壁とも2段目から若干の持ち送りがみられる。南壁および北壁は基底石を2個据えており、南壁は4段、約1mまで、北壁は3段、約0.6mまで残存する。南壁、北壁ともほぼ垂直に積み上げられ

ている。石材は、閃緑岩、片麻岩、花崗岩等である。

D. 遺物出土状況

南壁に接した床面で土師器甕(11)が一点出土しており、ほぼ原位置を保っているものと思われる。また周溝埋土からは須恵器杯身(12)が出土している。

5. 9号墳

A. 調査前

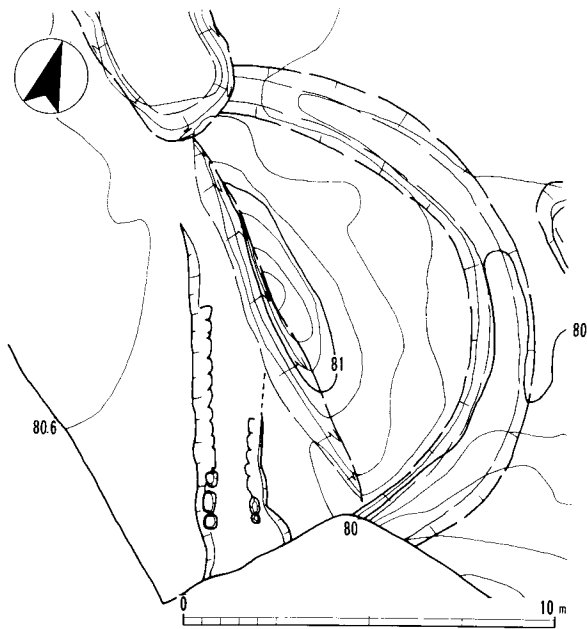
北東側斜面の最上部付近、発掘区の南端に位置し、墳頂部の標高は81.4mである。墳丘の北東側は調査区外へのびるが、径12m、高さ2mの円形の高まりが認められた。南西側すなわち発掘区側は2分の1程すでに土取りにより削られていた。

B. 墳丘

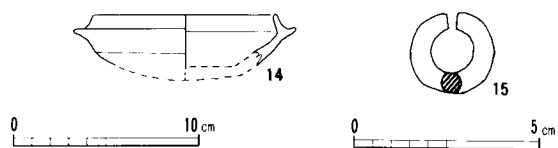
北側から西側にかけて幅2m、深さ30cm程の周溝が巡り、北側は21号墳の周溝と共有する。南西側はすでに削られており、その痕跡すら確認できなかった。

C. 遺物出土状況

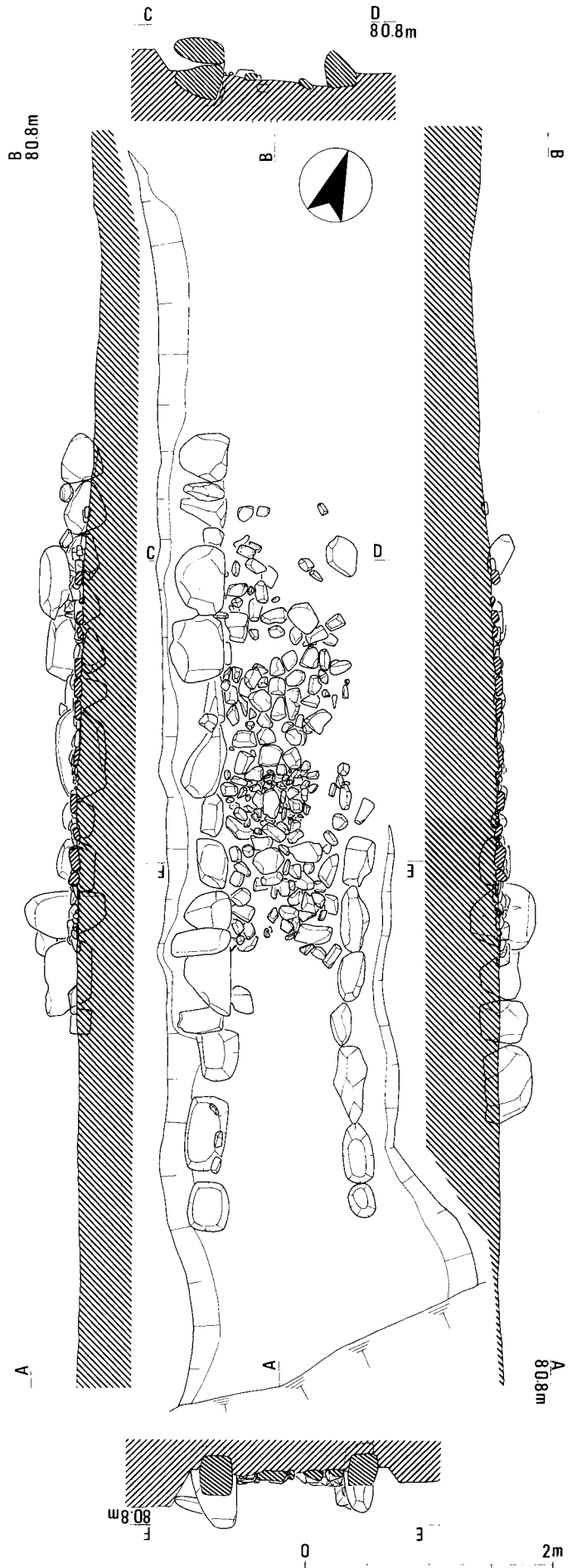
周溝埋土から小片ではあるが、須恵器杯(13)が出土した。



第82図 16号墳測量図 (1:200)



第83図 16号墳出土遺物実測図 (1:4、15は1:2)



第84図 16号墳石室実測図 (1:50)

6. 16号墳

A. 調査前

9号墳の西約25m、当古墳群における北東側斜面の古墳群では、最も高い標高81m付近に位置する。開墾により墳丘はそのほとんどが破壊されており、北東側に墳丘が約四分の一、高さ0.7m程残存する。

B. 墳丘

検出した周溝から径13mの円墳と推定される。

周溝の幅は1～2m程であるが、検出されたのは北および東側だけで、西側は開墾時に削平されたのか検出されず、南側も既に削り取られていた。

C. 主体部

主体部の掘形は深さ0.2～0.3m程しか残っていないが、検出面では長さ10m前後、幅約2mである。

横穴式石室で主軸はN20°Wである。全長6.3m以上、幅0.9mである。西側壁には高さ0.7m程の立柱石がみられ、これを袖石と考えるならば、玄室は長さ3.7m以上、羨道部は長さ2.6m以上の右片袖式の石室となる。玄室の床面には全面に5～20cm程の敷石がみられる。側壁は1～2段しか残存しておらず、奥壁については削平を受けており、石材の抜き取り穴すら検出出来なかった。

D. 遺物出土状況

表土から須恵器杯身(14)が、玄室石敷の間から耳環(15)が出土した。

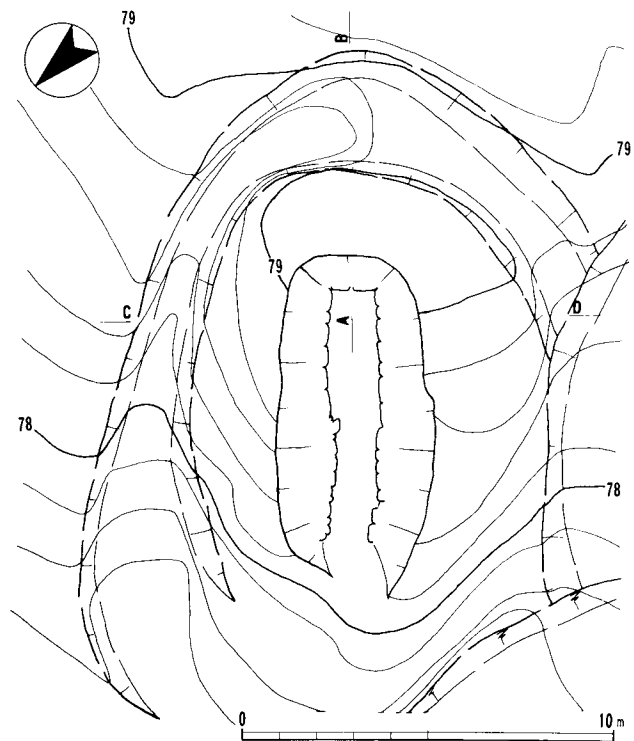
墳である。0.6m程の盛土が認められる。

周溝は幅1～3m、深さ0.5m程である。西側は22号墳の周溝に切られる。

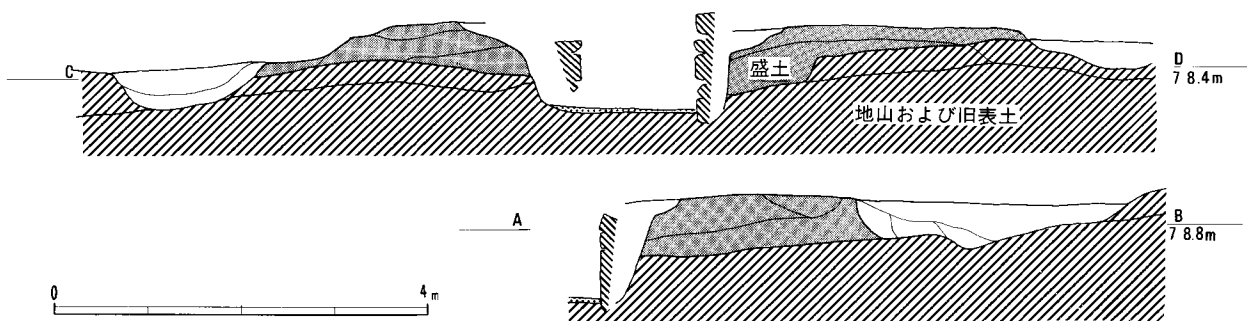
C. 主体部

掘形は2層目の盛土後、切り込んでおり、長さ約10m、幅約4.2mである。

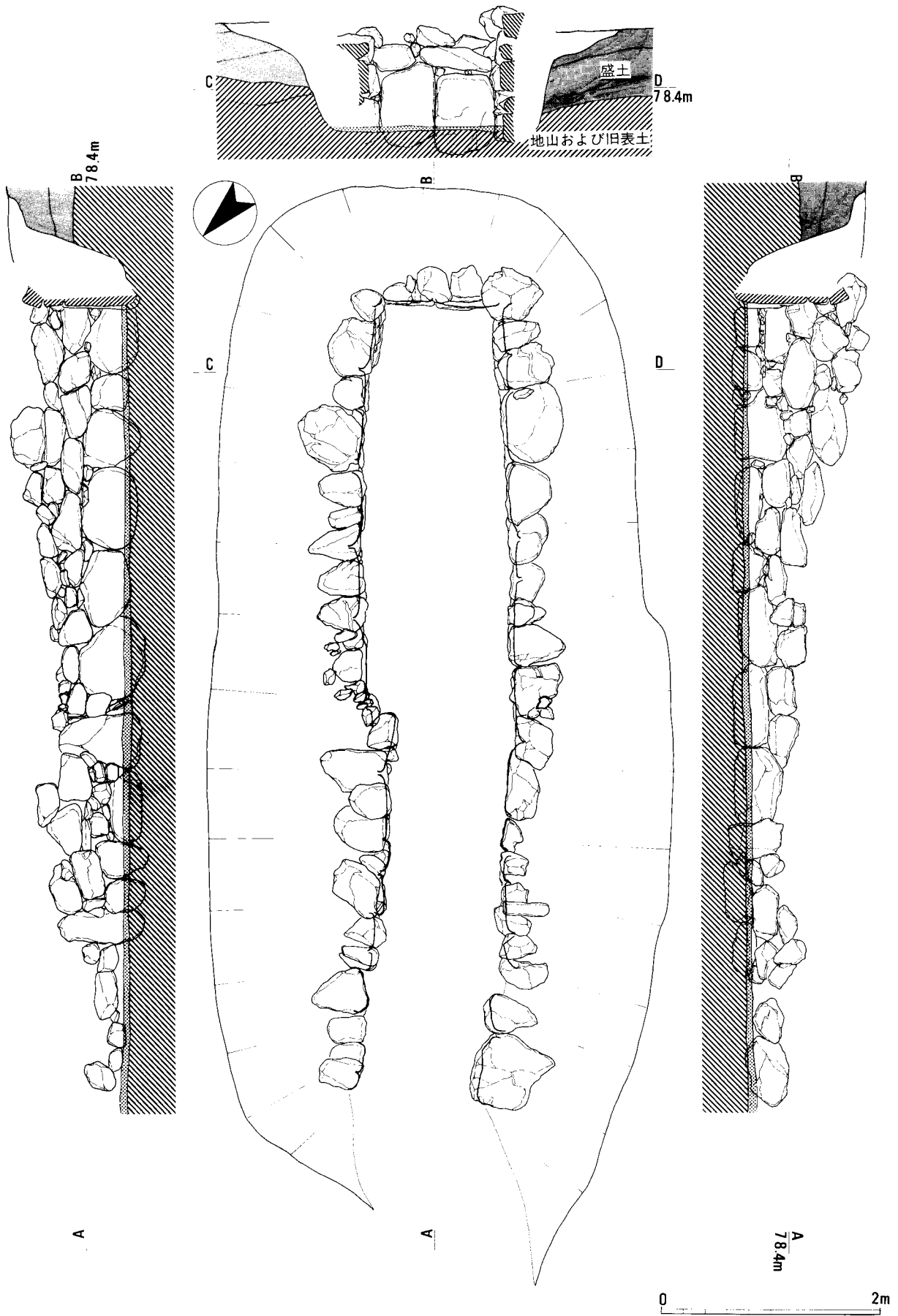
右片袖の横穴式石室で、主軸はN44°Wで北東に開口する。平面形は玄室が長さ3.7m、幅1.1～1.4mの長方形であるが、右側がやや胴張り気味である。羨道部は、長さ3.5m、幅1.1mである。側壁は残りの良い所で4段、約1.0mまで残存しており、基底石は長さ30cm～70cmの石材を使用している。奥壁は3段、0.8mまで残存しており、基底石は0.5×0.7mの石材を縦に2個据える。袖石は高さ約0.7mである。



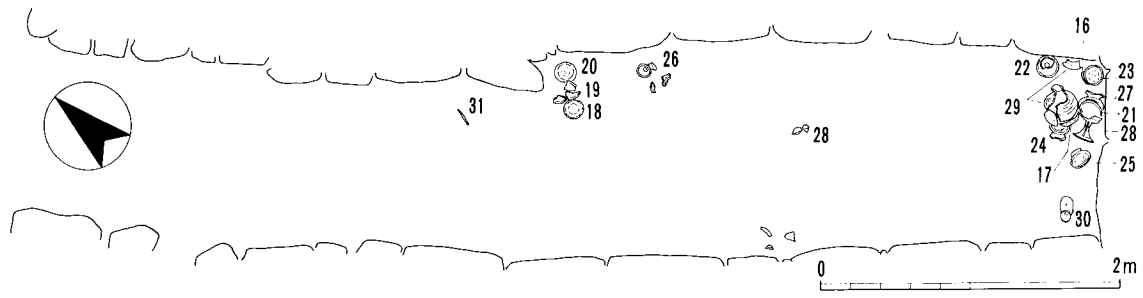
第85図 19号墳測量図(1:200)



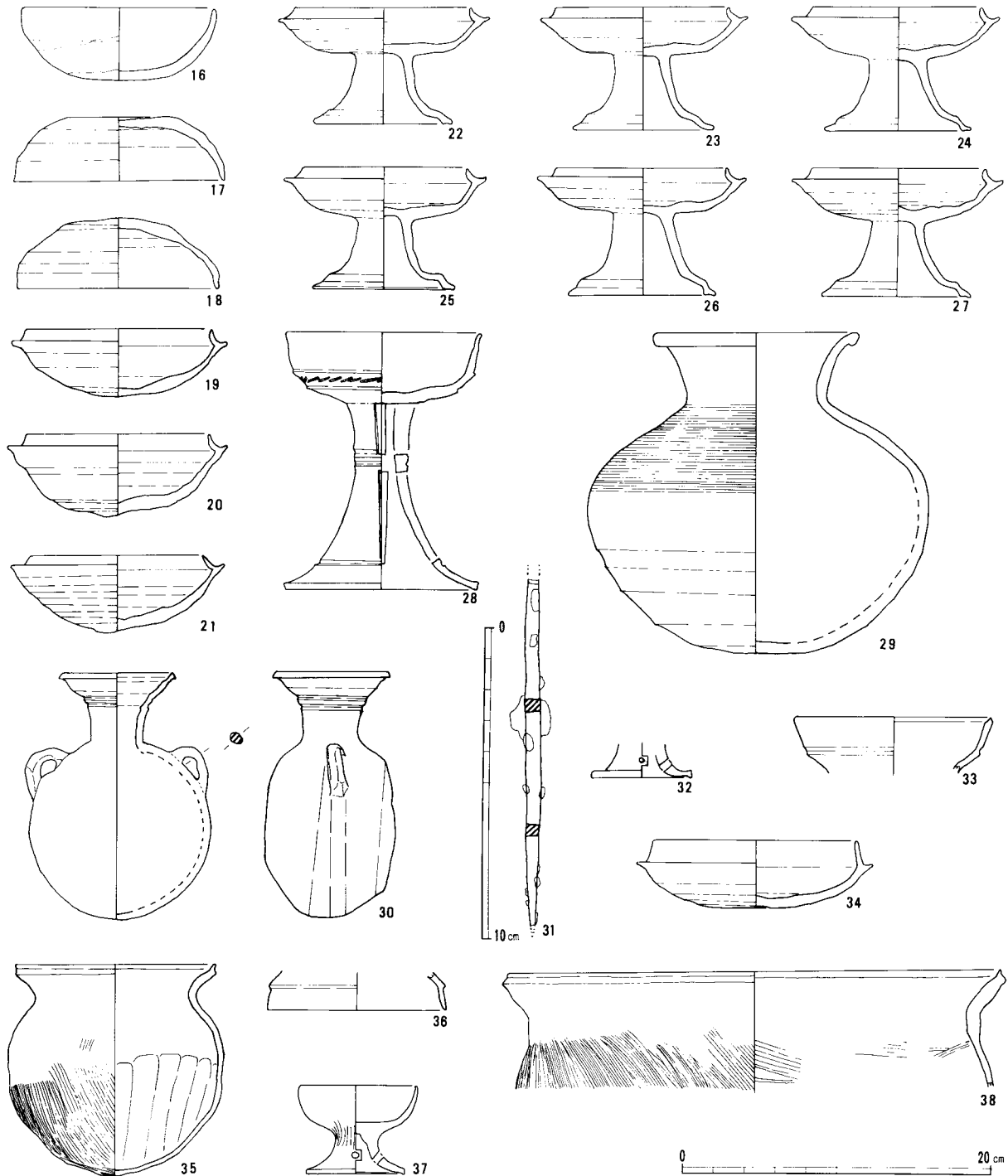
第86図 19号墳墳丘断面図(1:80)



第87図 19号墳石室実測図 (1:50)



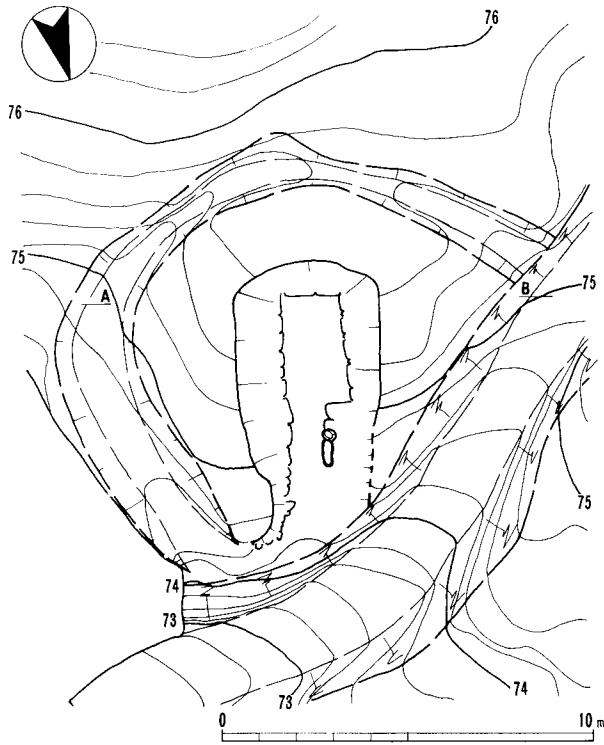
第88図 19号墳遺物出土状況 (1:50)



第89図 19号墳出土遺物実測図 (1:4、31は1:2)

D. 遺物出土状況

玄室の奥壁付近の床面からは土師器椀(16)、須恵器提瓶(30)・杯身(21)・杯蓋(17)・高杯

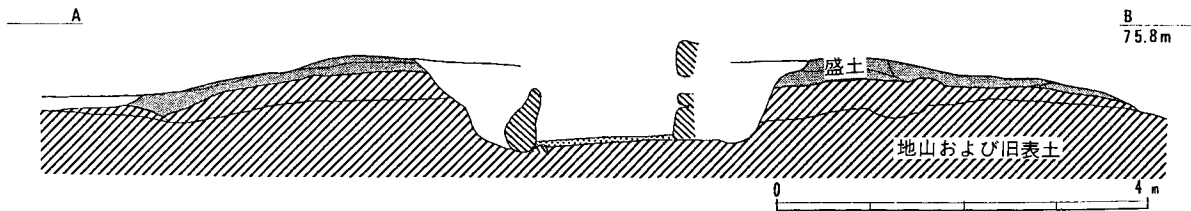


第90図 20号墳地形測量図(1:200)

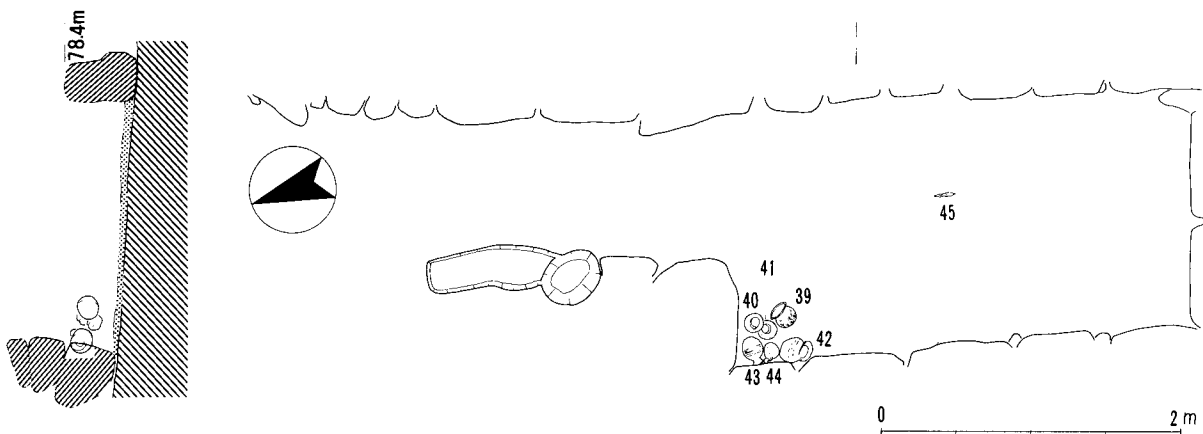
(22~25・28)・広口壺(29)がまとめて出土しており、(23)は正立、(22)は倒立している。玄室中央部からは須恵器高杯(28の破片)・杯身片が、袖石近くからは、須恵器杯身(19・20)・杯蓋(18)が出土しており、(18)は正立、(20)は倒立している。そこから少し離れて高杯(26)が出土している。袖石近くの羨道部からは鉄釘(31)が出土している。

高杯(22~27)は6点出土したがいずれも、有蓋短脚で、口径が10.6~11.5cm、器高7.5~8.2cmで、杯部外底部をロクロケズリしている。ロクロ回転は時計廻りで、胎土・焼成が酷似しており、同一窯の焼成と思われる。また(20)と(21)の杯身も同一窯の焼成と思われる。また杯身(18)と杯蓋(19)は共に明青灰色をしており、胎土、焼成とも酷似しており、セットであろう。

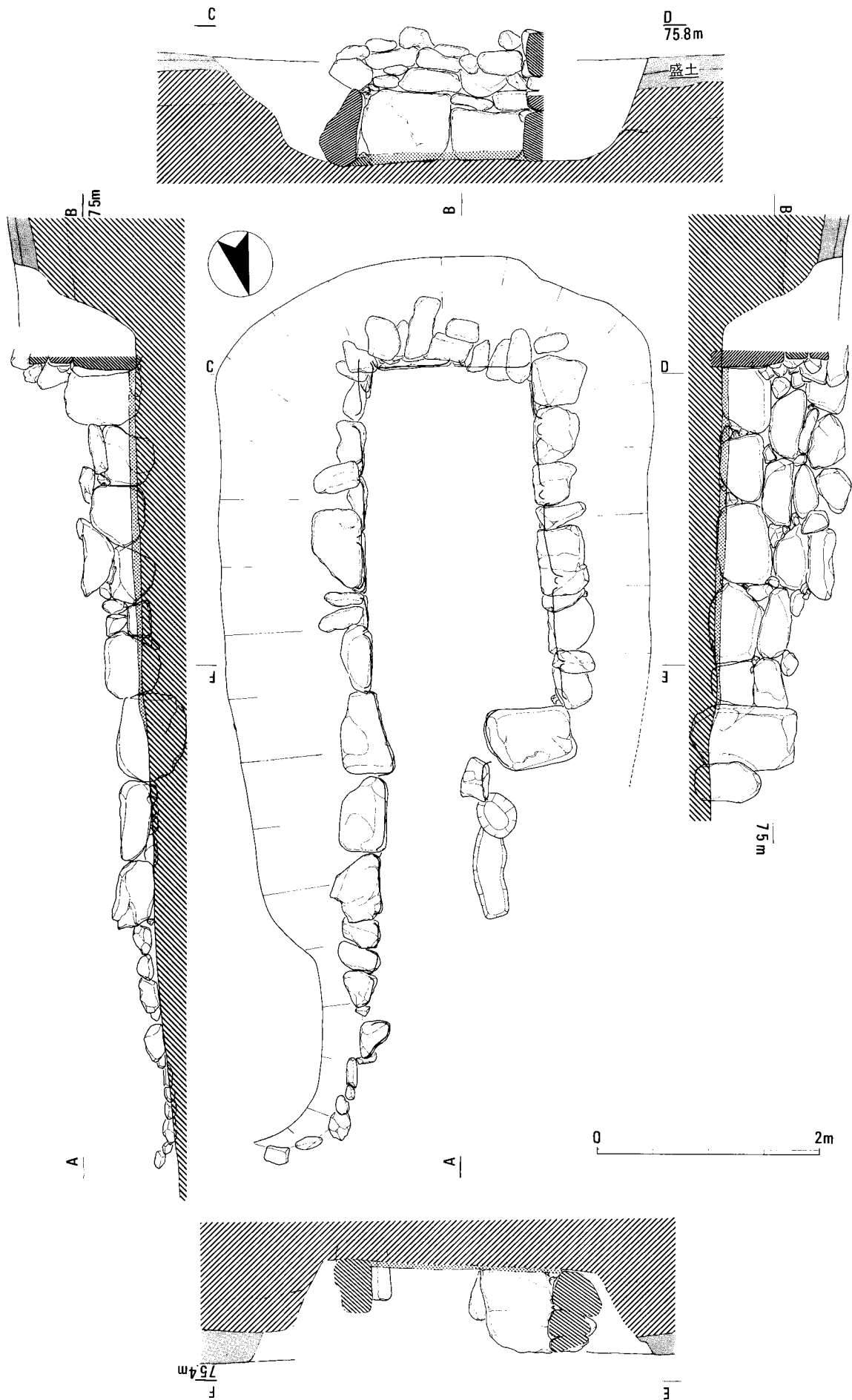
他に石室埋土からは土師器高杯(32)・甕(35)、須恵器杯身(34)・杯蓋(36)・甕(33)が出土している。周溝埋土からは土師器甕(38)・高杯(37)が出土している。土師器高杯(32・37)は口径7.5cm、器高5.7cmの小型のもので脚部の円孔は1カ所である。



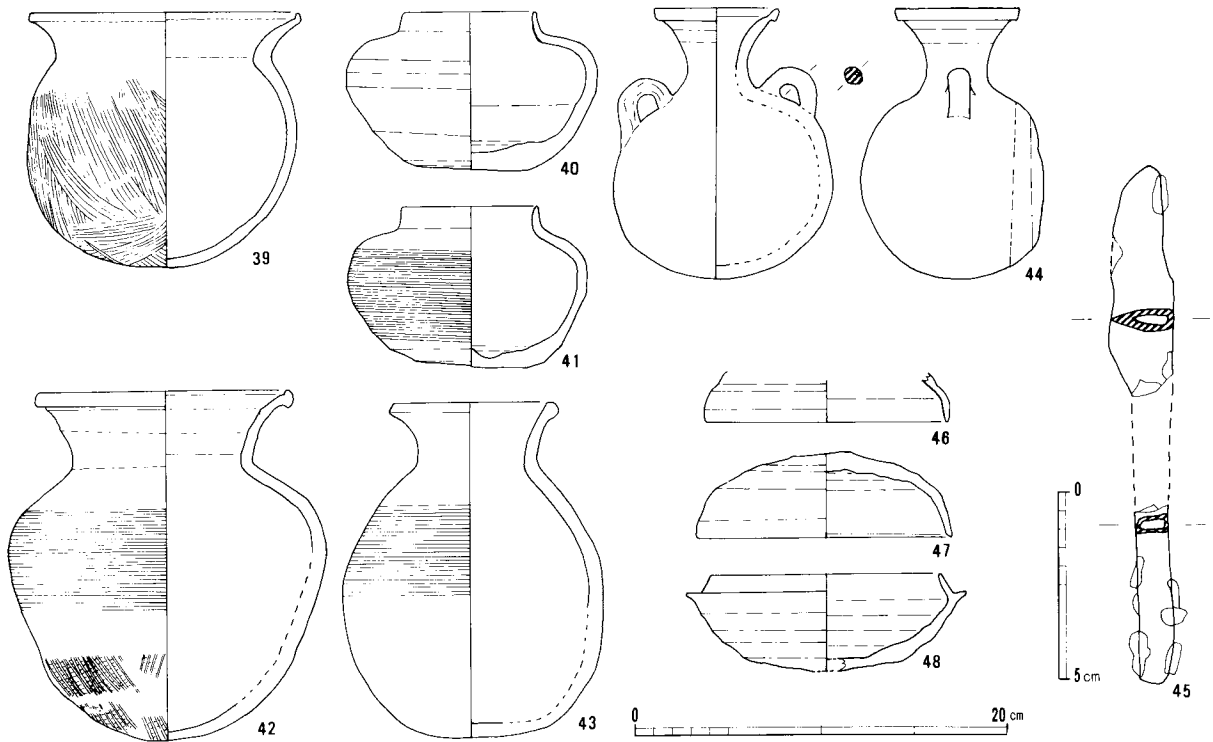
第91図 20号墳墳丘断面図(1:80)



第92図 20号墳遺物出土状況(1:50)



第93図 20号墳石室実測図 (1 : 50)



第94図 20号墳出土遺物実測図（1：4、45は1：2）

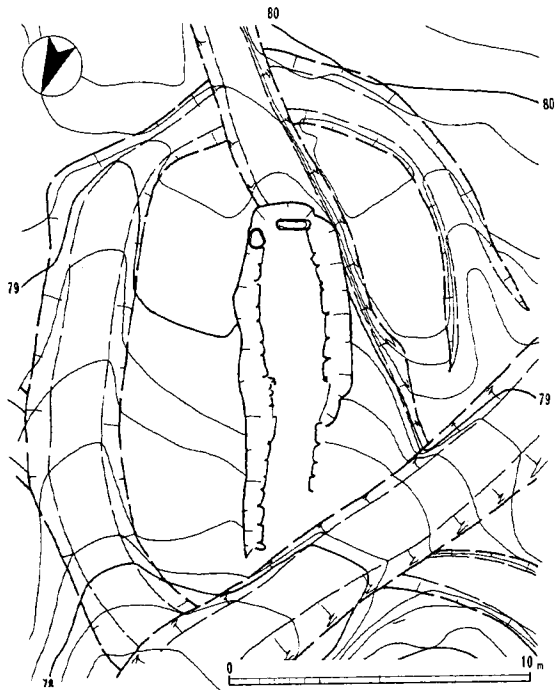
8. 20号墳

A. 調査前

北西側斜面の北東端に位置し、発掘区の北端にあたり、標高は76mである。墳丘はすでに削平されていたが、石室の石材が二個露呈していた。

B. 墳丘

径12mの円墳である。旧表土の上に2層、約20cmの盛土がみられ、高さは0.6mまで残存する。



第95図 22号墳測量図（1：250）

周溝は幅1～2m、深さ20cm程である。北側は現道により削り取られている。

C. 主体部

掘形は2層目の盛土後切り込んでおり、玄室部での幅は3.9mである。左片袖式の横穴式石室で、主軸はN18°Eと北に開口する。玄室の平面形は長さ3.0m、幅1.6m、羨道部は長さ3.3m、幅0.8mである。側壁は残りの良いところで、4段、約1.1mまで残存しており、基底石は長さ0.7m程の石を据えている。袖石は、平面形が0.8×0.6m、高さ1.0mの直方体の石を使用している。奥壁は4段、約1.1mまで残存しており、基底石は幅0.7m程の石材を2個使用している。地山から床面までの高さは玄室で約6cmであるが、羨道部では地山が床面となる。

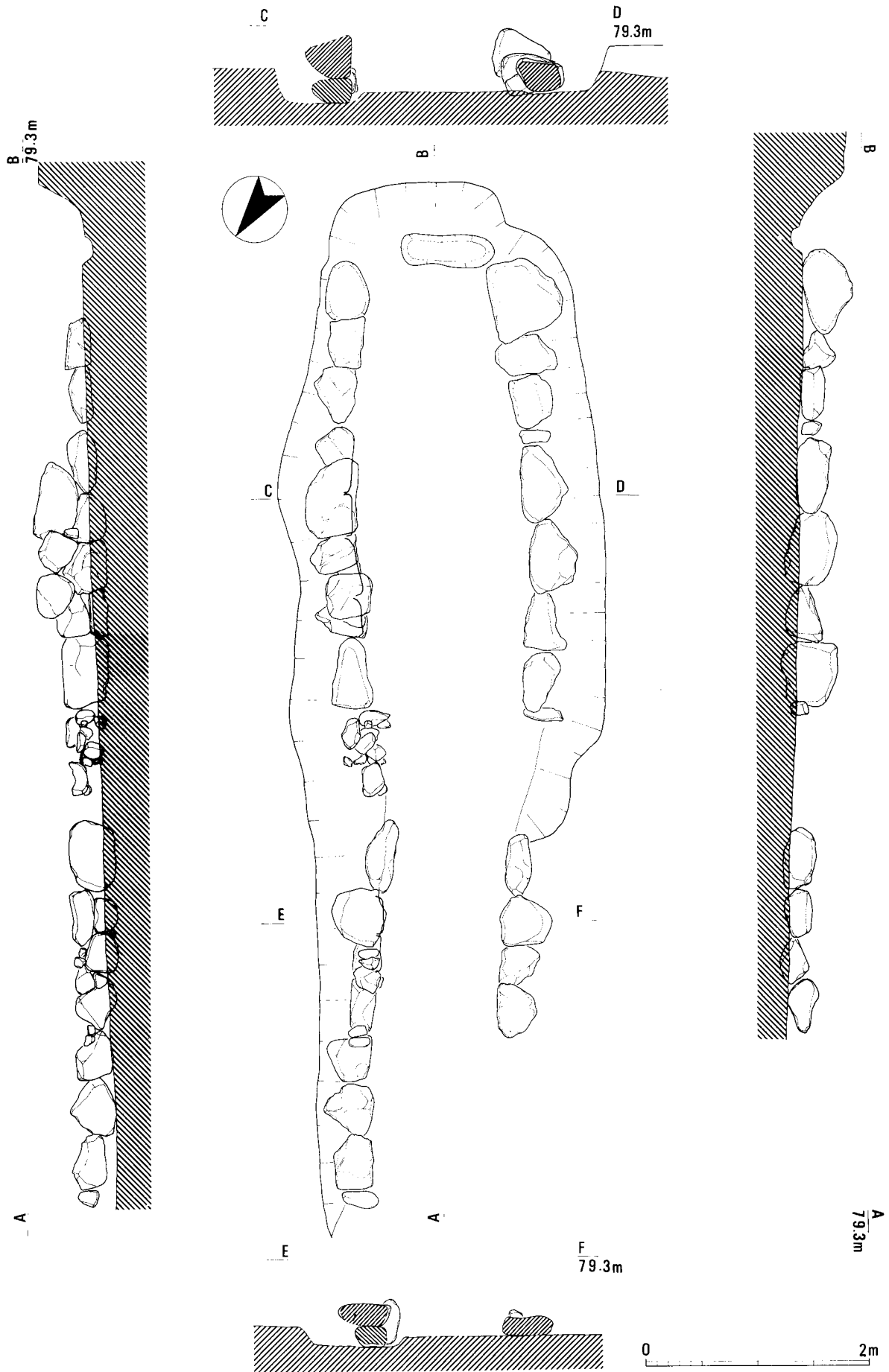
D. 遺物出土状況

玄室の袖石近くの床面から土師器甕（39）、須恵器広口壺（42）・短頸壺（40・41）・壺（43）・提瓶（44）がまとめて出土し、玄室の中央部床面からは鉄製刀子（45）が一点出土した。いずれも原位置をほぼ保っているものと思われる。

また周溝埋土からは、須恵器杯身（48）・杯蓋（46・47）が出土した。

9. 21号墳

A. 調査前



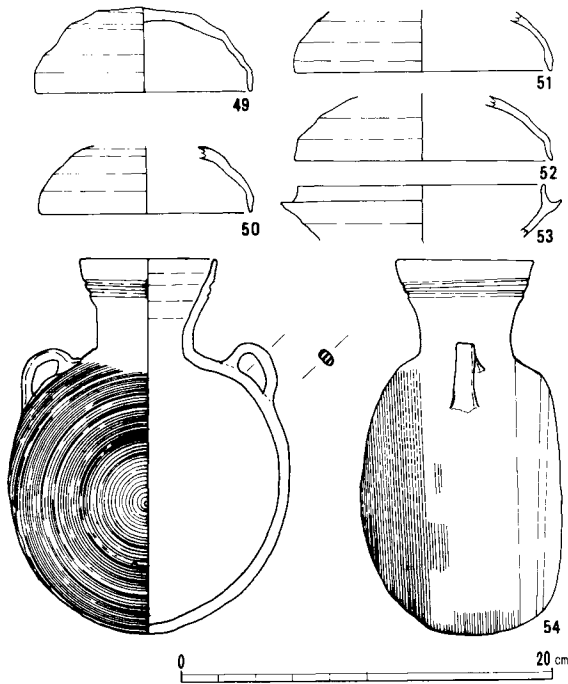
第96图 22号墳石室実測図 (1:50)

9号墳の北側に近接して径10m、高さ0.5m程の高まりが認められた。標高は80.2mである。

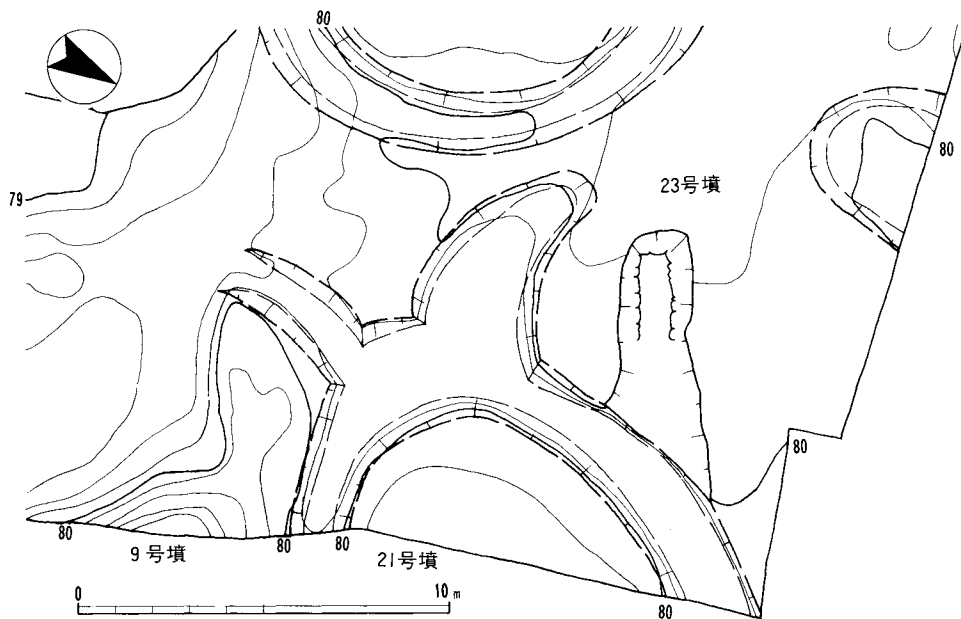
B. 墳丘

墳丘の東側は調査区外であるため、全容は明らかでないが、検出した周溝の径から判断して、径12m前後の円墳と推定される。

調査を行った墳丘の西側で、幅1m、深さ0.3~0.4mの周溝がみられたが、西側では23号墳を切り、南側の周溝は9号墳の周溝と共有する。



第97図 22号墳出土遺物実測図(1:4)



第98図 9・21・23号墳測量図(1:200)

10. 22号墳

A. 調査前

19号墳の南西に位置しているが、現水路およびみかん畑の開墾により、墳丘はすでに削平を受けてその痕跡すらとどめておらず、調査前は古墳の存在は考えられなかった。

B. 墳丘

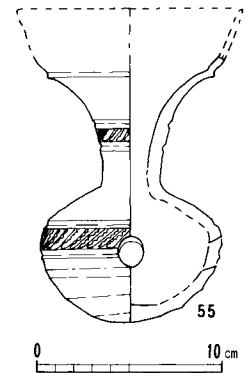
墳丘は残存していないが、検出した周溝から判断して、推定長径16m、短径13mの石室の軸方向にやや長い円墳と思われる。

周溝は幅1~3m、深さ約0.6m程残存する。

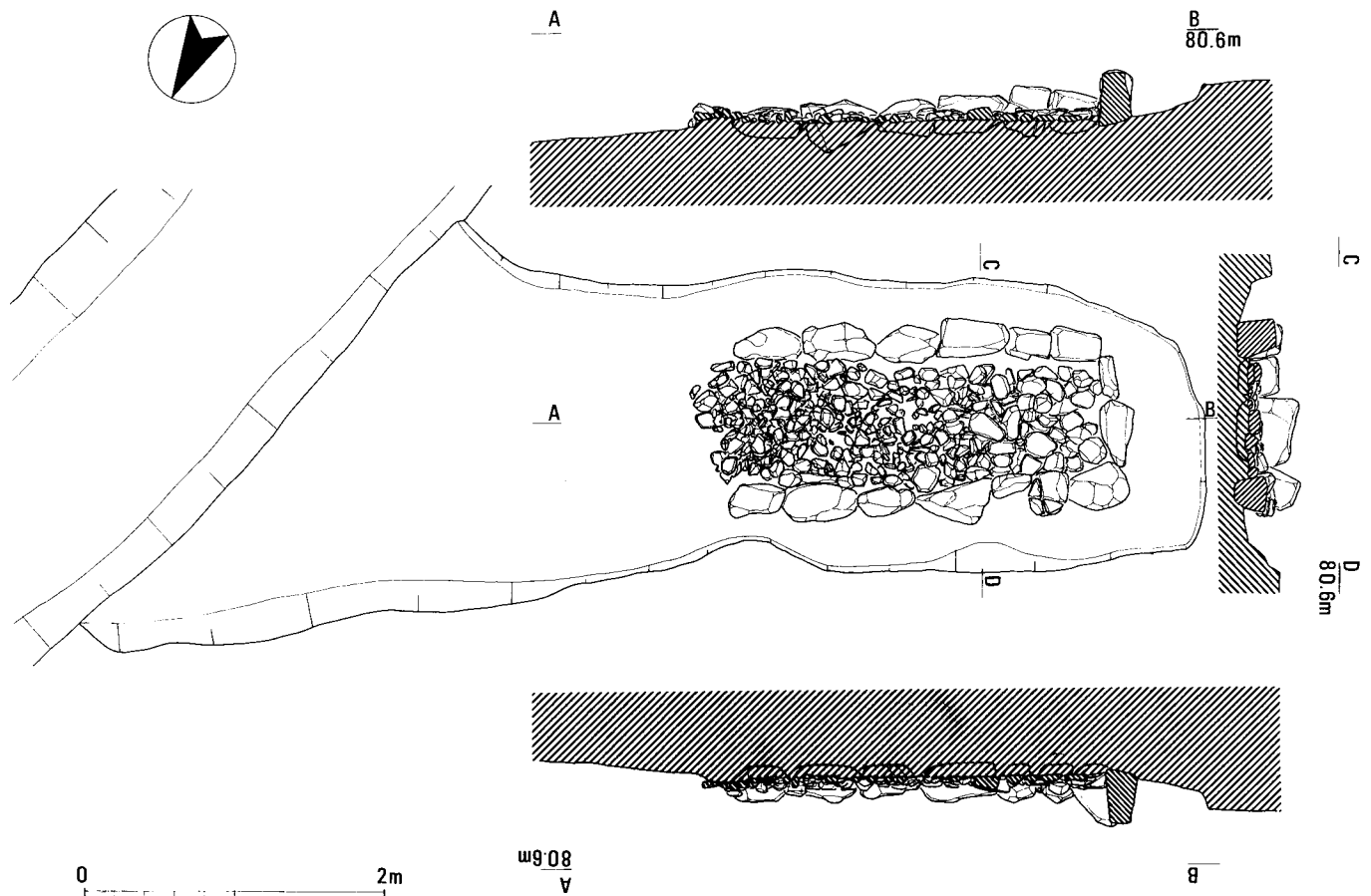
C. 主体部

掘形は深さ0.4m程しか残存していないが、検出面で長さ9.4m、最大幅2.8mである。

横穴式石室で、主軸はN20°Wである。石室の残存状況が悪く、正確な規模は決め難いが、平面形は、玄室が長さ3.8m前後、幅1.1~1.5mで、やや胴張りとなる。羨道は長さ4.5m以上、幅1.0mでやや東寄りに開口する。右側壁は奥壁から4m付近で狭くなっており、袖石の抜き取り穴は検出できなかったが、残存している石の並びから判断するならば、右片袖式石室の可能性が高い。しかし左側壁のラインもこのあたりでやや狭くなっており、両袖式の可能性も否定できない。側壁は1~2段しか残存しておらず、基底石は長さ0.5m程の石を使用している。奥壁の



第99図 23号墳出土遺物実測図(1:4)



第100図 23号墳石室実測図 (1:50)

古墳	墳形	墳丘規模	残存高	主体部	玄室規模(m)	羨道規模(m)	石室方向	備考
5号墳	円墳	(径14m)	2m	(石室)	——	——		周溝のみ調査
6号墳	円墳	径12~15m	2m	右片袖 横穴式石室	3.6×1.3	4.1×0.8	N33° E	外護列石
7号墳	方墳	一辺8m	0.9m	横穴式石室	1.6以上×0.9	——	N68° W	外護列石
8号墳	円墳	径8m	1.2m	竖穴式石室	2.4×1.0	——	N29° W	
9号墳	円墳			(石室)	——	——		周溝のみ調査
16号墳	円墳	径13m		横穴式石室	3.7以上×0.9	2.6以上×	N20° W	石敷
19号墳	円墳	径12~15m		右片袖 横穴式石室	3.7×1.1~1.4	3.5×1.1	N44° W	
20号墳	円墳	径12m	0.6m	左片袖 横穴式石室	3.0×1.6	3.3×0.8	N18° E	外護列石
21号墳	円墳	(径12m)			——	——		周溝のみ調査
22号墳	円墳	径13~16m		右片袖? 横穴式石室	3.8×1.1~1.5	4.5以上×1.0	N20° W	
23号墳	円墳	(径13m)		(横穴式石室)	2.7以上×0.8	不明	N64° E	石敷

第19表 平林古墳群調査古墳の概要一覧

石材はすでに残存していなかったが、80cm×30cmの抜き取り穴を検出した。

D. 遺物出土状況

石室埋土から須恵器杯身(53)・杯蓋(49~52)・提瓶(54)が出土した。(52)と(53)は色調・焼成・胎土が同じでセットと思われる。

11. 23号墳

A. 調査前

21号墳の西側に位置するが、削平を受けており、調査前はその痕跡すら認められなかった。

B. 墳丘

検出した周溝から径13mの円墳と推定される。

幅2~3m、深さ20cm程の周溝が南側と北西側でわずかに残存する。北側は削られて既になく、東側

の周溝は21号墳の周溝に切られる。

C. 主体部

石室の掘形は深さ0.1m程しか残存していないが、検出面で長さ7.5m以上、幅2m前後である。

横穴式石室で、主軸はN64°Eである。長さ2.7m以上、幅0.8mである。側壁、奥壁とも基底石のみ残存しているが、石室の東半分は木の根によって攪乱をうけており、石材抜き取り穴は確認できなかった。床面は全面に5~20cm程の大きさの敷石がみられる。

D. 遺物出土状況

玄室の石敷上から須恵器甕(55)が、一点出土したのみである。

3. その他の遺物

1. 縄文時代

A. 石器

削器(56・57)、楔形石器(58)、石鏃(59~61)、二次加工のある剥片(62)等が出土した。

B. 縄文土器

19号墳羨道部埋土から(63)が、9号墳周溝埋土

から(64)が出土した。

2. 平安~鎌倉時代

22号墳の表土および石室埋土から土師器杯(65~70)・甕(71)、山茶椀(72~75)、山皿(77)が出土した。

表面採集遺物としては、山茶椀(76)がある。

4. 結 語

1. 立地

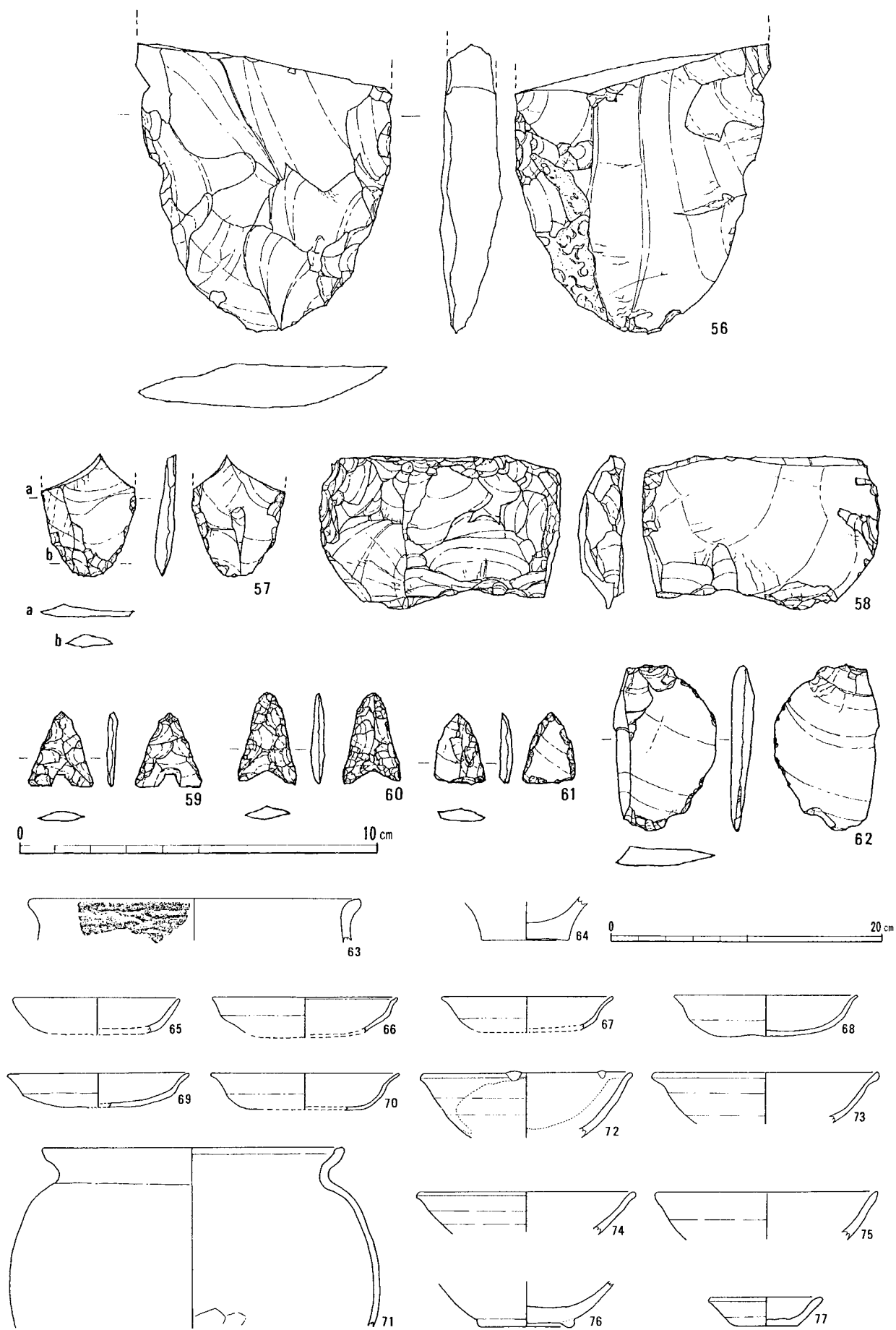
平林古墳群は、未調査の古墳も含めると、計23基の古墳群である。古墳の分布については、堀坂川に北面する緩斜面上に立地する北支群と、その南側の平坦部および北東側に張り出す緩斜面上に立地する南支群に大別できる。今回の調査は古墳群を南北に縦断する形で道路建設が計画され、古墳群の中央を調査することとなり、北支群は5・6・7・8・19・20・22号墳、南支群は9・16・21・23号墳の調査をおこなった。

北支群は1~8・19・20・22号墳の11基により構成されるが、北支群についてはさらに二分することができる。北支群-aは、今回調査古墳では調査区の北西に位置する7・8号墳で、石室は北西すなわち堀坂川に向かっており、墓道は調査区外の北に、

堀坂川に沿って東から西に設けられていたものと思われる。周溝のみの調査となった5号墳や調査区外の1~4号墳も石室が北西に開口していると考えられ、おそらくこの群に属するであろう。北支群-bは、20・19・6・22号墳の4基からなる。石室は北西または北東に開口しているが、いずれも調査区の北端から西端中央部に走る現在の林道に向かって開口していることから、林道がそのまま当時の墓道と重複していたと考えられる。

南支群は、9~18・21・23号墳の12基により構成される。このうち標高が高い所に位置する9・16・21・23号墳の調査をおこなった。但し、9・21号墳は周溝のみの調査であった。

2. 石室形態



第101図 遺物実測図 (56~62は 2 : 3、63~77は 1 : 4)

今回の調査では6・8・16・19・20・22・23号墳の計8基については主体部の調査を行った。8号墳は竪穴式石室であるが、他は横穴式石室である。調査を行った古墳の石室は天井石まで残存するものは1基もなく、石室全体の構造は不明である。床面の平面形については、いくつかに分けることが出来る。

①まず竪穴石室の8号墳であるが、床面の平面形は幅1.0m、長さ2.4mである。次に横穴式石室であるが、②20号墳は左片袖式石室であるが、袖石が大きく、片袖を強く意識している。玄室は幅1.6m、長さ3.0mでその比率は1：1.9である。③6・19号墳は右片袖式石室であるが、袖石はあまり大きくない。玄室は最大幅1.3～1.4m、長さ3.6mでその比率は1：2.6～2.8である。羨道部の幅は1m前後のものである。④22号墳は6・19号墳より大型であるが、平面形は似ている。右片袖式石室の可能性が高く、玄室は幅1.1～1.5m、長さ3.8mでその比率は1：2.5である。羨道部の長さは4.5m、幅は1mのものである。⑤7号墳は玄室の幅が0.9mと狭いものであるが、長さは不明である。⑥南支群に属する16・23号墳の2基は、共に石室の長さは不明であるが、玄室は幅0.8～0.9mと7号墳とはほぼ同じであるが敷石が見られるものである。16号墳は袖部を若干意識した右片袖式石室、23号墳は不明である。

3. 出土遺物

各古墳の石室や周溝等からは数は少ないながらも遺物が出土している。個々の古墳の出土遺物の時期については主体部が残存していた古墳についてのみ、^⑦田辺編年により須恵器杯身・杯蓋を中心にふれておきたい。

6号墳石室からは須恵器が6点出土しているが、杯身(2・3)についてはTK217の古い段階と考えている。7号墳石室出土遺物も6号墳出土遺物とはほぼ同じ時期でよいであろう。8号墳の石室からは土師器甕(11)しか出土していないが、周溝から出土している杯身(12)についてはTK209と考えている。16号墳出土遺物については杯身(14)が表土から出土しており、TK217の古い段階と考える。19号墳出土遺物については二時期あり、羨道部埋土出土の杯身(34)をTK43と考え、玄室出土遺物の杯身(19

～21)、杯蓋(16・17)高杯(22～27)については6号墳出土遺物よりも若干古い要素を持つがTK217の古い段階におさまるものと考えている。20号墳石室から出土している壺(40～43)等はTK209の古い段階と考え、周溝出土遺物の杯身(46)杯蓋(47～48)については器形は古い要素を持つが調整技法からTK209の新しい段階と考える。22号墳の石室埋土出土の杯身(53)、杯蓋(49～52)は、TK217の古い段階と考えている。23号墳石室出土の甕(55)はTK209と考える。以上、平林古墳群の出土遺物の時期については、古いものでTK43、新しいものでTK217の古い段階であると思われる。

4. 築造時期

当古墳群の築造順は、石室形態から考えると20号墳が最も古く、次に6・19・22号墳、そして7・16・23号墳となる。各古墳から出土した遺物の編年観とは必ずしも一致していないが、追葬あるいは後世の攪乱による混入等がその理由かと思われる。したがって出土遺物の時期を各古墳の築造時期と考える訳にはいかないが、平林古墳群としては6世紀後半から7世紀前半にかけて築造されていったと考えてよいであろう。

〔註〕

- ① 松阪市史編さん委員会『松阪市史 第二巻史料篇 考古』松阪市 1987
- ② 『日本歴史地名大系 第24巻 三重県の地名』平凡社 1983
- ③ 註①に同じ
- ④ 津西高等学校教諭 磯部克氏の御教示による
- ⑤ 県下二例目の出土である。一例目は度会郡玉城町大仏山古墳群出土のもので、現在神宮徴古館に所蔵されている。なお全国的な出土例は、当古墳群を含めると7例目である。
 - ・『三重考古図録』三重県教育委員会 1954
 - ・『小俣町の遺跡』皇学館大学考古学研究会 1985
 - ・柴垣勇夫「特殊須恵器の器種と分布」『愛知県陶磁資料館研究紀要6』愛知県陶磁資料館 1987
 - ・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 京都府立山城郷土資料館『発掘成果速報—昭和62年度の調査から—』京都府立山城郷土資料館 1988
- ⑥ 註④に同じ
- ⑦ 田辺昭三『陶邑古窯址群I』平安学園考古クラブ 1966
なお遺物の編年観については奈良大学助手植野浩三氏より御指導、御助言を賜った。

出土地点	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考	整理番号
5号墳・周溝	須恵器	甕	口径(13.0) 器高 27.0	胴部球状	口縁部ヨコナデ 胴部外面タタキ・カキ目 胴部内面同心円スタンプ	灰白色	並	やや軟		21-0071
6号墳・ 玄室 No.2	須恵器	杯身	口径 11.2 器高 3.3	たちあがりは低く内傾	ロクロナデ 底部ヘラ切り未調整、一部ロ クロケズリ	オリーブ 灰色	砂粒を 含む	良好	ロクロ回転逆時計廻り (3)と同窯か?	21-0002
6号墳・ 玄室 No.5	須恵器	杯身	口径 10.8 器高 3.5	たちあがりは低く内傾	ロクロナデ 底部ヘラ切り未調整	オリーブ 灰色	砂粒を 含む	良好	ロクロ回転逆時計廻り (2)と同窯か?	21-0005
6号墳・ 玄室 No.3	須恵器	高杯	口径 10.8 器高 17.5	無蓋長脚 三方向に小突起 脚部は上段に貫通しない透かし 下段に三方向と四方向、沈線	杯部底に刺突文	灰色	細砂粒を 含む	焼き割れ 自然釉		21-0003
6号墳・ 玄室 No.4	須恵器	甕	口径 12.6 器高 15.3	口縁部ラッパ状 体部に2本の沈線 頸部に2本の沈線	底部外面乱ナデ	暗青灰色	砂粒を 含む	良好 自然釉		21-0004
6号墳・ 玄室 No.1	須恵器	提瓶	口径 器高 器体径 16.5	鈎状の把手	体部カキメ	青灰色	3mm未満 の砂粒を 含む	良好	体部に「サ」字状のヘラ記号	21-0001
7号墳・ 玄室 No.2	須恵器	特殊偏 壺	口径 器高 12.8	提瓶の体部を下半のみ切り残し、 波状に口縁をつくる。体部中央、 両側面に二対の穿孔	口縁部はヘラによる成形 体部カキメ ヘラケズリ	青灰色	良好	良好 自然釉		21-0007
7号墳・ 玄室 No.4	須恵器	壺	口径 5.6 器高 13.0	直口壺	ロクロナデ 底部ヘラケズリ(ロクロ未使 用)	暗青灰色	砂粒を 含む	自然釉		21-0009
7号墳・ 玄室 No.3	須恵器	提瓶	口径 5.0 器高 17.5 器体径 15.7	口縁部外反 円盤状突起	体部カキメ	オリーブ 灰色	4mm未満 の砂粒を 含む	焼き割れ 自然釉		21-0008
7号墳・ 玄室 No.1	須恵器	提瓶	口径 6.8 器高 20.6 器体径 15.6	環状の把手	体部カキメ	青灰色	細砂粒を 含む	良好 自然釉		21-0006
8号墳・玄室	土師器	甕	口径 17.0 器高 18.4	胴部は球状 口縁部外反、端部は内側へつま み上げる	口縁部ヨコナデ 胴部外面ハケメ 胴部内面上半ハケメ下半ケズリ	淡黄色	砂粒を 含む	並		21-0010
8号墳・周溝	須恵器	杯身	口径 12.4 器高 3.6	たちあがりは低く内傾 底部平底	ロクロナデ 底部外面ヘラケズリ 底部内面一方向ナデ	オリーブ 灰色	砂粒を 含む	良好	ロクロ回転逆時計廻り	21-0011
9号墳・周溝	須恵器	杯	口径(11) 器高	沈線2本	ロクロナデ	青灰色	良好	良好 自然釉	ロクロ回転逆時計廻り	21-0012

第20-1表 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	器種	器形	法量 (cm)	形態の特徴	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考	整理番号
14	16号墳・盛土	須恵器	杯身	口径 (9.6) 器高 一	たちあがりは低く内傾	ロクロナデ	灰色	砂粒を含む	並		21-0014
15	16号墳・玄室	金属製品	耳環	径 2.2 断面径0.5						細地金張り	21-0015
16	19号墳・玄室 No.19	土師器	椀	口径 12.2 器高 4.7	底部平底 口縁部内弯、端部は丸い	粘土紐つなぎ痕 口縁部ヨコナデ	黄棕色	砂粒を含む	並		21-0032
17	19号墳・玄室 No.9	須恵器	杯蓋	口径 13.7 器高 4.1		ロクロナデ	青灰色	砂粒を含む	焼き服れ 自然釉	ロクロ回転時計廻り	21-0024
18	19号墳・玄室 No.14	須恵器	杯蓋	口径 13.0 器高 4.5		ロクロナデ 天井部へラ切り未調整	明青灰色	小石を含む	良好	(19) と同窯か?	21-0028
19	19号墳・玄室 No.15	須恵器	杯身	口径 12.0 器高 4.4	たちあがりは低く内傾	ロクロナデ	明青灰色	砂粒を含む	自然釉	(18) と同窯か?	21-0029
20	19号墳・玄室 No.16	須恵器	杯身	口径 11.8 器高 5.2	たちあがりは低く内傾 底部中央はやや尖り気味	ロクロナデ 底部へラ切り未調整	青灰色	砂粒を含む	良好	ロクロ回転時計廻り (21) と同窯か?	21-0030
21	19号墳・玄室 No.5	須恵器	杯身	口径 11.0 器高 4.9	たちあがりは低く内傾 底部中央はやや尖る	ロクロナデ 底部へラ切り未調整、一部 ロクロケズリ	青灰色	砂粒を含む	焼き服れ	ロクロ回転時計廻り (20) と同窯か?	21-0020
22	19号墳・玄室 No.4	須恵器	高杯	口径 11.5 器高 7.5	有蓋短脚 杯部のたちあがりは 低く内傾	ロクロナデ 杯部外底部ロクロケズリ 内底部乱ナデ	青灰色	砂粒を含む	良好	ロクロ回転時計廻り	21-0019
23	19号墳・玄室 No.3	須恵器	高杯	口径 11.2 器高 7.9	有蓋短脚 杯部のたちあがりは 低く内傾	ロクロナデ 杯部外底部ロクロケズリ 内底部乱ナデ	青灰色	砂粒を含む	良好	ロクロ回転時計廻り	21-0018
24	19号墳・玄室 No.8	須恵器	高杯	口径 10.9 器高 8.0	有蓋短脚 杯部のたちあがりは 低く内傾	ロクロナデ 杯部外底部ロクロケズリ 内底部乱ナデ	青灰色	砂粒を含む	良好	ロクロ回転時計廻り	21-0023
25	19号墳・玄室 No.2	須恵器	高杯	口径 10.6 器高 7.8	有蓋短脚 杯部のたちあがりは 低く内傾	ロクロナデ 杯部外底部ロクロケズリ 内底部乱ナデ	青灰色	砂粒を含む	良好	ロクロ回転時計廻り	21-0017
26	19号墳・玄室 No.13	須恵器	高杯	口径 11.0 器高 8.2	有蓋短脚 杯部のたちあがりは 低く内傾	ロクロナデ 杯部外底部ロクロケズリ	青灰色	砂粒を含む	良好	ロクロ回転時計廻り	21-0027
27	19号墳・玄室 No.6	須恵器	高杯	口径 11.2 器高 8.2	有蓋短脚 杯部のたちあがりは 低く内傾	ロクロナデ 杯部外底部ロクロケズリ	青灰色	砂粒を含む	良好	ロクロ回転時計廻り	21-0021

第20-2表 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	器種	器形	法量 (cm)	形態の特徴	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考	整理番号
28	19号墳・ 女室No. 7 No.11	須恵器	高杯	口径 12.6 器高 17.6	無蓋長胴2段透かし透かし 2方向 胴部に沈線	杯部に刺突文	灰白色	砂粒を含む	良好		21-0022
29	19号墳・ 女室No. 10 No.18	須恵器	壺	口径 13.2 器高 20.6	広口 胴張り	胴部下半ロクロケズリ 胴部上半カキメ	青灰色	砂粒を含む	良好	ロクロ回転時計廻り	21-0025
30	19号墳・ 女室 No.1	須恵器	提瓶	口径 7.2 器高 15.9 胴径 11.7	小型 環状の把手 口縁部外反 頸部に沈線2本	ロクロナデ	青灰色	良好	焼き割れ 自然釉		21-0016
31	19号墳・ 女室 No.17	鉄製品	釘	全長11以上 断面 0.5× 0.4	断面方形						21-0031
32	19号墳・ 石室 埋土	土師器	高杯	口径 — 器高 —	小型 胴部に凹孔		明黄褐色	良好	良好	(37) と同じ胎土	21-0034
33	19号墳・ 石室 埋土	須恵器	甌	口径(13) 器高	口縁ラッパ状 沈線	ロクロナデ	青灰色	砂粒を含む	良好	小片	21-0035
34	19号墳・ 石室 埋土	須恵器	杯身	口径(13.0) 器高 4.4	たちあがりは低く内傾 底部平底	ロクロナデ 底部ロクロケズリ 底部内面一方向ナデ	暗青灰色	小石を含む	良好	ロクロ回転時計廻り	21-0033
35	19号墳・羨道	土師器	甕	口径 12.9 器高 13.7	胴部球状 口縁部外反、端部は内側に み上げる	口縁部ヨコナデ 胴部外面ハケメ、内面ヘラケ ズリ	褐灰色	並	並		21-0037
36	19号墳・羨道	須恵器	杯蓋	口径(12) 器高 —		ロクロナデ	暗青灰色	良好	良好	小片	21-0036
37	19号墳・周溝	土師器	高杯	口径 7.5 器高 5.7	小型 胴部に凹孔	胴部上半にハケメ	明黄褐色	良好	良好	(32) と同じ胎土	21-0039
38	19号墳・周溝	土師器	甕	口径 31.8 器高 —	口縁部外反、端部は内側に み上げる	口縁部ヨコナデ 胴部内外面ともハケメ(1.8cm /12本)	淡黄色	砂粒を含む	並		21-0040
39	20号墳・ 女室 No.1	土師器	甕	口径 14.5 器高 14.5	胴部球状 口縁部外反、端部は内側に み上げる	口縁部ヨコナデ 胴部外面ハケメ	黄色	細砂粒を 含む	並	底部に長さ11cmのへら記号 「—」	21-0041
40	20号墳・ 女室 No.3	須恵器	壺	口径 7.0 器高 8.4	短頸壺 口縁部は短く直立し、端部は丸 い、体部は肩が張る	ロクロナデ 体部下半ロクロケズリ 底部内面乱ナデ	暗青灰色	砂粒を含む	良好	ロクロ回転時計廻り	21-0043
41	20号墳・ 女室 No.4	須恵器	壺	口径 7.2 器高 8.3	短頸壺 口縁部は短く直立し、端部は丸 い	ロクロナデ 底部ロクロケズリ 底部カキメ	暗青灰色	砂粒を多 く含む	良好	ロクロ回転時計廻り	21-0044

第20-3表 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	器種	器形	法量 (cm)	形態の特徴	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考	整理番号
42	玄室 20号墳・ No.2	須恵器	壺	口径 13.2 器高 18.6	広口壺 口縁部外反 体部は比較的長い	ロクロナデ 外面胴部上半カキメ、下半タ タキメ。内底部同心円	青灰色	砂粒を含む	焼き肌れ 自然釉		21-0042
43	玄室 20号墳・ No.5	須恵器	壺	口径 8.2 器高 17.9	底部は平底風 体部は徳利形 口縁部外反	ロクロナデ 体部上半カキメ	青灰色	砂粒を含む	良好		21-0045
44	玄室 20号墳・ No.6	須恵器	提瓶	口径 6.6 器高 14.5	小型 口縁部は外反 環状の把手	ロクロナデ 体部ロクロケズリ	明青灰色	砂粒を含む	焼き肌れ 自然釉	ロクロ回転時計廻り	21-0046
45	玄室 20号墳・ No.7	鉄製品	刀子	長さ(14) 幅 1.6 厚さ 0.6							21-0047
46	20号墳・周溝	須恵器	杯蓋	口径(13.0) 器高		ロクロナデ	オリーブ 灰色	良好	良好	小片	21-0050
47	20号墳・周溝	須恵器	杯蓋	口径 12.6 器高 4.6	口縁端部の内側に面を持つ	ロクロナデ 天井部へラ切り未調整	オリーブ 灰色	砂粒を含む	良好	ロクロ回転時計廻り	21-0049
48	20号墳・周溝	須恵器	杯身	口径(12.4) 器高 (5.1)	たちあがりは低く内傾 やや深い	ロクロナデ 底部へラ切り未調整	灰色	良好	良好 自然釉		21-0048
49	22号墳・玄室	須恵器	杯蓋	口径 11.6 器高 4.5	やや深い	ロクロナデ 天井部へラ切り未調整、一部 ロクロケズリ	灰白色	砂粒を含む	やや軟 焼き肌れ	ロクロ回転時計廻り	21-0051
50	22号墳・石室	須恵器	杯蓋	口径(11.4) 器高	やや深い	ロクロナデ 天井部にロクロケズリがみら れる	青灰色	砂粒を含む	良好		21-0056
51	22号墳・石室	須恵器	杯蓋	口径(12.8) 器高		ロクロナデ	灰白色	砂粒を含む	やや軟		21-0055
52	22号墳・石室	須恵器	杯蓋	口径(13.8) 器高		ロクロナデ	青灰色	砂粒を含む	良好	(53)と同窯で、セツトか?	21-0054
53	22号墳・石室	須恵器	杯身	口径(13.2) 器高	たちあがりは低く内傾	ロクロナデ	青灰色	砂粒を含む	良好	口縁部小片 (52)と同窯で、セツトか?	21-0053
54	22号墳・玄室	須恵器	提瓶	口径 7.2 器高 20.0 体径 15.2	環状の把手 頸部に沈線2本	体部カキメ、ロクロケズリ	暗青灰色	砂粒を含む	良好	ロクロ回転時計廻り	21-0052
55	23号墳・玄室	須恵器	甗	口径 器高	口縁ラッパ状 頸部に沈線2本 体部に沈線2本	ロクロナデ 底部ロクロケズリ 頸部と体部に刺突文	明青灰色	砂粒を含む	やや軟	ロクロ回転時計廻り 穿孔時の粘土塊が内部に落ち ている	21-0070

第20-4表 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	器種	器形	法量 (cm)	形態の特徴	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考	整理番号
56	9号墳・周溝		削器	残存長 8 (7.2) 幅 厚 1.2						サヌカイト製 大型、上部欠損	21-0073
57	表面採集		削器	残存長 3.3 幅 厚 2.7 0.3						サヌカイト製 上部欠損	21-0074
58	表面採集		楔型石器	長 幅 厚 6.8 4.3 1.3						サヌカイト製	21-0079
59	表面採集		石鏃	長 幅 厚 2.1 1.8 0.3						サヌカイト製	21-0076
60	16号墳・石室埋土		石鏃	長 幅 厚 2.5 1.6 0.3						サヌカイト製	21-0075
61	22号墳・石室埋土		石鏃	長 幅 厚 2.0 1.4 0.4						サヌカイト製	21-0077
62	表土		二次加工のあ る剥片	長 幅 厚 4.6 3.0 0.6						サヌカイト製	21-0078
63	19号墳・羨道	縄文土器	甕	口径(24.8) 器高 一		外面条痕 内面ナデ	明赤褐色	砂粒を含む	並	スス附着	21-0038
64	9号墳・周溝	縄文土器		口径 器高 底径 6~7			明赤褐色	砂粒を含む	並		21-0013
65	22号墳・石室埋土	土師器	杯	口径(12.4) 器高			黄橙色	並	並	小片	21-0068
66	22号墳・石室埋土	土師器	杯	口径(13.4) 器高	口縁部外反	口縁部ヨコナデ、底部未調整	黄橙色	並	並		21-0067
67	22号墳・石室埋土	土師器	杯	口径(12.8) 器高	口縁部外反	口縁部ヨコナデ、底部未調整 ユビオサエ痕	黄橙色	並	並	小片	21-0066
68	22号墳・石室埋土	土師器	杯	口径 13.6 器高 3.0	口縁部外反	口縁部ヨコナデ、底部未調整 ユビオサエ痕あり	黄橙色	並	並		21-0060
69	22号墳・表土	土師器	杯	口径(13.6) 器高 (2.5)	口縁部外反	口縁部ヨコナデ、底部未調整	浅黄橙色	並	並	口縁部にスス附着	21-0057

第20-5表 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考	整理番号
70	22号墳・表土	土師器	杯	口径(13.7) 器高(2.7)	口縁部外反	口縁部ヨコナデ、底部未調整	黄橙色	並	並		21-0058
71	石室 22号墳・埋土	土師器	甕	口径 22.4 器高	胴部球状 口縁部外反、端部は内側に折り返す	口縁部ヨコナデ	黄橙色	並	並	胴部外面にスス付着	21-0059
72	石室 22号墳・埋土	陶器	山茶碗	口径 15.4 器高	口縁部外反	口縁部ヨコナデ	灰白色	並	良好	口縁部漬け掛け	21-0061
73	石室 22号墳・埋土	陶器	山茶碗	口径(16.4) 器高	口縁部外反	口縁部ヨコナデ	灰白色	並	良好	小片	21-0064
74	石室 22号墳・埋土	陶器	山茶碗	口径(16.0) 器高	口縁部外反	口縁部ヨコナデ	灰白色	並	良好	小片	21-0065
75	石室 22号墳・埋土	陶器	山茶碗	口径(16.2) 器高		口縁部ヨコナデ	灰白色	並	良好	小片	21-0063
76	表面採集	陶器	山茶碗	口径 器高 高台径(6.8)		口縁部ヨコナデ 底部糸切り痕	灰白色	並	良好		21-0069
77	石室 22号墳・埋土	陶器	山皿	口径 8.2 器高 2.1		口縁部ヨコナデ 底部糸切り後、ナデ消し	灰白色	並	良好	口縁部回転時計廻り 内面全面に自然釉	21-0062

第20-6表 出土遺物観察表

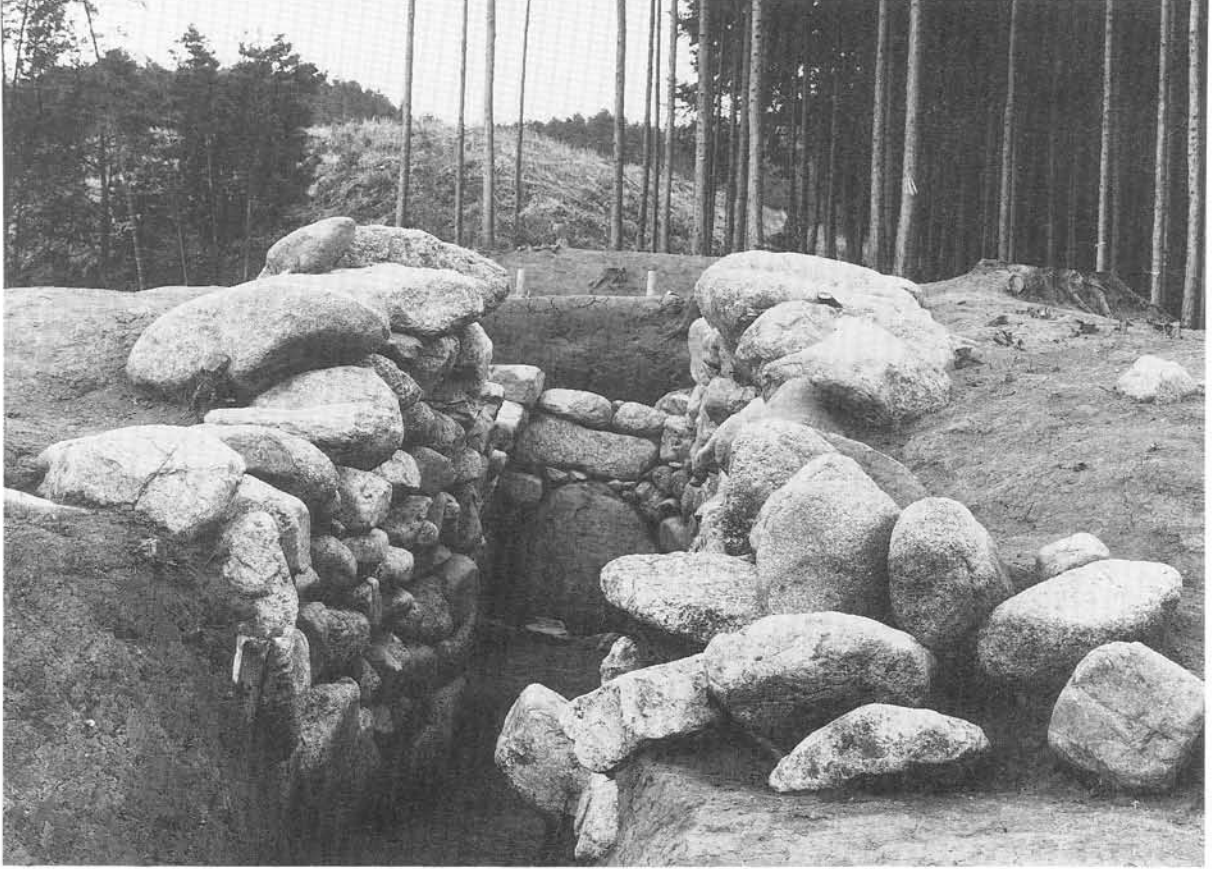


調査前遠景（東から）

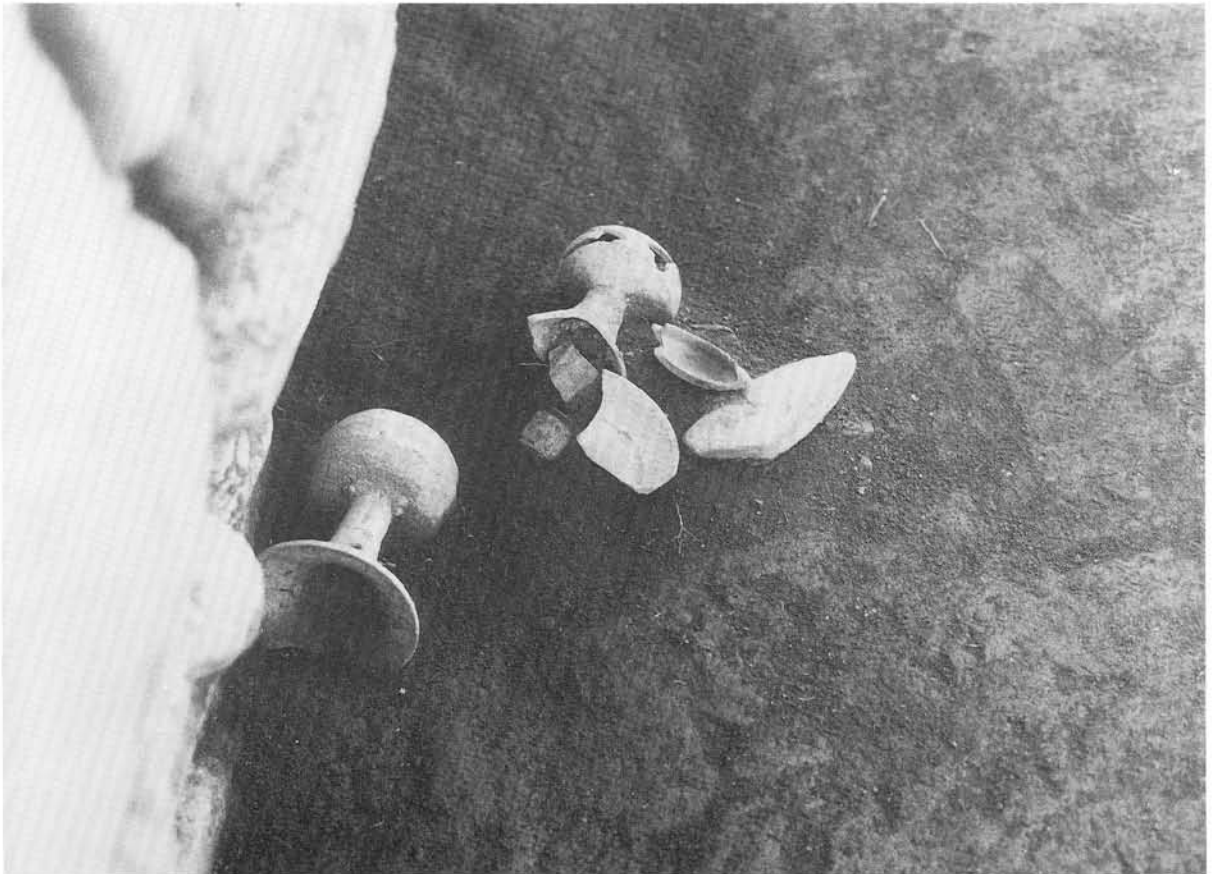


6号墳（北から）

PL42



6号墳石室（北から）



6号墳遺物出土状況



7号墳（東から）



7号墳石室（西から）

PL44



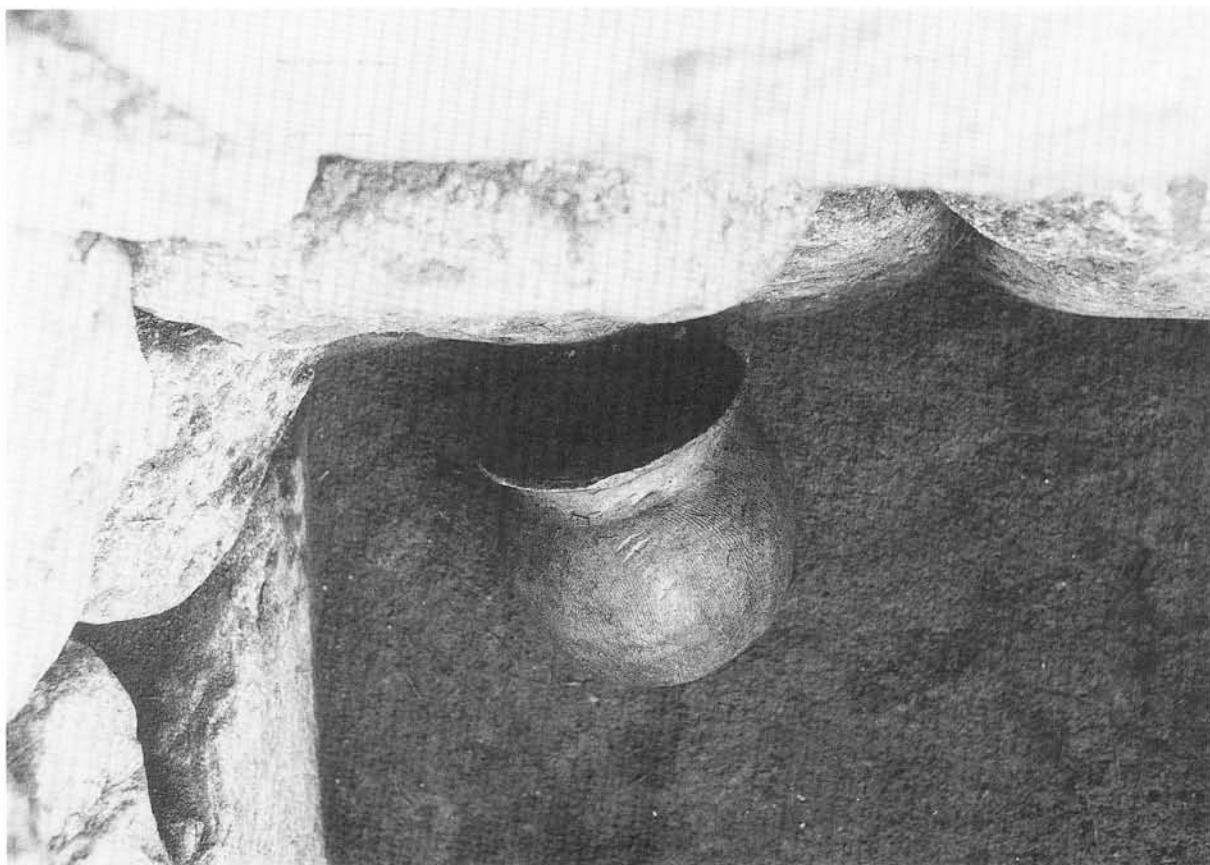
7号墳遺物出土状況（西から）



8号墳（南から）



8号墳石室（東から）



8号墳遺物出土状況（北上から）

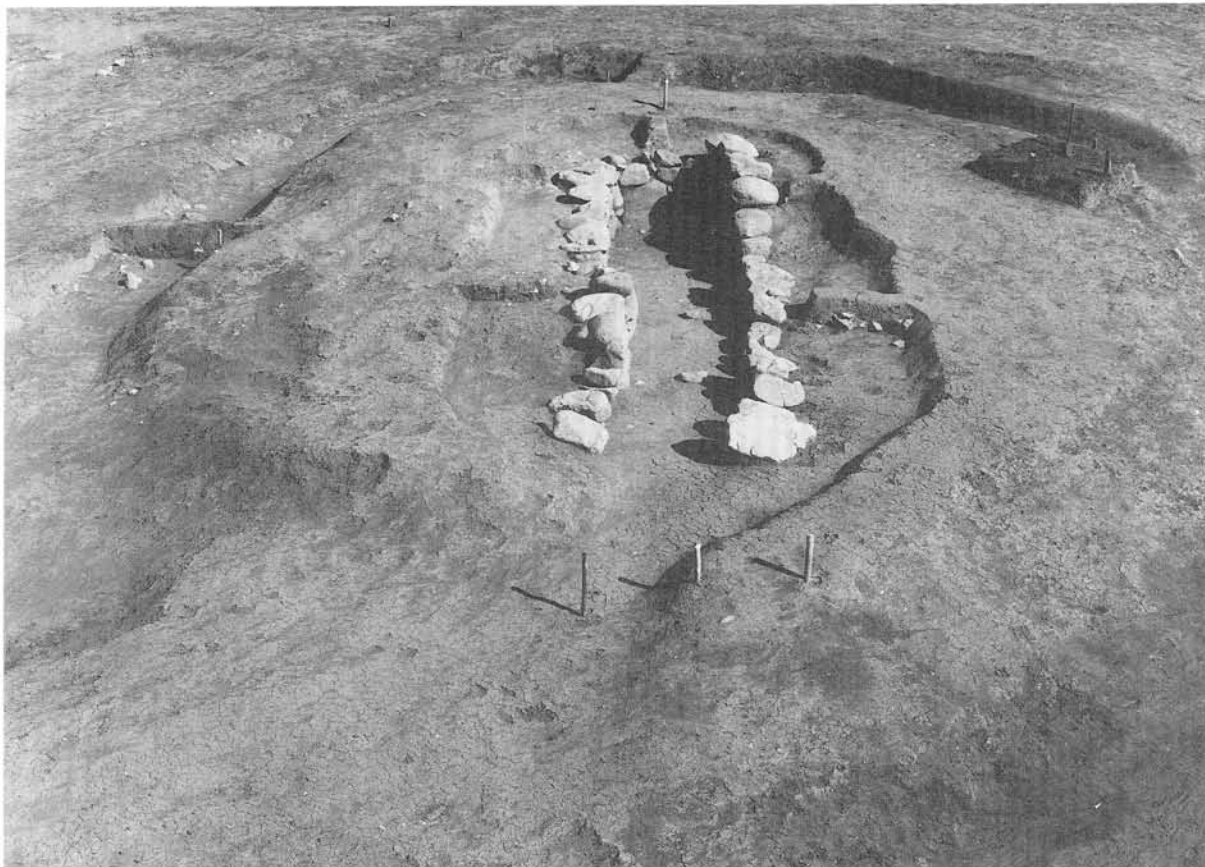
PL46



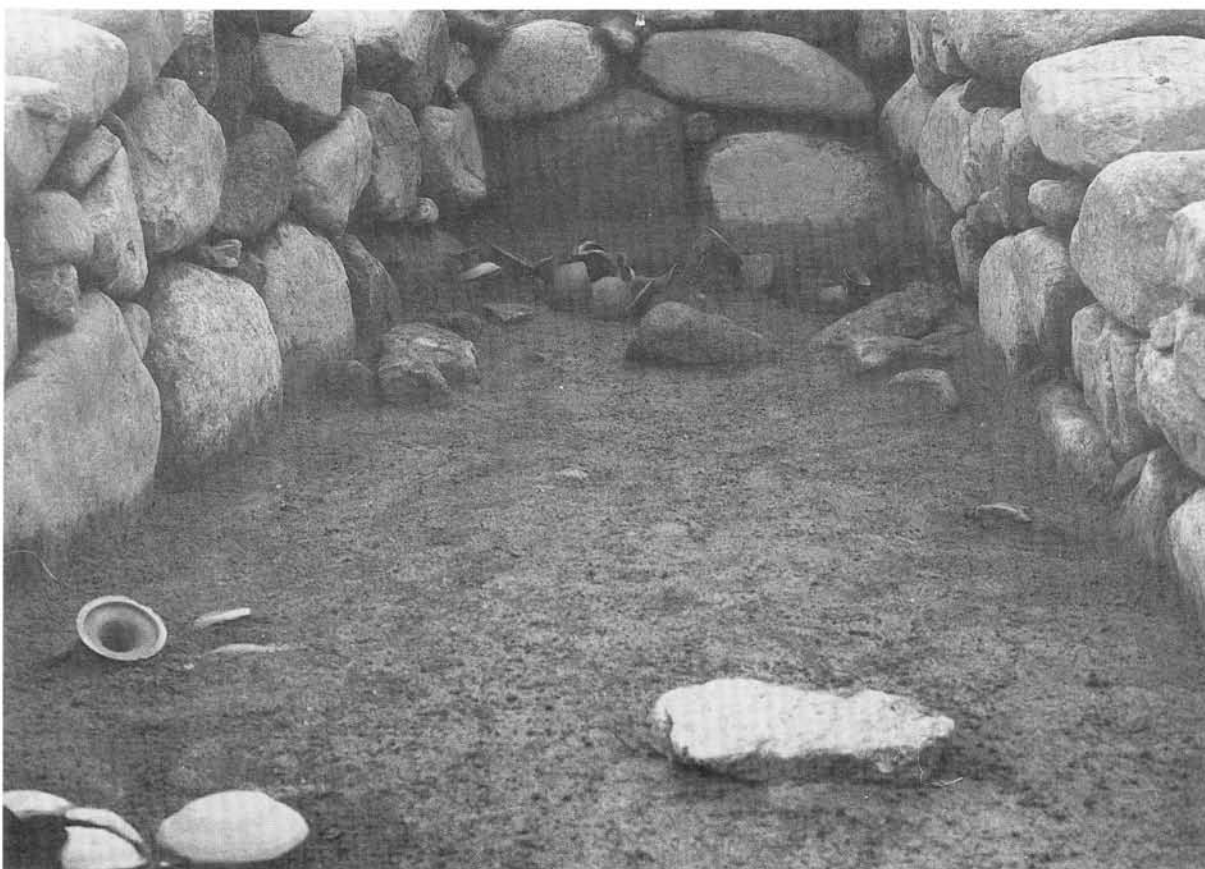
16号墳（北から）



16号墳石室（南から）



19号墳（北から）

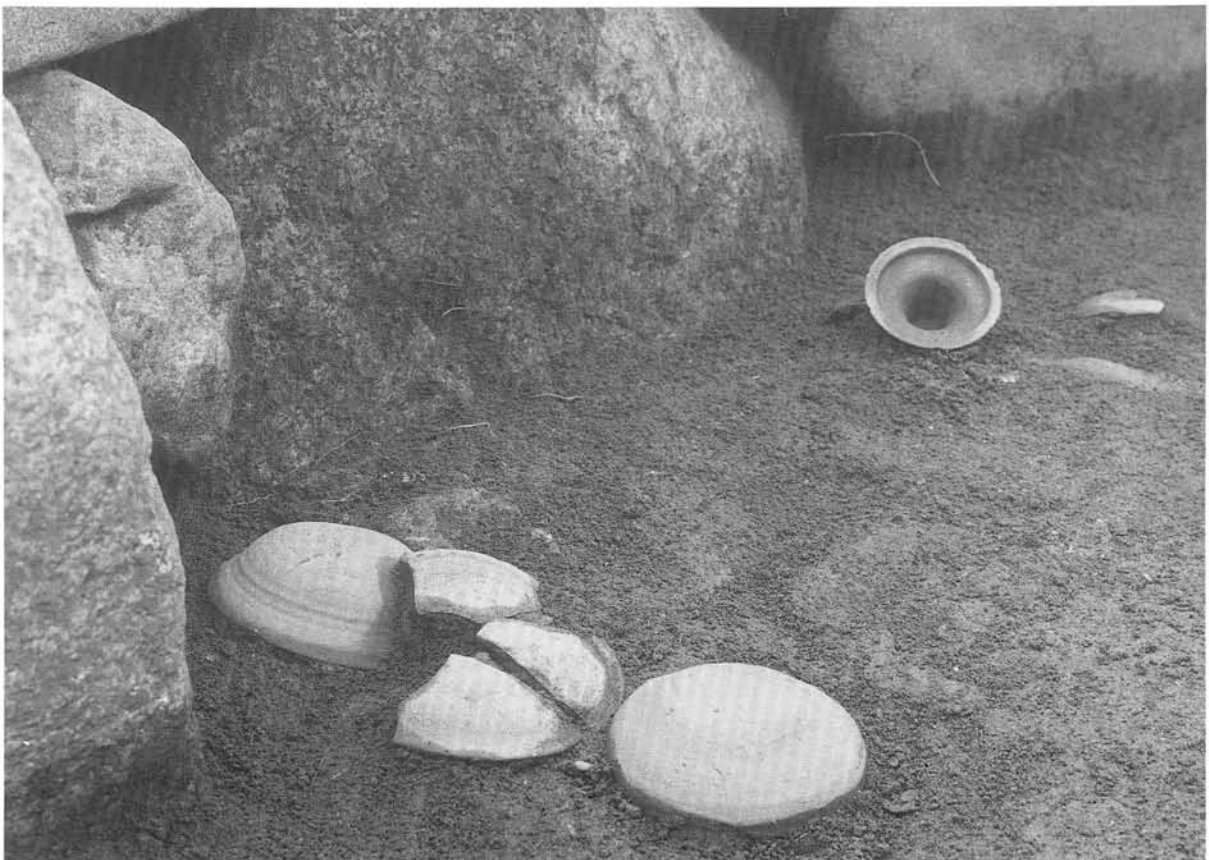


19号墳遺物出土状況（北から）

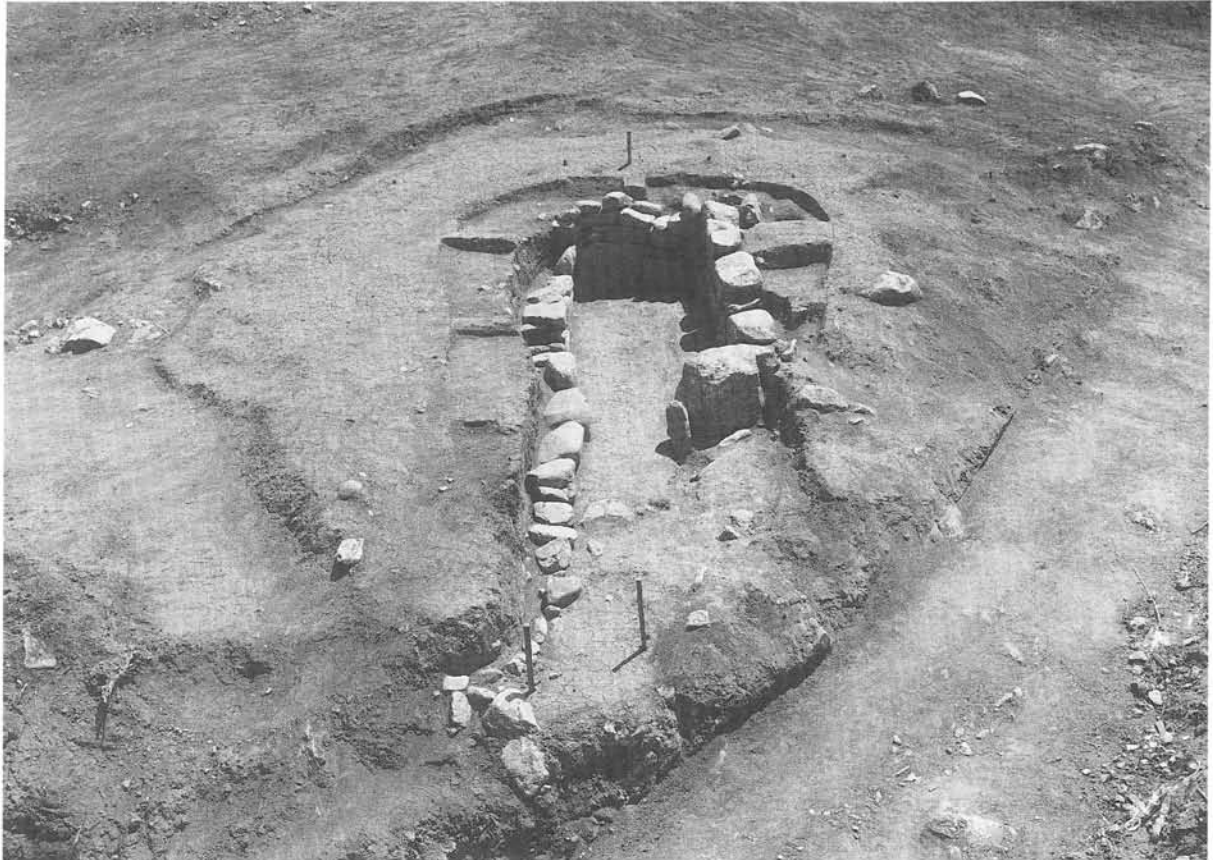
PL48



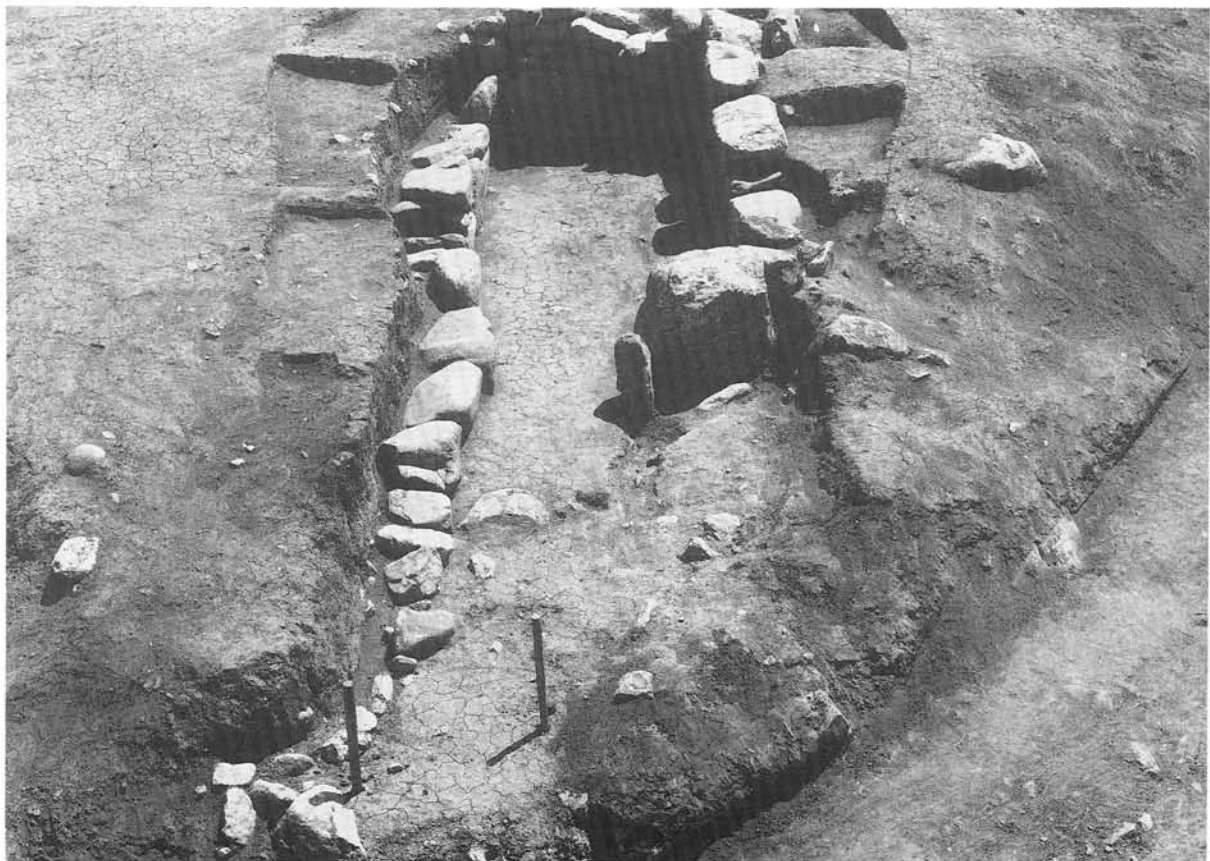
19号墳遺物出土状況（北上から）



19号墳遺物出土状況（西から）

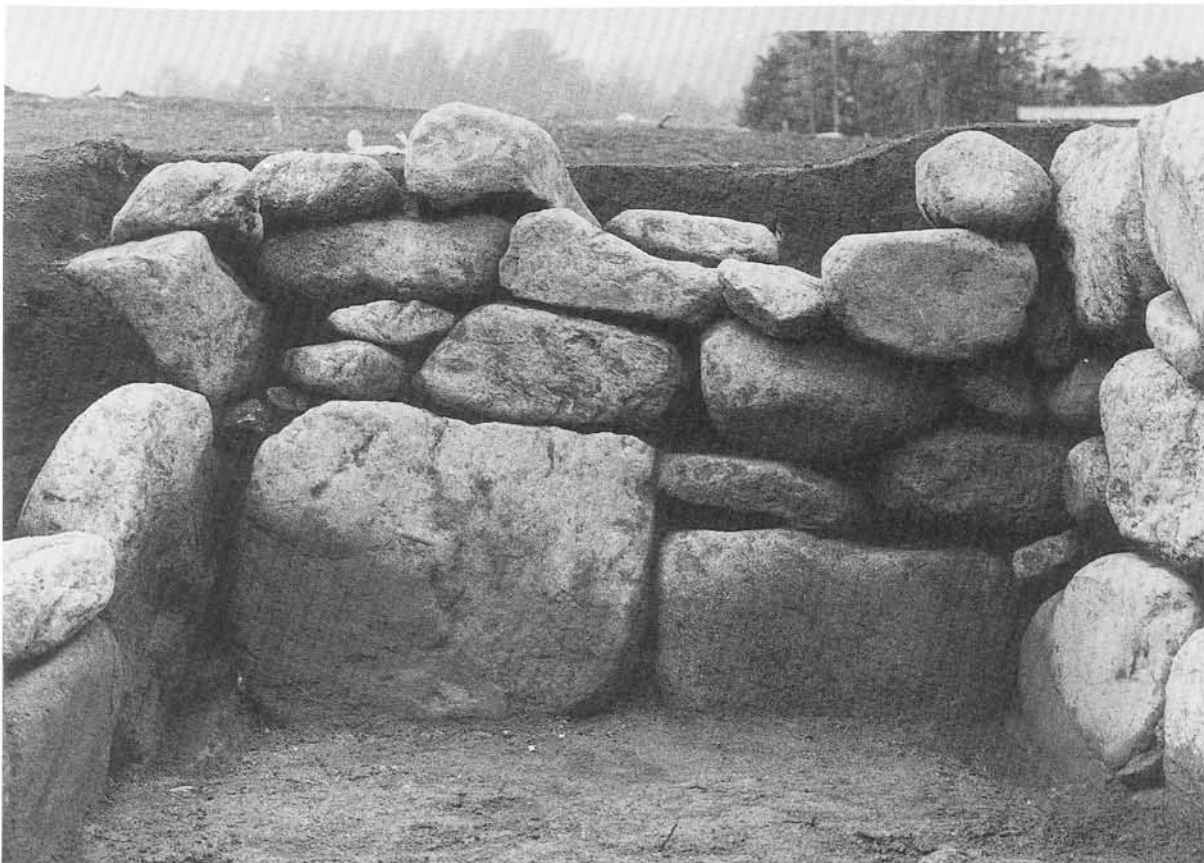


20号墳（北から）



20号墳石室（北から）

PL50



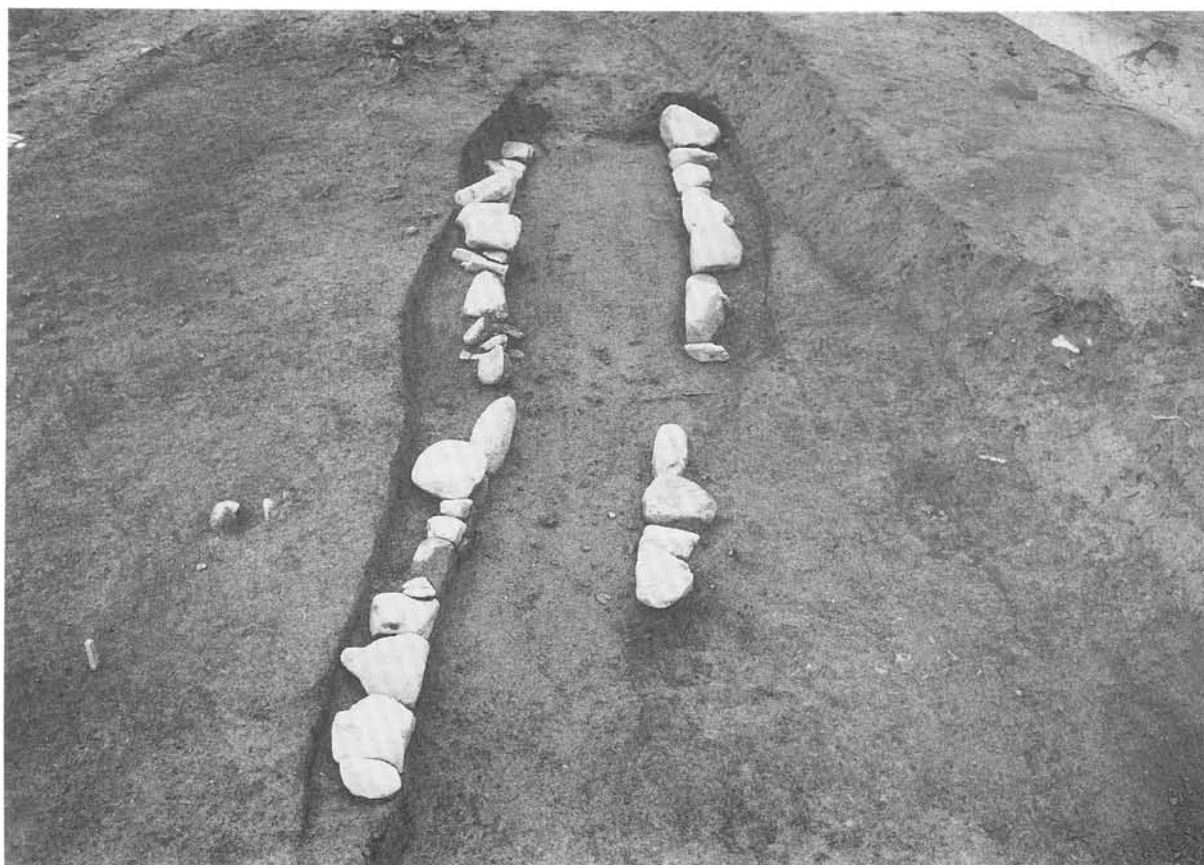
20号墳奥壁（北から）



20号墳遺物出土状況（南上から）

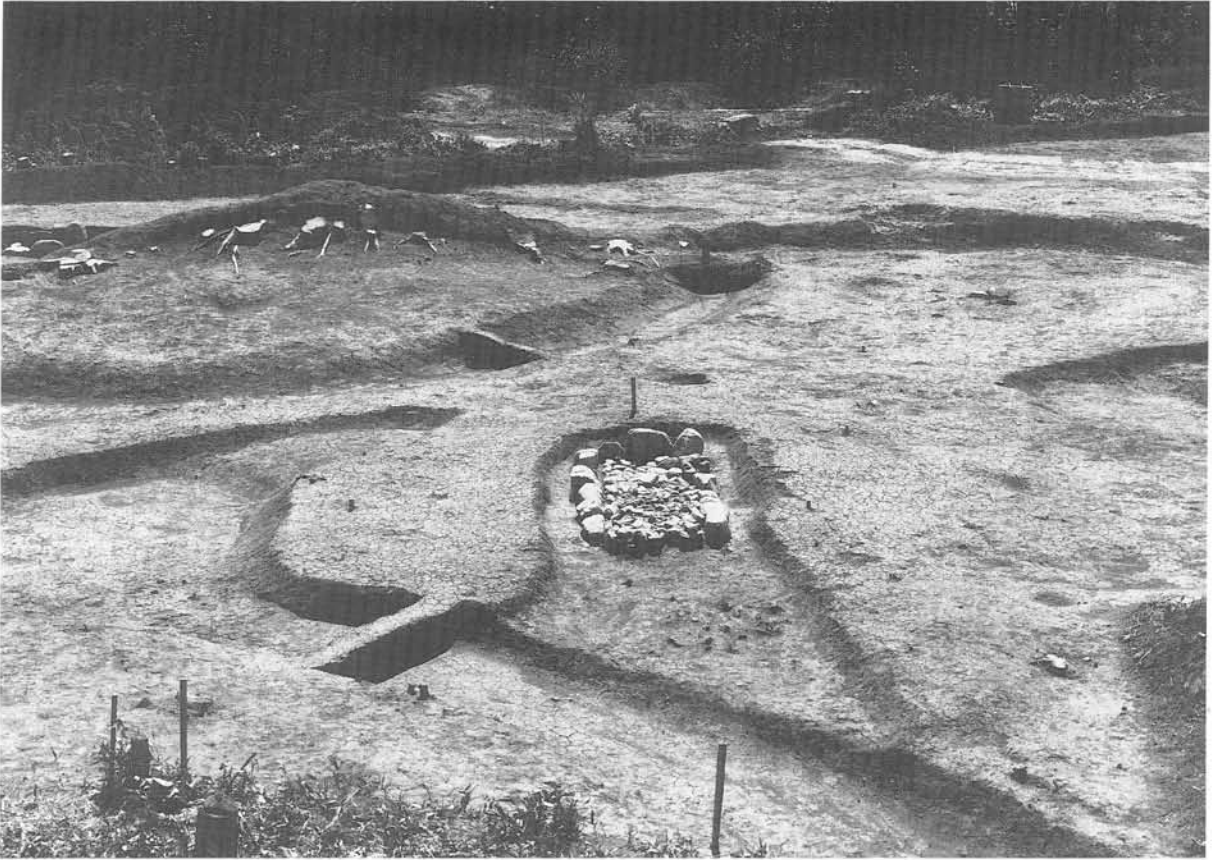


22号墳（北から）

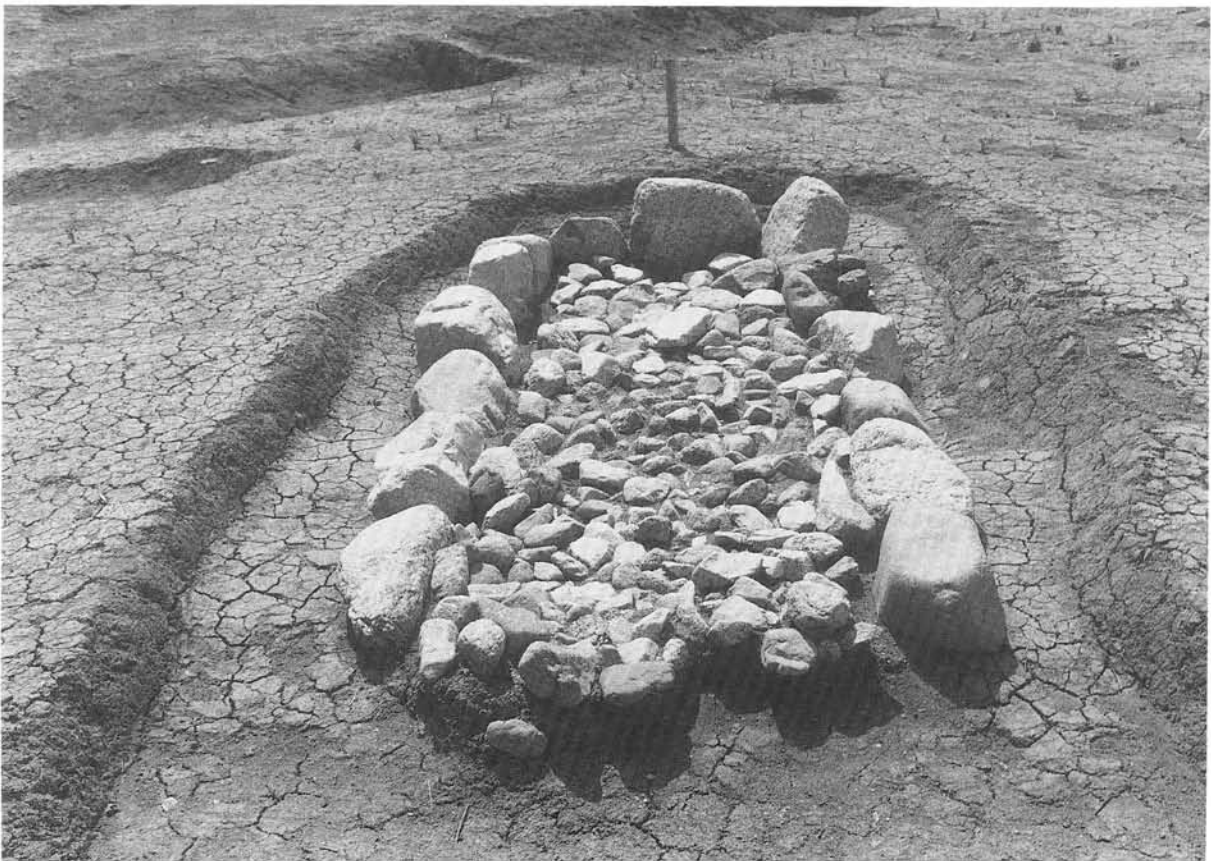


22号墳石室（北から）

PL52



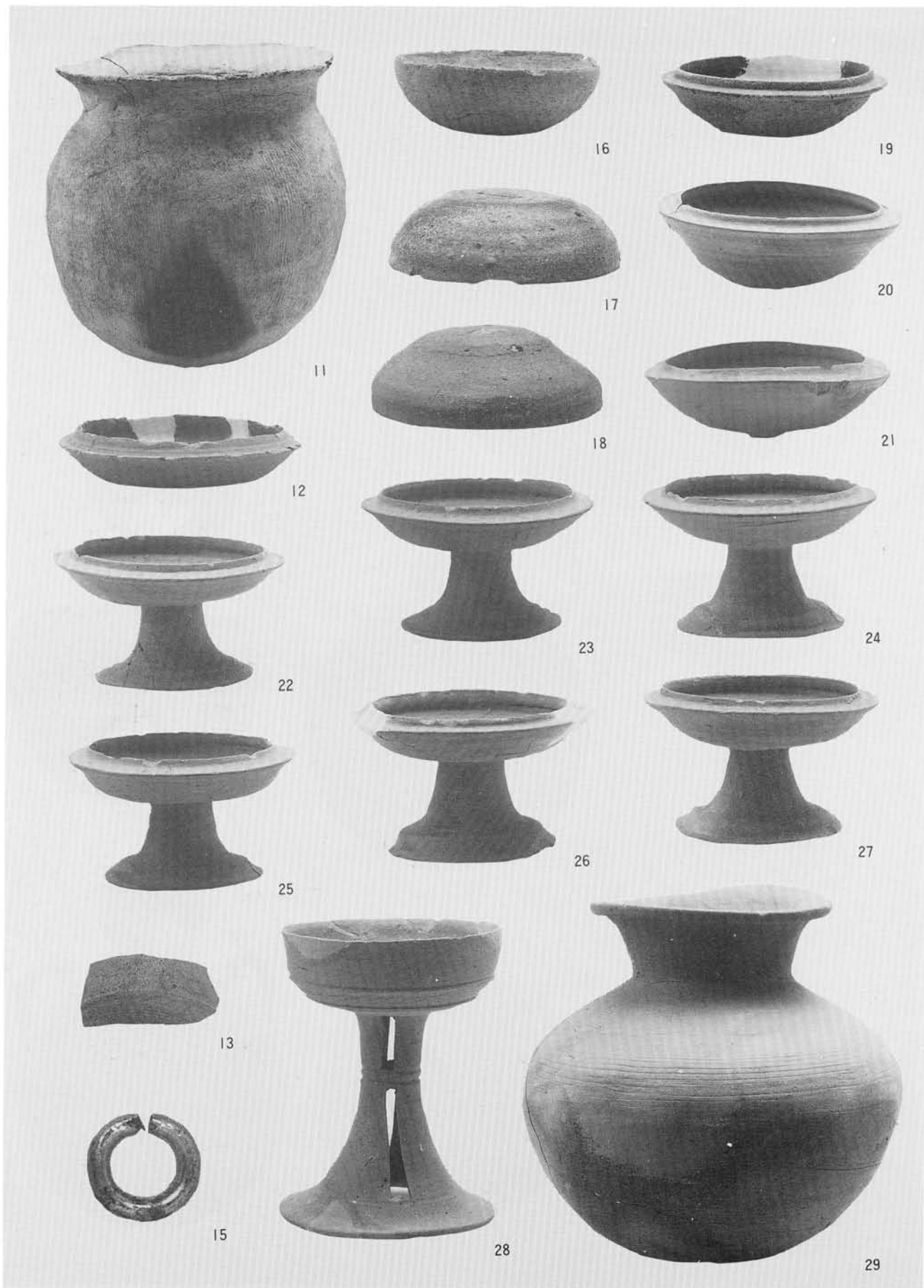
23号墳（東から）



23号墳石室（東から）



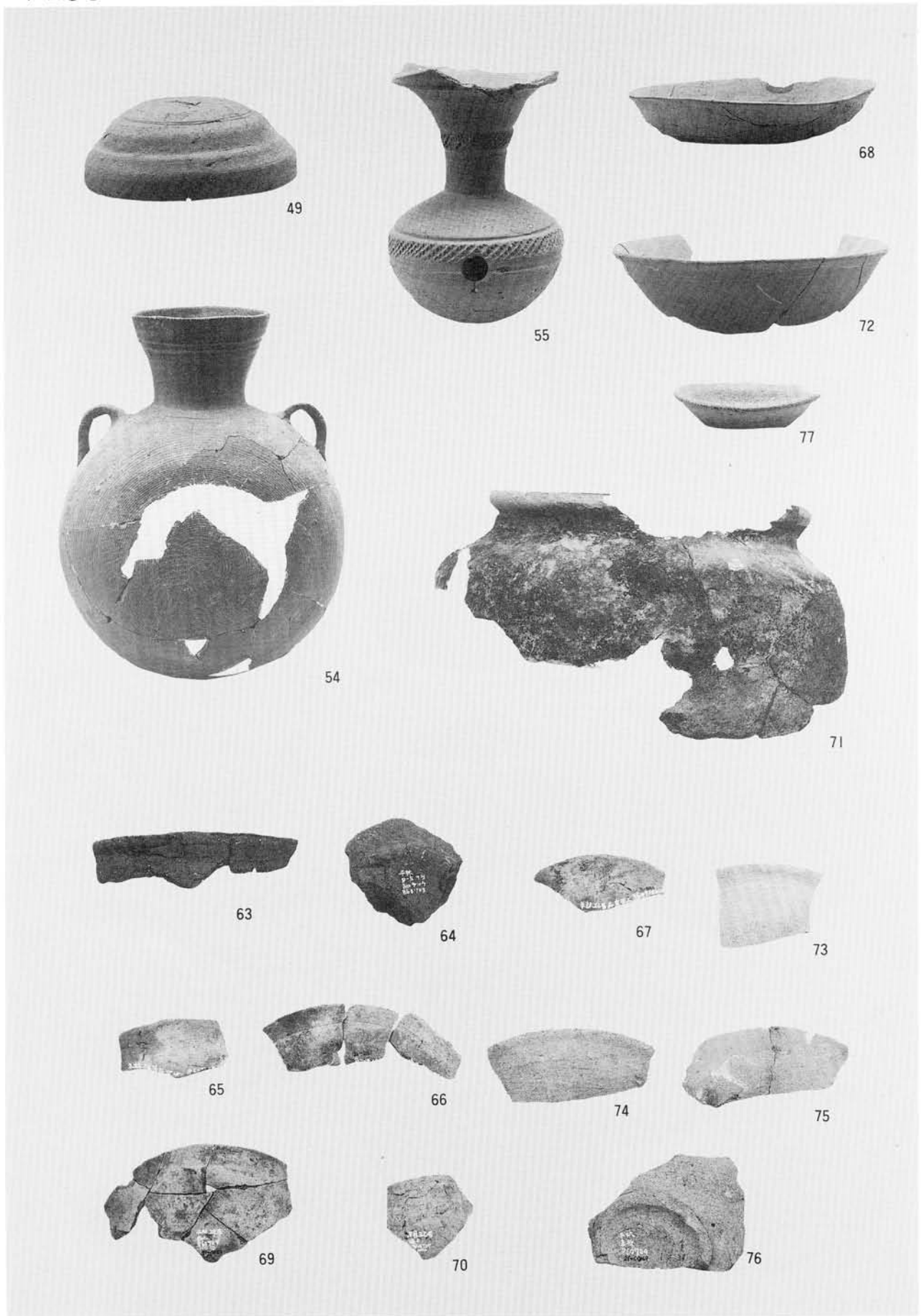
出土遺物 (1 : 3)



出土遺物（1：3、15は1：1）



出土遺物 (1:3)



出土遺物 (1 : 3)

VI. 松阪市岡山町 ^{よこ お}横尾古墳群 (22)

1. はじめに

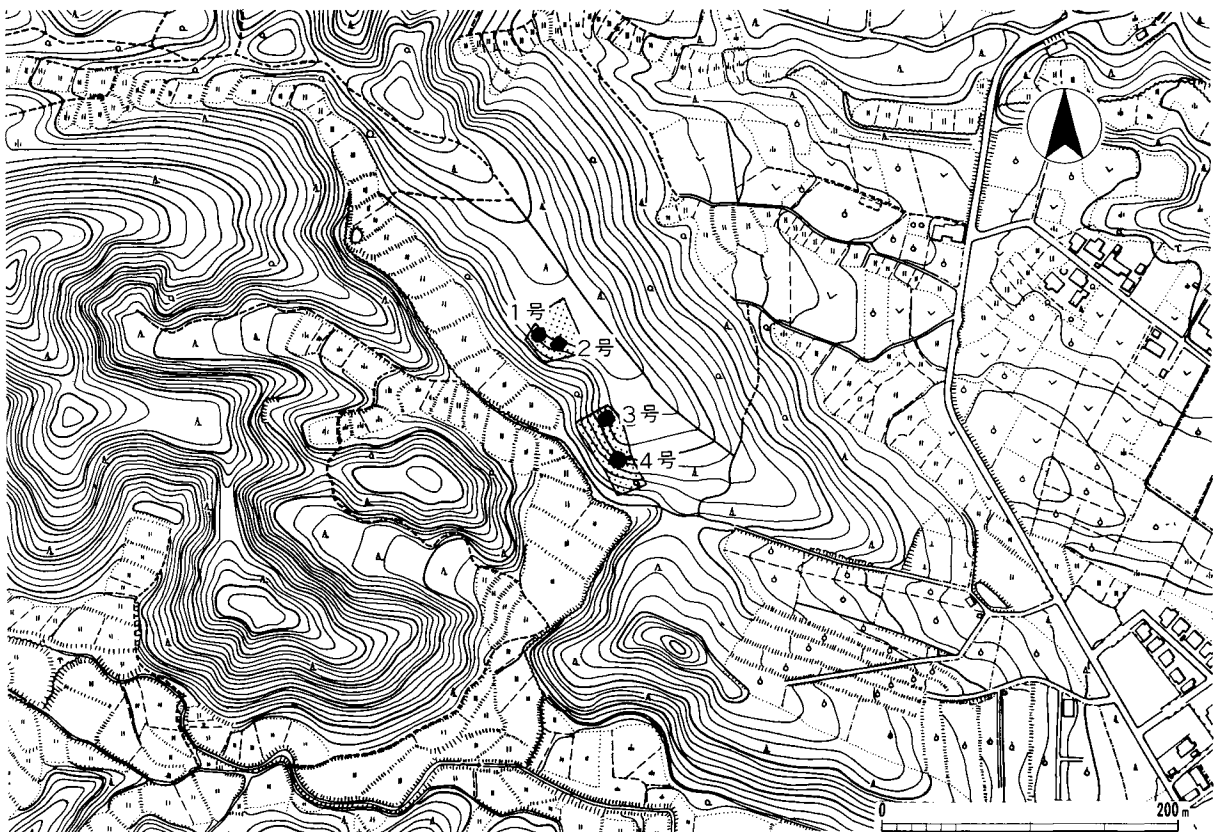
横尾古墳群は松阪市岡山町字横尾に所在し、標高757mの堀坂山東麓にひろがる丘陵地の一支脈（標高90～120m）に位置している。立地的には東南にのびる尾根の西南斜面に築造されている古墳である。同じ尾根上の西北には昭和60・61年度において3次にわたって発掘調査を実施した横尾中世墓群が隣接しているところである。その中世墓群からは数百基にのぼる配石墓群、土坑墓群、火葬穴群が検出され、その規模もさることながら、内容的にも全国の注目をあびた遺跡である。

さて、この古墳群は昭和60年7月から開始した西野墳墓群（後に中世墓遺跡としての横尾墳墓群と古墳としての横尾古墳群に各々分離し名称変更した。）発掘調査の継続事業としての第4次調査として実施した形をとっており、その調査対象面積は2,500㎡で昭和61年5月31日から開始し、同年12月5日に終了した。この調査は三重県教育委員会が主体となり、同事務局文化課文化財第二係が担当して実施したところである。なお、松阪市遺跡番号73の横尾古墳（円墳）は当古墳群の4号墳にあたる。

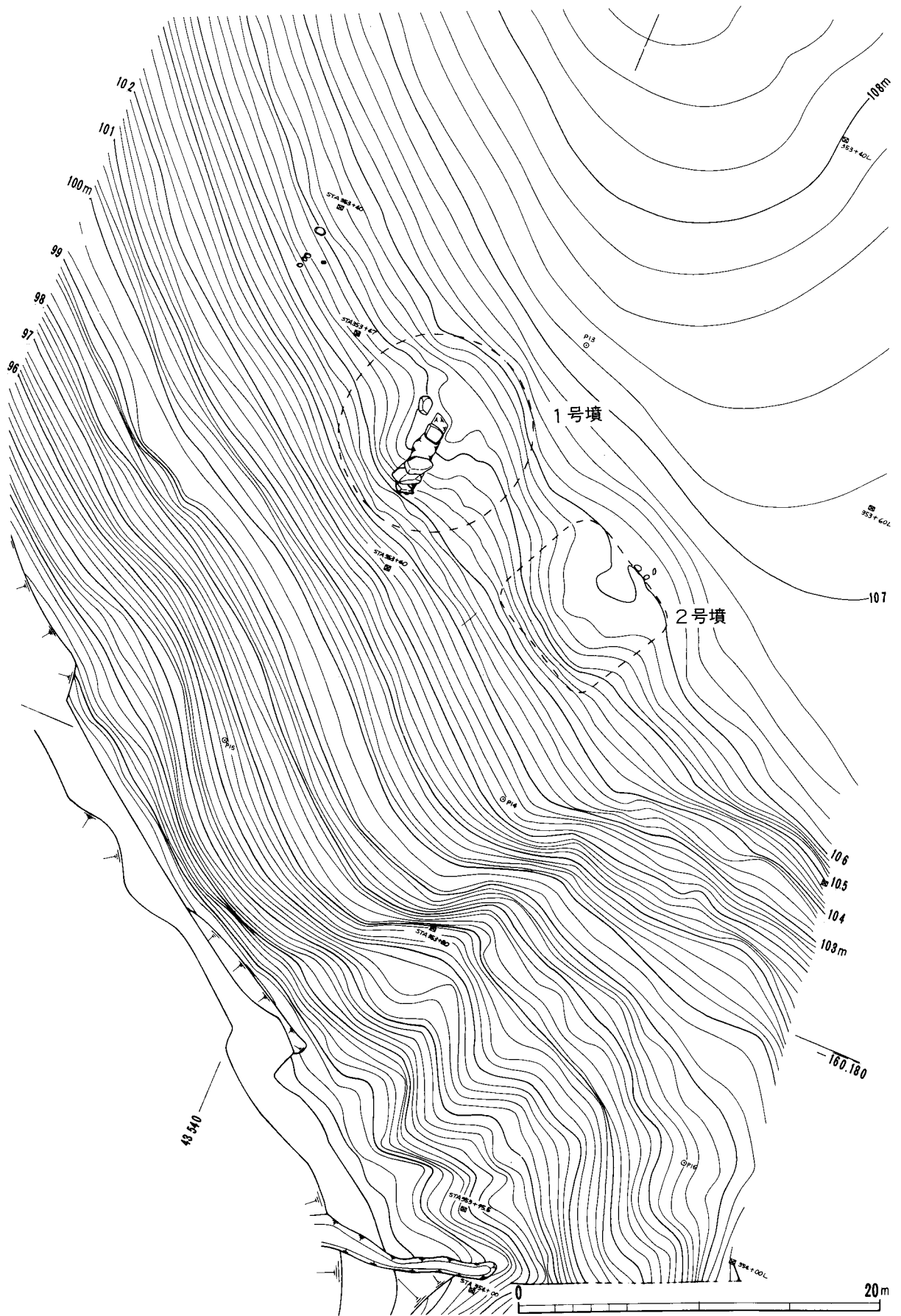
2. 古墳群の概要

当古墳群は中世墓群が続く尾根上の平坦地南側の

緩斜面に立地し、標高95～105mの範囲に築造され



第102図 遺跡位置図 (1 : 5,000)



第103図 1・2号墳調査前測量図(1:300)

ている。今回の調査で検出された古墳は4基で、北側に1号墳(円墳)と2号墳(方墳)が数mの間隔で並ぶように、またその南には浅い谷筋をはさんで50mのところには3号墳(方墳)と4号墳(円墳)が約20m間隔で築かれている。あたかも円墳と方墳がセットとなっている状況を呈している。

以下、各古墳ごとにその概要を記述してゆきたい。

(1) 1号墳

A. 墳形

円墳形態で、墳丘の直径は約10m、高さ1.2mで、やや南北に長円形となる。墳丘上方と両側に半円状に周溝がめぐる。

B. 埋葬施設

南に開口する右片袖式の横穴式石室で、天井石は玄室中央やや奥壁寄りの一石をほぼ原位置でとどめる他は、墳丘斜面に転石していた。玄室は幅1.4m、長さ3.2m、高さ2.2mで、羨道部をふくめた石室全長は7.5mである。石室の石材は基底石として比較的大きな石を横長に据え、その上からは大小の不揃いの石を乱石積みしている。特に西側壁に顕著に認められるが、床面から約1.1mのラインで石面を合わせたような構築段階が窺える。また、玄室と羨道部の境は両壁ともに高さ0.8m余の石を立てかけて袖石としている。両側壁の石積みの持ち送りはかなり急で天井石の残存しているところでの側壁頂点の幅は30cmと非常に狭い。

玄室の埋葬面は地山上に薄く置土して堅く叩きしめている。丘陵斜面に築造しているためか、玄室部分は地山を約2m掘り下げ、羨道部は客土をして盛り上げ、埋葬面をほぼ水平に仕上げている。

玄室、羨道ともに排水溝などの施設はみられない。

C. 遺物

かなりの盗掘をうけており、出土遺物は非常に少ない。また、石室内部は攪乱されている様子で、したがって原位置を保っているものはないと考えられる。玄室部の埋土からは須恵器杯身(2・3)・台付長頸壺(5)と土師器甕(7)、及び耳環(8)が1点、また羨道の埋土からは須恵器杯身(1)が出土している。(4)の須恵器杯身は墳丘埋土からである。須恵器杯身の口径は9~11cmの小ぶりの杯

で底部はへら切り後未調整のままである。耳環は銅芯金箔貼りである。なお、土師器把手付鍋(6)には煤の付着が全くみとめられず、実用されたものとは思えない。

(2) 2号墳

A. 墳形

方墳であり、その墳丘の一辺は7.2m×7.0mでほぼ正方形に近いがやや南辺に向かってひろがっている。墳丘の残存高は約0.8mである。墳頂は全体に土砂流失、あるいは後世の削平を受けていると考えられるが、現状は平坦な形状を呈する。

墳丘裾部の両側方と下方には外護列石が明確にみられる。人頭大の自然石を3段階後積み上げて墳丘裾部を保護している。これは当然のことながら同時に墓域の設定をかねて構築しているものと思われる。斜面の高所の一辺は列石も完全に巡っておらず不徹底であり、当墳が南側に意識して造られたことがわかる。

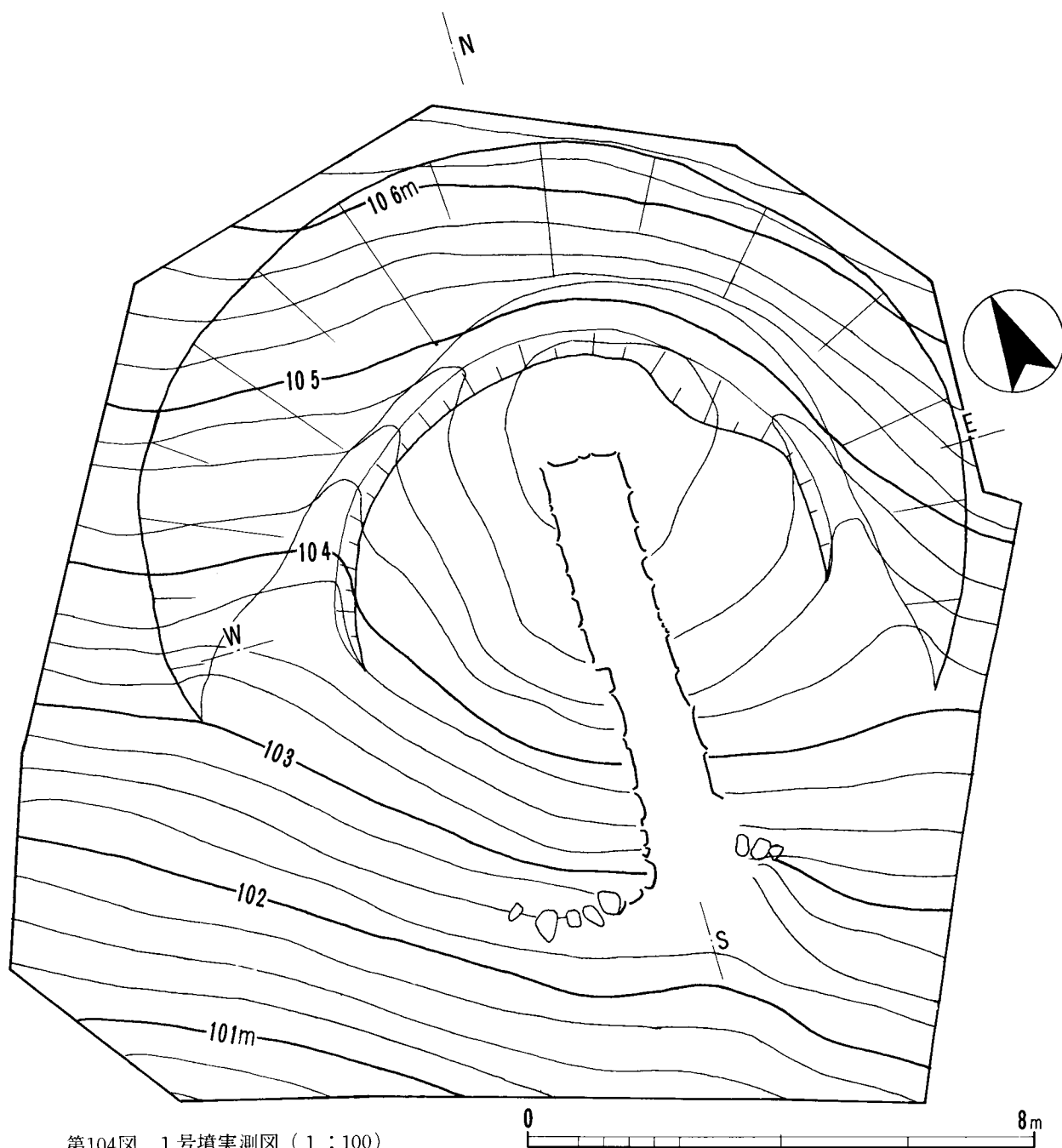
B. 埋葬施設

2号墳に伴う主体部については、石室形態ではなく、木棺直葬を推定してその検出に努めたが、墓掘形、棺痕跡等の検出はできなかった。

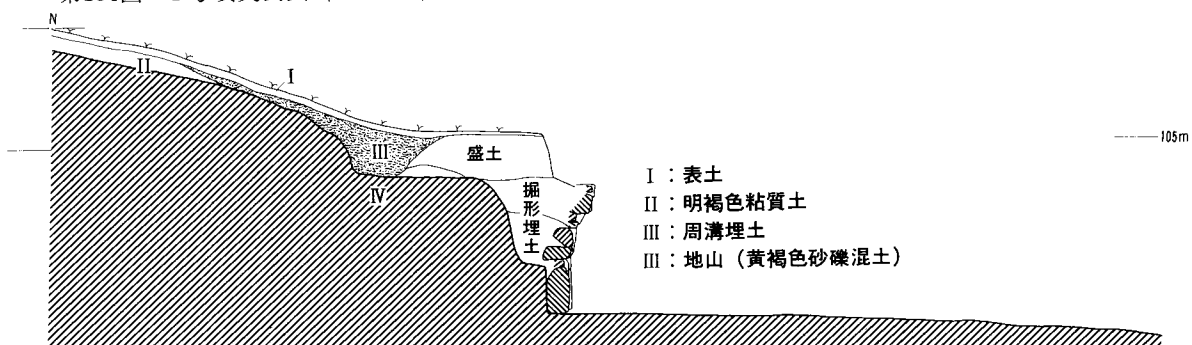
しかし、C. 出土遺物の頃にも触れるように、須恵器杯・蓋がセットになって並んだ状態で、墳丘中央や、南寄り出土している。この出土状況(第113図)は明らかに人為的な、いわば供膳状況を意識したものと考えられる。主体部施設と共に、覆土(盛土)がほとんど流失したものの、副葬品の一部として残ったものか、あるいは別の墳丘上墓前祭祀の一形態を示すものなのかはここでは決定しかねるのである。

C. 出土遺物

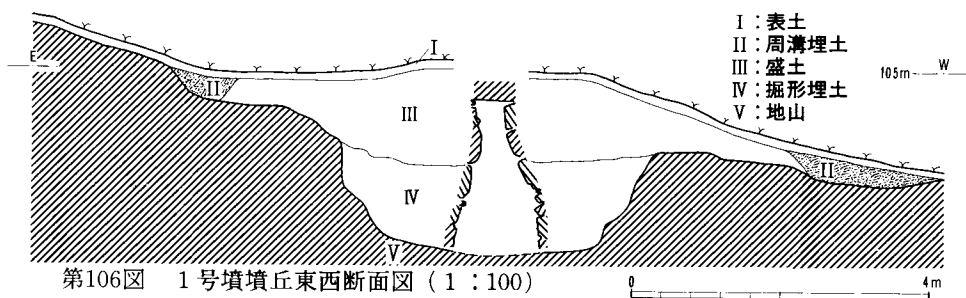
当古墳での出土遺物としては墳頂部の現地表下数cmのところ須恵器杯身(14~18)と杯蓋(9~13)が完全にセットとなってほぼ2列状態で出土したにとどまる。杯身の口径は8~9cm内外、杯蓋は9~12cm内外と小ぶりの杯ばかりである。形態、技法的にもよく似かよっており、杯蓋の天井部は(11)を除きクロケズリの痕を残し、また杯身の底部はいずれもへら切り後未調整のままである。



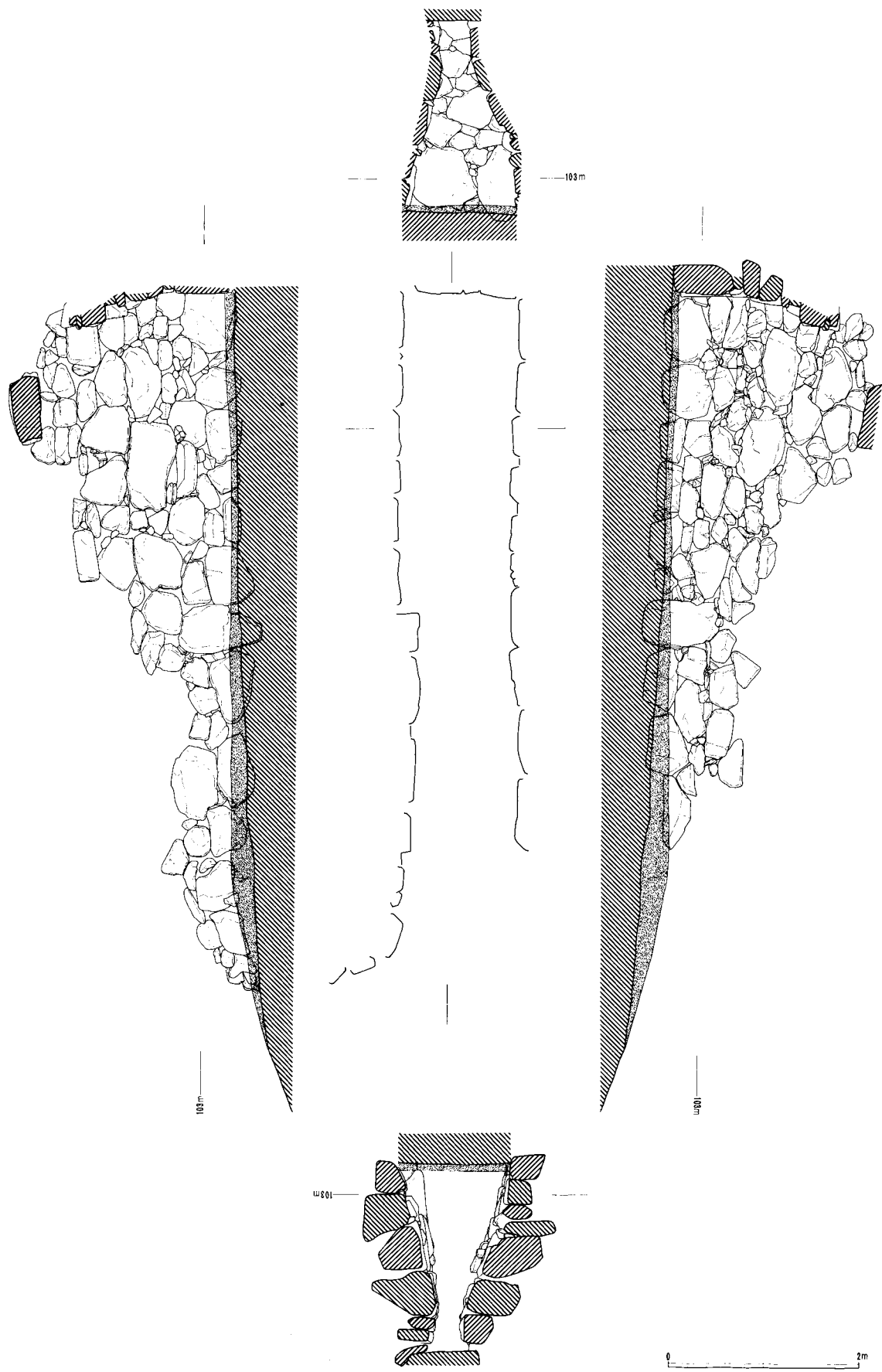
第104图 1号墳実測図 (1:100)



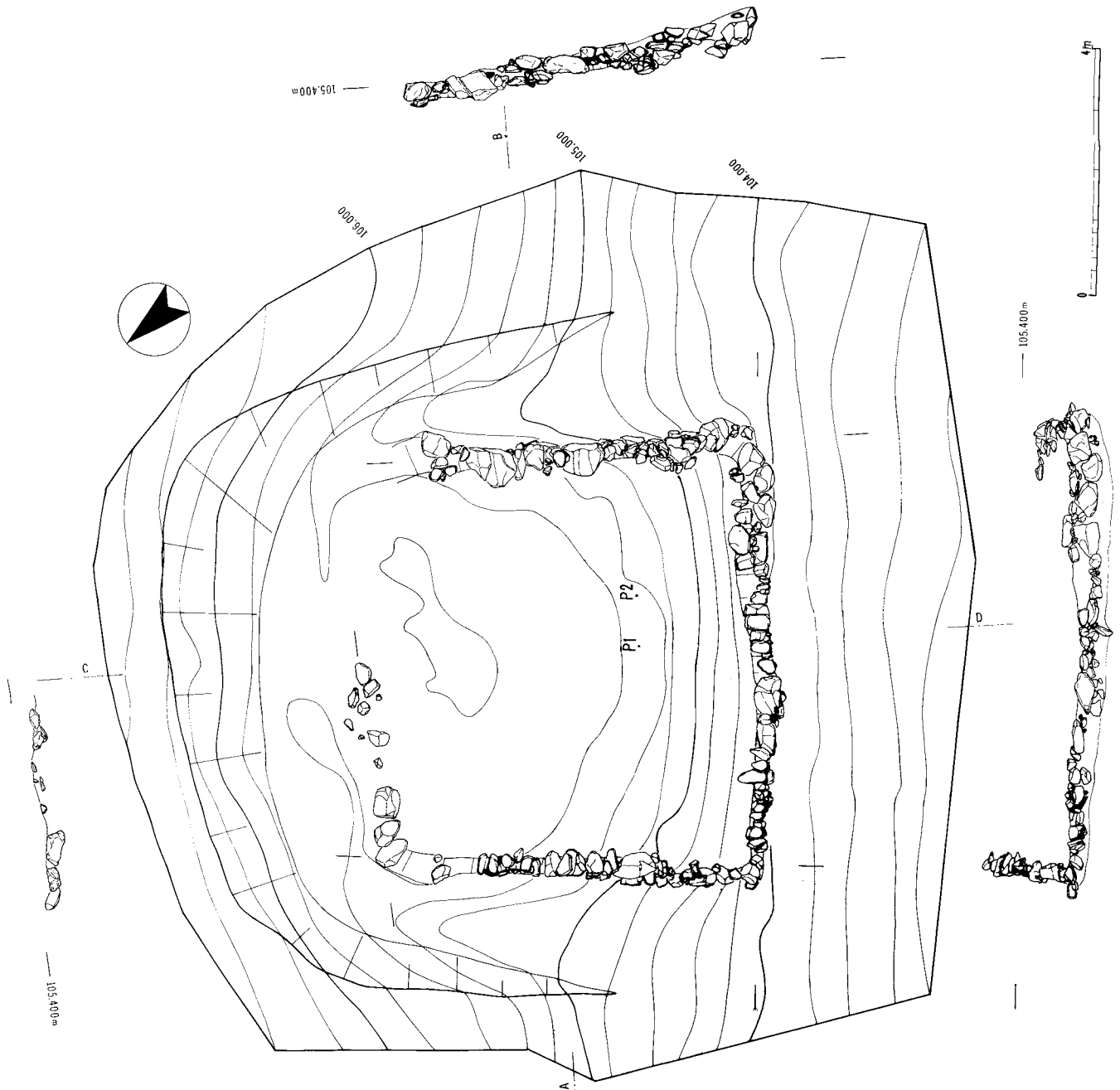
第105图 1号墳丘南北断面図 (1:100)



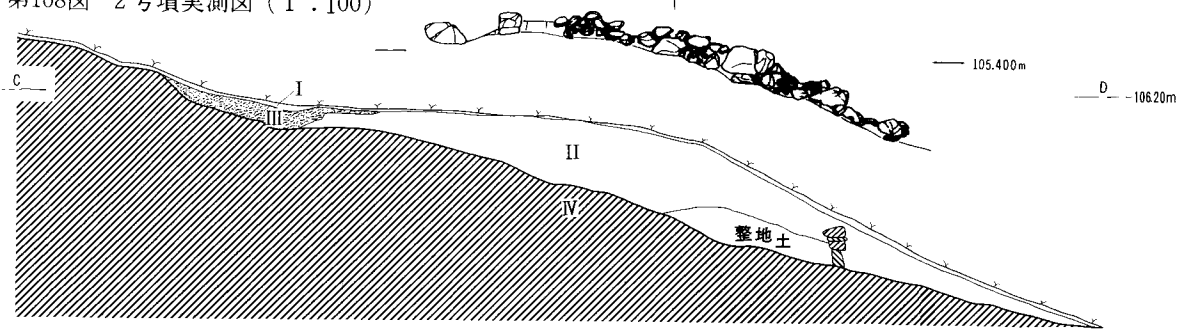
第106图 1号墳丘東西断面図 (1:100)



第107図 1号墳石室実測図(1:60)

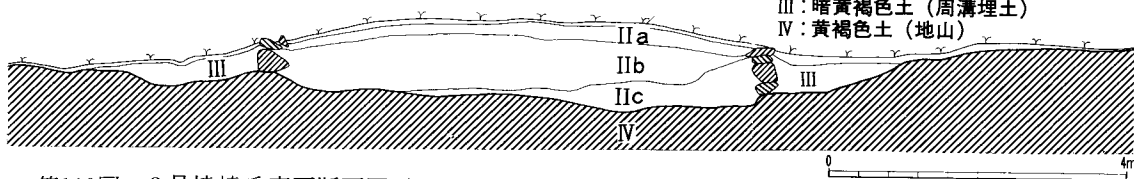


第108图 2号墳実測图 (1:100)

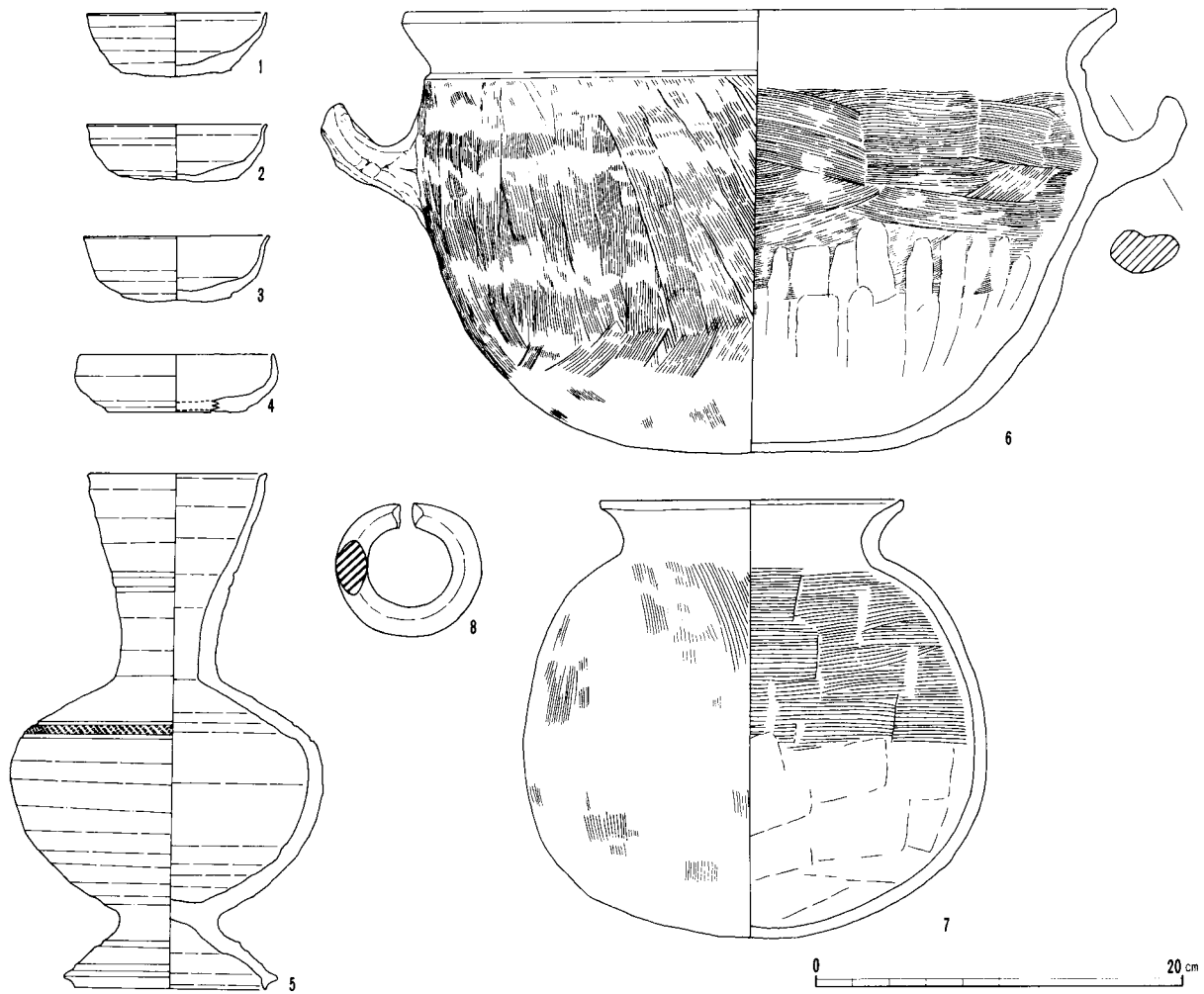


第109图 墳丘南北断面图 (1:100)

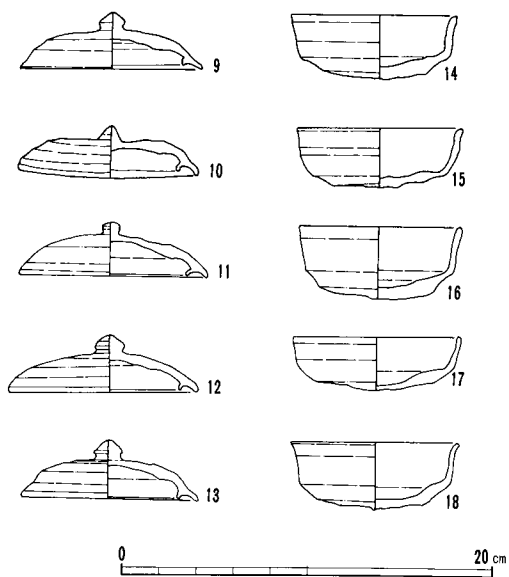
- I: 黑褐色土 (表土・腐蝕土)
- II: 赤黄褐色土 (盛土)
- III: 暗黄褐色土 (周溝埋土)
- IV: 黄褐色土 (地山)



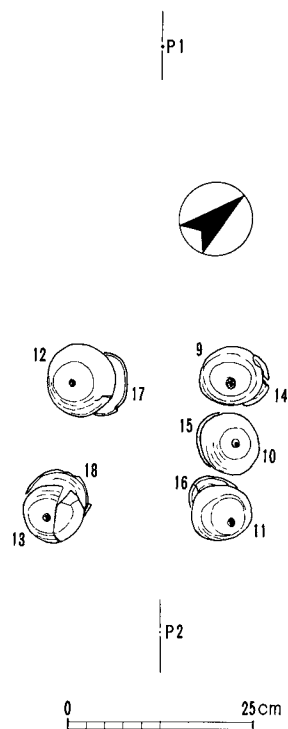
第110图 2号墳墳丘東西断面图 (1:100)



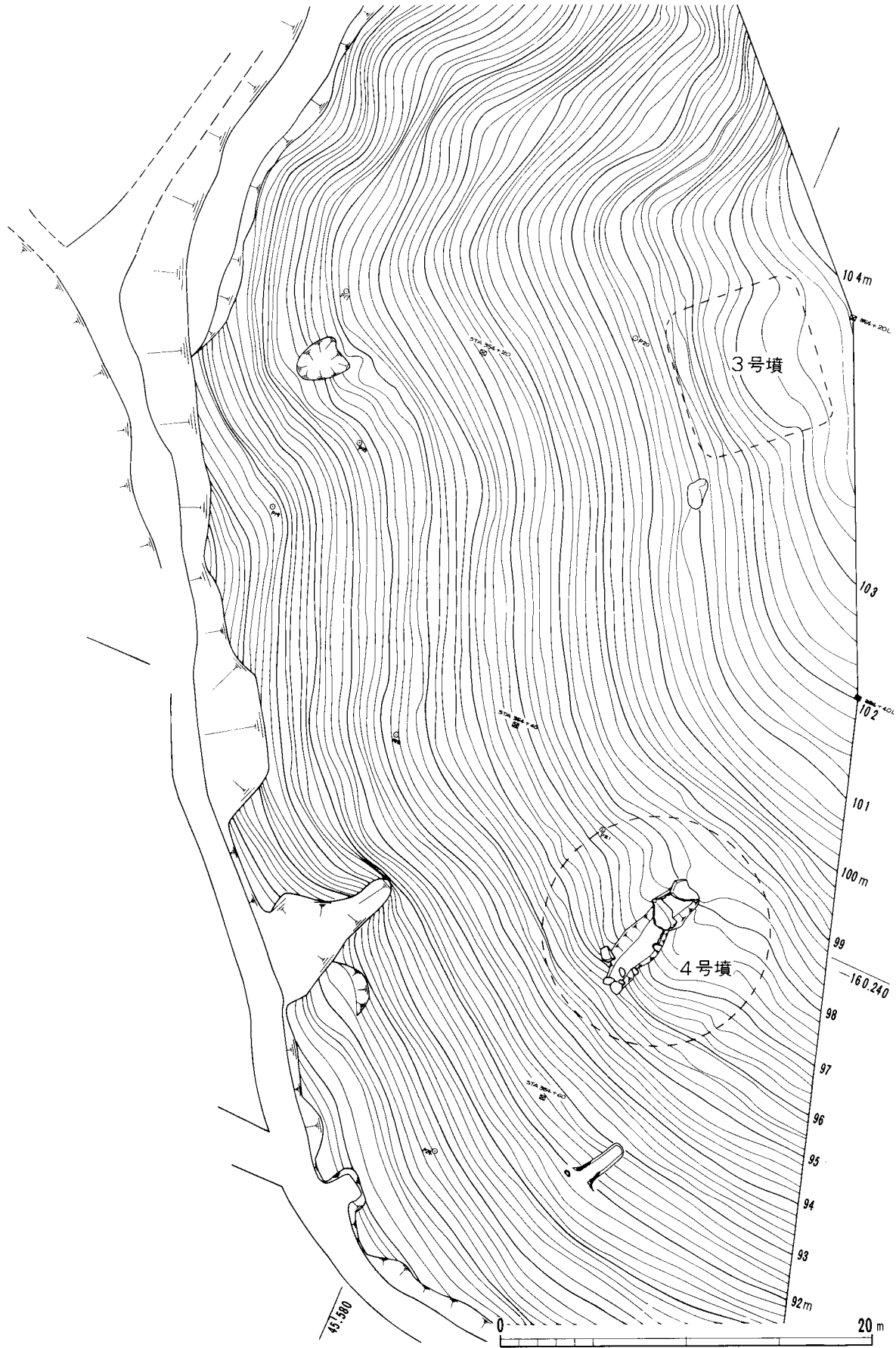
第111図 1号墳出土遺物実測図（1：4）（8は1：1）



第112図 2号墳出土遺物実測図（1：4）



第113図 2号墳遺物出土状況（1：10）



第114図 3・4号墳調査前測量図 (1:300)

(3) 3号墳

A. 墳形

2号墳と同様の方墳で、墳丘の一边は7.8m×7.5mではほぼ正方形に近く、残存の墳丘高は1.0mである。南辺がやや長く、わずかに両側辺が南にひろがっている。周溝は認められなかった。

外護列石は2号墳同様に墳丘裾部の両側方と下方に明確に認められるが、高所側の一边のそれは2号墳同様に列石は完全に巡っていない。そして、あきらかに斜面の低い側の南西側を特に強く意識してつくられたものと考えられる。石積みは人頭大の自然石を要所に小石を混じえながら3～5段前後積み上げている。

B. 埋葬施設

2号墳同様に、内部主体としては石室ではなく、木棺直葬を推定してその主体部の検出に努めたが墓壇掘形、棺痕跡等は検出できなかった。

しかし、2号墳とはやや状況が異なるが、墳頂部で遺物が集中している点もみられることより、当墳も主体部の大半が流失したものと考えられる。

C. 遺物

墳丘の表土を剥いでゆく段階でその中より、須恵器杯蓋(19～22)・杯身(24～30)・無蓋高杯(23)や土師器甕(31)・鍋(33)、及び耳環(32)が出土している。これらの出土遺物のうち、(19)、(20)、(21)、(23)は2号墳と同じように墳頂部の現地表下数cmのところをかたまって出土している。

(4) 4号墳

A. 墳形

円墳形態で、墳丘の直径は約10m余でやや南北に長い。残存の墳丘高は約1mある。墳丘上方と両側の約北半は周溝が巡るが低所の正面まではまわらない。

B. 埋葬施設

南に開口する右片袖式の横穴式石室である。玄室の規模は幅1.6m、長さ3.5m、残存高2.1mで、羨道部をふくめた石室全長は7.25mである。天井石は奥壁にかかる一石以外は付近に散在しており、盗掘の跡を窺わせる。石材は全体に1号墳より大きい

自然石を利用しており、基底石としては横長に石を据え置き、玄室ではその上から5～6段の石が積まれていた。側壁の石積の持ち送りは1号墳ほど急ではない。また、玄室と羨道部の境は長さ0.85m余の石を縦長にたてて袖石としている。埋葬面は凹凸のあるところに薄く置土をしてかためている。

埋葬面から約30cm上方の埋土からは中世の土師器鍋等が出土しており、この時期にはすでに当古墳が開口していたことがわかる。

C. 遺物

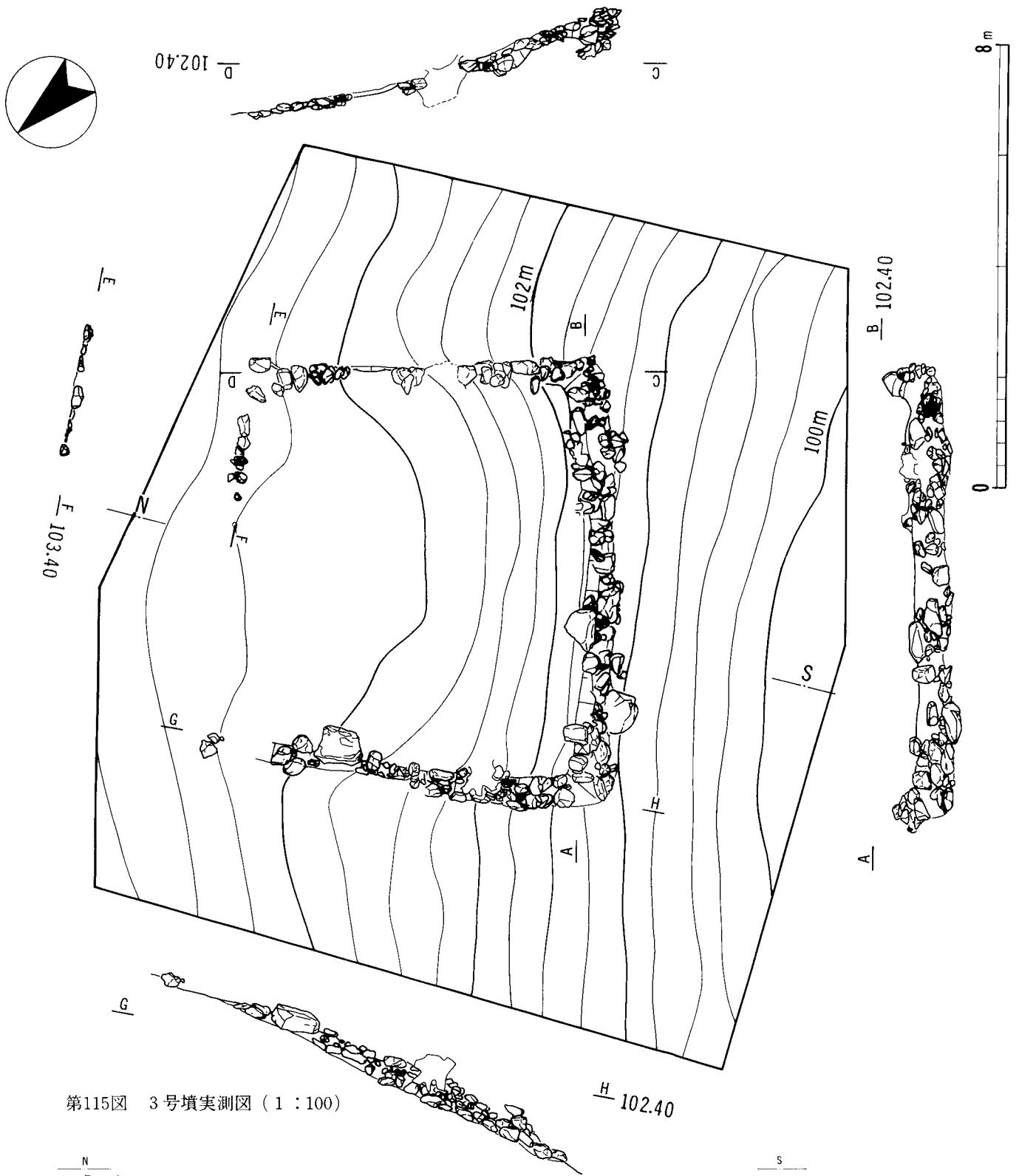
遺物の出土位置は(44)の須恵器杯身を除いては、玄室東奥壁寄りと羨道部に分けられる。前者では、土師器椀(34～38)、須恵器杯蓋(39～42)・杯身(45～48)・提瓶(50)が出土しており、後者では土師器甕(51・52)・甌(53・57)、須恵器杯蓋(43・54)・台付長頸壺(49)と耳環(58)等が出土している。

なお、玄室のほぼ中央西寄りでは須恵器杯身(44)が検出された。

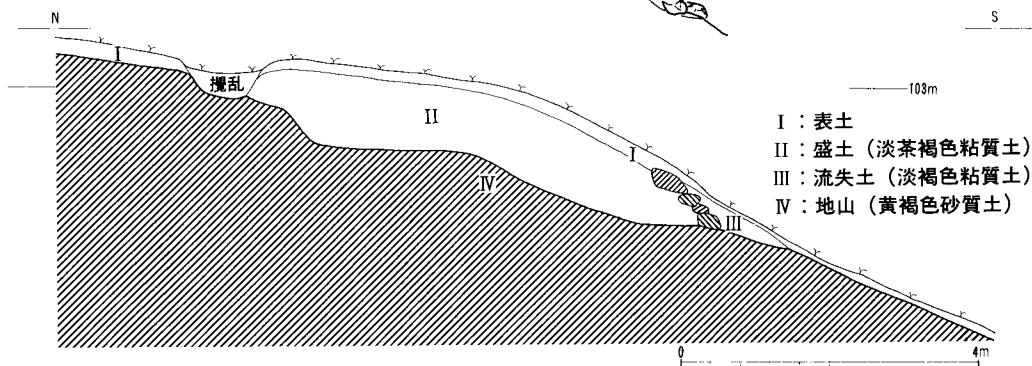
特に、羨道部の西壁に沿って北から土師器甌(57・53)・長胴甕(52)・球胴甕(51)といういわば日常炊飯具が倒置した状態で並べられている。(52)の長胴甕の体部外面下半には煤の付着がみられるが、他には認められず、羨道部におけるなんらかの祭祀事例とも考えられる。また、当石室内では埋葬面から約30cmのところでもかなりの量の中世土器を検出した。土師器小皿(68～71)、土師器鍋(72～75・76)、茶釜形壺(78)がその主なもので、江戸時代の鑄造貨幣である寛永通宝(77)も1点出土している。小皿の口径は7～8cmのもの10cm内外のもの2種に分けられるが、調整技法としてはいずれも内面はナデ調整で、外面は基本的に未調整である。器壁は極めて薄く、色調は白っぽい褐色を呈するものである。

鍋は短い口縁部の端部を上方につまみあげた形態のもので、体部は扁平球状を呈する形式である。

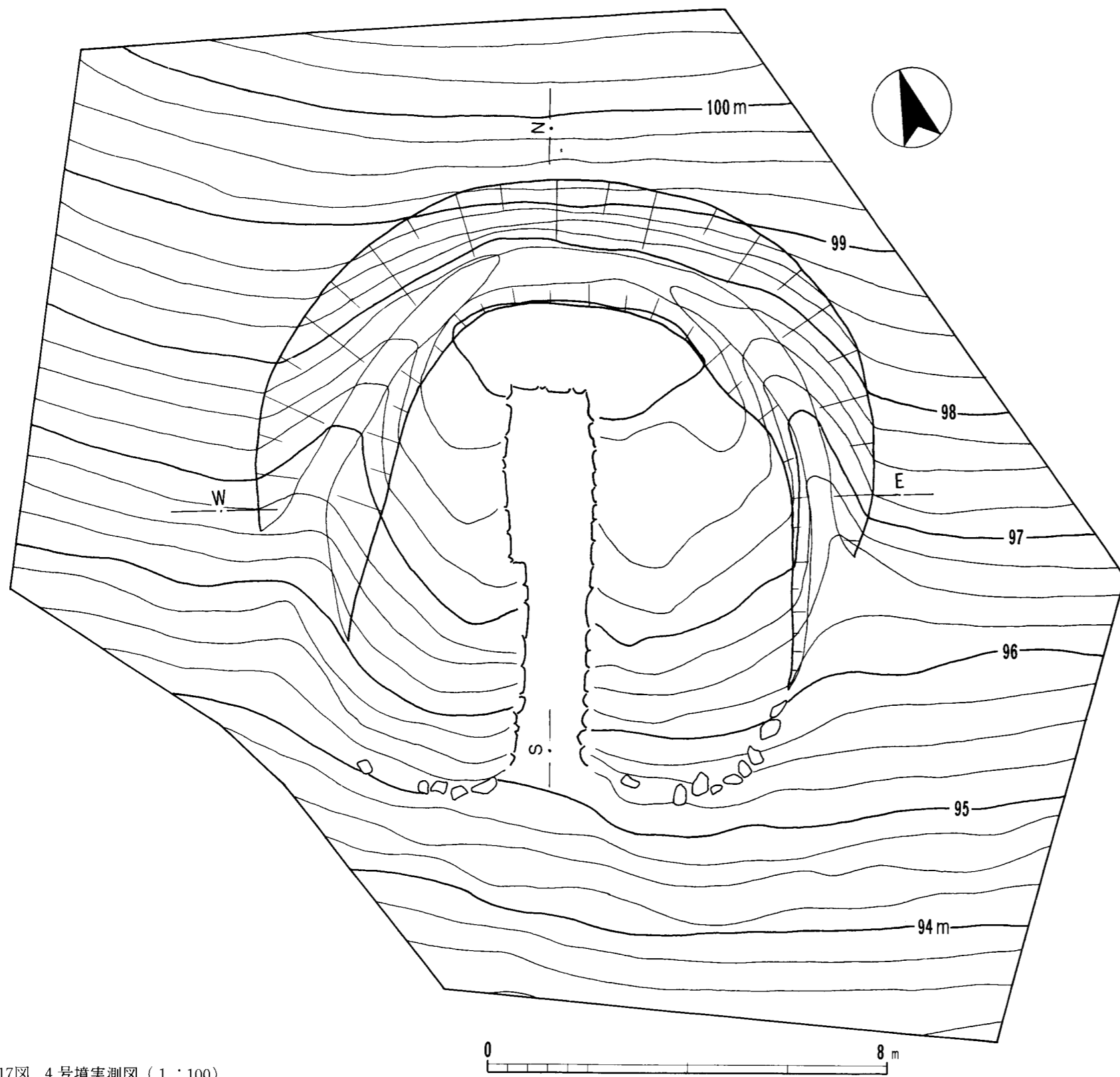
これらの土師器の年代はおそらく15世紀末から16世紀代に入るものと考えられる。



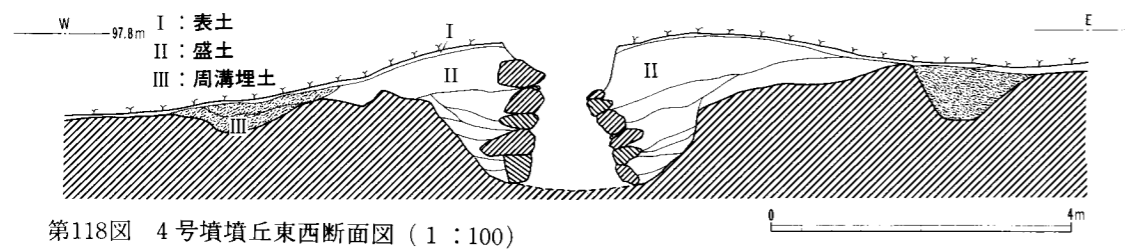
第115图 3号墳实测图 (1:100)



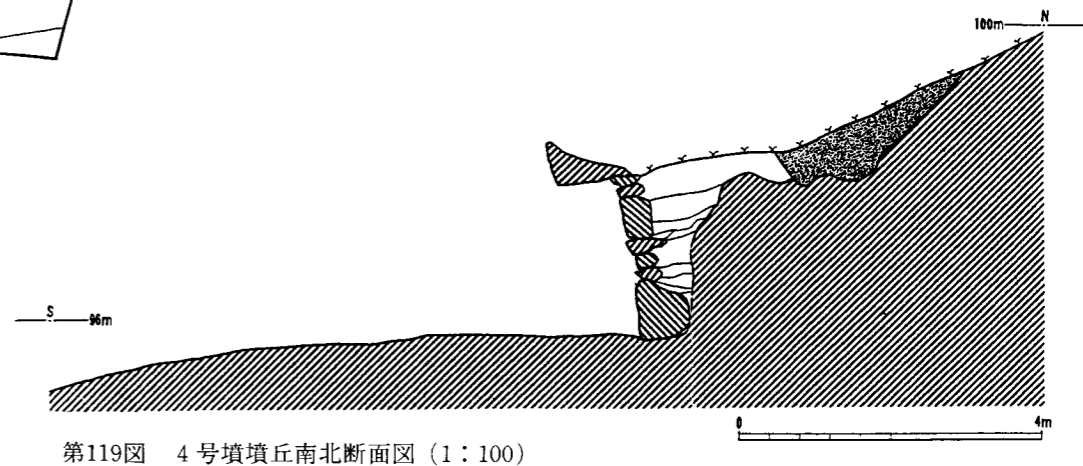
第116图 3号墳填丘南北断面图 (1:100)



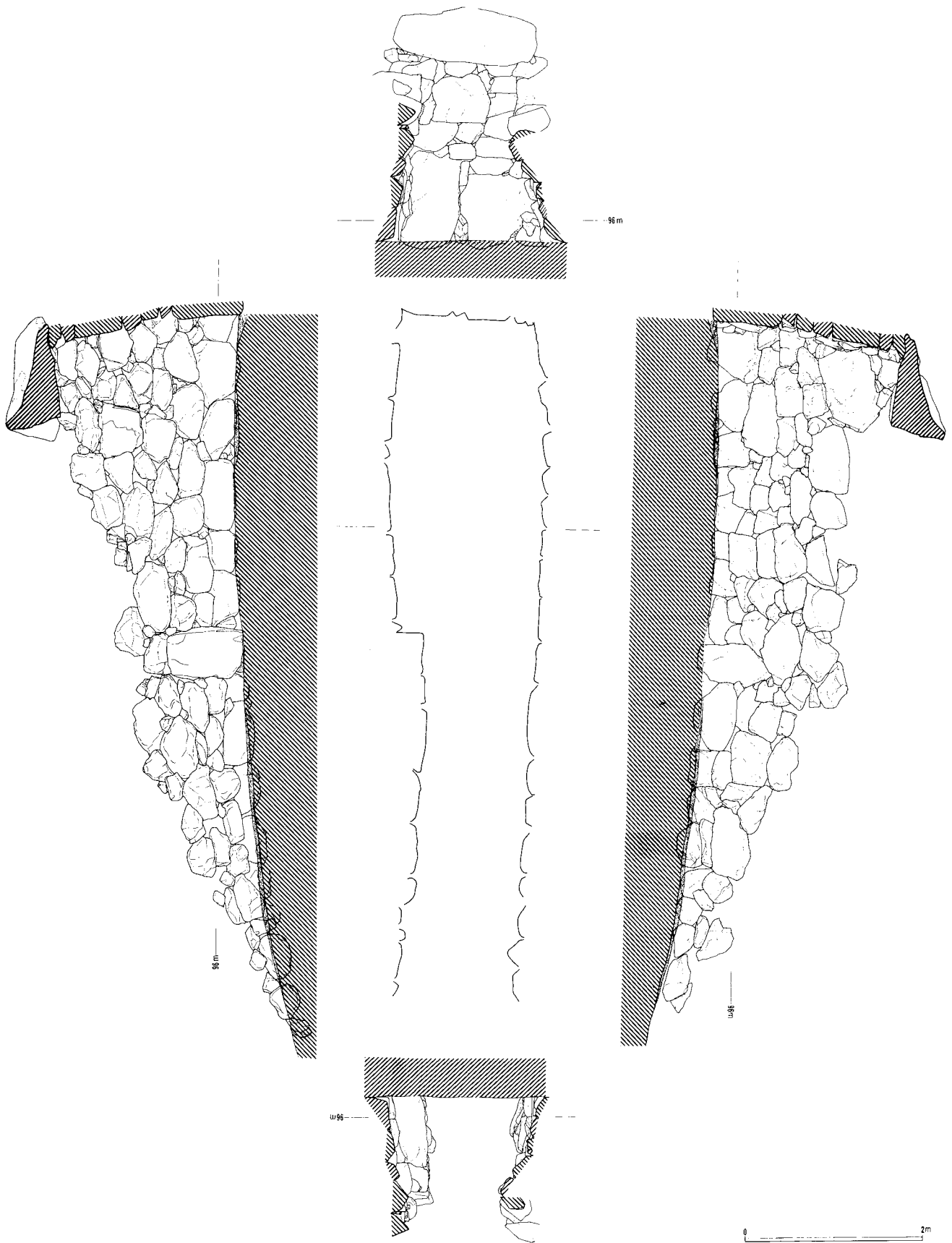
第117图 4号墳実測図 (1:100)



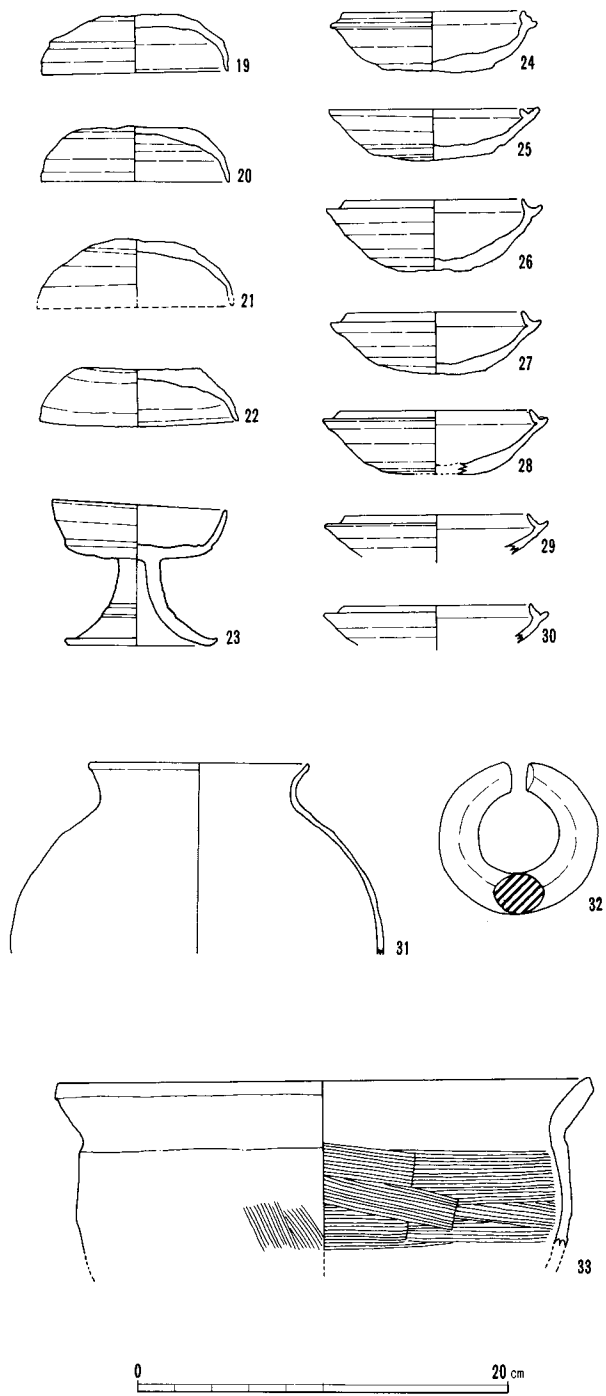
第118图 4号墳填丘東西断面図 (1:100)



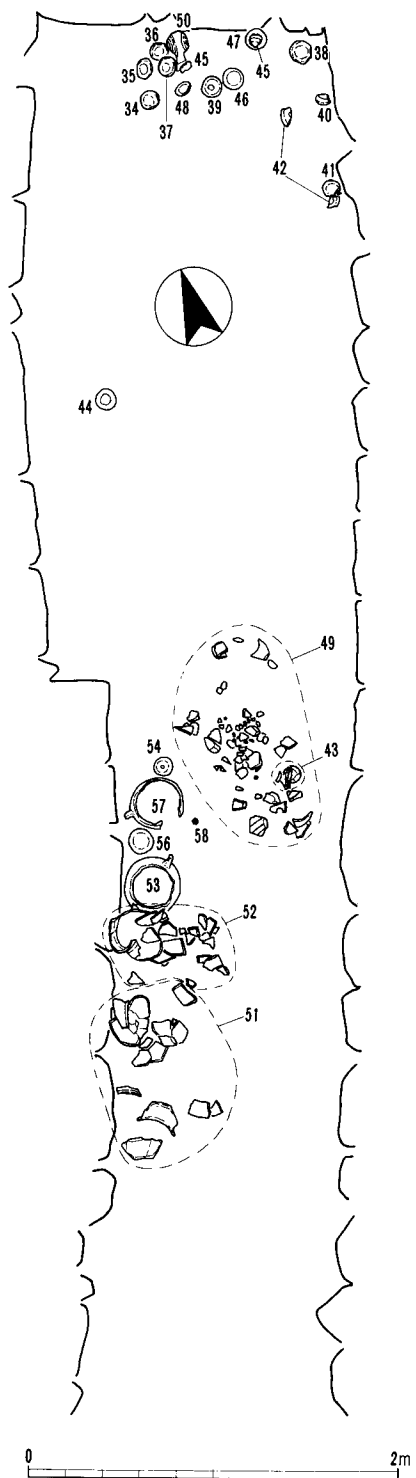
第119图 4号墳填丘南北断面図 (1:100)



第120图 4号墳石室実測图 (1:60)

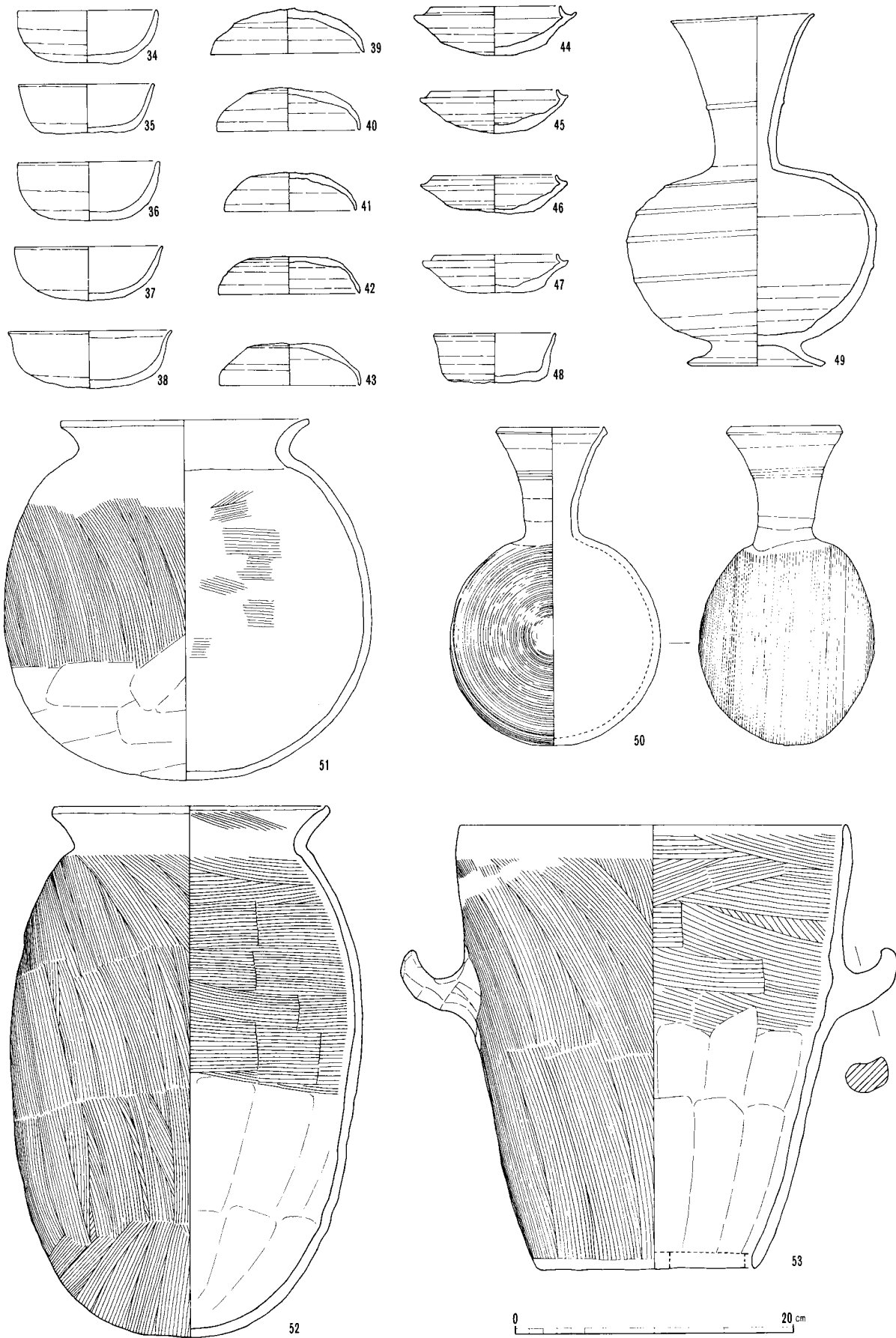


第121図 3号墳出土遺物実測図（1：4）（32は1：1）

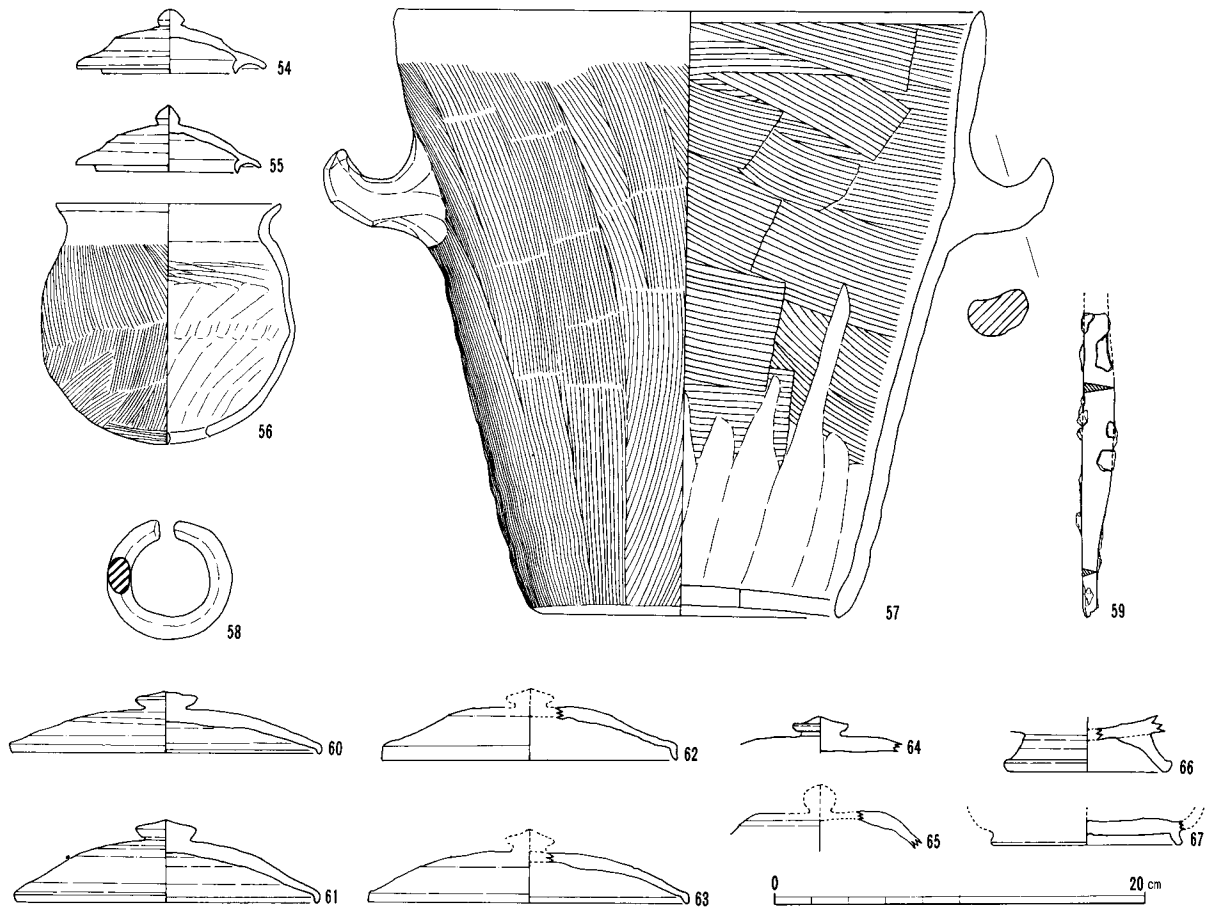


第122図 4号墳遺物出土状況（1：40）

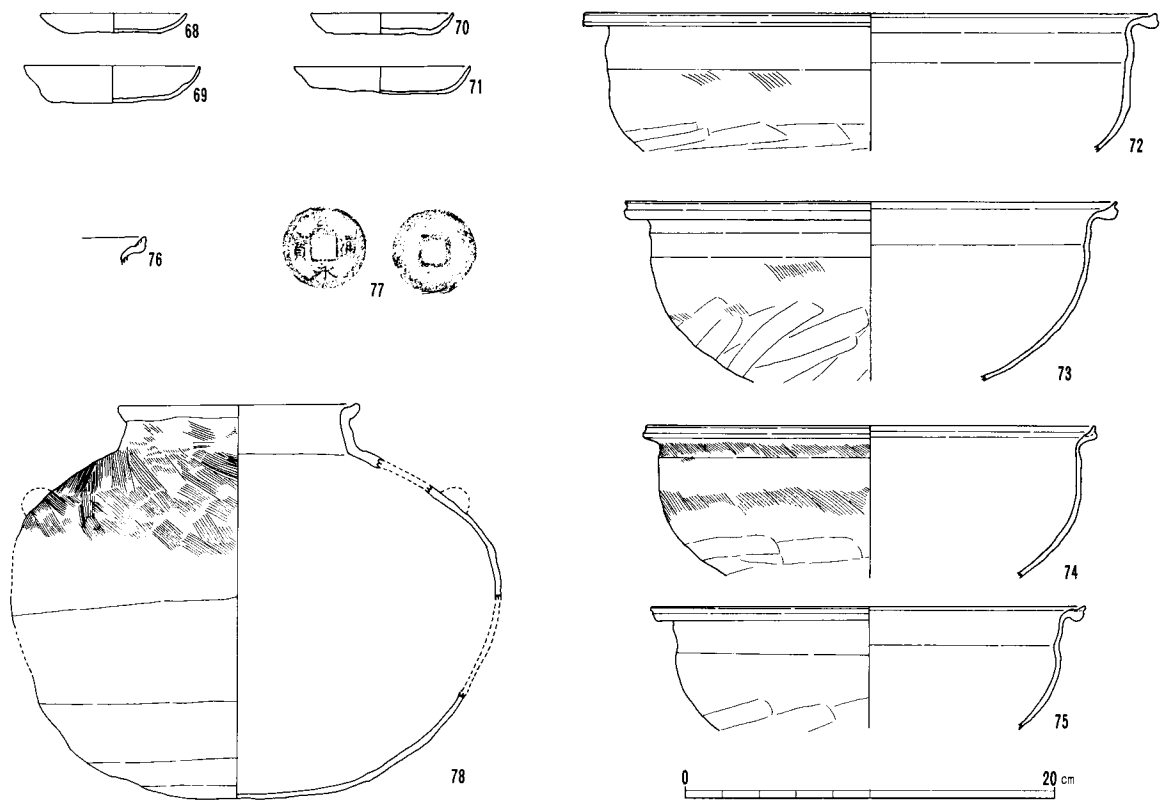
* 図中の番号は遺物番号を示す。



第123图 4号填出土遺物実測図(1:4)



第124図 4号墳出土遺物実測図(1:4)(58は1:1・59は1:2)



第125図 4号墳出土遺物実測図(1:4)(77は1:2)

3. 結 語

(1) 地形と立地

当古墳群は位置的には松阪市西部域に属する標高757mの堀坂山から東麓にのびる丘陵地の一支脈に位置している。そして、その支脈は北西から南東方向に、平野部に突き出した形を呈し、1～4号墳は標高95～105m前後の南側の緩斜面に立地している。

今回の調査区に見る限り4基より構成される。そして、北より1号墳(円墳で横穴式石室)と2号墳(外護列石をめぐらす方墳で木棺直葬か)が、言わば円墳と方墳がちょうど対になったような形で、また、その南には浅い谷を一つ隔てて、3号墳(外護列石をめぐらす方墳で木棺直葬か)と4号墳(円墳で横穴式石室か)が同様な形で立地・築造されている。

これら4基の古墳が位置する北側の丘陵尾根一帯は、昭和60年度に発掘調査を実施した中世の一大墓地群としての横尾墳墓群が占有しているところである。そしてその調査においても、古墳時代の須恵器等が少量検出されており、中世墓造営時に当古墳群の一部が破壊された可能性は十分考えられるが、今回の調査結果の在り方からみても、長期間にわたって多数の古墳が一定地域に順次築造された結果(形)としての所謂、群集墳として位置づけられるものではないであろう。

古墳群の位置するこの丘陵の西側には尾根筋に平行するかのような細い谷水田が走る。横穴式石室は1・4号墳ともほぼ南に開口し、また、外護列石をめぐらす2・3号墳も、その正面観は南方向を意識して築かれている。これは、地形立地上の影響とも考えられるが、南に広がる平野部(松阪市岡山町～西野町)を見下ろし、意識した所産とも考えられよう。

(2) 埋葬施設について

A. 1号墳・4号墳(横穴式石室)について

両者の古墳は基本的に墳形が円形プランであり、内部主体として横穴式石室をもち、且つ羨道にむかつて右に袖をもつ片袖式石室であるという点では共

通している。

その石室構造についてであるが、2号墳玄室の平面プランに幅にして20cm余、長さにして30cm余、1号墳のそれよりも規模が大きい。いずれも平面プランは幅に比べて長さが長大化した長方形を呈するが、2号墳玄室は両側壁中央部が外方へやや張り出した胴張り形態を呈する。ちなみに、玄室幅指数($\frac{\text{玄室幅}}{\text{玄室長}} \times 100$)は1号墳で44、4号墳で46である。また、羨道幅指数($\frac{\text{羨道幅}}{\text{玄室幅}} \times 100$)は前者で68、後者で79である。そして、羨道部の長さは両者ともに玄室の長さを上回っている。

次に、石室両壁の石材の積み方については、石材を横位に6～7段積み上げることを基本とし、玄室と羨道部の境には0.8m余の石材を縦長に立てかけて袖石としている。また、壁面の持ち送りについては4号墳はさほど認められないが、1号墳について天井部内側幅が非常に狭くなり、かなり急な持ち送りがみられるのである。

以上、1・4号墳の石室構造について少々ふれたが、その石室のプラン、構造等を畿内における横穴式室の型式分類^①にあてはめれば、その時期は古くても第Ⅲ型式(6世紀後半)以降、ないし第Ⅵ型式(7世紀前半)の石室形態であることがわかる。しかし、前述した1号墳の石室壁面の持ち送りはきわめて顕著である点は、横穴式石室の中でも比較的新しい時期の一般的特徴(傾向)とは合致していない。これを単に石室に使う石材の問題(材質や石の大きさ等)と見るのか、石室工人集団、あるいは被葬者の地域性(特殊性)等の表出とみるかはもう少し検討を待ちたいと思う。

B. 2・3号墳について

両者の古墳は方形プランを呈し、外護列石を巡らすという点で共通している。規模的にはいずれも一辺7m代であるが、やや3号墳の方が大きい。残存高は0.8～1m余で、内部主体としては木棺直葬を想定して発掘調査を進めたが、いずれも墓壇堀形、棺痕跡等は検出できなかった。

しかし、2号墳においては前述したように墳頂部の表土下わずか数cmのところ須恵器杯・蓋がセツトになって並んで検出され、また3号墳でも須恵器杯・蓋、土師器甕、耳環等がある程度かたまって出土している。

このような遺物の出土状況を主体部の流失に伴ってたまたま残存した遺物と見るのか、別の意味（墳丘上墓前祭祀等）をもつものなのか等の判断は今回の調査と資料からは速断できないのである。

(3) 築造時期について

1～4号墳の築造時期については、各古墳からの出土遺物、特に須恵器の編年（年代観）に依るところが大きい。

1号墳石室からの出土は数少ないが、口径10cm余の杯・蓋形態が逆転する小ぶりの杯（1～4）は陶邑編年^②のTK217型式頃に比定され、7世紀中葉と考えられ、当墳築造期の一点をおさえることができる。2号墳については、ほぼ同形態、同型式の須恵器杯・蓋（9～18）が検出されており、1号墳出土の須恵器と相似た時期（TK217型式）のものと考えられる。

3号墳出土遺物には須恵器杯蓋（19～22）、杯身（24～30）、高杯（23）があるが、その型式は先のTK217型式の範疇におさまるものであるが、かえりをもつ宝珠つまみ付の蓋形態も見られない点等からみると、217型式でも古相（7世紀前葉）に位置づけられそうである。

つぎに4号墳であるが、当古墳群中では最も遺物出土量が多い。須恵器について概観すると、他の古墳にくらべるとやや時期幅が窺える。口径10cm余の小ぶりの杯・蓋をその主流とするが、蓋形態については（54・55）のように宝珠状（乳頭状）つまみが付き、口縁部以上にかえり部が垂下する蓋も出土している。また、一方では偏平な宝珠つまみが付き、口縁部のかえりの消失し、端部が短く垂下する形態の蓋（60～64）も出土している。

これらの須恵器を概観すれば、4号墳出土須恵器は、時期的にはTK217型式古相（7世紀前葉）～TK46・48型式（7世紀中頃～後葉）、及びMT21型式（8世紀初頭頃）までの時期幅に属するものと考え

えられる。したがって4号墳については何回かの追葬が推定されるのである。

以上まとめると、各古墳の須恵器よりみる築造年代はいずれも7世紀前葉～中頃（須恵器編年でいうTK217型式頃）と考えられ、各古墳の築造時期差はさほどないものと判断できる。

(4) おわりに

以上、各古墳の石室構造、築造時期等に触れたが、が、今後の検討課題の意味をも含め、2点ほどおわりに概述しておきたい。

その1つは、4号墳の遺物項にも述べたように羨道部西壁に沿って、土師器（甑・長胴甕・球胴甕）が並置されていた事実についてである。

おそらくは墓前炊飯にかかる祭祀の意味合いを推定できるが、その形態（在り方）を示唆する事例として今後の類例を待ちたい。

2つ目は当古墳（いわば終末期に属する古墳群）と古代寺院造営との時代的関わりの有無等についてである。当古墳群から南西に約1.5kmのところには白鳳時代から奈良前期の寺院跡（丹生寺廃寺）が知られている。いわば被葬者の性格、またその経済・社会的背景の中で、再度当古墳群の位置（性格）付けを検討しなくてはならないと思われるが、以上若干の問題提起を兼ねて、結語としたい。

（新田 洋）

〔註〕

- ① 白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」『古代学研究42・43合併号』（1966・古代学研究会）
- ② 田辺昭三『陶邑古窯址群I』平安学園考古クラブ（1966）

図版番号	出土地点	器種	器形	法量 (cm)	形態の特徴	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考	整理番号
1	1号墳・羨道	須恵器	杯身	口径 9.8 器高 3.6	口縁部はほぼ直立してのびる	底部へラ切り未調整	淡灰色	石粒(2~3mm大)少量含む	良好(並)	ロクロ回転順廻り・内面中央に一方方向の仕上げナデ	22-8102
2	1号墳・石室埋土	須恵器	杯身	口径 9.6 器高 3.2	口縁部はやや外反してのび、端部は丸くおさまる	底部へラ切り未調整	淡灰色(白っぽい)	砂粒少量含む	良好(並)	ロクロ回転順廻り	22-8103
3	1号墳・石室埋土	須恵器	杯身	口径(10.0) 器高 3.6	口縁部は外反してのびる・底部はへラ切り時の段残す	底部へラ切り未調整	淡灰色	砂粒少量含む	良好(並)	ロクロ回転順廻り	22-8104
4	1号墳・墳丘北セクション	須恵器	杯身	口径(10.5) 器高 3.1	口縁部はやや内湾して立ち上がる	底部へラ切り未調整	白灰色	砂粒少量含む	良好	ロクロ回転逆廻り	22-8107
5	1号墳・石室	須恵器	台付長頸壺	口径 9.5 器高 28.1	体部(肩下)に輪描き列点文	胴部約半分はロクロケズリ	淡黄灰色	砂粒多く含む	良好(並)	ロクロ回転順廻り	22-8101
6	1号墳	土師器	把手付鍋	口径 39.0 器高 24.0	偏半球状の体部から、口縁部はくの字に外反	体部外面はハケメ、底部近くへラケズリ痕・体部内面上半はハケメ、下半はへラケズリ	淡黄褐色	砂粒少量含む	良好	煤の付着など見られず、実用された感じはない	22-8108
7	1号墳・石室埋土	土師器	甕	口径 16.6 器高 23.6	球状の体部から、口縁部はくの字に短く外反し、端部は外方に面をつくる	体部外面はハケメのちナデ・体部内面上半はハケメ、下半はへラケズリ	淡黄褐色	精緻	やや軟弱	外面底部に、煤が付着	22-8106
8	1号墳・石室	金銅製	耳環	外径 1.8 ~2.0	—	—	金色	—	—	銅芯に金箔貼り・断面は楕円形	22-8105
9	2号墳・墳丘Ⅲ	須恵器	杯蓋	口径 9.8 器高 3.1	宝珠つまみ・かえりは短く下方にのびる	天井部ロクロケズリ	暗青灰色	細砂粒少量含む	良好	ロクロ回転順廻り・内面中央に仕上げナデ	22-8205
10	2号墳・墳丘Ⅲ	須恵器	杯蓋	口径 9.8 器高 2.8	乳頭状つまみ・天井部は平坦	天井部ロクロケズリ	淡青灰色	砂粒やや多く含む	良好	ロクロ回転順廻り・内面中央に強い一方方向の仕上げナデ・焼成時のひずみが大い	22-8207
11	2号墳・墳丘Ⅲ	須恵器	杯蓋	口径 10.2 器高 2.9	乳頭状つまみ	天井部凹み多い(ロクロケズリ痕見られない。)	淡青灰色	砂粒やや多く含む	良好	ロクロ回転順廻り・内面中央に強い一方方向の仕上げナデ・重ね焼き痕あり	22-8209
12	2号墳・墳丘Ⅲ	須恵器	杯蓋	口径 12.5 器高 3.2	宝珠つまみ	天井部ロクロケズリ	暗青灰色	砂粒やや多く含む	良好	ロクロ回転順廻り・内面中央に一方方向の仕上げナデ	22-8201
13	2号墳・墳丘Ⅲ	須恵器	杯蓋	口径 9.5 器高 3.1	宝珠つまみ	天井部ロクロケズリ	青灰色	砂粒・石粒多く含む	良好	ロクロ回転順廻り・内面中央に一方方向の仕上げナデ	22-8203

第21-1表 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	器種	器形	法量 (cm)	形態の特徴	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考	整理番号
14	2号墳・墳丘Ⅲ	須恵器	杯身	口径 8.9 器高 3.5	口縁部はやや外傾して立ち上がり、端部は尖る	底部へラ切り未調整	青灰色	砂粒多く含む	良好(並)	ロクロ回転順廻り・内面中央に一方方向の仕上げナデ	22-8206
15	2号墳・墳丘Ⅲ	須恵器	杯身	口径 9.1 器高 3.2	口縁部は内側に面をつくる	底部へラ切り未調整	青灰色	砂粒少量含む	良好	ロクロ回転順廻り・内面中央に一方方向の仕上げナデ	22-8208
16	2号墳・墳丘Ⅲ	須恵器	杯身	口径 8.7 器高 3.9	口縁部はやや外反して立ち上がり、端部は丸くおさまる	底部へラ切り未調整	濁灰色	砂粒・小石含む	良好	内面中央に一方方向のナデ	22-8210
17	2号墳・墳丘Ⅲ	須恵器	杯身	口径 9.1 器高 2.9	口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部は丸くおさまる	底部へラ切り未調整	青灰色	砂粒微量含む	良好	ロクロ回転順廻り・内面中央に一方方向の仕上げナデ	22-8202
18	2号墳・墳丘Ⅲ	須恵器	杯身	口径 9.1 器高 3.6	口縁部は外傾してのび、端部は丸くおさまる	底部へラ切り未調整	青灰色	砂粒・石粒多く含む	良好	ロクロ回転逆廻り・内面中央に一方方向の強いナデ	22-8204
19	3号墳・墳丘Ⅲ M80	須恵器	杯蓋	口径 10.0 器高 3.2	口縁部は、やや外向きにのびる	天井部へラ切り未調整	淡黄灰色	砂粒少量含む	良好	ロクロ回転順廻り	22-8301
20	3号墳・墳丘Ⅲ M80	須恵器	杯蓋	口径(10.0) 器高 3.0		天井部へラ切り未調整	青灰色	砂粒少量含む	良好	ロクロ回転順廻り・内面中央に一方方向のナデ	22-8303
21	3号墳・墳丘Ⅲ M80	須恵器	杯蓋	口径(16.0) 器高(3.7)		天井部へラ切り未調整	淡灰色	細砂粒少量含む	良好	ロクロ回転順廻り	22-8304
22	3号墳・墳丘Ⅲ M80	須恵器	杯蓋	口径 10.6 器高 3.3	天井部平面をのこす	天井部へラ切り未調整・口縁部内面にへラのアタリ痕がつく	晴青灰色	細砂粒少量含む	良好	ロクロ回転逆廻り・内面中央に一方方向のナデ	22-8302
23	3号墳・墳丘Ⅲ M80	須恵器	無蓋高杯	口径 9.4 器高 7.8	杯部の口縁部は内弯気味に立ち上がる・杯部底面との境に鋭い稜をもつ・脚部に2条の沈線	全体をロクロナデ調整するが、杯部底面はロクロケズリ痕のこる	晴青灰色	細砂粒少量含む	良好		22-8309
24	3号墳・墳丘Ⅲ M80	須恵器	杯身	口径 9.8 器高 3.3	立ち上がりは器壁厚く、短く立つ・受部は水平に短くおさまる	底部へラ切り未調整	灰色	砂粒・石粒少量含む	良好	ロクロ回転順廻り	22-8307
25	3号墳・墳丘Ⅲ M80	須恵器	杯身	口径 11.4 器高 2.7	口縁部は短く斜め内側にのびる	底部へラ切り未調整	淡灰色	石粒少量含む	良好	ロクロ回転順廻り	22-8308
26	3号墳・墳丘Ⅲ M80	須恵器	杯身	口径(9.8) 器高 3.8	口縁部は短く斜め内側にのびる	底部へラ切り未調整	淡灰色	砂粒少量含む	良好	ロクロ回転逆廻り・内面中央に乱ナデ	22-8310
27	3号墳・墳丘	須恵器	杯身	口径(11.4) 器高 3.3	口縁部は短く斜め内側にのびる	底部へラ切り未調整	淡灰色	砂粒少量含む	良好		22-8441

第21-2表 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考	整理番号
28	3号墳・墳丘Ⅲ M80	須恵器	杯身	口径(10.2) 器高 3.4	口縁部の立ち上がりは斜め内方にのびる	底部へラ切り未調整	淡黄灰色	砂粒多く含む	良好	内面中央部は乱ナデ	22-8311
29	3号墳・墳丘Ⅲ M80	須恵器	杯身	口径(9.8) 器高 —	口縁部の立ち上がりは、斜め内方にシャープにのびる		灰色	細砂粒少量含む	良好		22-8312
30	3号墳・墳丘Ⅲ M80	須恵器	杯身	口径(10.2) 器高 —			淡黄灰色	細砂粒少量含む	良好		22-8313
31	3号墳・墳丘Ⅲ M80	土師器	甕	口径(10.4) 器高 —	口縁部は丸みをもって短く立ち上がり、端部はやや受口状となり、尖る	口縁部内外面ヨコナデ・体部内面へラケズリ	淡茶褐色	砂粒多く含む	良好	器面の磨耗はげしい	22-8306
32	3号墳・墳丘中 央(盛土)	金銅製 耳環		外径 2.1 ~2.2	——	——	金色	——	——	銅芯に金箔貼り・断面楕円形	22-8314
33	3号墳・墳丘右 下表採	土師器	鍋	口径(29.2) 器高 —	把手付鍋形態と考えられる	口縁部内外面ヨコナデ・体部内外面ハケメ	淡黄褐色	精良	やや軟	1/6残(口縁部~体部上半)	22-8305
34	4号墳・玄室	土師器	椀	口径 10.1 器高 3.8		粘土紐巻き上げ・口縁部内外面ヨコナデ	淡黄褐色 (濁肌色)	砂粒・金雲母片含む	やや軟	2/3残	22-8403
35	4号墳・玄室	土師器	椀	口径 9.6 器高 3.6	底部は平底で杯形態	口縁部内外面ヨコナデ・内面ナデ・体部外面下半~底部は乱ナデ	明黄褐色	精緻	良好		22-8424
36	4号墳・玄室	土師器	椀	口径 10.2 器高 4.1	底部は平底風	粘土紐巻き上げ・口縁部内外面ヨコナデ・他はナデ調整	明黄褐色	砂粒多く含む	良好	底部の一部に黒斑のこる	22-8404
37	4号墳・玄室	土師器	椀	口径 10.6 器高 3.9	底部は丸底風で、半円状の体部	粘土紐巻き上げ・外面は全体にナデ調整	明茶褐色	細砂粒やや多く含む	良好(内面中央は不良)		22-8425
38	4号墳・玄室	土師器	椀	口径 11.7 器高 4.2	丸味のある体部から口縁部は外反してのび、端部は丸くおさまる	粘土紐巻き上げ・口縁部内外面ヨコナデ	淡黄褐色 (肌色)	砂粒・金雲母片含む	良好		22-8426
39	4号墳・玄室	須恵器	杯蓋	口径 11.0 器高 3.2	天井部と口縁部の境は窪み状に反し、口縁部は外方に八の字状にのびる	天井部へラ切り未調整	淡青灰色	砂粒少量含む	良好	ロクロ回転(順廻り)・内面中央は乱ナデ	22-8407
40	4号墳・玄室	須恵器	杯蓋	口径 10.3 器高 3.1	丸味のある天井部から口縁部は短く内傾する	天井部へラ切り未調整	暗青灰色	石粒少量含む	良好	ロクロ回転(順廻り)・内面中央は乱ナデ	22-8410
41	4号墳・玄室	須恵器	杯蓋	口径 9.6 器高 2.7		天井部へラ切り未調整	暗青灰色	石粒少量含む	良好	ロクロ回転(逆廻り)	22-8408

第21-3表 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	器種	器形	法量 (cm)	形態の特徴	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考	整理番号
42	4号墳・玄室	須恵器	杯蓋	口径 10.0 器高 2.7		天井部へラ切り未調整	青灰色	砂粒少量 含む	良好	ロクロ回転逆廻り	22-8417
43	4号墳・羨道	須恵器	杯蓋	口径 10.1 器高 3.2		天井部へラ切り未調整	暗青灰色	砂粒少量 含む	良好	ロクロ回転逆廻り	22-8414
44	4号墳・玄室	須恵器	杯身	口径 9.3 器高 3.5		底部へラ切り未調整	淡青灰色	砂粒少量 含む	良好	ロクロ回転逆廻り・内面中央は乱ナデ	22-8405
45	4号墳・玄室	須恵器	杯身	口径 10.5 器高 3.1		底部へラ切り未調整	淡青灰色	砂粒少量 含む	良好	ロクロ回転順廻り	22-8413
46	4号墳・玄室	須恵器	杯身	口径 8.9 器高 2.8		底部へラ切り未調整	青灰色	砂粒少量 含む	良好	ロクロ回転逆廻り・内面中央は乱ナデ	22-8409
47	4号墳・玄室	須恵器	杯身	口径 10.4 器高 2.8		底部へラ切り未調整	暗青灰色	砂粒少量 含む	良好	ロクロ回転順廻り・内面中央は乱ナデ	22-8416
48	4号墳・玄室	須恵器	杯身	口径 8.8 器高 3.5	平底部から、体部、口縁部は斜め外方に直線的にのびる	底部へラ切り未調整	淡黄灰色	砂粒やや多く含む	良好	ロクロ回転逆廻り	22-8402
49	4号墳・羨道	須恵器	台付長頸壺	口径 10.2 器高 25.2	体部はロクロケズリによる強調した稜(4条)をもつ・頸部にはロクロナデによる低い突縁走る	体部の1/2下部にはロクロケズリの痕のこる	淡灰色	砂粒多く含む	良好	ロクロ回転順廻り	22-8428
50	4号墳・玄室	須恵器	提瓶	口径 7.6 器高 22.7	頸部にへラ状工具による2条の沈線	体部は全体にカキメ調整	青灰色	砂粒少量 含む	良好	ロクロ回転順廻り	22-8421
51	4号墳・羨道	土師器	甗	口径 19.8 器高 25.6	球状の体部から口縁部は短く外反してのびる・最大径は体部中央	体部外面ハケケメ調整・体部内面上半はハケケメ、下半はヘラケズリ	淡褐色	細砂粒多く含む	良好	体部の中央下寄りに最大径をもつ	22-8423
52	4号墳・羨道	土師器	長脚甗	口径 19.8 器高 38.1	長脚球の体部から、口縁部はくの字に外反してのび、端部は面をつくる	体部外面全体ハケケメ調整・体部内面上半はハケケメ、下半はヘラケズリ	淡黄褐色	細砂粒多く含む	良好	体部外面下半に煤付着	22-8420
53	4号墳・羨道	土師器	甗	口径 27.8 器高 32.0	深鉢状の体部の中央やや上寄りに上向き棒状把手がつく	口縁部内外面はヨコナデ・外面ハケケメ調整・内面上半はハケケメ、下半はヘラケズリ	淡茶褐色	砂粒多く含む	良好		22-8411
54	4号墳・羨道	須恵器	杯蓋	口径 14.0 器高 3.4	宝珠つまみ・かえりは内側斜め下方に長くのび、口縁端をしのぐ	天井部中央へラ切り未調整	淡青灰色	砂粒少量 含む	良好	ロクロ回転順廻り	22-8406
55	4号墳・羨道 4カキ出し	須恵器	杯蓋	口径 7.8 器高 3.5	宝珠つまみ・かえりは垂直に長くのび、口縁端をしのぐ	天井部約1/2ロクロへラケズリ	淡青灰色	砂粒少量 含む	良好	ロクロ回転順廻り・天井部全体に自然釉がかかる	22-8427

第21-4表 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考	整理番号
56	4号墳・羨道	土師器	甕	口径 12.2 器高 12.7	球状の体部から口縁部は斜く立ち上がる	口縁部内外面ヨコナテ・体部内面の肩部はハケメ以下はヘラケズリ、中央部に連続オサエ痕	淡茶褐色	砂粒少量含む	良好	底部に焼成後穿孔あり	22-8401
57	4号墳・羨道	土師器	甌	口径 31.4 器高 32.8		口縁部内外面ヨコナテ・外面全体ハケメ・体部内面はハケメ、1/4以下ヘラケズリ	黄褐色	砂粒少量含む	良好		22-8412
58	4号墳・羨道	金銅製耳環		外径 1.5 ～ 1.7		――	金色	――	――	銅芯に金箔貼り・断面は楕円形	22-8432
59	4号墳・羨道端	鉄製刀師		刀部幅 1.0 長さ ～ 1.2		――	――	――	――		22-8419
60	4号墳・墳丘Ⅲ・スノ	須恵器	杯蓋	口径(16.5) 器高 3.4	偏平宝珠つまみ	天井部約2/3クロケズリ	青灰色	砂粒やや多く含む	良好	ロクロ回転順廻り・内面に「X」状のヘラ記号あり	22-8415
61	4号墳・Ⅲ表土	須恵器	杯蓋	口径(15.5) 器高 4.0	偏平宝珠つまみ	天井部約1/2クロケズリ	淡灰色	細粒多く含む	良好	ロクロ回転順廻り	22-8418
62	4号墳・周溝Ⅲ	須恵器	杯蓋	口径(16.0) 器高 ー	口縁部はわずかに外向きに斜く垂下する	天井部約1/2クロケズリ	淡黄灰色	細砂粒少量含む	良好	ロクロ回転順廻り	22-8439
63	4号墳・周溝Ⅲ	須恵器	杯蓋	口径(17.2) 器高 ー		天井部約2/3クロケズリ	灰色	細砂粒少量含む	良好	ロクロ回転逆廻り	22-8440
64	4号墳・Ⅲ表土	須恵器	杯蓋	口径 ー 器高 ー	偏平宝珠つまみ		淡灰色	細砂粒少量含む	良好		22-8438
65	4号墳・周溝Ⅱ埋土	須恵器	杯蓋	口径 ー 器高 ー	天井部平坦	天井部ヘラ切り未調整	淡青灰色	砂粒多く含む	良好	ロクロ回転順廻り	22-8443
66	4号墳・墳丘Ⅲ・スノ	須恵器	脚台部分のみ	脚径 8.4 脚径 ー	脚は八の字にふんばり、端部は上方に丸く肥厚する	外面ロクロナテ調整	灰色	砂粒含む	良好	ロクロ回転順廻り	22-8442
67	4号墳・周溝Ⅲ	須恵器	高台付杯	脚径(10.2) 脚径 ー	高台はやや外方にふんばり、端部は丸くおさまる	外底部ロクロケズリ	淡灰色	砂粒やや多く含む	良好(並)	ロクロ回転順廻り	22-8422
68	4号墳・女室中央	土師器	小皿	口径(7.8) 器高 1.1	いびつな円形・口縁端部尖る	外面未調整で指頭圧痕のこる・内面ナテ調整	淡褐色(淡肌色)	精良	良好		22-8437
69	4号墳・女室	土師器	小皿	口径 9.6 器高 2.0	底部は平底風	口縁部内面斜いヨコナテで段状となる・外面未調整で指頭圧痕のこる・内面ナテ調整	白褐色	精良	良好		22-8431

表21-5表 出土遺物観察表

図版番号	出土地点	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整技法	色調	胎土	焼成	備考	整理番号
70	4号墳・玄室	土師器	小皿	口径 7.7 器高 1.1	いびつな円形・口縁端部丸くおさまる	外面未調整でオサエ・内面ナデ調整	淡褐色 (肌色)	精良	良好	外面に指頭圧痕のこる	22-8433
71	4号墳・玄室	土師器	小皿	口径(9.3) 器高 1.4		口縁部外面ヨコナデ・内面ナデ調整・底部は未調整	淡茶褐色	精良	良好	外面に指頭圧痕のこる	22-8446
72	4号墳・玄室	土師器	鍋	口径(31.0) 内径(9.1)	偏平な半球状の体部から口縁部は水平にのび、口縁端部は上方に肥厚、断面三角形	口縁部内外面ヨコナデ・体部外面上半はハケメ、下半はヘラケズリ・内面はナデ調整	淡茶褐色	精良	良好	外面の口縁端部にいたるまで煤がつく	22-8430
73	4号墳・石室	土師器	鍋	口径(26.6) 内径(10.3)	偏平な半球状の体部から口縁部は水平にのび、口縁端部は断面三角形	口縁部内外面ヨコナデ・体部外面上半はハケメ、下半はヘラケズリ・内面はナデつけ	淡黄褐色	精良	良好	外面の口縁端部にいたるまで煤がつく	22-8436
74	4号墳・石室	土師器	鍋	口径(24.6) 器高(8.9)	口縁端部外面に1条の沈線めぐる	口縁部内外面ヨコナデ・体部外面上半はハケメ、下半はヘラケズリ・内面はナデつけ	灰褐色	精良	良好	外面の口縁端部にいたるまで煤がつく	22-8435
75	4号墳・玄室 中央	土師器	鍋	口径(23.6) 器高(7.8)	偏平な半球状の体部から口縁部は短く水平にのび、口縁端部は上方に立ち上がり、断面三角形	口縁部内外面ヨコナデ・体部外面上半はナデ、下半はヘラケズリ	淡茶褐色	精良	良好	外面の口縁端部にいたるまで煤がつく	22-8429
76	4号墳・玄室	土師器	鍋口縁部片	口径 — 器高 —	口縁端部は上方に立ち上がり、断面三角形	口縁部内外面ヨコナデ	淡黄褐色	精良	良好	細片	22-8445
77	4号墳・表土 L86	铸造貨幣		径 2.3			—	—	—	「寛永通宝」	22-8447
78	4号墳・石室	土師器	茶釜形鍋	口径(12.8) 器高(20.0)	偏平半球状の体部から口縁部は内傾して立ち、外面に折り返し丸く肥厚、端部上面は凹状の面	口縁部内外面ヨコナデ・体部外面上半はハケメ、下半はヘラケズリ・内面はナデ調整	淡黄灰色	精良	良好	体部外面下半のみ煤が厚く付着	22-8434

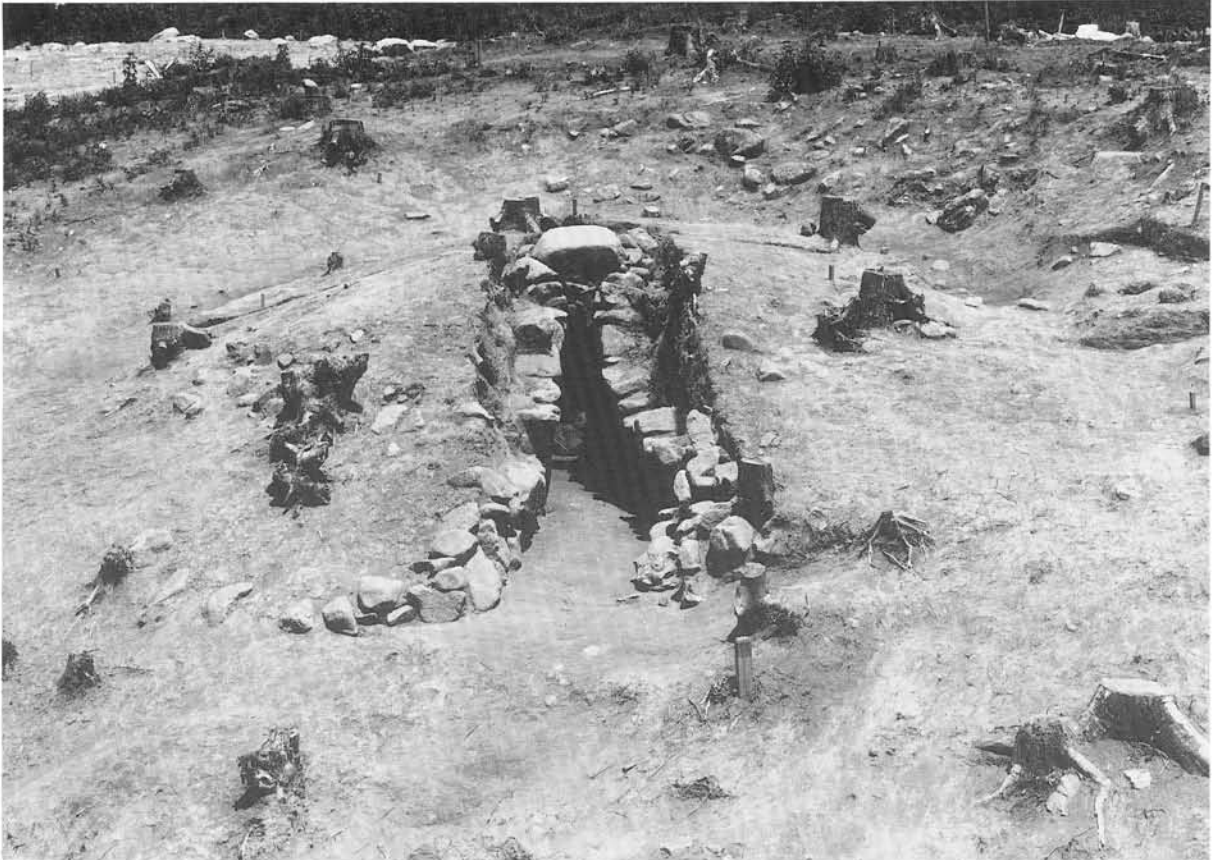
第21-6表 庄土遺物観察表



調査前全景（北西から）



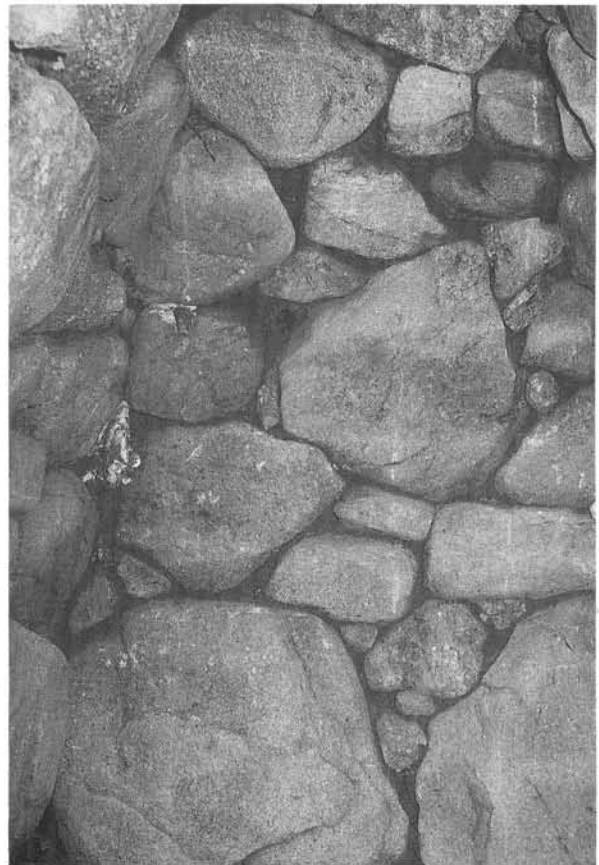
1・2号墳調査前近景（北から）



1号墳全景（南から）



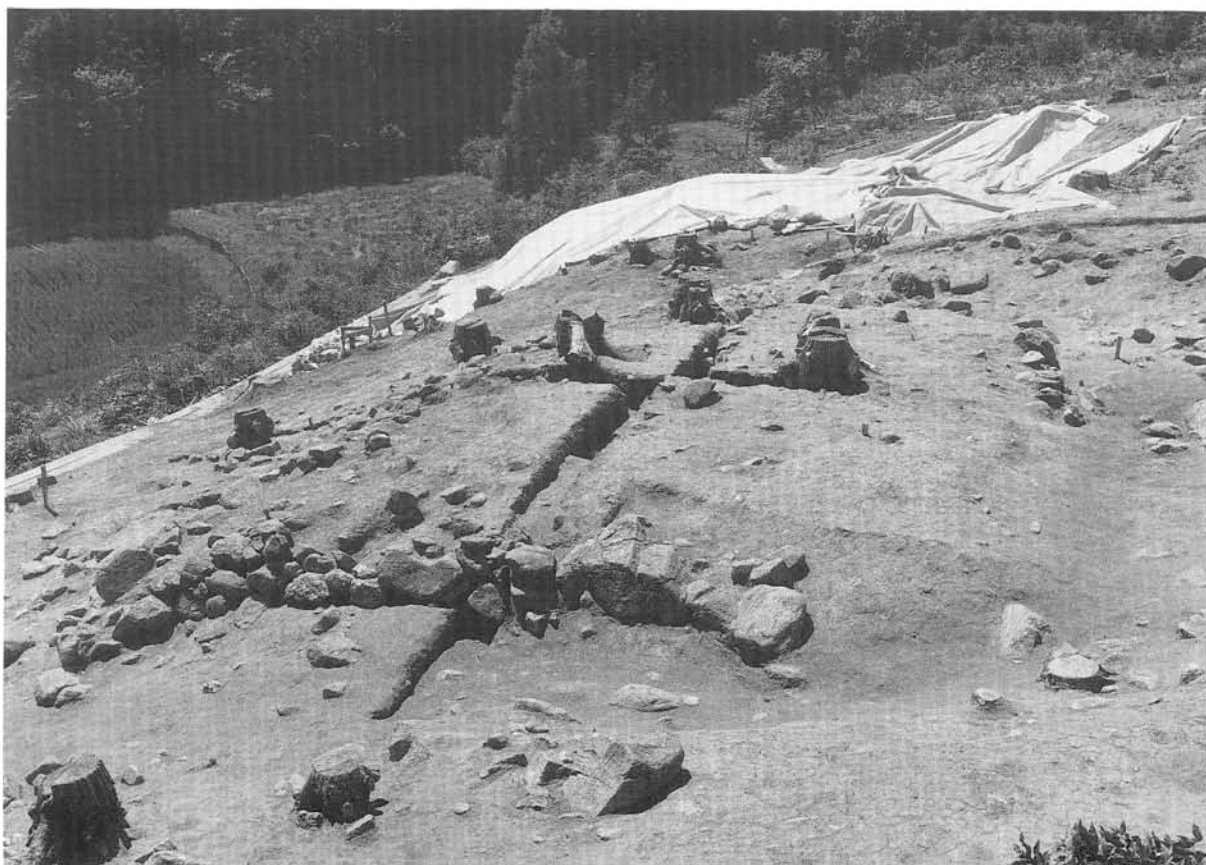
1号墳石室（南から）



1号墳石室奥壁



2号墳全景（南から）



2号墳東側外護列石（東から）

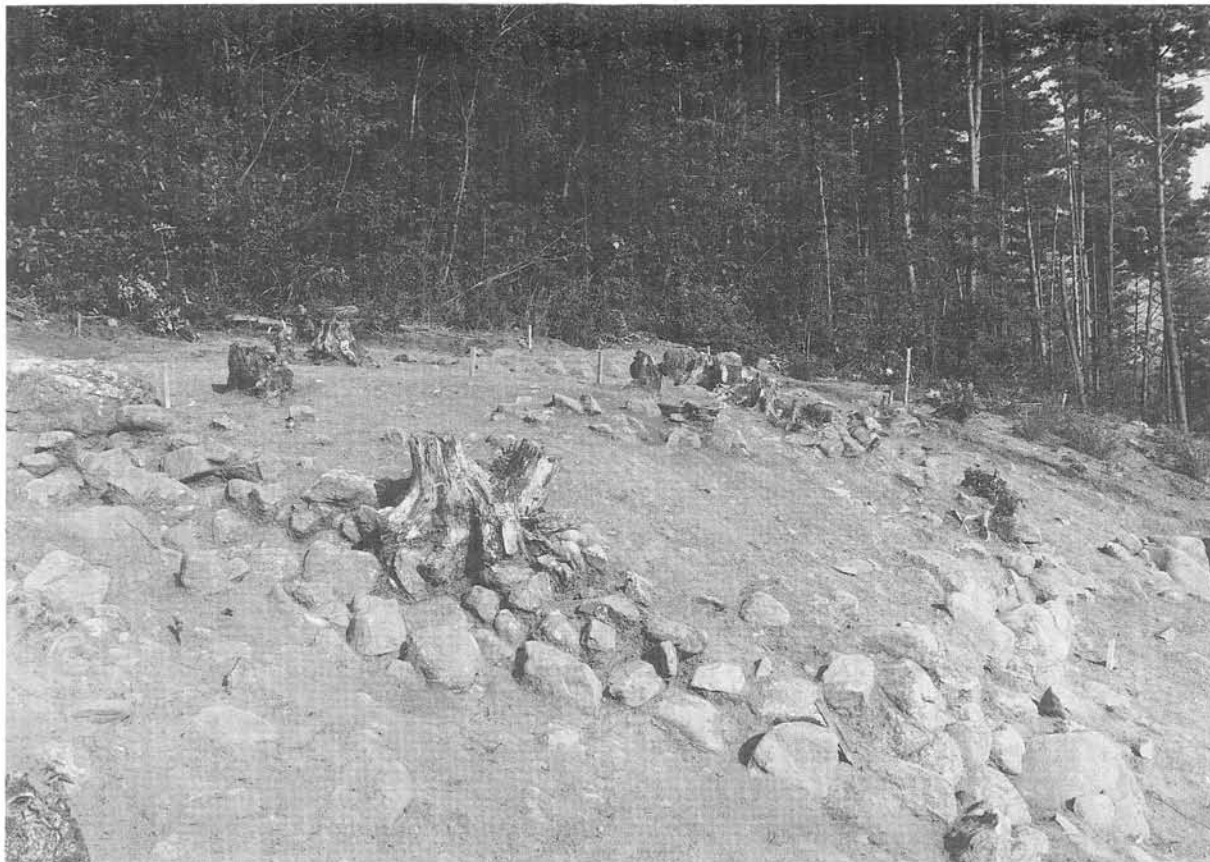
PL60



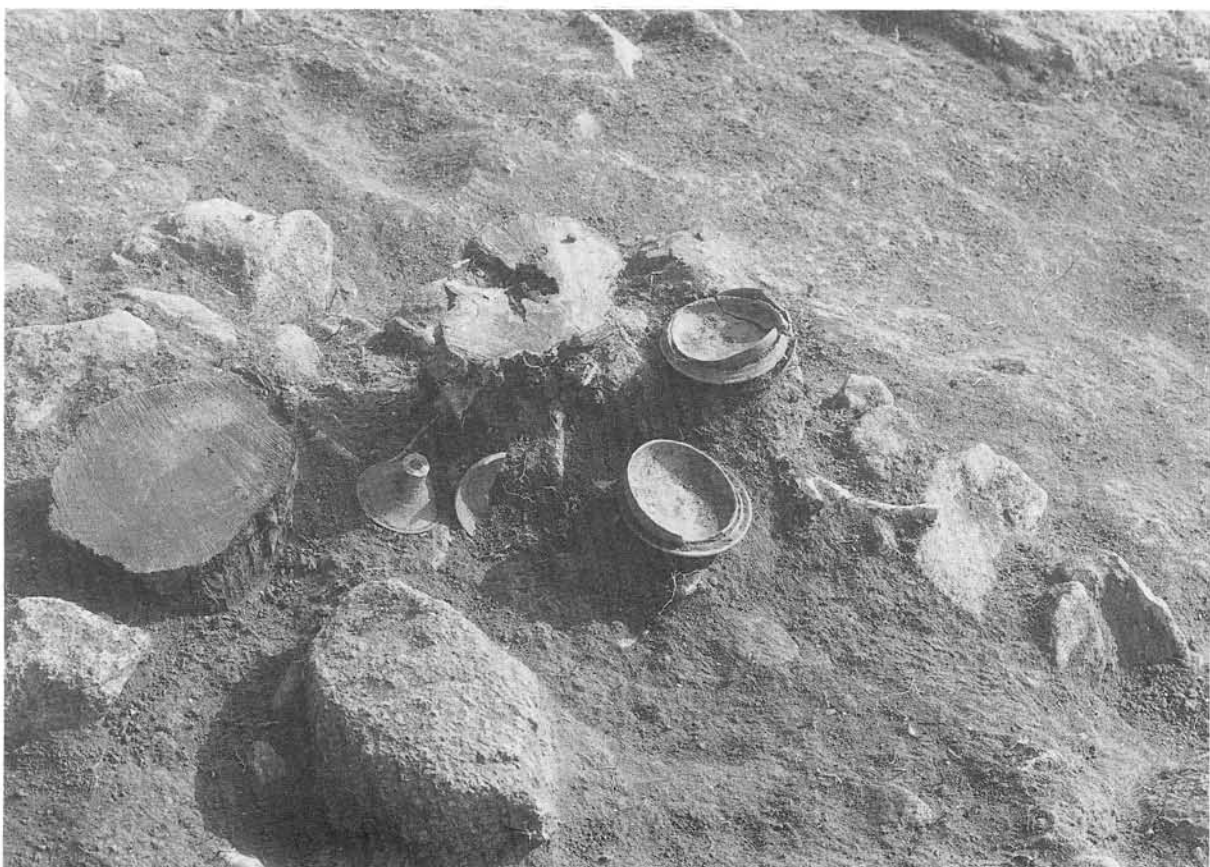
2号墳墳丘遺物出土状況



3号墳全景（南から）



3号墳（北西から）

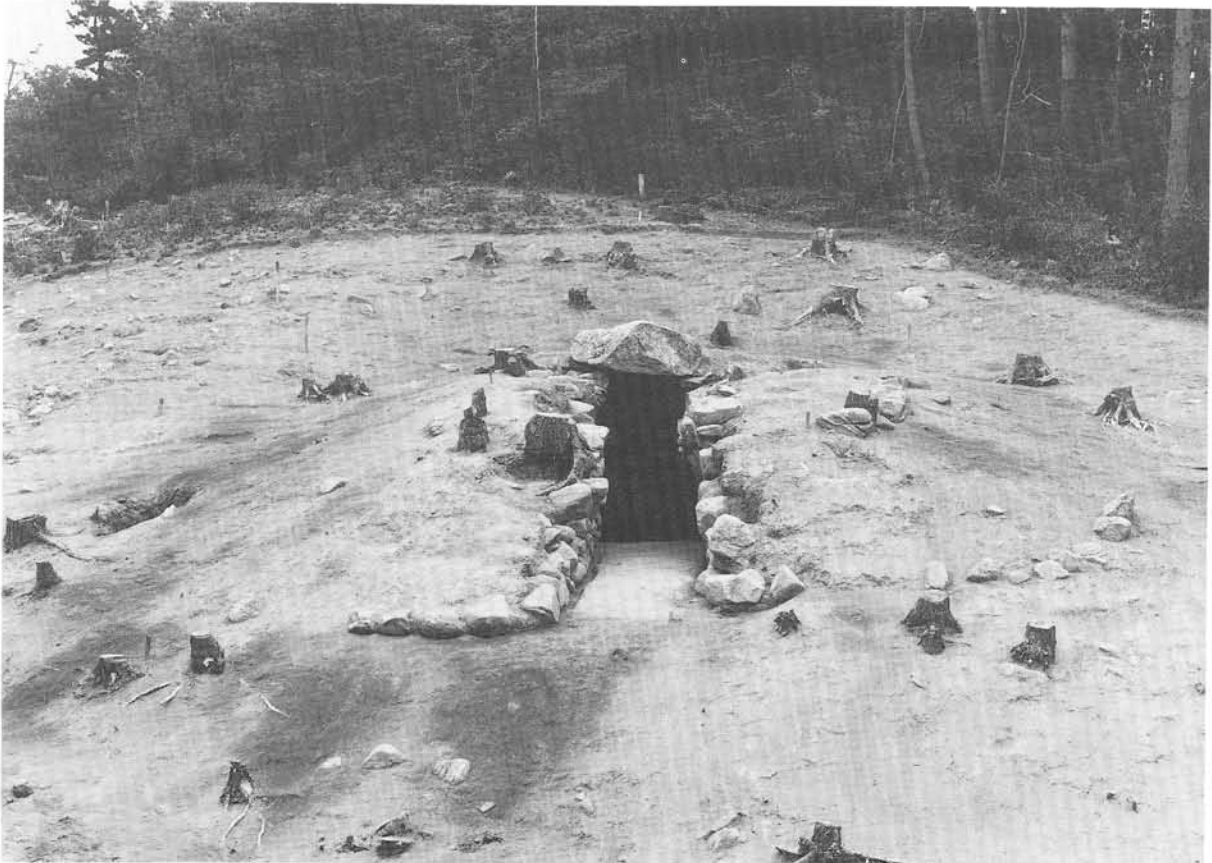


3号墳墳丘遺物出土状況

PL62



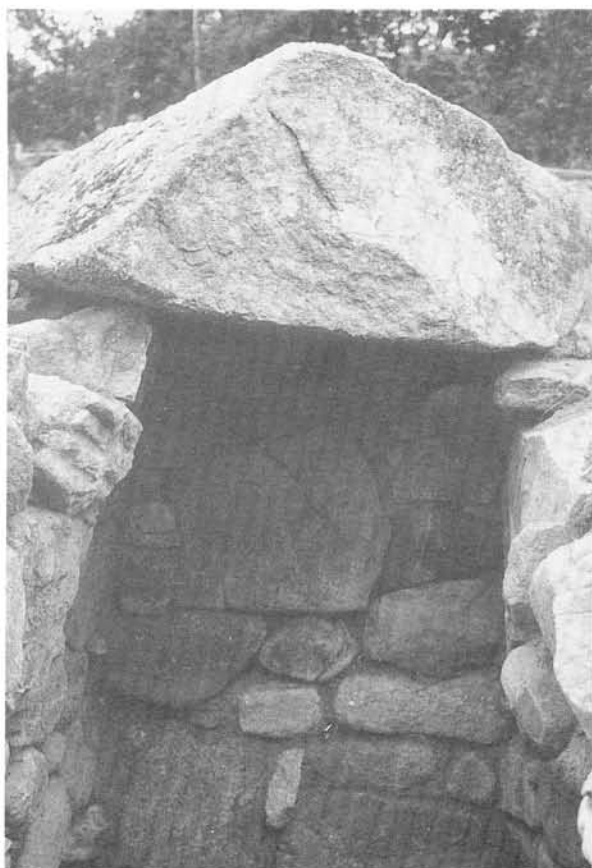
4号墳全景（西東から）



4号墳全景（南から）



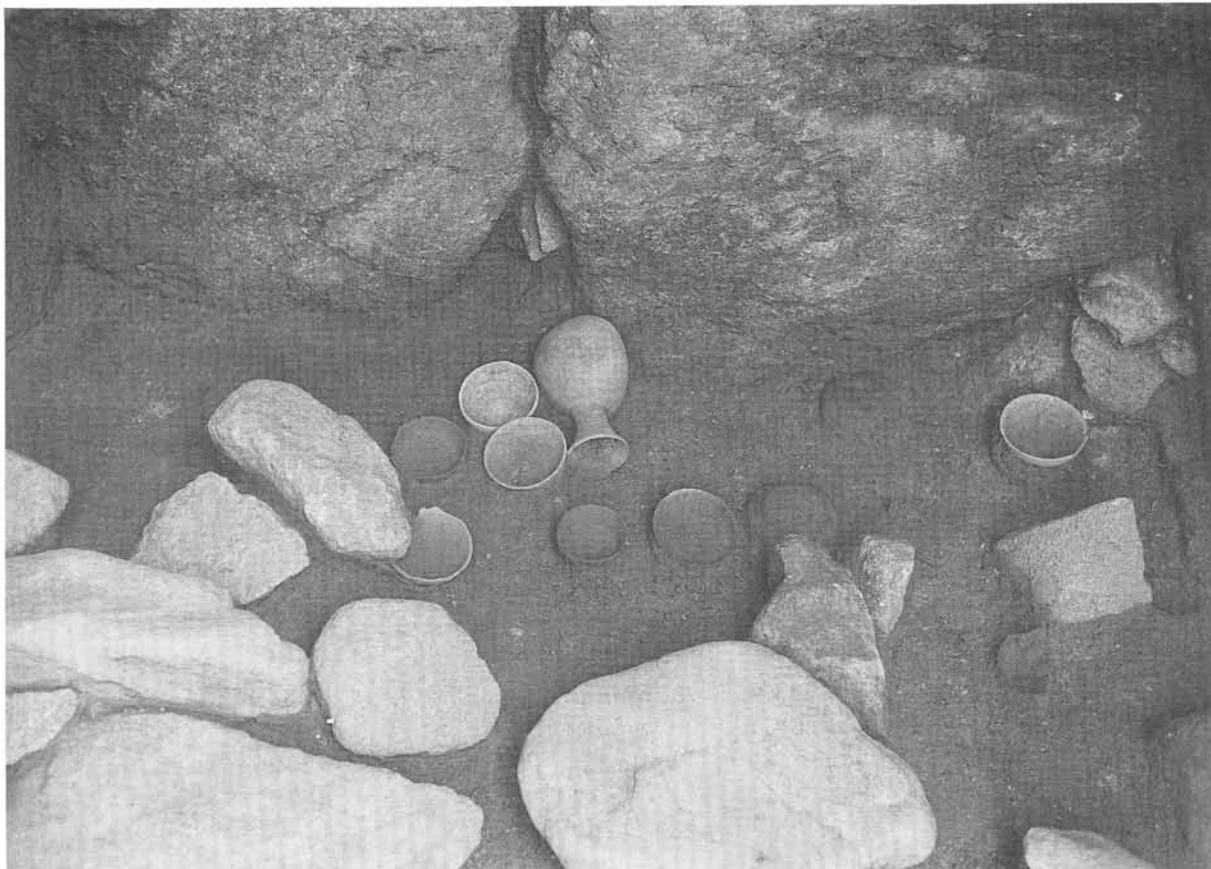
4号墳石室（南から）



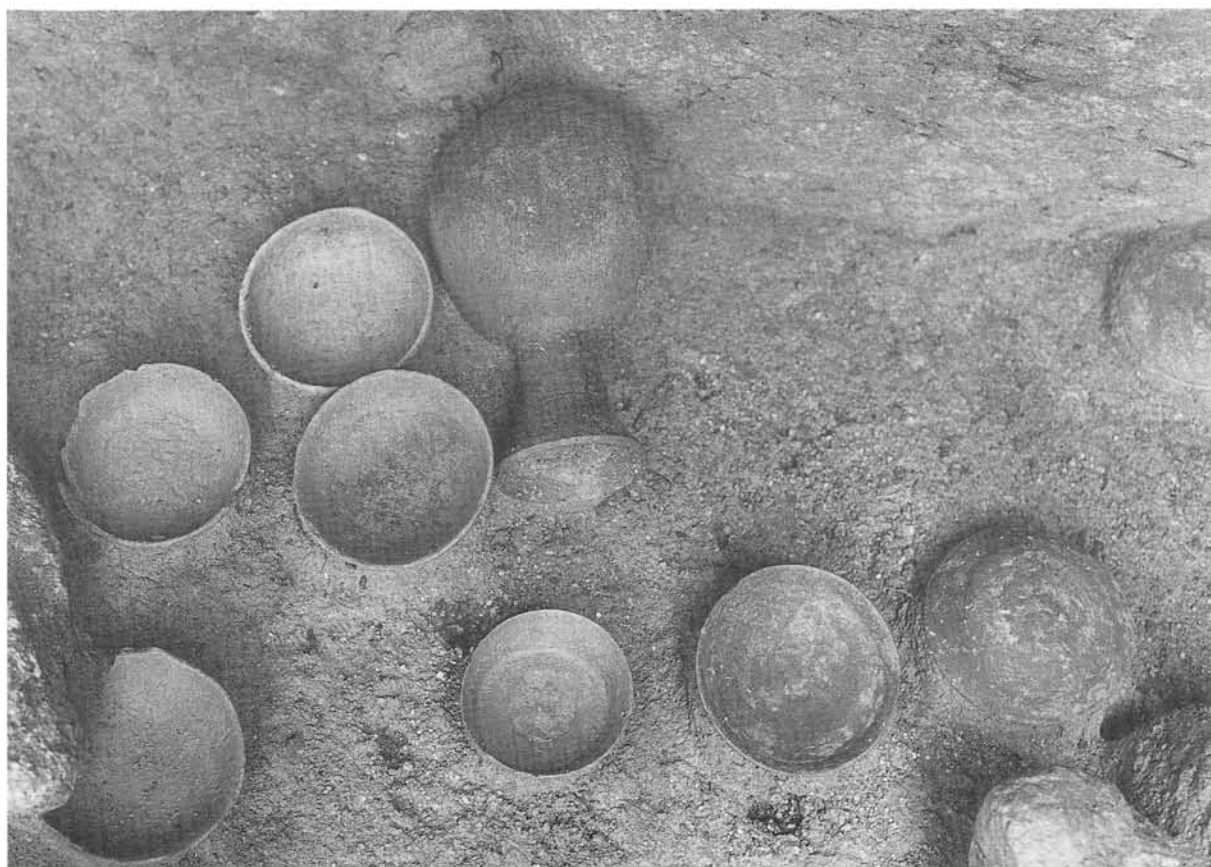
4号墳石室奥壁



4号墳石室内中世土器出土状況



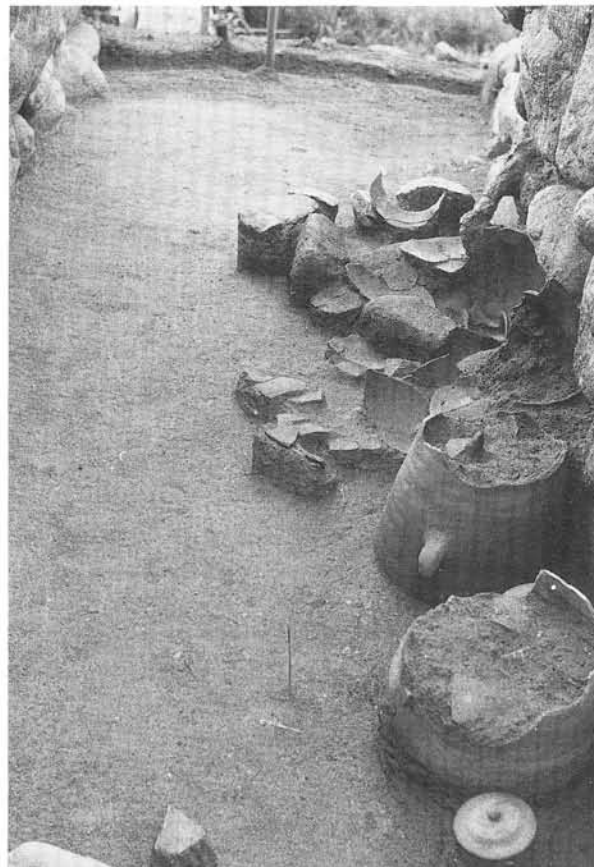
4号墳玄室内遺物出土状況



4号墳玄室内遺物出土状況



4号墳羨道部遺物出土状況

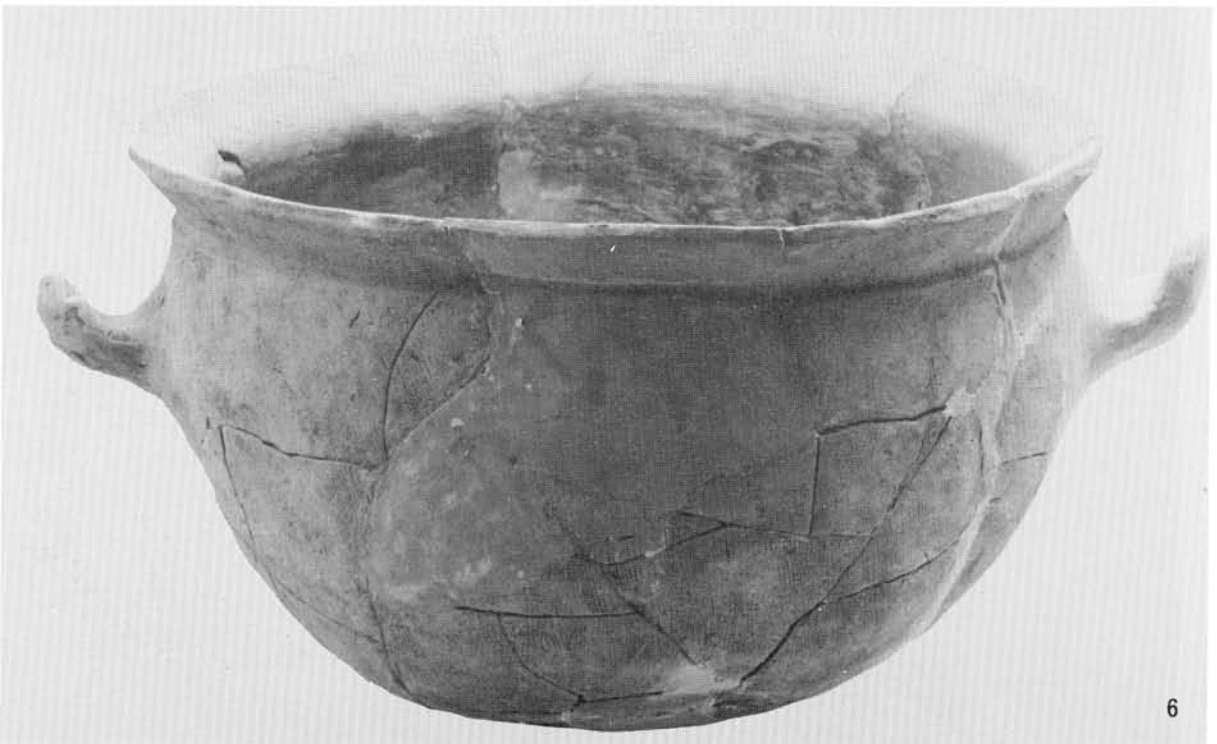
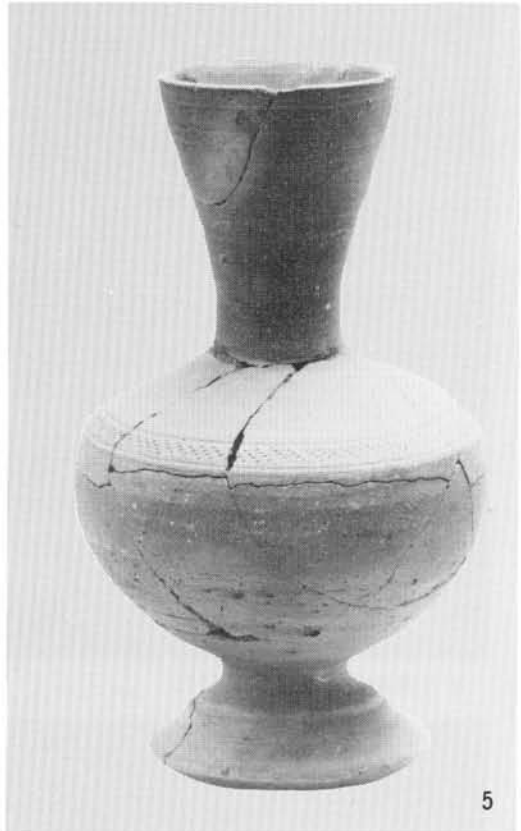


4号墳羨道部遺物出土状況



4号墳土師器（甑・甕）出土状況

PL66

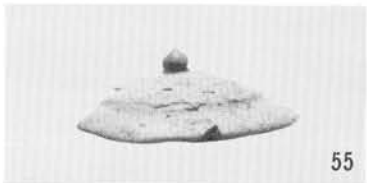


出土遺物 (1 : 3)



出土遺物 (1 : 3)

PL68



出土遺物 (1 : 3)



8



32

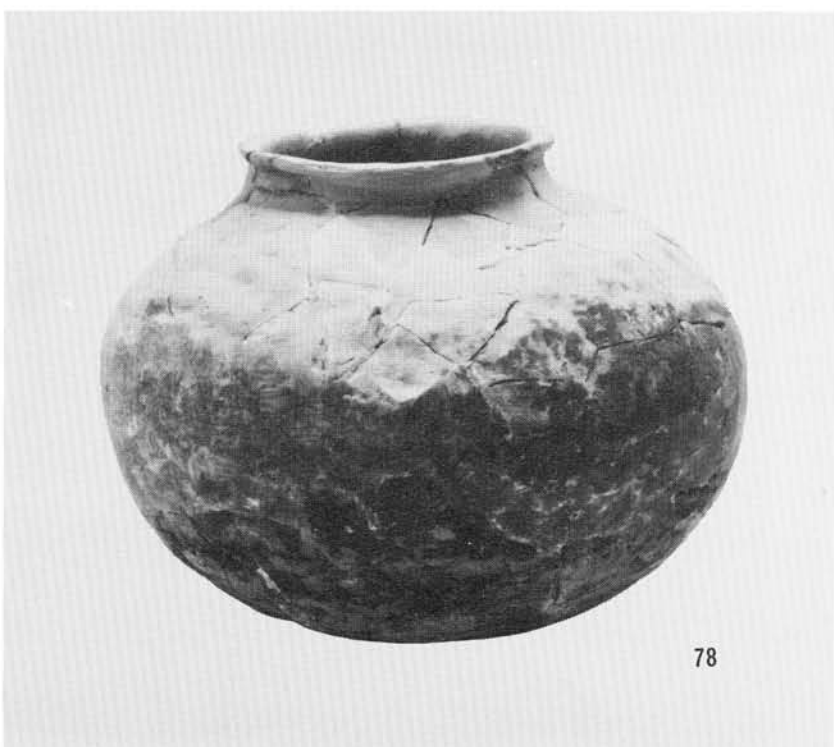
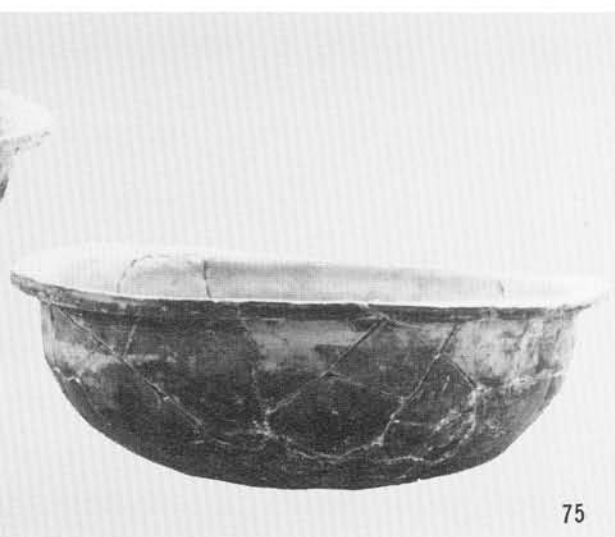
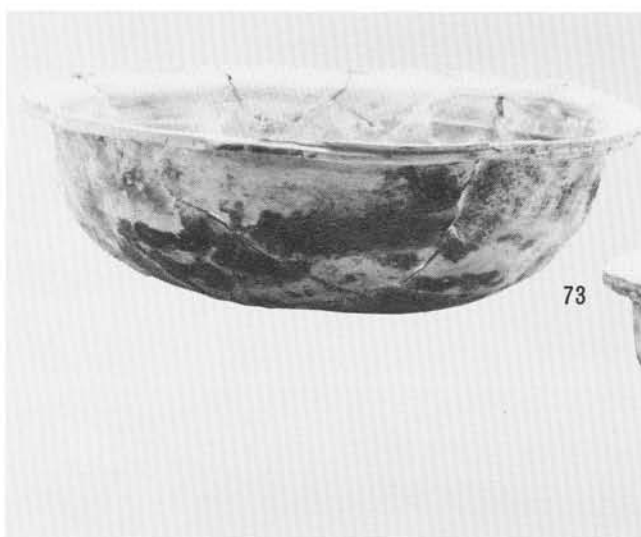


58



出土遺物 (1 : 3) (8・32・58は $\frac{1}{4}$)

PL70



出土遺物 (1)

(付 編)

垣内田 3 号墳出土の象嵌円頭柄頭・鞘尻金具の元素分析と保存処理

奈良大学助教授

西 山 要 一

三重県松阪市にある垣内田古墳群の 3 号墳から鉄製の円頭柄頭と鞘尻金具が発見された。この円頭柄頭と鞘尻金具に象嵌の存在を考えられた三重県教育委員会の依頼を受けて奈良大学文学部文化財学科保存科学研究室で調査と保存処理を行ったので、その結果を報告する。

1. 円頭柄頭

長さ 4.6cm、幅 3.5cm、厚さ 2.5cm を計り、全面凹凸の激しい鉄錆に覆われている。X線透過写真撮影を行ったところ、縁に小渦文を一行に配し、円周を 4 分割して火炎状と心葉形を組み合わせた文様を 4 個配する象嵌のあることが判明した(写真 1)。象嵌線部分を拡大観察してみるとその断面が逆三角形であることがわかる。X線断層写真では、象嵌線の断面形までは鮮明ではないが、それらの存在は明確に把握できる(写真 2)。

この象嵌線は、象嵌文様表出処理によって銀線であろうと判断したが、錆とともに剥落していた象嵌線を観察・分析することができた(写真 3)。写真は象嵌線が地金から剥離した裏側から見た状態である。

銀色部分を X線マイクロアナライザーで定量分析したところ、銀 96.52%、銅 0.21%、鉄 1.18%、塩素 0.60%、ケイ素 0.54%、アルミニウム 0.94% (重量比) の値を得た(図 1・表 1)。また、象嵌線の裏にわずかに付着していた黒い斑点(地鉄の錆と思われる)を定量分析したところ、鉄 55.76%、銀 31.63%、塩素 2.03%、カルシウム 0.85%、リン 1.36%、ケイ素 4.75%、アルミニウム 3.62% (重量比) の値を得た(図 2・表 2)。

これらのデータから鉄製柄頭の加飾に使われた象嵌線は、純銀に近いものであることがわかる。

写真 3 は象嵌線の裏側で糸を撚ったような形に見えるがこれを詳細に観察すると、糸象嵌のための鑿彫りの溝の反転した状態が写し出されたものである

ことがわかる。すなわち、金槌一打による鑿の運びは約 0.8mm、断面は表面幅(象嵌線の幅)約 0.5mm、深さ約 0.35mm の逆三角形である。この鑿の運びと象嵌溝の形は、古墳時代の象嵌技法として普遍的なものである。

2. 鞘尻金具

長さ 3.5cm、幅 3.0cm、厚さ 2.2cm を計る。全面凹凸著しい錆に覆われ、一部、表面錆が剥落している。X線透過写真撮影をしたところ、4 個の心葉形を象嵌していることが判明した(写真 4)。象嵌線は細く断面三角形を呈するが、ところによって滲んだように不鮮明な太い線となっているところから、象嵌線はかなり腐食の進んでいるものと予想させる。X線断層写真にも象嵌線として鮮明に映る部分と不鮮明な部分が見られる。不鮮明な部分は腐食が進んで溶け出し、錆となってふくれ上がった部分であると思われる(写真 5)。

象嵌文様表出処理によって象嵌線が銀線であろうと思われたが、断面を分析することができた(写真 6)。象嵌線の断面の表面幅(糸象嵌線の幅)は約 0.2mm、深さ約 0.11mm を計る浅い三角溝である。通常この時代の象嵌の幅は 1mm 前後であるのに比して細いのは、表面が腐食して消滅して細くなったものかと思われる。

象嵌線断面の X線マイクロアナライザーによる定量分析によると、銀 94.07%、銅 0.90%、鉄 1.42%、塩素 2.41%、ケイ素 0.39%、アルミニウム 0.82% (重量比) の値を得た(図 3・表 3)。また、同断面の地金部分の定量分析では、鉄 98.42%、銅 0.28%、銀 0.12%、塩素 0.06%、ケイ素 0.56%、アルミニウム 0.55% (重量比) の値を得た(図 4・表 4)。

高純度の鉄で製作した鞘尻金具に、ほぼ純銀の線で象嵌加飾していることが判明する。

3. 象嵌円頭柄頭と象嵌鞘尻金具の保存処理と文様の表出

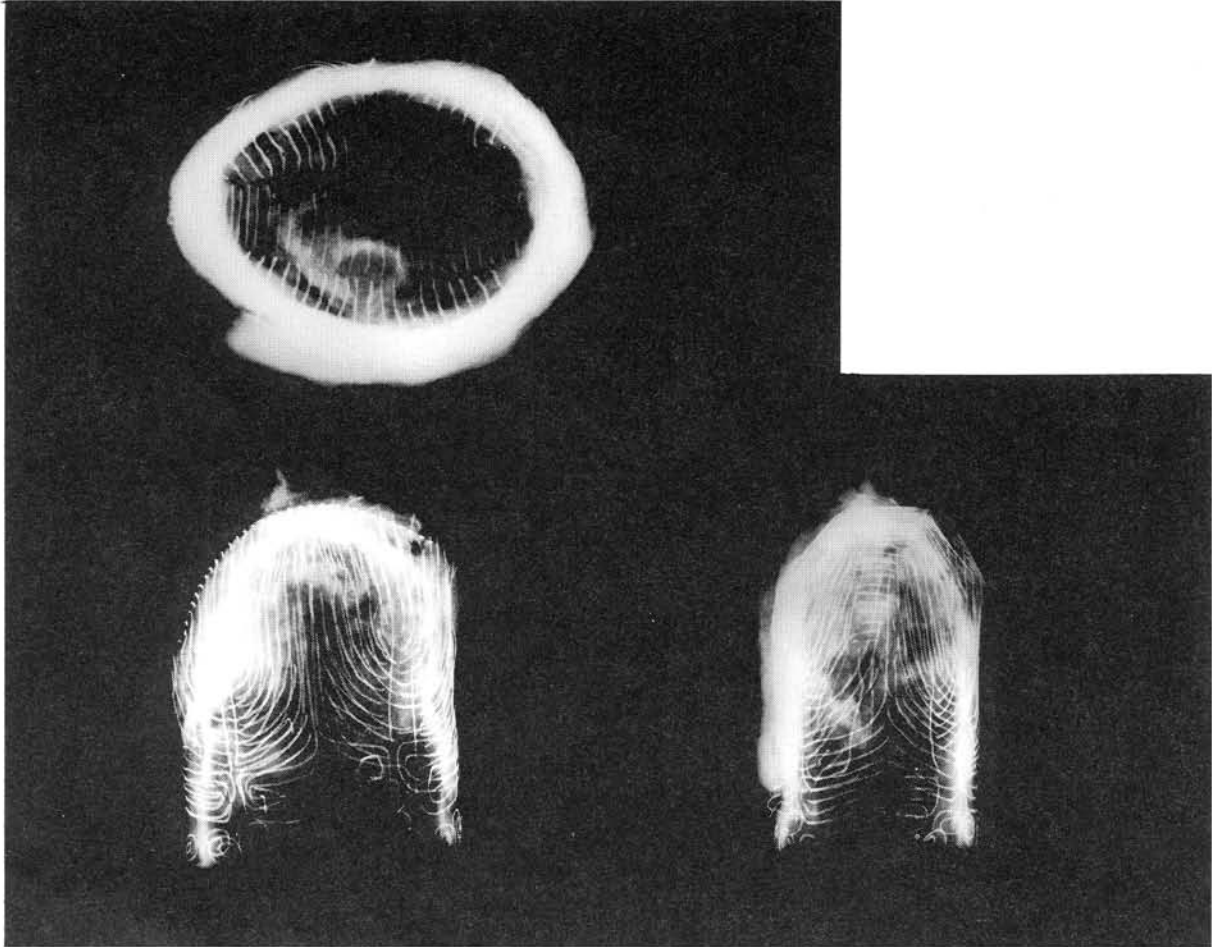


写真1 円頭柄頭のX線透過写真（左：正面より、右：側面より、上：上面より）

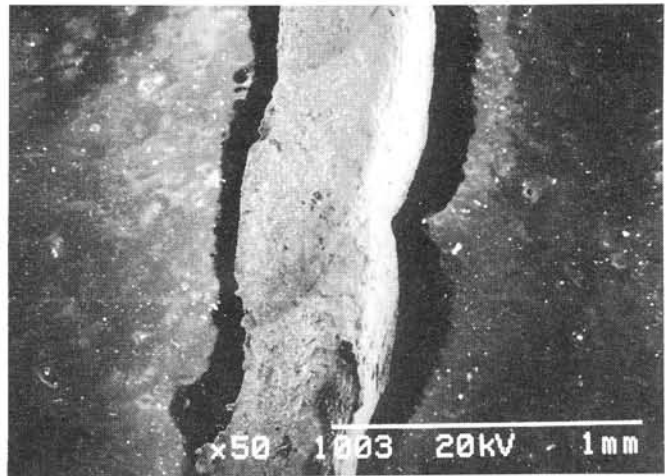
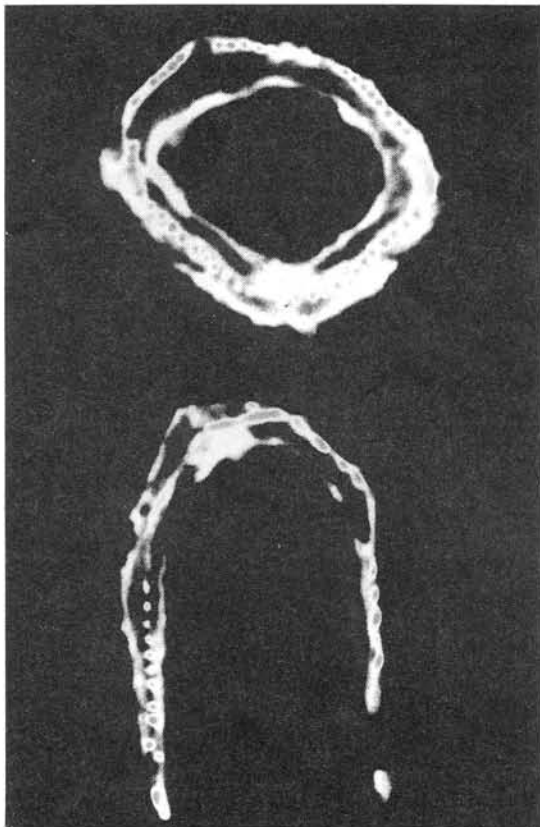


写真3 円頭柄頭の象嵌線（裏面）

写真2 円頭柄頭のX線断層写真（上：横断面、下：縦断面）

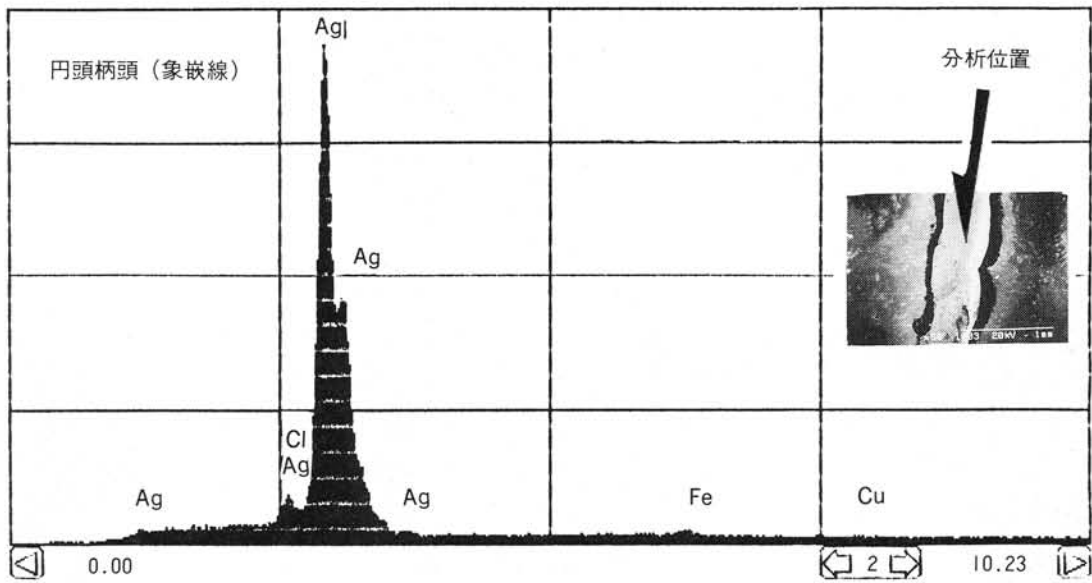


図1 円頭柄頭の象嵌線の分析チャート

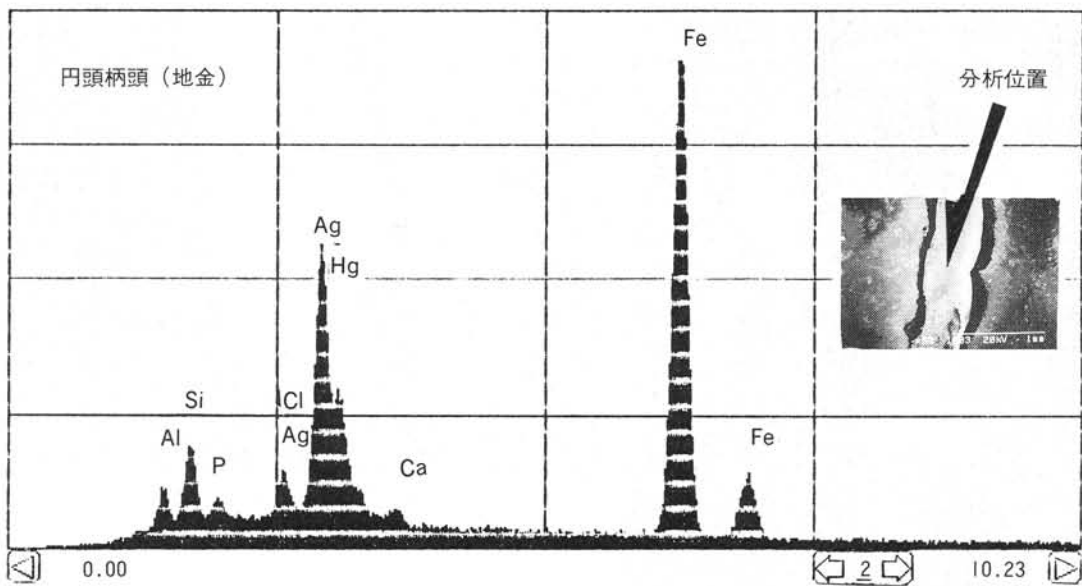


図2 円頭柄頭の地金の分析チャート



写真4 鞅尻金具のX線透過写真（左：正面より、右：側面より、上：上面より）

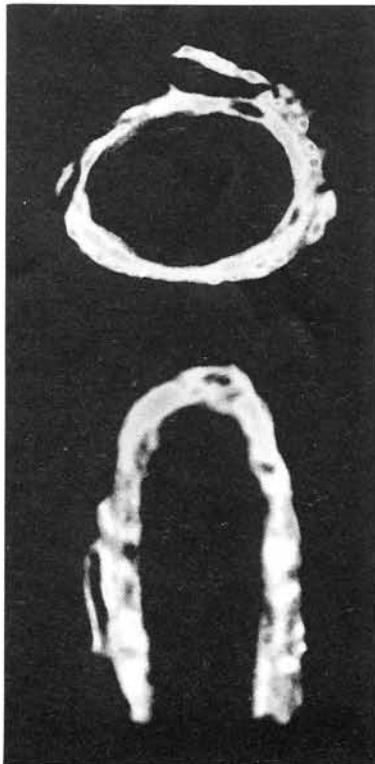


写真5 鞅尻金具のX線断層写真
（上：横断面、下：縦断面）

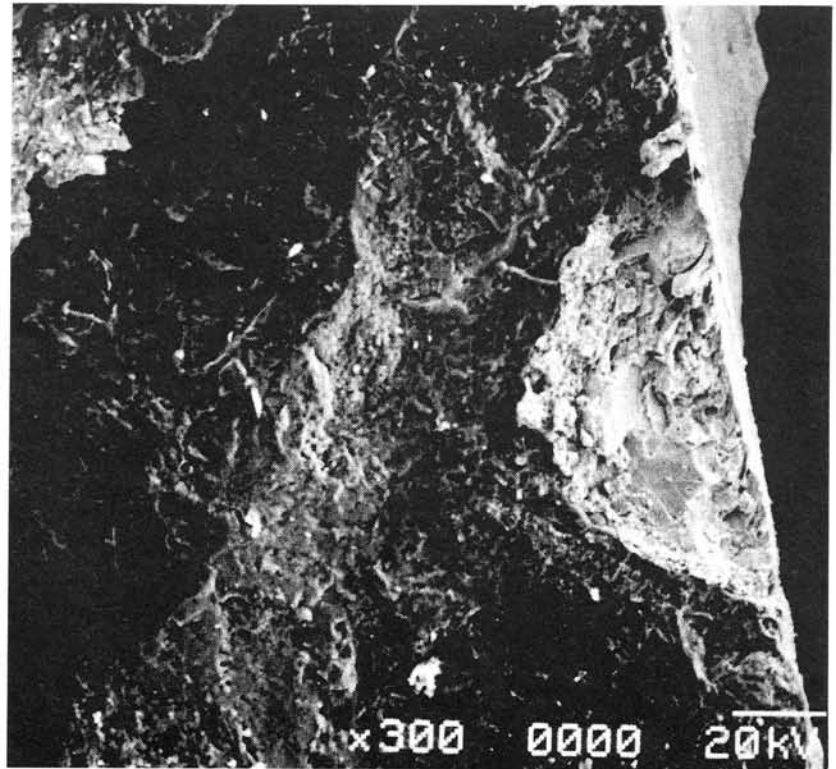


写真6 鞅尻金具の象嵌断面

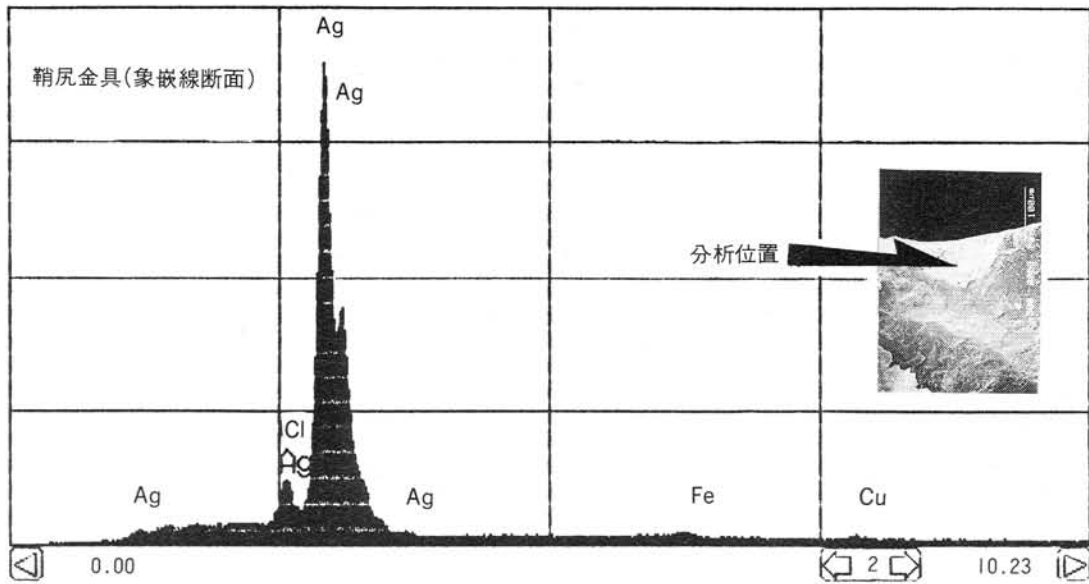


図3 鞅尻金具の象嵌線断面の分析チャート

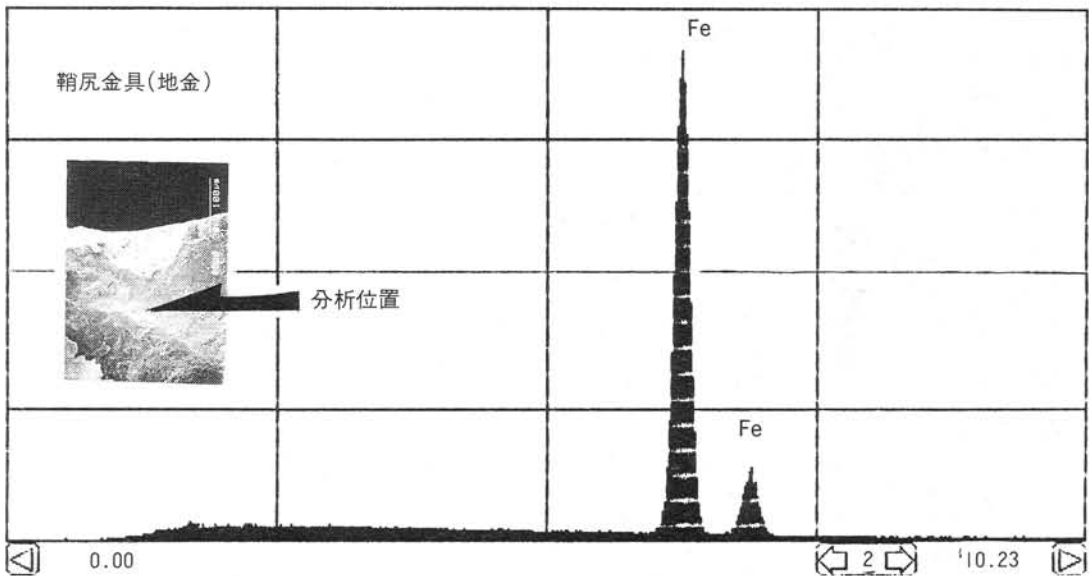


図4 鞅尻金具の地金の分析チャート

表1 円頭柄頭（象嵌線）の定量分析

元	素	重量濃度 (%)
13	アルミニウム (Al)	0.94
14	珪素 (Si)	0.54
17	塩素 (Cl)	0.60
26	鉄 (Fe)	1.18
29	銅 (Cu)	0.21
47	銀 (Ag)	96.52
トータル		100.00

表2 円頭柄頭（地金）の定量分析

元	素	重量濃度 (%)
13	アルミニウム (Al)	3.62
14	珪素 (Si)	4.75
15	リン (P)	1.36
17	塩素 (Cl)	2.03
20	カルシウム (Ca)	0.85
26	鉄 (Fe)	55.76
47	銀 (Ag)	31.63
トータル		100.00

表3 鞘尻金具（象嵌線断面）の定量分析

元	素	重量濃度 (%)
13	アルミニウム (Al)	0.82
14	珪素 (Si)	0.39
17	塩素 (Cl)	2.41
26	鉄 (Fe)	1.42
29	銅 (Cu)	0.90
47	銀 (Ag)	94.07
トータル		100.00

表4 鞘尻金具（地金）の定量分析

元	素	重量濃度 (%)
13	アルミニウム (Al)	0.55
14	珪素 (Si)	0.56
17	塩素 (Cl)	0.06
26	鉄 (Fe)	98.42
29	銅 (Cu)	0.28
47	銀 (Ag)	0.12
トータル		100.00

地中に1400年の長期間埋納されていた鉄製柄頭・鞘尻金具は、既に内部深くまで錆が進んでいる。X線写真で見える限り、金属鉄は既になく、すべて鉄錆に化しており、表面は大きく凹凸している。しかし、鉄製品の保存には決して適していない土中の環境であるが、その不適な土中の一定した環境下において、鉄製品表面はポーラスな赤錆となっているものの、その内部では十分に酸素の供給されない黒錆層が形成されている。発掘されると、保存の環境が一変するために、この黒錆層が再び錆化を始め、鉄製品を細片に崩壊させるのである。

保存処理は、発掘後の鉄製品がこれ以上酸化が進み崩壊しないように行う処理で、基本的には現状を維持するための処理であるが、時として、錆により変形した遺物を、可能な限り原状にもどすために錆を削り落としたり、破片を接合したりする。また、本遺物のように象嵌のある場合は、これを鮮明に見ることができるように、象嵌を覆う鉄錆を削り落とすことが通常行われる。

保存処理と象嵌文様の表出は以下の工程で行った。

- ① 洗浄（有機溶剤で、土・有機酸等を除く）
- ② 乾燥（十分に乾燥して水分を取り除く）
- ③ 樹脂含浸（アクリル系合成樹脂を真空含浸して、強化・防錆する）
- ④ 樹脂塗布（アクリル樹脂を表面に塗布して大気から遮断し防錆をはかる）
- ⑤ 文様の表出（精密加工グラインダーを使って象嵌表面を覆う錆を削り落とす）
- ⑥ 樹脂塗布（象嵌文様上にも樹脂を塗布し防錆をはかる）

以上の工程に約3ヵ月を費やし、保存処理・文様表出を終えた。保存処理を終えた鉄製品でも、完璧な保存をはかるためには、密閉乾燥容器に収納するなどの保存管理が必要である。

なお、本資料の分析にあたって、X線断層写真（X線CT881型使用）は国立歴史民俗博物館田口勇・齋藤努氏に、X線マイクロアナライザー分析（エネルギー分散形X線分析装置EMAX-2700使用）は株式会社堀場製作所吉川尚・村瀬潤氏にそれぞれお手をわずらわせました。感謝申し上げます。

平成2(1990)年3月に刊行されたものをもとに
平成17(2005)年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告87-4

近畿自動車道(久居～勢和)

埋蔵文化財発掘調査報告

—— 第2分冊2 ——

1990(平成2)年3月31日

編集 三重県教育委員会
発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 株式会社伊勢出版
